

ギャル&パンツァー／ガールズ&パンツァー

ミハイル・シュパーギン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

100年以上の歴史を持つフロンティア学園に、史上初めてとなる戦車道部が設立された。

隊長にして設立者は、退学の危機に瀕した留年ギャル1年生。

これは、彼女とその仲間たちの物語である。

pixivでも公開中。

目次

設定集（不定期更新）

登場人物（フロンティア学園） | 1

登場人物（青師団高校） | 10

登場人物（バラトン工業高校） | 13

登場戦車 | 15

第1話 戦車道仮承認

チャプター1 フロンティア学園 | 18

チャプター2 呼び出し | 21

チャプター3 閃き | 27

チャプター4 準備 | 33

チャプター5 オリエンテーション | 43

チャプター6 タイムリミットは3日 | 48

チャプター7 相談 | 60

チャプター8 オリエンテーションII | 67

チャプター9 戦車道仮承認 | 81

第2話 戦力整備

チャプター1 依頼 | 83

チャプター2 朗報 | 86

チャプター3 隼高校 | 92

チャプター4 合同説明会 | 99

チャプター5 碧眼の少女と偽物 | 106

チャプター6 戦力吟味 | 112

チャプター7 イズベスチャ社 | 119

チャプター8 くじ引き | 124

チャプター9 練習試合

132

チャプター10 燃えよ！カヴェエナント

141

第3話 初陣

チャプター1 黒森峰女学園

157

チャプター2 励まし

165

チャプター3 黒森峰女学園VSイズベスチャ社

173

チャプター4 打診

188

チャプター5 貸与

195

チャプター6 黒森峰・フロンティア連合VSイズベスチャ社

203

チャプター7 後退

211

チャプター8 意見具申

223

チャプター9 贈り物

230

第4話 予選リーグ

チャプター1 エントリー

242

チャプター2 新戦力

256

チャプター3 新メンバー

261

チャプター4 テスト勉強

285

チャプター5 試合前夜

291

チャプター6 開幕

302

第5話 これが青師団高校の戦いです！

チャプター1 会敵

311

チャプター2 前哨戦

316

チャプター3 分断

322

チャプター4 トラップポイント

330

チャプター5 瀬戸際

340

チャプター6 弾雨

348

第6話 小休止

チャプター1 次に向けて頑張ります！

362

チャプター2 移動

366

チャプター3 不安

373

チャプター4 意気投合

381

第7話 フロンティア学園 vs バラトン工業高校

チャプター1 戦闘配置

387

チャプター2 陽動

392

チャプター3 マルギツトの策略

398

チャプター4 攻防

405

設定集（不定期更新）

登場人物（フロンティア学園）

1000年以上の歴史を持つフロンティア学園に、史上初めてとなる戦車道部が設立された。

隊長にして設立者は、退学の危機に瀕した留年ギャル1年生。

これは、彼女とその仲間たちの物語である。

〈登場人物〉

●塚野スズネ

フロンティア学園1年生のギャル。元来2年目だが、成績不振で留年中。戦車道隊長にして創設者。

●野島カエデ

同2年生。塚野の親友。同じくギャル。戦車道では副隊長を担当。

●土橋アンナ

同2年生。ツチハシと読む。塚野と野島の親友だがギャルでは無い。

漫画部所属だが、戦車道を題材にした漫画を描く為に戦車道と漫画部を掛け持ちする。

●萩原ミツキ

同1年生。報道部員で、将来は報道部長にのし上がる野心を抱いており、その足掛かりに戦車道を取材する。

●福地ケイコ

同3年生。報道部長（デスク）。

●国崎マイ

同3年生。生徒会会長。

●佐伯ユキネ

同3年生。生徒会副会長。留年生の塚野を敵視しているが、度が過ぎて国崎から罰として戦車道参加を命じられる。

●鹿屋リナ

同3年生。生徒会広報。マイペースで語尾を伸ばす事が多いが、呑み込みは早い。

●田張エミ

隼高校2年生。戦車道用の戦車を整備、修理する田張整備工場が実家で、戦車の整備、修理、運用は自然と身についた。隼高校では機械部と呼ばれる部活動のリーダーを務めている。父親の田張将司のことはパパと呼んでいる。

●安藤アイリ

隼高校2年生。機械部員で田張の頼れる右腕。少々変わった喋り方をするが、人懐こい性格。

●中村ホノカ

隼高校2年生。機械部員。元気がいい性格。

●五十嵐セイナ

隼高校2年生。機械部員。クールな性格。

●尾鷲カズサ

隼高校2年生。機械部員。素っ気ない性格。

●大地ヒデミ

大鳥高校2年生。元戦車道経験者。合同説明会で塚野達と出会い、フロンティア学園の戦車道に参加する。

●村江カルラ

新戸学園3年生。元戦車道経験者。合同説明会で塚野達と出会うが、当初は断っている。イタリア人の母と日本人の父を持つハーフで碧眼。苗字は母の祖母の苗字から拝借している。

●伊関ナナ

デイスカバリー高校2年生。吹奏楽部砲術チームメンバーで、大砲の扱いが得意。旧ソ連製の100mm対戦車砲D-10Sをフロンティア学園にもたらし、SU-100の保有に繋がった。通称バナナ。

●桐山シノ

デイスカバリー高校2年生。伊関と共に吹奏楽部砲術チームメンバーだった。通称アワビ。シノ↓ノシ↓ノシアワビ↓アワビという連想らしい。

●田張将司

戦車道用の戦車を整備、修理する田張整備工場の工場長。田張エミは彼の娘である。

●野島信也

野島カエデの祖父。元海上保安官で、フロンティア学園の学園艦船長。

●足羽香林

戦車道教導企業「イズベスチャ社」の教官。元プラウダ高校生徒で、元サンダース高校の宮口恵良とはライバル関係だった。通称カリンカ。

●宮口恵良

村江カルラを戦車道に導いた人物。年齢が10程離れた先輩で、元サンダース高校生徒。元プラウダ高校の足羽香林とはライバル関係だった。通称エラ。

●タールツアイ

バラトン工業高校戦車道チーム隊長。

●児玉七郎（本家キャラクター）

日本戦車道連盟理事長。

●蝶野亜美（本家キャラクター）

陸上自衛隊所属。階級は一等陸尉で、戦車道教官。

●西住まほ（本家キャラクター）

戦車道の強豪、黒森峰女学園チームの隊長。

●逸見エリカ（本家キャラクター）

戦車道の強豪、黒森峰女学園チームの副隊長。

●エル（本家キャラクター）

青師団高校戦車道チーム隊長。

●ヴィリディアナ（本家キャラクター）

青師団高校戦車道チームメンバー。

● トリスターナ（本家キャラクター）
青師団高校戦車道チームメンバー。

● アンダルシア（本家キャラクター）
青師団高校戦車道チームメンバー。

● バスク
青師団高校戦車道チームメンバー。三号突撃砲砲手。赤いバンダナを額に巻いている姉御肌な性格の3年生。

● ガリシア
青師団高校戦車道チームメンバー。

〈登場戦車〉

● カヴェナント
英国の巡航戦車。構造上の関係で、車内がサウナ状態になる欠点を抱えているが、戦車に関して素人な塚野スズネは、格安という理由だけで中古販売サイトから2輜も購入してしまった。
2ポンド砲を主砲とする。

● ハリー・ホプキンス
英国の軽戦車。マークⅧとも表記される。
2ポンド砲を主砲とする。

● SU-100
旧ソ連の対戦車自走砲。
強力な100mm対戦車砲D-10Sを主砲とするが、固定砲塔なので全方位への即応は不得手。

● UEトラクター・機関銃搭載型

フランスの装甲トラクターに7mm機関銃とその為の箱型戦闘室を設けた豆戦車仕様。

●VK16.02レオパルト

ドイツの試作軽戦車。

パンター中戦車をデフォルメ化したような見た目で、5センチ砲を主砲とする。

黒森峰女学園が保有するが、重装甲重火力戦略の推進で放置されていた。

●IS-3

旧ソ連の重戦車。

全体的に被弾経始が考慮された設計で、強力な122mm砲を主砲とする。

●T-44

旧ソ連の中戦車。

主砲こそT-34-85と一緒だが、設計は当時としては先進的で、戦後のソ連主力戦車の設計に大きな影響を与えた。

●コメット

英国の巡航戦車。

良好な機動力と強力な77mm砲を装備。

●クロムウエル

英国の巡航戦車。

最高速度は時速64kmと、第二次大戦中最速の中戦車と評された。

6ポンド砲搭載型、75mm砲搭載型、95mm榴弾砲搭載型といったバリエーションが存在している。

●M4A3E2中戦車

アメリカの中戦車で、通称シャーマン・ジャンボ。車体正面装甲が傾斜付きの100mm厚、砲塔正面が177mm厚という鉄壁の防御力を備える。

●T29重戦車

アメリカの試作重戦車で、対ティーガーII重戦車として計画されたが、実践投入はされなかった。

強力な長砲身105mm砲で武装している。

●SU-100Y

旧ソ連の駆逐戦車で、試作のT-100重戦車の車体に海軍の130mm艦砲を搭載している。

〈登場組織〉

●フロンティア学園

100年以上の歴史を持つ高校だが、今まで戦車道を科目に設置した事が無かった。

戦艦三笠も属する敷島型戦艦をモチーフにした学園艦をプラットフォームにしているが、度重なる改装で敷島型戦艦に見えなくなっている。

●田張整備工場

日本戦車道連盟と契約関係にある、戦車道用戦車の修理・整備工場だが、一応それ以外の機械や車輛の整備・修理も請け負っている。

●隼高校

田張エミが所属する高校。プラットフォームは全通飛行甲板時代の旧日本陸軍空母のあきつ丸をモチーフにした学園艦。

かつて戦車道があったが、本家アニメ時点より20年前に廃止さ

れ、その名残として機械部が存続している。

●バラトン工業高校

ハンガリー風の高校で、ハンガリー戦車を主戦力にした戦車道チームを保有。

人工温泉が名物。

●羊の丘学園

ニュージーランド風の高校で、シャーマン戦車やスコフィールド戦車等を主戦力にした戦車道チームを保有。

●新千歳高等学校

文科省の学園艦統廃合政策の過程で誕生した高校。
北海道の苫小牧を母港とする。

●エクセルシオール大学附属学院

政府の戦車道推進政策に呼応して、同名大学が設立していた高校。
大学の資金力を背景に、充実した戦車戦力が整った戦車道チームを保有している。

〈登場用語〉

●トライポイント

フロンティア学園で導入されている成績評価システムの1つ。
何かの活動や取り組みに挑戦すると、その内容や達成度合い等、各種要素を考慮に入れた成績点を獲得する事が出来る。

挑戦内容や評価によっては、進学や就活において推薦事項として適用される事もある。

成績不振の生徒のバックアップ用としても機能するようで、塚野スズネが退学回避の為に利用する事となった。

●競技用戦車

戦車道向けに改造が施された戦車の総称。
搭乗員保護の為にカーボンコーティングや、被撃破時に自動掲揚される白旗が設置される。

登場人物（青師団高校）

本家高校。

但し人員補充の為にオリジナルキャラクターを多数設定している。

本家キャラクターには人名の後ろに（本家）と表記。

予選リーグの回から登場する。

政府の戦車道へのテコ入れに伴い戦車道設置校が増え、その為に長らく開催されていなかった全国高校大会出場を賭けた予選リーグが復活するが、これまでの戦績によつては既存校も予選リーグ出場の対象校として指定される事になり、その結果、ここ数年不振続きの青師団高校も選ばれてしまう事となった。

現隊長のエルは、今年度の全国大会の1回戦で敗北した事が響いていると考えており、それ故に苦悩している。

スペイン系の高校であり、ドイツ、ソ連、そしてスペインの戦車を保有し、その戦力は決して弱いものではなく、古参校だけあって他校に負けない練度を誇り、いわばポツと出のフロンティア学園にとつては十分な強敵となつて立ちはだかる。

●エル（本家）

青師団高校戦車道チーム隊長。3年生。

来年の全国大会に向けた予選リーグの対象に選ばれてしまった事を、隊長たる自分の責任であると苦悩している。

Ⅱ号戦車F型に車長として座乗する。

●ヴィリディアナ（本家）

3年生。

エルが座乗するⅡ号戦車F型の操縦手を担当する。

●トリスターナ（本家）

3年生。

エルが座乗するⅡ号戦車F型の装填手兼通信手を担当する。

●アンダルシア（本家）
II号戦車F型の車長を担当する。

●バスク

青師団高校戦車道チームの副隊長。3年生。

三号突撃砲砲手を担当し、赤いバンダナを額に巻いている姉御肌な性格をしている。

苦悩を独り抱え込むエルをサポートする。

●ガリシア

1年生。慎重な性格。

BT-5の車長を担当する。

●エレナ

1年生。やや大胆な性格。

ガリシアと同じくBT-5の車長を担当する。

●ピリ

1年生。

エレナが車長のBT-5の操縦手で、エレナに感化されたのか同じように大胆な性格である。

●ソル

1年生。

ガリシアが車長のBT-5の操縦手を担当する。

●アルタ

2年生。

次期隊長を期待されており、ベルデハ2の車長を担当する。

●ソフイア
2年生。

次期副隊長を期待されており、IV号戦車H型の車長を担当する。

●ミランダ

II号戦車F型の車長を担当。

想定外の事態に弱いが、本人もそれを自覚しており改善に努めている。

●ペネロペ

2年生。

III号突撃砲の車長を担当しているが、3年生で副隊長のバスクが事実上の指揮官であり、本来はバスクが車長のポジションにつくべきところを、どうしても砲手をやりたいというバスクの我が儘が通った形となっている。

●バレリア

III号突撃砲の操縦手を担当。

●カサンドラ

III号突撃砲の装填手を担当。

登場人物（バラトン工業高校）

ハンガリー系の高校で、ラデツキー級戦艦をモデルにした学園艦を拠点とし、長崎県佐世保市を母港とする。

人工温泉やブダペストの国会議事堂を模した校舎等が名物で、校外をトラムが交通手段として走っているところは蒸気機関車を保有する知波単学園と似ている。

黒森峰女学園やプラウダ高校、青師団高校等と同じく古参の戦車道設置校の1つだが、戦車道全国高校生大会には出場したりしなかったりと波があり、ここ10年近くは実績に乏しい事から予選リーグの対象校の1つとなった。

熊本県を拠点とする黒森峰女学園と付き合いがあり、Ⅲ号突撃砲やⅣ号戦車を供与されて運用していた事もあったが、ハンガリー戦車への更新を地道に進めて行った結果、本予選リーグで遂にハンガリー戦車のみでの出場を果たす。

最終的にはタシユ中戦車の保有も計画しているが、現状実現していない模様。

尚、黒森峰女学園から供与されていたドイツ戦車は、ハンガリー戦車への更新に伴い全て返却したようである。

パンツァージャケットはWW2時のハンガリー陸軍のものをモデルにしている。

●タールツアイ

現隊長の2年生。

性格はフレンドリーでお茶漬けやおでんを好み、特に梅干しが大好物だが、塩分超過には気を付けている。

トウラインⅡ中戦車に座乗していたが、Ⅲに強化される。

本心ではドイツ戦車も残しておくべきだったと思っているが、ハンガリー系の高校故にハンガリー戦車だけでチームを編成したいというメンバー達の願いも理解している。

●アンヌ

現副隊長の2年生。

トルデイII a 軽戦車に座乗する。

ハンガリー戦車のみของทีม編成に最も意欲的な人物だったらしい。

機動力に長ける軽戦車を好み、騎馬隊や戦闘機隊のように機動戦闘を挑む。

●ニコラ

もう1人の副隊長で2年生。

ズリーニイII自走砲（以後ズリーニイ105）の車長を担当。

アンヌと同じくハンガリー戦車のみของทีม編成に意欲的だった。

●マヨル

3年生で隊長だったが、隊長の座をタールツアイに明け渡した。

タールツアイの事を信頼しており、自身も完全なハンガリー戦車への移行には内心反対であったが、自分の我が儘を通す事による士気の低下を懸念し、チームとしての要求を優先した上で、自分より柔軟な思考のタールツアイにチームを託している。

それでもドイツ戦車への未練を捨てきれず、1輦のズリーニイ105を75m対戦車砲搭載型のズリーニイI（以後ズリーニイ75）に改造し（その際、日本戦車道連盟にパーツの新造を申請して承認されている）、これに座乗して指揮を執る。

登場戦車

●カヴェエナントー

英国の巡航戦車。構造上の関係で、車内がサウナ状態になる欠点を抱えているが、戦車に関して素人な塚野スズネは、格安という理由だけで中古販売サイトから2輜も購入してしまった。

マチルダ歩兵戦車やヴァレンタイン歩兵戦車等にも採用された2ポンド砲を主砲とする。

●ハリー・ホプキンス

英国の軽戦車で、マークVIIIとも呼ばれる。

小柄で機動力が良く、2ポンド砲を主砲に採用している。

戦車道経験者の大地が座乗。

●SU—100

T—34の車体をベースに開発された、旧ソ連の強力な対戦車自走砲。

100mm対戦車砲D—10Sを主砲とするが、固定砲塔なので全方位への即応は不得手。

副隊長の野島が座乗。

●UEトラクター・機関銃搭載型

フランスの非武装の装甲トラクターに7mm機関銃と、その為の箱型戦闘室を設けた豆戦車仕様。

火力こそ非力だが、様々な作戦行動でフロンティア学園戦車道チームに貢献する侮れない戦力である。

●VK16.02レオパルト

史実では完成間近で組み立てが中止となったドイツの試作軽戦車。

日本戦車道連盟や黒森峰女学園、そして本国ドイツの有志が協力して設計図やパーツをかき集め、黒森峰女学園で完成の日の目を迎え

た。

パンター中戦車をデフォルメ化したような見た目で、5センチ砲を主砲とする。

黒森峰女学園の重装甲重火力戦略の一環として、偵察車輛として導入されたが結局Ⅲ号戦車で代用出来る事、軽戦車としては整備性が複雑、そしてティーガーⅡやパンター、ヤークトパンターといった重戦力の導入に予算を回す事が優先された経緯から戦力外扱いとなり、一応組み立てを完了させてから日本戦車道連盟に譲渡する予定となっていた。

●IS―3

旧ソ連の重戦車で、戦中末期頃に実用化されたが実戦には投入されていない。

全体的に被弾経始が考慮された設計で防御力が非常に高く、強力な122mm砲を主砲とする。

戦車道教導企業であるイズベスチャ社は、少なくともこれを5輛保有しており、教官の足羽香林も座乗する。

●T―44

旧ソ連の中戦車で、戦中末期頃に実用化されたが実戦には投入されていない。

主砲こそT―34―85と同じだが、設計は当時としては先進的で、戦後のソ連主力戦車の設計に大きな影響を与えた。

戦車道教導企業であるイズベスチャ社は、少なくともこれを30輛近い数字で保有している。

●コメット

英国の巡航戦車。

良好な機動力と強力な77mm砲を装備。

●クロムウエル

英国の巡航戦車。

最高速度は時速64kmと、第二次大戦中最速の中戦車と評された。

6ポンド砲搭載型、75mm砲搭載型、95mm榴弾砲搭載型といったバリエーションが存在している。

●M4A3E2中戦車

アメリカのM4中戦車シリーズの一種で、通称シャーマン・ジャンボ。

車体正面装甲が傾斜付きの100mm厚、砲塔正面が177mm厚という鉄壁の防御力を備える。

●T29重戦車

アメリカの試作重戦車で、対ティーガーII重戦車として計画されたが、実戦投入はされなかった。

強力な長砲身105mm砲で武装している。

より強力な120mm砲を搭載したT30といったバリエーションもある。

●SU-100Y

旧ソ連の駆逐戦車で、試作のT-100重戦車の車体に海軍の130mm艦砲を搭載している。

第1話 戦車道仮承認 チャプター1 フロンティア学園

洋上を進むクラシカルな見た目の巨大な船。

全長5.5kmになるこの船は、フロンティア学園と呼ばれる高校のプラットフォーム、即ち学園艦になっていた。

当初は「開拓高校」という名前だったが、戦後にフロンティア学園に改名した経緯を持つ。

戦艦三笠が属していた敷島型戦艦をモチーフとした船で、100年以上の歴史を持つ古参艦だが、何度も近代化改修を重ねた事で、パッと見ではモチーフの敷島型戦艦とは思えぬ姿に変貌している。

神奈川県横須賀市を母港とし、同県の飛び地とされ、人口は2万人程度だ。

この学園艦の校舎、1年6組から物語は始まる。

20XX年8月31日

時計の針は12時をちよつと過ぎたところである。

「あー終わったあ」

1年6組の教室の中で、塚野スズネは大きく伸びをした。

今しがた、孤独の緊急特別追試を終えたばかりで、担当教諭が彼女の答案用紙を回収して教室を退室したところだった。

「にしてもどうすっかなあ…」

塚野は椅子の上で反り返りながら、けばけばしい化粧で覆われた顔を少ししかめた。「またノイジーに殺されちゃうよお…」

天井を眺めながら数秒間考えたが、何も良い考えは浮かんでこない。

「…ま、いつか」

塚野はそう呟くと、体に反動をつけて立ち上がった。

鞆を取り、自分も教室の扉をスライドさせて出て行き…

またすぐに戻って来た。

「あつぶね」

塚野はエアコンの操作パネルに歩み寄ると、きちんと停止ボタンを押し、それから照明のスイッチも切ると、今度こそ教室を後にした。

教室を出た塚野が向かったのは食堂だった。

昼食の時間なので、中はおにぎりや丼やカレーライスや麺類を注文する学生でごった返している。

「おーい、ノイジー！」

「だからノイジーやめろよ」

塚野を待っていた2人組のうちの片方が言った。

ノイジーこと野島カエデもまた、塚野と同じギャルだが、けばけばしい化粧の塚野と違い、こちらは目立つ化粧はしていない。

「まあいいじゃん別に」

「それで、追試どうだったの?」

もう片方の土橋アンナが聞いた。

土橋の方はギャルでは無く、いわゆるごく普通の生徒だが、塚野と野島とは友達でよく一緒に行動している。

土橋が質問してから30秒も経たない内に野島が塚野の胸ぐらを掴んだ。

「…おいてめえ、あれだけ教えたのに、ふざけんなよ……」

塚野が前年度の成績不振から留年が決定した後、野島が勉強を教えしてくれる事になったのだ。

因みにこの頃から口やかましく小言をくれるようになったので、ノイジーと呼ぶようになったのである。

しかし塚野は悪びれずに肩をすくめた。

「いやあ、分かんないもんは分かんないしさあ。もうお手上げ」

「あ?」

野島が塚野の胸ぐらを掴む手に力を込めた時、土橋が周りを気にしながら間に入った。

「えっと、カエデちゃん。周り見てるし、ね?」

野島は「けつ」と舌打ちして塚野を放したが、険しい目つきは塚野

に据えられたままだ。

「…で、どうすんだよ？それ駄目だったらマジで終わりだぜ」

「まあまあ、何とかなるって」

楽観的な答えをする塚野に、野島の鼻息がまた荒くなり始めた。

と、そこへ連絡のチャイムが鳴り響いた。

「1年6組の塚野スズネさん、1年6組の塚野スズネさん。至急生徒会室まで来て下さい」

続く

チャプター2 呼び出し

生徒会室へ行くと、生徒会員の1人が受話器を取り、内線で生徒会長室に塚野が来た事を知らせた。

「会長室へどうぞ」

取次ぎをした生徒会員に促されるまま、塚野は生徒会長室の扉を押し開いた。

「ちーっす」

生徒会長室では、3年生で生徒会長の国崎マイと、同じく3年生で副会長の佐伯ユキネが何かを話し合っていたが、塚野が入室すると話を中断した。

脇に退がった佐伯が敵意のこもった鋭い視線を塚野に向ける。

国崎は1枚の書類を、尚も数秒間眺めていたが、不意に塚野の方に顔を上げ、書類を下ろした。

「小高先生から聞きました」

そう切り出され、塚野は小高先生が誰だったか思い出そうとして、さっきの緊急特別追試の担当だった事に思い当たった。

その時、国崎は眺めていた書類を突き出した。

中身は緊急特別追試の答案用紙で、塚野の名前が右上に書かれている事から、紛れも無くさっきまで塚野が悶々としていた答案用紙だった。

そして点数は…彼女の名誉の為に控えておこう。

「あ、ああ、それっすか…」

「…舐めてるの?」

佐伯の口調は刺すような冷たさだった。

普通の人間ならば金縛りに合うところだが、なんと塚野は凶太くもへらへら笑いながら頭を搔いて見せた。

「いやさあ、全然分かんなかったんだよねえ。完全お手上げ状態」

だが、直後に国崎から返って来た言葉に、さすがの塚野も固まった。

「退学です」

国崎はあくまでポーカーフェイスだが、佐伯とは違う別の冷たさが

あった。「ゲームセット、ですよ」

「ふえ…う」

塚野は理解が追い付いていないような声を上げたが、その実、いきなり首元にナイフを突きつけられたかのような衝撃を受けていた。

「塚野さん。3月の末に言った事、忘れていないですよ？フロンティア学園は2度目の留年は認めない、もし今度も成績不振なら、退学になる決まりだ…と言った事を…」

「え、ああ、そうだった、かなあ…？」

とぼけてはみたが、本当は覚えていた。

聞いたその時はただの脅しだろうと、ロクに校則を確かめもせずスルーしていたのだが、まさか本当にそういうルールだとは思ってこみなかったのである。

とは言え、食い下がってみる。

死中に活を求めるのだ。

「あ、でもさ。2学期から頑張ったらしいじゃ…」

しかし最後まで言い終わらないうちに、国崎の冷徹な言葉が遮る。

「もう手遅れです塚野さん。あなたは今年の1学期の成績で、もう退学回避限界点を越えてしまいました。残りの期間を、たとえば全科目100点満点を取ったとしても挽回出来ないレベルです」

「え、どゆこと…？」

「何の為に緊急特別追試やったって思ってるのよ？」

苛ついた佐伯が、床を右足でトントン叩き始めた。「全然分かってないわね」

その後を国崎が引き取る。

「…あれが、成績を挽回するラストチャンスだったのです」

「そ、そーなんだ…」

「…ふざけてるの…？」

佐伯の体が前のめりになり、今にも塚野に殴りかかりそうだ。

「佐伯さん、もういいです」

国崎に止められて、佐伯は素直に姿勢を正した。

「はい会長」

国崎は再び塚野を見て話の続きをする。

「本当ならこの場で退学処分といったところですが…とは言え、何とかならないか考えてみました。そして、まだ何とかする方法があります」

塚野は思わず興味をそそられた。

「へえ…なんすか？」

「残りの期間の学業を頑張りつつ、『トライポイント』を稼げば、進級条件を満たす成績点を取れるかもしれません」

「とらいぽいんと…？」

「何かに挑戦する事…部活でも、個人的な活動でも何でも…とにかく挑戦する内容や、その結果次第ですが、それが評価点として成績に加算されます」

塚野にも、入学時に説明を受けた記憶がうつすら残っていた。

このフロンティア学園では、何かに挑戦する事を事前に生徒会か担任教師に表明していれば、その挑戦活動の結果を成績点に加算してくれるという特殊な成績評価システムが取り入れられている。

また、自分が挑戦した内容が、場合によっては進学希望先への推薦状にも成り得るのだ。

基本的に違法だったりモラルに反していたり無謀過ぎたりしなければ、どのような挑戦内容でも認められるようになっていくが、決して全生徒に強要されるわけではなく、任意で決める事が出来る。

もともと余程の理由が無い限り、学業と両立出来ていなければ、それはそれで問題視されてしまうが。

「あー、なんか聞いた事あつかな」

国崎の説明が続く。

「もし明日の午前8時40分までに、挑戦内容が決められたら、退学処分は取り下げましょう。もし断るのであれば、それでも結構です」

「え、何それ。なんでそんな回りくどい事するわけ？退学させる気なら、ズバッと退学処分にしたらいいいじゃん」

「…その後はどうするのですか？」

「さあ。どっかに転校すりやそれで済む話っしょ」

国崎が呆れたような、憐れむような、あるいは両方の気持ちを合わせたような溜息を吐いたので、塚野は困惑した。

「な…なんすか？」

「塚野さん。今のあなたの偏差値では、低レベル校しか行けませんよ」「いや、低レベルつつつてもたかが知れてるっしょ」

「疑うのは自由ですが、あとで後悔しますよ。それはそれは酷い所だそうです。それでもいいなら止めませんが」

「う…」

これには塚野も、身の振り方を再考せざるを得ない。

塚野とて、将来は辛く苦しい人生を送りたいと思っっているわけではないし、フロンティア学園に入学したのも、色々事情こそあれ、自分の将来を考えての事だ。

…が、今の状況は控えめに言っても『最悪』である。

考え込んだ塚野に、佐伯が煽りを入れる。

『「下手な考え休むに似たり」って言うし、さっさと転校しちゃえば？」

「佐伯さん…！」

さつき止めた時より少し強い口調で国崎が言った。「他人を貶める事が生徒会の役割じゃありません」

「…すみません、会長」

佐伯は素直に謝ったが、表情は釈然としておらず、その後の質問も、言葉選びに苦労していた。「ただ…でも、本当にいいんですか？こんな…生徒」

「決めるのは本人です」

塚野は拳を握った。

こうなれば答えは1つだ。

「…ちっ、分かったよ。やりやあいんよね、やりやあ」

国崎が塚野の眼を覗き込むように確認する。

「では、明日の8時40分までに答えを出す、という事でいいですね？」

塚野はうんうんと頷きながら佐伯に指を突き付けた。

「あたぼうよ。それにこいつの言う事がいちいちむかつくしさあ」

「ふーん。まあ、無理しないでね」

佐伯の冷笑に、塚野は睨み返した。

「てめえ、まじで見てるよな」

「あ、それはそうと…」と、国崎が言った。「私も佐伯さんも、一応3年生です。敬語で話すのがマナーですよ」

「あ…これでいいです…ですか？」

「はい。他に質問は？」

「無いです」

「あーもうおんぼろエレベーターが。階段の方が早くね？」

実際のろいエレベーターに無意味に当たり散らしながら外に出ると、野島と土橋がベンチに座って待っていた。

「あ、どうだった？」

真っ先に立ち上がった土橋が言った。

歩きながら生徒会から聞いた話を2人に聞かせると、野島が考え込むように腕組みした。

「ふーん、なるほど。で、どうするんだ？」

「考えなう」

「あのさ、時間無い事分かってんのか？」

「まあまあ力エデちゃん。いきなり決まるものではないし…」

土橋が苦笑しながらそう言ったが、野島の表情は硬いままだ。

「…ったく。マジで明日までに答え出せよ」

「はいはい、分かってるって」

「分かってねえ面してっから言ってるんだぞ」

また野島がヒートアップしそうになった為、土橋が話題を振る。

「あ、そうだ。スズやんさ、良かったら漫画部に入らない？」

しかしこの土橋の提案は速攻で却下された。

「あ、いや、うち絵心死んでるから却下っすわ」

「えー。何かオリジナル漫画描いて売り出したらいいのに。普通に成績点になるよ、実際にあっつし」

「あつし棒人間しか書けねえんだわ」

「うーん：頑張ったら書けると思うんだけど」

「無理なもんは無理だっつーの」

結局その場では何も決まらなのまま、3人は分かれた。

続く

チャプター3 閃き

そして時刻は23時に飛ぶ。

「あー、マジどうすっかなあ」

あれから塚野は、明日の午前8時40分までに生徒会に提示する『回答』が思い浮かばず、学生向けアパートの一室で一人悶々としていた。

白のシートが敷かれたベッドの上でゴロゴロしながら、彼女なりに一生懸命考えてみたのだが、どうしても空を手で掴むような感覚ばかりなのである。

「…やっぱ無理かな…？」

そう呟いてみたが、自分の言葉に納得していないもう1人の自分がいるので、なんの慰めにもならないどころか、もやもやが風船のように膨らむばかりだ。

そうこうしているうちにも、時計の針は無情にも淡々と歩みを進め続ける。

「はあ…」

もう何度目かの溜息を吐くと、ベッドから起き上がり、気怠い体を引きずって目の前の勉強机まで持って行った

勉強机の上には、無線LANでインターネットと繋がっているノートパソコンが置いてあり、よくこれでネットサーフィンをしているのが、今も電源をつけっぱなしにしてある。

半ばやけくそな気持ちで椅子に座ると、無線マウスに右手を置いてインターネットエクスペローラーを開き、お気に入りメニューの中からフリー動画投稿サイトを選んでページを開いた。

いつも適当に動画を漁って視聴しているのだが、この時もいつもの習慣の動きで開いたに過ぎず、そこに何かあるかもしれないという意図で開いたわけでは決して無かった。

しかしこれが、塚野にとって新たな一歩になろうとは思ってもみなかった。

いわば、全くの偶然の産物だった。

「…ん？」

塚野が画面をスクロールしてふと目に留まったのが、『おすすめ動画』の一覧の中の1つの動画だった。

その動画のタイトルは『名勝負！IV号vsティーガーI』と表記されていた。

「…アイブイ号vsティーガーアイ…？何じゃそりや？」

サムネイルには2台の戦車が向き合っている画像が映っていた。

何だかよく分からないが、おすすめ動画は時々、思ってもみない動画をラインナップしてくる事がある。

「ふうん」

一端スルーしてまた画面を下にスクロールした塚野だったが、何故か脳裏からさっきの動画の事が離れなかった。

それでまた上にスクロールし直して、さっきの動画を見つけると、何気無く右クリックした。

どうせすぐにブラウザバックするつもりだったが、塚野は動画の身に釘付けとなった。

『石柱を挟んで睨み合うIV号とティーガーI。大洗女子学園の残る戦車は、このフラッグ車のIV号のみ…！』

男性実況者の言葉通り、元々ブロンズ像か何かを上を立てられていたであろう、背が低くて白く四角い石柱を挟んでアイブイ号（IV号戦車）とティーガーアイ（ティーガーI）が砲身を向け合って対峙している。

そこには緊迫感が張りつめており、それが塚野の目を釘付けにして、ブラウザバックボタンを押す事を躊躇させた。

男性実況者の実況は続く。

『いよいよ黒森峰の後続が押し入って来た！時間が無いぞ大洗！さあどうする…！』

と、男性実況者の声が合図だったかのようになり、IV号戦車が動き出した。

左から円を描くようにティーガーIに接近していくが、ティーガーIも車体を回転させて対応している。

そして…

『IV号発砲！しかし跳弾！ティーガーIも反撃したが外れ…おつとここでIV号が加速…おおつと、なんと横滑り！ドリフト走行で一氣に後ろに回るつもりだ…！』

IV号の加速に比例して実況も加速し、塚野の目も釘付けになる。

いかにも重そうなティーガーIが急いで車体を回すが、IV号のドリフト走行に虚を突かれて反応が一瞬遅れた事が仇となり、僅差で間に合っていない事は明白だった。

『IV号が来た！IV号が来た！後ろに回った！両者発砲！』

男性実況者の声は、興奮の最高潮に達していた。

「…すげえ…なにこれ…」

塚野はすっかりこの迫力ある戦いに見入ってしまった。

尚も映像は続く。

男性実況者の声は落ち着きを取り戻していた。

『さあ…煙でよく見えませんが、果たして結果や如何に。IV号が白旗なら黒森峰の優勝、ティーガーIが白旗なら大洗の優勝。はたしてどちらが勝利したのか…あ、煙が晴れて来ました。結果を見てみましょう』

映像では、砲塔から不安そうに顔だけ覗かせているIV号の少女に対し、ティーガーIの少女は暫し佇んだ後、何かを悟ったように体から力を抜いた。

その時、判定担当らしい女性の声が響いた。

『黒森峰フラッグ車、走行不能…よって…大洗女子学園の勝利!!』

画面に、『大洗女子学園の勝利』というテロップが表示され、男性実況者の声が続く。

『信じられない快挙！初出場にして初優勝！圧倒的戦力差にも関わらずもぎ取った勝利！そして黒森峰女学園は、残念ながら去年の雪辱を果たせず、今年も準優勝となりました！しかし物凄い迫力！熱い試合、感動のファイナルでした！死力を尽くして戦った両者に、惜しみ無い拍手を送りましょう！』

そこで映像は終わったが、塚野は暫し呆然としていた。

試合の一部を切り取ったほんの数分間の映像なのに、頭の中では、2台の戦車の熱い激闘の様子が延々とループし続けていたのである。塚野はカーソルを動かして、画面の左下にある輪を描く矢印ボタン、即ちループ再生を押した。

さつきと同じ映像がもう1度再生されたが、またしても見入ってしまった。

それを何回繰り返し返したのだろうか、時刻が既に日付を越えていた。

その時ふと、塚野は閃いた。

「……これだ……！」

そして翌朝。

「戦車道？」

午前8時30分の生徒会長室で、佐伯の裏返った声が響いた。

それに対して国崎は、戦車道について少しばかり知っているようだった。

「茶道や華道と並ぶ、伝統的な武芸ですね。戦車同士が戦うスポーツみたいです」

「……いや会長、どうして詳しいんですか？」

「何とも奇遇ですが、昨日のネットニュースでちらと見ました。高校生のチームが、大学生のチームを破ったという試合の記事でした」

そう説明すると、国崎は塚野に顔を戻した。「我が校は100年以上の歴史がありますが、戦車道をやっていたという話は聞いた事無いですし、記録も見た事ありません。恐らく、あなたが初めてです。我が校で戦車道をやりたいと言い出したのは」

「はあ……」

塚野からすると、フロンティア学園が100年以上の歴史を持つていようがいまいがど関心の外だったが、少なくともこれで、戦車道を選んで良かったという確信は得られた。

つまり、自分がここで戦車道をやる最初の人間になるという事であり、成績評価点も、その分多くなる筈だ。

「それじゃあ早速部活に組み入れて貰っていいですか？」

すると国崎は、意外そうな表情を見せた。

「塚野さん。戦車道は教科であって、部活では無いですよ」

言っている事が分からず、塚野は首を傾げた。

「…はい？」

「戦車道がある高校では、選択制必須科目の中に設定されているみたいです。例えば弓道や書道の中に戦車道もあって、その中から一つを選ぶ感じですよ」

「え、いや…てつきり部活とばかり…」

先入観と言われればそれまでだが、塚野にとってはどう見ても『教科』と言うよりは部活動の1つにしか見えなかった。

まあ、世の中不思議な事が多々あるものだ。

しかしまず大事なものは、退学を免れた事だ…当分の間は。

国崎が居住まいを正した。

「それで、何が言いたいのかと言いますと…今回の場合、我が校に新たな科目が設定されるかもしれない、という事です」

塚野は文法の1つに引つ掛かりを感じたが、聞き間違いの可能性もあったので、一応聞き返してみた。

「え…『かも』、ですか？」

「はい。仮承認という形になり、正式承認されるかどうかはその後の頑張り次第です。予算も仮予算となり、通常予算と比べると少ないです」

「戦車って高そうですね」

佐伯が言った。「通常予算でも難しいのでは？」

「それは私にも分かりませんが…」

そこまで言い掛けたが、塚野の言葉で中断した。

「まあ、何とか頑張ります」

佐伯が興味深げに片眉を上げた。

どう見ても塚野の企てがうまくいくとは思っていない様子だ。

「ふふ、お手並み拝見ね」

「まだなんもしてねえのに分かんねえでしょうが…！」

塚野はついムキになったが、国崎がサインを求めた。

「はいそこからまでにして……ここにここにサインして下さい」

「え…あ、はい」

国崎から黒のボールペンを借りて、指定箇所にも自分の名前を書き込んだ。

続く

チャプター4 準備

そして午前の授業が終わり、昼休みの食堂。

「しつかしました妙な事やるんだな…」

野島の目の前に土橋のラップトップコンピューターが置かれており、塚野が見つけた例の戦車道の試合動画が開かれていた。

「けどやる事多くてマジだしい、人もいねえしさあ」

「初っ端からダメダメだなおい」

頬杖突きながら天井を眺めている塚野に呆れた口調の野島。

と、そこへ後ろから声が掛かった。

「何を見てるんですか？」

振り返ると、黒の一眼レフカメラをストラップで首から提げている生徒が立っていた。

左腕には『報道部』と書かれた腕章を巻いており、見た目から判断すると1年生だろうか。

「えつと…誰？」

と、見知らぬ顔に塚野が首を傾げると、カメラ少女は慌てて胸ポケットから名刺入れを取り出した。

「申し遅れました。1年生で報道部の萩原ミツキと申します！」

塚野、野島、土橋の順で自分の名刺を渡す萩原。「皆さんのお名前は？」

「塚野スズネ。よろっす」

「野島カエデだ」

「土橋アンナよ」

自己紹介が終わると、塚野が右手の人差し指と中指の間に挟んだ名刺の裏表を何度も引っ繰り返しながら尋ねた。

「…新聞書いてんの？」

萩原は楽しそうに頷いた。

「はい！大変ですが、すっごく楽しいですよ！」

「読売？毎日？ニユーヨークタイムズ？」

「あ、いえ、あくまで校内新聞です…」

苦笑交じりにそう答えた後、ラップトップコンピューターの画面に目を転じる。「ああ、戦車道ですか！」

動画は既に再生が終わっていたが、タイトルで気付いたようだ。

「知ってんの？」

「はい。なんでも政府が2年後にこれのプロリーグを開くので力を入れてるらしいんです…でもどうしてこの動画を見ているんですか？」

「こいつが戦車道やるんだってさ」

野島が右手の突き出した親指を塚野に振った。

「ああ、なるほど。ちよつと珍しいなと思ったもので、それでちよつと声を掛けてみたんですが…」

そう言つてから、萩原は唐突にこう切り出してきた。「そうだ。取材させて貰えませんか？」

「…What?」

なぜか英語で聞き返す塚野。

萩原は報道部員としての血が騒ぐのか、活き活きとして説明する。

「いやあ、この学園艦で戦車道って、確か初めてだっと思ってまして、取材すれば良いネタになるんじゃないかなあって」

「すっげえ唐突だな」

と、野島がぼそりと言つた。「でも全然何も決まってるねえぞ」

「いえいえ、寧ろ大歓迎です！フロンティア学園の戦車道の歴史を1から取材出来るなんて、こんな嬉しい事はありませんよー！」

「…まだ何も始まってないと思うんだけど…」

萩原のペースに困惑した土橋が言った。「あと私とカエデちゃんはメンバーじゃないよ」

「塚野さん…でしたっけ、だけですか？」

「これから増やすとこ」

と、だるそうに机に突っ伏しながらボソボソ答える塚野。「まあ当ては無いですけど」

「じゃあ、こつちで宣伝を手伝います！記事にしたら注目が集まると思いますよー！」

秒でがばと身を起こす塚野。

「え、まじ?」

「はい!お任せ下さい!」

「おっしや商談成立!」

まだ仮承認の段階だが、人が集まらないと何も始まらないし、良い宣伝になるのであれば、ここは取材を受けた方が何かと都合が良さそうだと考えたのだ。

すると野島が、右手の人差し指を塚野にピンと突き付けた。

「でもオリエンテーションやるのはおめえだぞ」

「分かってるってもう」

「じゃあどうするつもりだよ」

「んー、まあ、戦車走らせときゃなんとかなるっしょ」

「戦車ねえじゃねえかよ」

「買えばいいっしょ」

「どこで買うんだよ」

「ああもう、だからノイジーなんだよ」

わざとらしく頭を抱える塚野。

「あ、あの、すみません」

萩原の遠慮がちな声掛けに、2人の口喧嘩が止まる。「今日の放課後に何か活動予定ありますか?」

「…とりま戦車探しと場所探しやろっかなあって」

「どこで待ち合わせます?」

「1年6組で」

「え、1年6組…?」

どうやら萩原は同じ1年のエリアにいなながら塚野の存在に全く気付いていなかったようだ。

困惑して聞き返した萩原だが、野島の説明であっさり納得した。

「こいつ、留年中」

「ああ、なるほど」

意外と萩原は人の経歴をあれこれ詮索してこなかった。

報道部員なのでその気になれば幾らでも掘り返す調査を行えるだ

ろうが、差し当たり戦車道とは無関係なので質問しない事にしたようだ。

「では、放課後にまた」

「ういつす」

そして放課後。

塚野、野島、土橋、萩原の4人はコンピューター室にいた。

出入り口に近い席のデスクトップを操作する塚野が開いたサイトは、日本戦車道連盟の公式ホームページだった。

『日本戦車道連盟公認競技用戦車』：うう、噛みそう…」

そうぼやきながら、サイト内の文章をカーソルでなぞっていく。

「あー、どんな戦車でもダメなんだ」

土橋の感想に、萩原が自分の記憶を思い出しながら解説する。

「確か、第二次世界大戦の終わり？までに使われていた戦車だけって聞いた事が」

「へえ…えーつと。ああ、あった。『参加可能な車両：1945年8月15日までに設計が完了して試作されていた車輛と、それらに搭載される予定だった部材を使用した車輛のみで、左記の条件を満たしていれば、実在しない部材同士の組み合わせは認められる。設計段階の車輛に関しては、部材が調達できず再現が困難な場合は連盟と個別協議を行い、許可された範囲内の改造が認められている。』…ええと、イミフ」

「まあともかく、ミツキちゃんの言う通りって事なのかな。厳密には違う感じだけど」

と、土橋が分析した。

「すっげえ、選り取り見取り」

塚野が競技用戦車のラインナップを下へゆっくりスクロールしていくが、予想以上に戦車の種類は豊富だった。

サイズは大小様々で、それぞれのデザインも個性派揃いだ。

「ぶっちゃけそんなに種類無いかと思ってたわ」

「なんか戦車にしては安くねえか？」

例えば陸上自衛隊の10式戦車は十数億円するが、今見ているサイトの値段は、明らかにそれより圧倒的に安価だった。

「政府の補助とか、日本戦車道連盟の一部肩代わりで安くなっているようです」

「でも、日本戦車道連盟に加盟していないと購入出来ないみたいだよ」

「じゃあ加盟しよつかなあ…まだ仮承認だけど」

「そもそも仮予算で買えんのかよ」

「いけんじゃね」

塚野は持参したクリアファイルに入れていた、生徒会から渡された書類の束を取り出して一枚一枚めくっていった。

だが、その楽観的な夢想は見事に打ち砕かれた。

「あつたあつた…え、無理じゃん」

「いくら？」

土橋が一度書類を覗き込んでから画面に目を戻し、一瞬の間の後。

「…これなら買えるよ？」

「え、まじで？」

塚野が一瞬前のめりになったが、土橋が指差した戦車を見て酷くガツカリした。「…は？のっぺらぼうじゃん」

「I号指揮戦車B型」

それは履帯付きの車体の上に箱を乗せ、申し訳程度に小さな機関銃を箱に取り付けたような姿の戦車だった。

「いらねえ、こんなやつつけー」

「でも加盟には、最低限の戦車と乗員が揃える事が必要って書いてあつたよ？」

「だからってこんなしよぼい戦車買えねえってのー！」

「でも安いのもってこんなしかないよ？」

土橋が仮予算の範囲で購入可能な戦車達を、指で丸を描くように示した。

M1戦闘車にカーデンロイド、TKSにCV33、T-60にR3

5…それらの『しよぼい』候補達は、塚野の想像する戦車の姿とは遥かかけ離れていた。

「…他探そつと」

「あるのかよ」

「物は試しって言うじゃん」

野島の疑問に塚野はぶつきらぼうにそう答えると、日本戦車道連盟の公式サイトからブラウザバックした。

その結果、一番下に載っていた、中古や不用品、スクラップとして放出された競技用戦車販売サイトで、遂に仮予算でも手が届き、尚且つ塚野にとって戦車と言える姿の戦車を発見した。

大砲のサイズがちよつと不満だが、それでもバランスの良い見たい目をしているように塚野の目に映った。

「くあ…くあぶえ…くあぶえなんとあ…？」

『カヴェナター。英国の巡航戦車。四人乗り。2ポンド砲を装備し、主に練習戦車として運用された』

土橋が淀み無く戦車の名前と説明を読み上げた。

「おお、ツッチー天才かよ」

「スズやんがちゃんと読めてないだけだから」

「なんか、まるでどら焼きだな…」

真横から撮った写真を見ながら野島が言った。

その他の情報としては、この英国戦車の全長に全高、全幅、重量、最高速度といったスペックの一覧だった。

「ちゃんと戦車してるし、しかも2輻セットで超安いし…これならいけんじゃん」

『ちゃんと戦車してる』ってどういう意味だよ」

「こまけえこた良いの良いの。とりま買いだわ」

早速購入手続きに入る塚野。

野島はあっさりと入手出来た事に意外な気持ちだった。

「…意外と売ってるもんだな」

「どうよ。あたしの勝ちい」

「勝手に勝負してんじゃねえぞ」

「じゃあ次は、置き場所の探索ですね」

萩原がコンピューター室での出来事をメモに取りながら言った。

購入手続きを一通り済ませると、4人はコンピューター室を出た。

夕方だが、まだ昼間の猛暑の名残がある上、西日が厳しく照り付けて来るこの時間も不快そのものだった。

4人は校庭の近くを歩いていった。

「あつつう…」

「その化粧も暑苦しいんだよ大体…」

野島がそうぼやく中、土橋が辺りをキョロキョロ見回しながら言う。

「でも本当にあるのかな」

萩原も土橋の疑問に賛成の様子だ。

「確かに、今まで戦車道が無かった学園艦なので、余裕のあるスペースはなかなか見つからなさそうですよね」

そんな不安も後押ししてか、蒸し暑さがより際立っているように思える。

「シャワー浴びてえ」

戦車道創始者が誰よりも早く音を上げた直後、フェンス向こうにある何かを見つけた。「おっあれどうなんだろ」

3人が塚野の視線を追うと、フェンス向こうにある草ぼうぼうの広場に、建物の骨組みが佇んでいた。

元々はテント倉庫だったのか、外壁は無く、骨組みを見る限り屋根は蒲鉾のようなアーチを描く円弧屋根だった事を窺わせる。

「あんな所あったっけ？」

土橋が3人を見回すが、同じように知らない様子だった。フェンスを迂回して広場に入ると、その骨組みの前に立った。

「つか蚊多いな」

たかろうと飛び回る蚊から身を守ろうと、野島はハンドサイズの虫よけスプレーをポケットから取り出して自分に噴き掛ける。

まだ8月が終わって間も無いので、夏の虫が姿を消すまで暫く時間が掛かるだろう。

「重機でも置いてたんかな？」

「昔は拡張工事があったらしいので、これはその名残じゃないでしょうか？」

「相変わらず博識ねえ」

「又聞きなので、本当かはちよつと…」

と、萩原は自信無さげに注釈を入れた。

「でもお誂え向きだよね」

土橋が倉庫だった骨組みを指差した。「今まであんまり気にしてなかったけど、こんな所が近くにあったなんて」

「で、戦車と拠点が決まったけど、メンバーどうすんだ？」

『帰宅部』のノイジーが参加してくれたら話は早いんだけどねえ」

すると、決まってツツコミや反論入れる野島が考え込む表情を見せた。

「それなんだけどさあ。うーん。どうすつかなあ」

「でもカエデちゃん、いつも『何か自分のやりたい事を見つけたい』って言ってたし、ちようどいいんじゃない？」

と、土橋も参加を提案した。

塚野の言う通り、野島はどの部活にも所属していない、いわゆる『帰宅部』だが、これまでに幾つかの部活動を点々としてきたものの、どれも性に合わずに辞めて来た経緯があった。

かと言って自分のやりたい事が他に見つかったわけでもなく、野島にとってはそれが個人的な悩みでもあった。

「報道部はどうです？」

「去年入ったけど性に合わなくてやめたし」

「楽しいのに…」

悲しそうな萩原を尻目に、野島は尚数秒迷っていたが、どうやら戦車道に関心を持っているらしい事を自覚した。

「…そうだな。一応やってみるか」

「うっしや、1名ご案内！」

こうして野島が2人目の戦車道メンバーとなった。

その後、倉庫跡地の利用を生徒会に申請して承認された。

萩原の記事と宣伝は、翌日の校内新聞に掲載されたが、同校では初の試みとなる戦車道設置に関する噂話が、その日からぼちぼち聞こえるようになり、やがて全体に広まるようになっていった。

「頑張っているみたいですね、塚野さん」

昼休みの生徒会長室で、国崎が報道部発行の新聞を読みながら言った。

「…まあ、何だか意外ですね」

こう言ったのは佐伯である。

いつも昼休みに生徒会の活動スケジュールの打ち合わせをする為に生徒会長室に入っているのだが、今は国崎の話題に付き合っている形で、同じ校内新聞を読んでいた。

新聞の見出しは縦書きで『史上初！戦車道始動！』となっており、その左に萩原の書いた取材記事が記載されている。

昨日の放課後の取材を元に、一晩で書き上げたのである。

「確かに想像よりも速いですが…でも良い事じゃないですか」

「…ですね」

国崎は、佐伯のどこか面白く無さそうな表情に気付いた。

「どうしたんですか？」

「あ、いえ…実はスケジュールに気になる点があったもので…」

佐伯は咄嗟にごまかしたが、国崎には佐伯の考えている事が見通しだった。

「佐伯さん。どうしてそんなに邪険にするのですか？」

佐伯はちよつと困った風にもじもじした後、校内新聞を執務机の端に置いた。

「会長、私にはよく分からないのですが…」

「何がですか？」

「どうしてあんな…敢えて言いますが…落ちこぼれ以下の存在にわざわざチャンスを与えるのですか？」

「…逆に聞きますが、どうして落とされたがるのですか？」

「あんな奴はさっさと退学してしまえば…」

何か切迫したような表情で身を乗り出すようにした佐伯だが、そこ

で自分が感情的に暴走しかけている事に気付いて我に返った。

そんな佐伯の視線を、国崎はじつと受け止めていた。

「…すみません。言い過ぎました…」

国崎はちよつと俯いて考えた後、

「佐伯さん。スケジュールの打ち合わせは、放課後にずらしましょう」

「いえ、会長…もう、大丈夫です…」

「今はゆっくり休みましょう…昼休みですし」

それから数日後のオリエンテーション前夜。

ベッドの上で、例の購入サイトから印刷したカヴェナンターの操作説明書を読んでいると、携帯電話が着信音を鳴らした。

開いてみると、相手は野島だった。

「うーっす」

「おい、操縦方法は覚えたのかよ？」

「余裕余裕。まあそう言いながらぶっつけ本番になるけど」

「当日は手伝えねえからな。ちゃんと1人で運転して来いよ」

2 輻のカヴェナンターは、今は搬入先の保管倉庫にあるが、この内の1輻を塚野が自ら操縦して校舎に入る手筈となっていた。

「大丈夫だってまじで…つか（夜の）10時過ぎてんじゃん」

「行けんならそれで良いけどよ。まあ、ハマすんじゃねえぞ」

「あいよ。じゃあね」

塚野は通話を切ると携帯電話を脇に放り、また説明書の熟読に専念し始めた。

続く

チャプター5 オリエンテーション

そしてオリエンテーション当日。

見学希望者の集合場所は校門前か、校門が見える場所になっており、大人数を収容可能な体育館といった大型収容施設では無かった。校門は全開にされており、事前の宣伝ではここから戦車が入って来ると知らされていた。

「見学者は多いですね」

国崎は最上階の窓から校門を見下ろしていた。

同じように窓から見下ろしている生徒は多く、外にも大勢の生徒がひしめいていた。

ただ、直射日光は避けて建物や樹木の陰に固まっており、各々ハンドサイズの小型扇風機や、アイスボックス系のアイスキャンデー、冷えたジュース等で暑さを凌いでいる。

そして、この変わったイベントに乗じて『出店』を出している生徒もいる。

…つまりはそれだけ宣伝効果があったという事で、注目と関心を集めているというわけだ。

「これは予想外でしたね」

手すりにもたれながら、佐伯が誰にともなくそう言った。

「もう正式設置まっしぐらですかねー」

そう言ったのは、広報の鹿屋リナであった。

国崎や佐伯と同じく3年生だ。

「色々実績を重ねてからになりますけど…とは言え、これだけ人が集まれば参加者も多いかもしれません。そうすれば、割と早く正式設置は認められるかもしれませんね」

これに対して佐伯は黙っているが、よつぽど塚野の事が気に入らないらしい。

彼女からすれば、いわば底辺の存在なのに、とんぱ子でうまく運んでいる事が、不満に輪を掛けているのだ。

「なにげに楽しみなのよねえ」

「あ、デスクもそうなんですか？」

萩原の問いに、報道部長（デスク）の福地ケイコは頷いた。

萩原から戦車道取材ネタにする話を聞いた時、3年生の福地もオリエンテーションの見学を決めたのであった。

「いい特ダネ掴んだんじゃない？逆に譲ってほしいくらい」

「いやいや、それはダメですってば」

真に受けた萩原が慌てて首を横に振った。

福地はわざとらしく口を尖らせた。

「ケチ」

「だって今年のMVP狙ってますから」

萩原が戦車道に協力的なのは、これが目的だった。

報道部の中で最も印象の強いネタを掴み、取材した記者は、『今年のMVP』に選ばれ、報道部長の座が近くなるが、萩原はまだ1年生ながら次期報道部長の座を狙っていたのである。

インパクトあるネタを求めていた萩原にとって、あの日塚野達と偶然出会った事は非常に幸運だったと言えよう。

「期待してるわ」

「はい、頑張ります！」

一方、校門の傍に日よけとして設置したタープテントの下では、野島と土橋が戦車の到着を待っていた。

「あいつ大丈夫かな？」

少し前に、保管倉庫から出発したという連絡が塚野から入っていたが、どこかで立ち往生していたり操縦ミスで事故を起こしていないか気になっていた。

と言って、電話したところで初めて操縦する戦車で手一杯であろう事が想像される為、連絡するわけにもいかなかった。

「やっぱ一緒に乗った方が良かったかな……」

目下戦車道メンバーは自分と塚野の2人だけなので、人員を割く余裕が無かったのである。

「心配性だなあ、カエデちゃんって」

そう言いつつ、土橋はラップトップコンピュータのモニターの右下に表示されている時計を見た。「もうそろそろじやないかな」

「ちよい見に行つて来るぜ」

野島がタープテントの屋根の下から出た時、音が聞こえて来た。

同じ頃、鹿屋が携帯電話を開いて現在時刻を確認した。

「そろそろ来ますよー」

その言葉通り、エンジン音だが初めて聞く音と、キヤタピラが回る音だろうか、金属の軋む音が聞こえて来た。

事前に塚野から聞かされていたのは、色々説明するより実演で見せた方が手っ取り早いというもので、実際に戦車を見て貰い、希望者を戦車に乗せて走り回ったり、空砲射撃をするパフォーマンスが行われる予定となっていた。

戦車と思しき音に、生徒達のざわめきが一段と大きくなる。

校門前の通りに出た野島が、腕を振りながら戦車を誘導し始めた。

じつとその様子を見てみると、やがて戦車：英国巡航戦車カヴェナントナーがその姿を現した。

算盤の珠のような形の砲塔が目を引く。

「おお、すげえ…」

「モノホン（本物）生で見ると違うな〜」

「迫力あるわね…」

生徒達から次々と驚きや感嘆の声が上がる。

携帯電話のカメラ機能を使って撮影や録画を始める者もあちこちで現れた。

これは確かに幸先の良いスタートだ。

このフロンティア学園に入った以上、塚野も決しているいい加減な人間では無い筈であり、それは今回のオリエンテーションで一つ証明された。

こんな短期間で戦車を準備し、オリエンテーションを企画し、そして恐らく難しい戦車の操縦方法まで習得したらしいのだ。

そんな事を国崎が考えていた直後、異変が起こった。

そう言えば姿を現した時からカヴェナンターの動きはどこか変で、
諭えて言うならよろめく酔っ払いだった。

最初は操縦に不慣れなだけだろうと思っていたが、校門の開閉を司
る誘導レールを越えたところで、カヴェナンターは車体を斜めに構え
たまま停止した。

「あれ？どうしたんだろー」

鹿屋が首を傾げる。

野島や土橋がカヴェナンターに走って行くのと、車体前部右側にあ
る箱型の操縦席のハッチが開くのがほぼ同時だった。

開いたハッチの穴から突き出された操縦手の両腕を野島と土橋が
1本ずつ掴み、力を込めて引っ張り上げる。

その中から出て来た操縦手の顔を見た生徒達から悲鳴が上がった。

車内から出て来たのは間違い無く塚野だったが、あのけばけらしい
化粧が溶け落ちたらしく、その溶けた化粧で顔面が覆い尽くされてあ
る種の『化け物顔』になっていたのだ。

ざわめきは騒ぎに変わり、その間に塚野と土橋は、ぐったりした塚
野に肩を貸して日陰に引っ張り込んだ。

入れ替わりに何人かがカヴェナンターによじ登り、たった今塚野が
出て来た操縦手席を覗き込むと、顔に熱気をもろに受けて、向かい側
の仲間と顔を見合わせた。

「…やっぱ、サウナじゃん、これ」

戦車の中がどうやら蒸し風呂状態になっていたらしい。

塚野の体中が汗だくになっているのが最上階からでも窺えた。

「保健室に行つて来る！」

土橋がそう言うのと立ち上がって走り出し、校舎内に消えて行つた。

カヴェナンターには、後部にエンジンを、前部に冷却用のラジエー
ターを配置し、両者を結ぶ為の冷却配管が車内を縦断しているという
特徴があった。

即ち車内に排熱される事で温度が上がり、とりわけ操縦席の脇に置
かれたラジエーターは操縦手を苦しめる地獄の装置であった。

全ては小柄な車体に無理をして必要な機能を詰め込んだ結果だが、そのおかげで『エンジンより乗員が先にオーバーヒートする戦車』と揶揄された。

そしてどうやら塚野は、この揶揄通りになったようだ。

ましてや今はまだまだ暑さが残る9月初旬。

外部と内部からの暑さに晒されたらひとたまりも無いだろう。

それでも暑さに耐えてここまで走らせて来た根性は尊敬に値するが：こうなってしまうては全てが台無しだ。

やがて土橋に先導された保健室の先生が現れ、日陰に寝かされている塚野の傍で屈み込んだ。

ぐったりとしているのでまずい状況に見えるが、保健室の先生に動揺や慌てぶりが見られないので、どうやら重体では無いらしい。

とは言え、塚野の心身共はかなり参った状態にあるという事は間違いないさそうだ。

すぐにストレッチャーターが用意され、塚野はそれに乗せられると保健室に運ばれて行った。

オリエンテーションは混乱と騒ぎの内に中止となり、失敗に終わった。

続く

チャプター6 タイムリミットは3日

塚野は保健室のベッドで目覚めた。

鈍い頭痛と吐き気で気持ち悪い意識の中で記憶を辿って行くと、確かカヴェエナントーの蒸し風呂地獄に耐えながら校門を通り抜けたところでとうとう暑さに耐え切れずハッチを開き、誰かが自分の腕を掴んで引っ張り上げ…そこで意識が途切れていた。

保管倉庫から出発して間も無く車内の温度が上がり始めたが、操縦桿やクラッチの操作で手一杯だったので、ハッチを開いて顔出しが出来なかったのである。

死ぬ程の蒸し暑さと息苦しさに耐えながら、何とか校内まで自走させて来たものの、そこで限界だったようだ。

塚野は暫く脱力状態でぼんやり天井や蛍光灯を眺めていたが、何かに思い当たったかのようにガバと身を起こした。

しかしまたしても襲って来た鈍い頭痛に頭を抱えた。

「もう少し寝てなさい」

様子に気付いた保健室の先生が机仕事を中断して立ち上がり、歩いて来ると塚野を優しく寝かし付けた。

「うげえ…頭がグリグリするう…」

「もう少しで回復すると思うわ」

「いや、もういけるっす」

「…オリエンテーションの事？」

考えている事を察した保健室の先生がそう尋ねると、塚野は顔をかめながら頷いた。

「どうなりましたあ？」

保健室の先生は、壁掛けの時計を振り返った。

塚野も視線で後を追うと、あれから数時間経過していた事を分かった。

保健室の先生はまた塚野を見る。

「それについて生徒会から伝言を貰っているの。回復したら、生徒会長室まで来るよう伝えるようになって」

そう聞くと寝ても休んでもいられなくなり、ふらつきながらもベッドから下りた。

「…あざっす」

止めても無駄だと分かった保健室の先生は、記録帳にベッド使用終了のサインをするよう求めた。

あとは体力の回復を待つのみだったので、問題無いと判断したのだ。

「会長は今、ちよつと用事があつて不在なんです」

応対した生徒会員がそう説明した。「こちらで知らせておきますので、会長室でお待ちください」

「用事あんら後にすっけど…」

「実は、塚野さんが来たらすぐに呼んで欲しいって言われてるんです」「そーなんだ」

塚野は生徒会長室に向かって歩いて行ったが、傍を通りかかった生徒会員達が一端作業の手を止めて、なぜかこちらを二度見してくるのが気になった。

彼女達の視線を訝しく思いながら生徒会長室に入ると、佐伯が中にいて、青いファイルを開いて立ち読みいた。

塚野の入室に気付いて顔を上げたが、佐伯もさっきの生徒会員達と似たような表情をした。

「…あ、そうか。化粧溶けたからね」

それで塚野は、やつと自分の顔が、化粧が溶け落ちたすっぴん状態である事に気付いた。

だから傍を通った生徒会員達は二度見してきたのだ…一体どんな顔をしていたのだろうか。

そんな事を考えていると、佐伯が青いファイルをパタンと閉じて本棚に直し、皮肉たつぷりの視線を向けて来た。

「あの戦車、熱がこもるんだって」

「…え？」

佐伯は腕組みをし、嫌味な口調で説明を続ける。

「しかもあの戦車特有の欠陥。よりによって欠陥品を選んじやうなんて、ある意味天才じゃない？」

塚野が気を失っている間に、野島や土橋が今回の戦車の事をより詳しく調査した結果、ラジエーターや冷却配管等の配置の関係により、熱がこもりやすい性質を持つ事が判明していた。

もともと、ミリタリーに詳しい人間からすれば基本中の基本の情報だろうが、よもや戦車にそのような欠陥がある筈も無いと考える素人にとっては、寝耳に水も同然だった。

確かに、カヴェンターという戦車について詳しく調べていればすぐに分かった問題ではあった。

ただ、入手した販売サイトにそのような事は書いていなかったし、いわば『思い付き』でスタートした戦車道だ。

この場合、運が悪かったとしか言いようがない。とは言え、よく調べなかった事も非である。

同じ頃、保健室の扉がガラガラと開いた。

「すみませーん。塚野さんいますか？」

野島だった。

土橋と萩原は、それぞれの部活中で一緒にいなかった。

保健室の先生は、事務作業から顔を上げた。

「塚野さんなら、少し前に退室したわよ？」

「どこに行くか聞いてますか？」

「多分、生徒会長室じゃないかしら？ 国崎さんから、呼び出しの伝言を預かっていたから」

佐伯の煽りに奥歯を噛み締めて黙っていると、佐伯は腰に両手を当てて語を継いだ。

「…で、これからどうするのかな？ 確か仮予算は、この欠陥品にかなり吸われたんじゃないっけ？ 正に、安物買いの銭失いってわけね」

塚野の自制心が、まるで吊り橋のロープが一本一本弾け飛んでいくみたいに音を立てて切れ始めた。

息が荒くなる塚野を見て、佐伯が挑発を重ねる。

「否定出来ないからって逆ギレかしら？」

そして塚野に向かって一歩踏み出す。「…さっさと諦めちやいなさいよ。その方が楽でしょ？」

瞬間、塚野のストレートパンチが佐伯の左頬を捉えていた。

「ぐっ…！」

佐伯は左頬を押さえながら、こちらを睨む塚野を睨み返した。

「ちっ…やったわね…！」

が、その頃には塚野の左手が佐伯の襟を掴んで引き寄せ、また顔面にパンチを浴びせていた。

パンチすると同時に襟を離したので、佐伯はよろめいて後ずさりしたが、その先は会長の執務机で、もろにその上のファイルやら電燈やらを派手に床に散らかしてしまった。

「いったた…！」

肘を突いて執務机から身を起こす佐伯。

「3年生だからって調子乗んなよ…！」

塚野の理性は完全に弾け飛んでおり、国崎から注意されていた敬語の使用も消し飛んでいたが、もはや佐伯もそんな事はどうでも良かった。

「ちっ。逆ギレとは上等ね！」

立ち上がると、拳を握り締めて殴り掛かり、それを塚野が防御し、2人は乱戦に突入した。

「こいつー！」

「ふざけやがってー！」

喧嘩に夢中になっていると、慌ただしく扉が開いて、2人同時にその方向に顔を動かすと、国崎と野島が啞然とした表情で立っていた。

扉の傍では生徒会員が様子を窺っているが、どうやら室内で起こった乱闘騒ぎが聞こえていたらしく、そこに国崎と野島が現れたという塩梅のようだ。

国崎は暫く二人を交互に見ていたが、徐に佐伯の方に歩いて行くと、いきなり右手の甲で佐伯の頬を引っぱいた。

「あ痛つ…！」

「何やってるんですか、佐伯さん！」

声こそ荒らげていないが、その冷然さは佐伯をたじろがせた。

「いや会長…こいつが先に手を出したんです！」

佐伯は弁明しようとするが、塚野を指差したが、国崎は首を横に振った。

「あなたが挑発したんでしよう？でなければ、殴り合いに発展する説明がつきません…それとも、証人が必要ですか？」

国崎が、まだ戸口で様子を窺っている生徒会員達を見た。

また、国崎も直に見たわけでは無いものの、状況を一瞬で察したらしい。

「そ、それは…あの…つまり…」

「あなたには追って処分を伝えます。今は退室して下さい」

「か、会長…？」

「…二度は言いませんよ？」

「…はい会長」

有無を言わさぬ口調に、佐伯は渋々、しかし黙って従い、生徒会長室を出て行った。

その背中を見送りながら、野島が塚野に声を掛ける。

「おい、大丈夫かよ？」

「スツキリしたかな」

扉が閉まると、国崎は塚野に頭を下げた。

「ごめんなさい。副会長が暴言吐いたのでしよう？」

「いや…まあ…殴った私も…悪いです…」

塚野もバツが悪そうに謝ったが、

「佐伯さんには何度か忠告していたのですが…」

と国崎は、床に散乱した文房具やファイル等を慎重に避けて歩きながら執務机を迂回して、片付けは後回しで椅子にゆっくりと座った。

「でも最初は誰かと思いましたよ」

「え？」

「あなた、化粧が取れたら凄く美人ですよ」

「ですよ。私も初めて塚野の素顔を見ました」

と、野島が言った。

「ええ。そのままの方が好きですよ、私は」

「その意見に一票です」

2人の言っている意味が分からず、塚野は戸惑った。

「え…何言ってるの？」

「逆になんであんな化粧してたんだよ」と、野島が問い返した。「コンテストでも開いたら優勝レベルじゃねえのか？」

どうやら褒められているらしい事に気づき、何とも言えない感情が塚野を包んだ。

「な、なんか…褒められたの初めてなんだけど…」

「何？」

「いや、なんて言うか…」

すると国崎が話を転換して、

「まあそれはそうと、今の状況を説明します」

塚野と野島が体を真っ直ぐにすると、「塚野さん、あなたが気を失っている間に、乗って来た戦車は、この前認可した倉庫に移動させました。野島さんが運送屋さんに頼んで、運び込んで貰いました」

「あ、ありがとね」

「気にすんな。あたしも、ちゃんとあの戦車について調べてなかったし」

国崎が再び話し出した。

「ただ、このままでは、戦車道の活動継続困難と見なされます。そうすると、直接あなたの学業継続困難に繋がります。これ以上の説明は…いりませんよね？」

「うっ…」

塚野はその先の意味を察して言葉に詰まったが、返事を絞り出した。「…はい…」

「続けるには、あなたが証明しなければなりません。戦車道の活動が、継続可能であるという証明を、です」

塚野は唾を飲み込んだが、釈然としない部分もあった。

「で、でも…戦車道以外の活動に移ったら、問題無いんじゃない？」

「それは認められません。他の活動への切り替えが、退学を回避する為の延命措置の手段となるからです。もし他の活動に移っても、恐らく同じ事を繰り返すでしょう…次から次へと、癖となって」

「…戦車道で挽回すると決めたから…ですか…?」

「その通りです」

しかし、国崎の言う証明を、一体どうやって示せばいいのか、何一つ名案は思い浮かばない。

頭の中をループしていたのは、『退学』という二文字で、前よりも現実味を帯び、説得力を増しつつあった。

「二応、どうすべきかは伝えます。3日の猶予を与えますので、それまでにオリエンテーションのやり直しを成功させて下さい。また失敗したり、タイムリミットを越えた時は…戦車道は活動継続困難と見なします」

野島は少し目を見開き、塚野は驚愕で思わず一步前に出た。

「たった3日…ですか…?」

「はい」

「それって、幾ら何でも無茶過ぎじゃないですか!」

しかし国崎は、キツパリと首を左右に振った。

「それ以上は、認められません」

もはや梃子でも動かないだろうし、これ以上の抗議は良い結果を招かない。

どうやら?…むしかなさそうだった。

「…分かりましたよ…」

話はそれで以上となった。

「…3日とか無理ゲーじゃね?」

廃倉庫の前に置かれたカヴェナンターの砲塔を背もたれに、立てた右膝に右腕を乗せながら塚野がぼそりと言った。「あの会長、頭おかしいんじゃない?」

野島はカヴェナンターの正面から塚野を見上げている。

カヴェナンターの売却金を足しにして別の戦車を買えば直す手も考

えたのだが、二束三文にしかならず、カヴェナンターでオリエンテーションのやり直しに臨まなくてはならなかった。

「でもよ、やるしかねえだろ」

「さっさと退学申請出してこよっかな」

「おい待てよ」

野島が声を上げた時、土橋と萩原が現れた。

「あ、やっぱりここだったんだ」

と、土橋が萩原を従えて合流した。「ちよんどミツキちゃんとはつたり会って、それで…」

土橋も萩原も、化粧が剥がれた塚野の顔立ちに困惑した。「えつと…スズやんだよね?」

「だと思えますけど…」

と、萩原も目をしばたたかせていた。

「うん、そうだよ」

塚野が答えると、2人とも驚きのあまり暫し言葉を失っていた。

「…すっごい綺麗じゃない」

「はい。普通に女優さんとかモデルさんになれそうですよ」

と、萩原も同意した。

「ほら、お世辞じゃねえだろ」

と、野島が言った。「あんた、マジで美人だぜ」

「ま、まあ…ありがと」

塚野は照れ臭そうにそっぽを向いた。

「それで、もう大丈夫なんですか?塚野さん」

と、萩原が尋ねると、塚野はあつという間に素っ気ない表情になった。

「全然。最悪」

その素っ気なさに、萩原は困惑した。

「ど、どうしたんですか一体?」

「あと3日でオリエンテーションのやり直しを成功させないと、あたし退学になるの」

「え…!」

萩原は、なぜそうなるかをすぐに思い出した。ただ、それを言葉には出せない。

「遠慮しなくてもいいよ。どうせあたしはおしまいなんだから…」

項垂れてしまった塚野に、野島と土橋がどうすればいいものかと目を合わせた。

塚野は完全に投げ槍になっており、持つて行き方によっては本当に自主退学を決意させてしまいかねなかった。

が、それでも説得しなければならぬ。

しかし最初に口火を切ったのは萩原だった。

「あの、塚野さん…」

「ん？」

塚野が緩慢な動きで顔を上げた。

「大洗女子学園と黒森峰女子学園の試合の動画、覚えてますか？」

塚野は、萩原が言わんとする事を図りかねて首を傾げた。

「…覚えてるけど、そんで？」

「塚野さんは、御存知でしょうか？あの全国大会、大洗は優勝しなければ廃校になっていった事を」

「いいや。初めて聞いたけど」

「大洗女子学園は廃校を回避する為に、戦車道を立ち上げて、全国大会に挑み、優勝する事で廃校回避を勝ち取りました。でも、まだ終わりでは無かったです。3週間も経たない内に、廃校の撤回が無かった事にされたんです」

塚野だけでなく、野島や土橋も信じられないという風に目を丸くしていた。それもその筈である。廃校回避の条件を満たしたのに、どうして無かった事にされるといいのか？

「なんでそうなの？」

と、塚野が3人を代表して聞いたが、萩原は首を横に振った。

「分かりません。ただ、文科省の学園艦教育局が、とにかく無い事にしたらしくて…」

萩原はそこで一端間を置いた。「でも、大洗は諦めませんでした。その結果、大学選抜チーム…少なくとも、高校生より経験と練度を積

んだ強敵…と試合をする事になって、それに勝てば、今度こそ廃校を回避できる事が認められ…大洗は辛うじて勝利しました。廃校は撤回され、大洗の存続が正式に決まりました」

萩原の真つ直ぐな視線を受けて、塚野は少し目を逸らした。

「それがどうしてか、塚野さんは分かりますか？」

「…諦めなかった、から？」

「そうです。大洗は諦めずに、自らの存続を賭けて必死に戦い、存続を勝ち取ったのです。それも2度に渡って。まあ、私も最近知った事なのですが…」

「そういや、会長がちらつと話していたのは、それだったのかな…」

それは、塚野が戦車道を始めると申請した時の事だ。

あの時、国崎がネットニュースで、高校生のチームが大学生のチームを破った試合の記事を読んだ事をチラツと話題に出していた。

しかもそれは、自分が『トライポイント』を獲得する為の活動を何にするか、悠長に悩んでいた日に起こった出来事では無かったのか…？

萩原は話し続けた。

「試合後のインタビューで、大洗戦車道チームの隊長、西住みほさんは、こう答えています。『どんなに苦しくても、それが何回立ちかはだかつて来ても、立ち向かい続ける限り、道は開けます。途中で引き返せば、全て終わりです』と」

痛い所を突かれたような感じになって小さく呻く塚野。

それを兆しと見た野島が畳みかける。

「そういやお前、ちよつと苦しい事あったら諦めてなかったか？この受験通ったのが不思議なくらいに」

「…そうかも」

「そうなんだよ。もう、終わりにしねえか？」

「そうだよスズヤン。最後までやってみよ？」

土橋も野島に加勢しつつ、こうも言った。「私も、戦車道に参加するから！」

「え、ツツチー、漫面部じゃなかった？」

「実は…戦車道を題材にした漫画を描こうと思ってる。でもそれを描こうと思ったら、実際に戦車道に参加して、実際に戦車に乗った方が理解を深められるんじゃないかって。そうしたら、説得力のある戦車道の漫画を描けるかもって」

「まじか。こつちも負けてられないな。部活浪人やってたし」

「おじいちゃんにも報告しないとね」

「そうだな」

そしてまた塚野を見る。「で、どうする？塚野」

塚野は数秒考え込んでいたが、やがて顔を上げた。

その表情はまた活力を取り戻していた。

「うっし。やってみっかな」

立ち上がると、3人の前に飛び降りた。「ぶつちやけ退学回避の手段に戦車道選んだけど…あの動画に感動した事も事実だし、どうせならひと暴れしてやろうって意欲がもりもり湧いてきた」

「ひと暴れとはなんだか物騒ですね」

「おハギの責任だかんね」

「え、おハギ!？」

「ハギワラだからおはぎ」

「ま、まあいいですけど…」

「調子戻ったな」

と、野島が言った。

「あんな偉そうな事言っておいてなんですが…白状すると、私も今日の一件を見て、戦車道への取材をやめようとしちゃいました…そしてらデスクにこつぴどく叱られちゃったんです」

その時の福地の剣幕は、萩原にとって初めて見る剣幕だった。

『いざ駄目そうだと思ったらあつさり捨てるなんて、酷過ぎじゃないかしら？あなたのおかげで、今日のオリエンテーションに人がたくさん集まったのよ。だから、あの子を助けてあげなさい。あなたにしか出来ない事で』

思い返すと、福地デスクはこのままだと塚野がどうなるかを知っていたような口ぶりだった。

だが不思議は無かった。福地デスクは、あらゆる方面に情報網を張り巡らせているのだ。だからこそ、『あの子（塚野）を助けてあげなさい』と言ったのだろう。

「そんな事言われたんだ」

萩原は頷いた。

「なので、また私が人を集めます。どうして失敗したのか、どう改善するのか。そういった事を記事に強調して明記します」

「けどよ」

こう言ったのは野島だった。「あの蒸し風呂はカヴェンター特有の『持病』だぜ。改善するって言っても、どうやるんだ？」

「うーん。それは…」

萩原は言葉に詰まったが、塚野は一案が閃いていた。

続く

チャプター7 相談

そして翌朝。

塚野は起床すると、いつもの日課の厚化粧を施そうと、洗面台の鏡の前に立ち、化粧道具の1つを握ったが、その手を下ろした。

そう、自分は変わらなければならぬ。

今までのけばけばしい厚化粧も、ある意味逃げだったのかもしれない。

この類の化粧をするギャルは、一種の自分磨きの為にやっているが、自分にはそんな意識は無かった。

そもそも同類の女子と一緒にいる事なんて無かったし、興味も持っていなかったのである。

塚野は最低限の物を残すと、大半の化粧道具をゴミ箱に投げ捨てた。

その行為は勇気が要るものだったが、いざ捨ててしまおうと気持ちがかたくなった。

もう後戻りは出来ない…いや、初めから後戻りという手段など存在しなかった。

ただ前進あるのみである。

それに、自分の素顔が美人だと言われて、悪い気はしなかった。

始めはお世辞だろうと考えていたが、どうやら本当に褒めてくれているらしく、塚野にはそれが嬉しかった。

最低限の化粧を済ませると、荷物を持って家を出た。

「…なるほど。それは災難だったね」

塚野と野島は、日本戦車道連盟の理事長室にいた。土橋は漫画部のイベントに顔を出していて、ここには来られていない。

萩原も同じく、所要で同席していない。

塚野から事のあらましを聞いた理事長の児玉七郎は、自分のつるつる頭を撫でた。

塚野の一案とは、日本戦車道連盟に赴いて、カヴェナンターの蒸し

風呂地獄をどうにかする方法が無いかどうかの相談だった。

彼の近くの革張りのソファには、陸上自衛隊の蝶野亜美1等陸尉が座っている。

「それに割り当てられた予算も足りない。となると、手持ちの戦車で、何としてもオリエンテーションを成功させなければならぬわね」

「はい。それで、色々調べた結果、カヴェナンターのオーバーヒートを遅らせる改造を、ここが行っていると聞きました」

「塚野さん、だったね？」

「はい」

「正確には、わしらがここでやっとするわけではないのだ。連盟と契約を結んでいる整備工場で、競技用戦車に改造や修理をお願いしとるんだ」

「では…」

「わしに1つ伝手がある。そこに一本連絡を入れよう。えっと確か、3日だったかな？」

「はい。時間がありません」

「では、善は急げ、だ。ここからそう遠くはない。すぐに会いに行ける筈だよ」

児玉理事長は立ったまま電話のボタンを叩いて、伝手の整備工場と連絡を取った。

相手が出るのに少し時間が掛かり、暫くの沈黙があった。

「…ああ、わしだよ。実はちよつと、戦車の改造を教えてほしい子が、今ここにおるのだが、会って貰えるかの？いや、今日だ。ちよつと諸事情があつてな…すまぬ、無理を言うね。じゃ、宜しく」

児玉理事長は振り向いた。「承諾を貰ったよ」

「有難う御座います！」

蝶野が立ち上がった。

「では理事長、この子達を送ってきます」

すると児玉理事長は不思議そうに首を傾げた。

「え、確か蝶野君が乗って来たへりつて…」

「分かっています。でも、何とかなるでしょう」

「いや、だが…」

みるみる狼狽する児玉理事長と、澄ました顔の蝶野に、塚野と野島は顔を見合わせた。

十数分後、塚野と野島は空の上だったが、塚野は狂気の沙汰を味わっていた。

この蝶野という自衛官、考える事が斜め上だ。

「こじえな；おそんーな；えじんー；；jna s!!!」

「なんにも心配いらないわー!」

!!!

恐怖に顔を歪めて意味不明な喚き声を上げる塚野のレシーバー越しに、蝶野の陽気な声が宥めようとするが、それどころの騒ぎではなかった。

なぜなら飛行するOH-1観測ヘリコプターの脚輪部分にしがみついていたからだ。

一応、車輪にはスキッドが付いていて、それを足場にした上で、脚輪の支柱と自分を、命綱とハーネスで繋いで固定して落下しないようにしてはいるが、高度4桁を時速270kmで飛行するヘリコプターの外側に、剥き出しで上と正面からの強風に晒されながらもみ付いている有様なのだ。

その点、野島はコクピットの中に座っているから安心だが、パイロットからは「何も触るな」と念入りに指示されていたので、こっちはこっちで体を縮み上がらせてカチンコチンに強張っていた。

体が何かに触れる度にビクツとして、また体を縮み上がらせる。

「そんなに怖がる事無いのに!アツハツハツハツハ!!!」

蝶野が高笑いする中、OH-1はひたすら最高速度で飛び続け、やがて児玉理事長が連絡を取った整備工場の上空に到達した。

着陸した時、塚野も野島も、心身共にへとへとに消耗していた。

「お〜い、づかの〜。だいじょ〜ぶか〜?」

「ノイジ〜こそへばってんじやねえですよ〜だ…」

どっちもフラフラだったが、互いに肩を貸し合って、辛うじて引つ

繰り返らずに済む事が出来た。

そんな二人を尻目に、蝶野は腰に手を当てて整備工場を左右に眺めていた。

「へー。丁度良いから私も見学していこっかな」

そこへ、整備工場から工場長らしき男性が小走りに出て来た。

パイロットに待機するよう言付けると、蝶野はその男性の前に歩み出た。

男性は蝶野の前で立ち止まると、頭を掻き掻きした。

「すみません。ちよつと用事があつたもので…」

「いえ。こちらこそ、急な話だったものですから」

男性は、蝶野の肩越しに塚野と野島を見た。

「それで、この二人ですね？ 田張工場で工場長やつとります、田張将司です」

「塚野スズネです…おえっ」

「野島カエデです。ゲホツ、ゲホツ」

互いに支え合いながら、塚野と野島はそれぞれ自己紹介した。

「その様子だと、大分参っちゃつたと見えますな」

田張工場長は苦笑しながらOH-1を見た。「あれに乗って来たの？ 随分と無茶したねえ」

「無茶どころじゃねえです、無謀つすよ…」

蝶野が2人の肩をポンポン叩く。

「初めてのフライトで疲れちゃつたわね。ちよつと休んでからにしますか」

…誰のせいでもうなつた。

事務室で冷えた麦茶を出して貰い、15分程休んで落ち着くと、早速田張工場長が案内してくれた。

工場の中は、大規模というわけではないが、それでも戦車を数輻は収容出来る広さを持っており、今も3台の競技用戦車が整備ないし修理中だった。

「凄い、色んな戦車があるんですね」

「これでも小規模なんだけどね。もっと凄い所だと、何十台も並んでいるけど…まあ、腕はどこにも負けてないって自負はあるよっ。」

蝶野の前では改まっていたが、今の田張は砕けた姿勢で接してくれていた。

「そ、そうなんです…。」

「あ、そうそう。そんなに硬い口調じゃなくて、もっと砕けていいんだよ?。」

「え、マジっすか?。」

田張はニコニコと頷いた。

「うんうん、それでいいそれでいい。」

「あざっす!。」

「適応はえーな。」

褒めてるのか皮肉っているのか分からない評価を下す野島。

そんな野島をスルーして、塚野が1台の戦車を指差した。

「あのでかい戦車はなんすか?。」

その戦車は全体的に焦げ茶色で、フロント部分に傾斜が付いており、長大な主砲を備えていた。

砲塔側面には、白で縁どられた黒色の十字マークが付いており、

マークの中にこれまた白文字で『黒森峰』の表記がある。

「あ、黒森峰の戦車じゃん。」

「その通り。手前の戦車はティーガーII。ドイツの重戦車だよ。」

「めっちゃ強そう。」

「実際強いよ。何と言っても、あの88mm砲が強さの秘密でね。」

「でも、奥のスマートな奴と比べたらちよつちいデブい…。」

奥のスマートな奴とは、ティーガーIIと似たデザインのパンター

G型中戦車の事で、派手に黒く煤けた2輜が縦に並んでいた。こちらも黒森峰の戦車である。

「ちよつと、デブって失礼ね!。」

鋭い声は、件のティーガーIIからだった。

『デブい』ティーガーIIの車長用キューポラから顔を覗かせたのは、ワインレッドのスカートと黒のパンツアーჯヤケット、黒の小さめな

帽子の、鈍い銀色のセミロングヘアの少女だった。

その目つきは、鋭い声と同じように鋭い。

銀髪の少女は、キューポラの縁に両手を掛けて出て来た。

「ティーガーIIは最強戦車の一角よ。デブ呼ばわりしないで！」

「あ、じゃあ、自衛隊の戦車と、どっちが強いつすか？」

塚野は単に好奇心から聞いたただけだが、銀髪の少女にとっては想定外だったらしく、ギクツとたじろいだ。

「な、何言ってるのよ！昔の戦車と今の戦車を比べる馬鹿がどこにいるのよ！」

「はい、ここにいます」

悪びれずに拳手する塚野に、相手は面倒になったのか、手を振りながら質問に答えた。

「ああもう。勝てるわけないでしょ、さすがに」

「え、でもさつき最強戦車の一角って……」

「だから、今と比べるなど言ってるでしょ！何回言わせるのよ！」

喚き立てる銀髪の少女に苦笑しながら、田張は紹介した。

「紹介しよう。黒森峰女学園の戦車道チームの副隊長をやってる、逸見エリカさんだ。彼女の乗るティーガーIIのサスペンションや電気系統に複雑な異常が発生したらしくてね、それでここで修理しているところなんだ」

塚野と野島もそれぞれ自己紹介すると、エリカがティーガーIIから下りて来て、2人をしげしげと見つめた。

「フロントティア学園？聞かない名前ね」

「この度、初めて戦車道を導入したらしくてね。今はカヴェエナントーの改造方法を学びにいらしたのさ」

エリカが腑に落ちないという顔をした。

「え、なんでカヴェエナントーなんかを？」

それについては塚野から説明する。

「なんか、中古販売サイトで安かったから買っちゃったんだけど、そうしたらえらいサウナ戦車で……」

エリカはぷつと噴き出した。

『サウナ戦車』って、あのゲテモノにピッタリの表現ね」

「あ、やっぱ知ってんすね」

「聖グロですら買わない代物よ」

「セイグロ…？」

「セントグロリアーナ女学院。英国の戦車を主力にしている高校だよ」

田張が注釈を挟んだ。「まあ、戦車道に関しては素人だからね、仕方ないよ」

「でも、幾ら何でもカヴェエナントーって…」

「一番安かったの」

「けどちよつと貧乏くじが過ぎるわよ」

「そんなわけで、改造方法を伝授して、オーバーヒートしにくくしようっていう作戦」

そこへ、パンターの車上から、エリカの部下らしき声が横入りする。

「副隊長！赤星さんが呼んでます！」

「今行くわ！」

声の主にそう答えてから、エリカはまた2人を見た。「あなた達、頑張ってるね。期待してるわ」

エリカと分かれてから、塚野と野島は、田張からカヴェエナントーの改造方法について、実技を交えながら突貫でレクチャーされる事となった。

続く

チャプター8 オリエンテーションII

そして3日後。

オリエンテーションのやり直しは運動場で行われる事となり、2輛のカヴェナントがそれぞれ運動場の角、対角線を引くように対峙する形で配置された。

萩原の新聞記事が功を奏したのか、思ったよりも人が集まっていた。

カヴェナント特有の欠陥やその原因、今度はそれを改善した状態でオリエンテーションのやり直しに臨む事が論理的かつ詳細に記載された事で、戦車に対する先入観が幾らか解く事が出来たようである。

塚野はカヴェナントの砲塔の上に立ち、マイクを握っていた。

「はいみんなあ、これから戦車道のオリエンテーションを始めるよお！この前は無様を見せちゃったけど、今度は大丈夫！」

その時、塚野は観衆の中に蝶野一尉の姿を認め、一瞬言葉を切った。蝶野も、塚野が自分を見つけた事に気付いてサムズアップする。

周りの生徒達が、見慣れない自衛官を不審げに何度も見上げているが、蝶野本人は全く意に介していない様子だった。

因みに蝶野からは事前に、オリエンテーションの見学に来てくれると知らされており、その際に蝶野からある提案を1つ受けており、それを早速実行するつもりだった。

塚野は小さく頷き返すと、続きを口にした。

「色々説明する事あつけど、昔の人の『百聞は一見に如かず』って偉い言葉を実践した方が早いかなあつて事で、これから、戦車同士で撃ち合いをしたいと思います！」

『撃ち合い』と聞いて、見学者達が互いに顔を見合わせてガヤガヤと何か言い合った。

「え、撃ち合い!?!」

「実弾射撃!?!」

確かに戦車は基本的に大砲を持っており、それを撃ってなんぼだ

が、まさかいきなりオリエンテーションで行うとは誰も思っていなかったのだ。

「この件は会長からの了承済みです！でも人がぜんっぜん足りないんで、あと5、6人お願いしよっかなあ？」

が、そうほいほいと名乗り出るわけでもなく、数秒間の沈黙が続いた。

何しろ、3日前にカヴェナンターが蒸し風呂地獄である事を目の当たりにしたし、砲撃戦を行うのは、そのカヴェナンターなのだ。

自分も同じ目に遭いたくないと躊躇うのは当然の心理と言えよう。それでなくとも、いの一歩になかなか言い出しにくいものだが。

そんな中、最初に名乗り出たのは萩原だった。

実を言うと、打ち合わせで砲撃戦イベントの志願者の1人になる事が決められていたが、新聞記事でカヴェナンターの蒸し風呂地獄が『改善』されているという記事の書きだしっぺとしての責任を果たしたいと言う、本人の気持ちもあったようだ。

「乗ります！」

「はい、そんじやこっち来てね！」

塚野は萩原を、自分が立っているように手招きした。

もう片方には野島と土橋が乗っており、これで2対2だ。

その頃、今回もオリエンテーションを見学していた国崎が、隣の佐伯を肘で小突いた。

「会長…？」

「佐伯さん、乗りなさい」

「…え!？」

唐突な命令に、仰天する佐伯。

しかし国崎はいたって真面目だった。

「まだあなたに処分を下していませんでしたよね。ですので、これを処分の1つとします。すぐに行きなさい」

「でも…」

「代わりに、副会長の任を解きましようか？」

さらつと脅して見せたが、佐伯には効果的だった。

佐伯にとつて、落ちこぼれの塚野が原因で、副会長の座を外されるのは屈辱以外の何物でも無かった。

それよりは、一時の屈辱に耐える方を選ぶべきだ、と佐伯は考えた。本当は、落ちこぼれが設立した戦車道に関わるなど、願い下げだったのだが。

「…分かりました」

佐伯が運動場へ向かった後、鹿屋が横に立った。

「あのー会長。私も行つて来ていいですかー？なんか面白そうですしー」

国崎は片眉を上げたが、反対しなかった。

「ええ、構いませんよ」

鹿屋の目がパツと輝いた。

「やったー！それじゃ、いつてきまーす！」

鹿屋が佐伯の後を追い、2人一緒に砲撃戦イベントに参加する旨を伝えると、佐伯が野島車の方へ、鹿屋が塚野車へ割り振られた。

その様子を眺めながら、国崎は別の事が気になるのか、観衆を見回していた。

「…ところで、あの子は、まだかしら？」

佐伯と鹿屋が戦車に乗り込んでいる間、塚野は指折りで人数をカウントしていた。

「えーつと、あつちが3人で、こつちも3人。カヴェ（ナンター）は4人乗りだから、あと2人かあ」

カヴェナンター乗員の、それぞれの役割は車長、操縦手、砲手、装填手だが、砲手が装填手を兼ねれば、一応3人でも運用出来なくは無と思うが…やっぱり定員は満たしておきたい。

塚野は再度募集を試みた。

「あつとふつたりー！あと2人欲しいなあ！」

左手で作ったVサインを掲げる。

すると、1人が歩み出た。

「私も乗るわ!」

報道部長の福地だった。

「え、デスクも乗るんですか!?!」

驚く萩原に、福地は自分の胸に拳を当てた。

「やっぱり気になるわ!私、あつちに乗るわね!」

福地は自分で野島車を選んだ。

どうやら、報道部同士の対決という構図を作るらしい。

それから数秒待ったが、これ以上は出て来そうに無かった。

「んー。さて、こっちは1人足りないけど…まあいつか」

塚野は募集をこれで切り上げる事にした。「んじゃあ、これで募集を終わり…」

と、それを遮る自転車のベル音の連打。

「ちよつと待ってええええええ!」

塚野だけでなく、観衆も声のした方角を見ると、こちらに向かって前のめりに自転車を突撃させる少女の姿があった。

服はフロンティア学園の制服とは異なる、別の高校のものらしい制服を着ていた。

「どいてええええええ!」

勢いを止めずに突っ込んでくる自転車に、観衆は慌てて左右に道を開けた。

彼女達の間を高速で通過してから急ブレーキを掛けると、他所の高校から来たらしいその少女は、自転車に跨ったまま、元氣良く自己紹介した。

「ふう、セーフセーフ」

「えつと…どなた?」

相手は学生証を塚野に向かって開いた。

「隼高校から来ました、田張エミです!」

その名前に、塚野はピンとくるものがあった。

「田張って…あの田張整備工場の…?」

「はい!実家です!」

田張工場長の娘らしい事は分かったが、あまりの唐突な登場に困惑

しかない。

「それで…何しに…?」

「私も戦車に乗ります!」

「ほうほうなるほど…って、え!?!」

「いきなりでごめんなさい。でも、パパがどうしても行けって言うから、ついつい来ちゃったんです」

「いやでも…他所の生徒乗せるのって…」

「国崎さん…でしたっけ?…この生徒会長には許可を取ってます!で
すから乗せて下さい!」

塚野が国崎を見ると、向こうで見学している国崎が静かに頷いて見
せた。

「どうやら田張の言った事は本当らしい。」

「…マジ?」

「そう、マジだよー」

後ろから鹿屋が保証した。「いやー。最初聞いた時はびっくりした
ねー」

更に田張は、頼んでもいないのに売り文句も付け加えて来た。

「戦車の動かし方なら、小さい時からパパに教えて貰っていたから、大
丈夫ですよ!あと機械弄りも得意です!」

まだ塚野は混乱していたが、この田張が加わればこちらも定員を満
たせる。

今は、デモの進行が優先だ。

「…オツケー。じゃあ、自転車をあつちに置いてから乗って」

「分りました!」

田張は自転車を運動場の外に出してから戻って来ると、慣れた身の
こなしでカヴェンターをよじ登った。

こうして、両車輛とも定員を満たした状態で砲撃戦イベントを始め
られる事になった。

塚野車の人員配置は、萩原が装填手、鹿屋が砲手、乱入者の田張が
操縦手、塚野が車長となった。

「いわばチェックってやつ?」

まだ操縦席から顔を出していた田張は、砲塔の塚野を振り仰いだ。「他にも事情はあるんですけど、とりあえずそんなところですね」

田張は自分の希望で操縦席を選んでいたが、「カヴェンターって、ここが一番地獄なのよね」

「塚野ちゃん、凄かったよー。1回目のオリエンテーションで、化粧がドロドロに溶けちゃってー…ほがほが!!」

塚野が慌てて鹿屋の口を塞いだのでそれ以上は聞き取れなかったが、田張は状況を察して苦笑した。

「ああ、なるほど。そう言う事ですね」

「でも今回は、その点が改善されているんですよね？」

と、萩原が不安そうに田張に聞いた。

「うーん。まあでも、蒸し風呂地獄は避けられないかも。そうなるのが遅れるというだけですから」

「えー!じゃあ私が書いたあの記事は…!?!」

「まあまあ、そうなる前に決着つけちゃえばいいんじゃないね?」

塚野がそう締め括った。

「大丈夫ですかね…」

鹿屋が塚野を見る。

「今から下りようかなー?」

「それは困るんで、やめて下さい」

塚野はマイクをオンにした。「じゃあ始めるんで、みんな隠れてどろぞー!」

互いのエンジンが始動すると、観衆は校舎の廊下に入ったり、塀の後ろに身を隠したりして砲撃戦に備えた。

「えっとー、これが旋回装置だっけー」

砲が上を向く。「あ、こっちかー」

今度は砲塔が左に回った。

「で、こっちが右?」

鹿屋の操作通り、右に砲塔が回る。

「主砲の上下がこれで…射撃はこれ…」

「飲み込み速いですなあ」

「ありがとう」

「塚野さん、ここに砲弾入れるんですよね？」

カヴェナンターの主砲、2ポンド砲から発射される40mm砲弾を両手に抱えた萩原が、砲の尾栓を確認した。

「うん、それでいいよ」

「じゃあ早速…」

ぎこちない仕草で萩原は主砲に砲弾を押し込んだ。

「上等上等…んで、田張さんは…」

「ごつちはいつでも行けますよ！」

さすがに整備工場の娘だけあって頼もしかった。「あ、普通に呼び捨てで構いません！」

「おつし。えーつと…」

塚野は携帯電話のアドレス帳から野島の電話番号を選んだ。

すぐに野島が出ると、状況を確認する。

「ノイジー、そっちは？」

「ああ、いいぞ」

「よし。じゃあスタート！」

電話を切ると、車内に頭を入れた。「戦闘開始ですよお！」

「ねーねー」

「ん？」

「なんかちよつと蒸し暑くなってきたねー？」

塚野の表情が引き攣る。

「…え、早くね？」

「急ぎましょう！」

早くも額に汗を浮かべた田張が、カヴェナンターの向きを野島車に向けた。

さてこちらは野島車。

「…あいつ、絶対瞬殺してやるわ」

鼻息荒い佐伯は、自ら砲手を買って出ていた。

目的は、塚野車をさっさと倒してしまう事で、それで塚野への鬱憤

を晴らそうとしていた。

まだ殴って来た塚野に根を持っているらしく、操縦席の野島には幼稚に映ったが、敢えて黙っていた。

その代わりに、

「人に当たらないよう、気を付けて下さいよ」

「そんなの朝飯前よ」

しかし佐伯は、砲塔を左に回そうとして、右に回してしまった。

「これだと昼飯になりそうね」

撮影したいという理由だけで車長になった福地が茶々を入れると、佐伯は鬱陶しそうに言い返した。

「うっさいわね」

弾丸は既に装填されており、あとは狙いを付けるだけだが、やはり素人で構成した即席チームはそういう簡単な動作もままならない。

対して、乱入者の田張を乗せたカヴェナンターは、少なくとも走行に関しては上手だ。

「こつちに来ますよ」

「分かってるってば！」

砲塔を回し直す佐伯だが、情景が横に滑るスコープは、相手のカヴェナンターを華麗にスルーした。「もう！」

「えっと、代わりましょうか？」

装填役の土橋が声を掛けたが、佐伯はあくまで自分が撃つ事に拘った。

「奴は、私が潰すわ！」

「いいかげん、こつちも動きますね。接近されてるんで」

「ちよつと待って……！」

佐伯の反論を待たず、野島はカヴェナンターを左に転じて塚野車と間合いを取るよう移動させた。

「うひょー、良い画がバッチリ撮れる！」

福地は車長役そっちのけで、嬉々としてカメラのシャッターを切りまくっている。

「福地先輩！指示出してくださいよお！」

土橋が懇願するが、福地は聞いていない。「カエデちゃん、やっぱり人員配置間違えてるよお！」

「今更遅いな」

「そんなあ！」

「敵は遅れてる！さっさとやっちゃおうよお！」

そう指示を出しながら、塚野はこちらにレンズを向ける福地に、両手でピースした。

「鹿屋さん、どうですか？」

田張は、鹿屋が照準を付けやすいように速度と向きを調整していた。

「もう少し…もう少し…これで、どうだー！」

先制攻撃をしたのは塚野車だった。

2ポンド砲が火を噴くと、小口径砲だが初めて見るその迫力に観衆はどよめいた。

しかし砲弾自体は野島車の手前に着弾し、運動場に穴を穿った。

「弾込め急げー！」

「は、はいー！」

普通は再装填に備えて次弾を抱えているものだが、萩原は弾薬ラックから砲弾を抜き取る作業から始めた。

「よし、突っ込むぞー！」

発砲した隙を突くべく、野島はカヴェンターを急転回させると、塚野車に向かって突撃を開始した。

「うおわ！こっち来るし！」

「どうするの!?!」

「ええと、ええと、全力疾走！」

「了解！」

田張がカヴェンターを急加速させたので、塚野は振り落とされないうよう、両腕を砲塔の天板に突っ張った。

2台のカヴェンターが、互いの尻尾を狙う犬のように運動場をぐるぐる回る。

2、3発撃ち合うが、どれも見当違いの場所で土煙を上げる。その様子を、福地が呑気に撮影している。

「これじゃ罫が明かないから、ここから出よつか！」

「出る!?!」

装填作業を終えた萩原が驚く。

「ちよつと運動場出て、校内散策！」

「それはいいですが、ガイド頼みますね？」

「塚野にお任せ！」

塚野車は運動場の周回をやめて、外側に歩を進めた。

「あ?何やってんだあいつ?」

野島が操縦席ハッチを跳ね上げて顔を出した。

ちよつと運動場を出た塚野車が、校舎の陰に姿を隠すところだった。

「追うわよー！」

そう息巻くは佐伯だ。「どこに逃げようが仕留めてやるわ！」

「え、いいんですか?ここから出て」

土橋が確認したが、佐伯は強引だった。

「いいから追うわよ!生徒会命令!」

「使い勝手の良い命令ですね」

そう皮肉を言いながら野島も、塚野車の追撃に移った。

「暑くなってきたわねそう言えば」

福地がそう呟いたが、野島はそれより数分前から蒸し暑さに最も苛まれていた。

オーバーヒートを遅らせる改造をした筈だが…どうなってるのだろう。

校舎と校舎の間を走る塚野車に、見学に来なかつた生徒達が興味津々の視線を向けて来た。

「お、来た来た」

すぐに姿を現した野島車を認めると、塚野は田張に次のコースを指示する。「そこ左!」

「左ね！」

T字路を左折する塚野車。

野島車も後を取って左折してきた。

「撃てえー！」

「そりやー！」

砲弾が野島車のすぐ横で命中すると、驚いた生徒達が慌てて身を隠したものの、それでも窓や物陰から両者の戦いを覗き見る。

「もう1発！」

佐伯の弾丸も外れ、その先の校舎のガラス窓を突き抜けた。「次！
急いで！」

萩原と違い、用意していた土橋がすぐ砲弾を押し込む。

「装填しました！」

直後に塚野車はまた左折して姿を消した。

しかし、これ以上は追いかけっこをしていられなくなってきた。

車内温度が、いよいよ耐え難い蒸し暑さにまで上昇してきたのだ。

「そろそろ決着つけっかなあ」

「どう…するんです？」

と、蒸し暑さに喘ぎながら萩原が聞いた。砲弾を抱えるのも辛そう
だ。

「うん、マジでしんどくなってきたー」

塚野や田張はハッチを開ければ外気で涼めるが、鹿屋と萩原は車内
に閉じ込められた状態だ。

「運動場に戻るよん。そこ右折して道なりに進んだら運動場に出られ
るから」

「了解！」

また後ろから野島車が撃って来たが、今度も外れて、塚野車の左斜
め前方の道に命中した。

「あ、戻って来た！」

観衆の1人が言う通り、運動場に再びカヴェナントーが戻って来

た。

すぐにもう1輛も姿を現し、運動場の向こう側とこちら側で睨み合う形となる。

「ああ…きついい…」

佐伯は顔中を流れる汗を袖で拭った。

既に全身汗だくなので、今更制服に汗が追加で沁み込もうが知った事では無かった。

「これは決着がつきそうね？」

福地は新鮮な空気を吸って悠々自適だ。

「いやもう、これで決着ついて下さい…」

顔中が滝の汗の土橋の言葉は、もはや願望だった。

「今度こそ決めてやるわ」

佐伯はスコープを覗こうとして、汗が目沁みる痛みに顔をしかめた。

「大洗対黒森峰みたいにやりたいけど、まあ無理だし…」

塚野は振り上げた右腕を、野島車に向かって下ろした。「突撃！」

田張は野島車に向かってカヴェンターを突撃させた。

野島車もそれに応じて向かって来る。

コースとしては、互いに反航でニアミスする形だ。

先に佐伯のスコープが塚野車を捉えた。

「食らえー！」

「撃てー！」

ほぼ同時に鹿屋も発射した。

互いの砲弾は、偶然にも真つ向からぶつかり合い、両車の間でまるで爆発するように砕け散った。

その瞬間を、福地のシャツターが収める。

再装填する間は無く、2輛はあつという間に距離を縮め…

「危ないー！」

直感で危険を察した田張が急ブレーキをかけ、前につんのめった。その為、野島車が前につんのめった塚野車を踏み台に、右履帯を乗

り上げる恰好となった。

「うわっ！」

車体が左へ急角度に傾いたので、福地が慌てて車内に引っ込む。

塚野はこの体勢を見逃さなかった。

「そのまま引っ繰り返しちやえー！」

「オーケー！」

田張は巧みにカヴェナンターを操作して、みるみる野島車を押し上げ、とうとう横転させてしまった。

「装填しました！」

「これでおしまいだー！」

無防備に晒された野島車の腹を、無情にも2ポンド砲弾が叩き込まれ、その衝撃で野島車は吹き飛ばされ、仰向けに引っ繰り返りながら滑って校舎の壁にめり込むように激突して漸く止まった。

「…やった？」

萩原が、ほとんど消耗し切った顔で這い出て来た。

「死ぬー」

鹿屋にいたっては、砲塔の上で大の字に引っ繰り返っている。「もうやだー」

やがて観衆が恐る恐る校舎や物陰から出て来る。

横転した野島車からは、撃破判定を示す白旗が上がっていた。

暫し沈黙が垂れ込めていたが、いつの間にマイクを握った蝶野の声が響き渡った。

「カヴェナンター2号車、走行不能！よって…カヴェナンター1号車の勝利！」

アドリブ判定だったが、観衆達からは「おおー！」と一斉に声が上がった。

塚野車の周りに観衆が集まり、汗だくの塚野達に「凄い迫力だった！」とか「こんなに興奮したの初めて！」と言った称賛の言葉が惜しみなく掛けられた。

そこへ国崎がやって来て、塚野の前に立った。

俄かに緊張で固まる塚野に、国崎は優しく声を掛けた。

「凄かったですよ、塚野さん。間近で見る戦車道が、こんなに面白いものとは、正直予想外でした」

何を言われるかと内心びくびくしていた塚野は、緊張が解けてつい間の抜けた返事をしてしまった。

「は…ひゃい…どもつす…」

と、すぐに我に返る。「あ、有難う御座います！」

国崎はちよつと笑い、頷いて見せた。

「戦車道の活動続行を、認めます」

一方、引つ繰り返った野島車からも蒸し焼き状態の4人が救出され、そちらにも観衆達から称賛の声が掛けられた。

もつとも、4人に称賛を聞く余裕など無かったが。

「ねーねー、大丈夫ー？」

自分も蒸し焼きで消耗状態なのに、鹿屋が地面に伸びている佐伯を気遣ったが、佐伯は鹿屋を弱弱しく睨み返した。

「…大丈夫に見える…？」

かくて、オリエンテーションのやり直しは成功した。

しかし、問題は山積している。

続く

チャプター9 戦車道仮承認

「やーっぱあれじゃ人集まんないよねえ」

借りた小会議室にいるのは、塚野、野島、土橋、萩原の4人で、今後の課題について話し合っていた。

それぞれが思い思いの恰好で寛いでいる。みんな疲れているのだ。

「田張さんに弄って貰ったら、温度上昇がかなり改善されましたよね」カヴェナンターの車内温度が思ったよりも早く上昇したのは、やはり素人が突貫で覚えた改造スキルでは限界があつたからであるらしく、実際に田張が隼高校に帰る前に2、3手を加えた後でテストしてみると、温度上昇はかなり緩くなっていたのであつた。

ただ、あくまで温度上昇が緩くなっただけである。

「結局サウナになるんじゃない意味ねえんだよ」

野島は不機嫌そうに頬杖を突いていた。

救助されるまで転覆したカヴェナンターの中で我慢を強いられた事が、かなり体に応えたようだ。

「んで今の手持ちがダブルサウナ」

「もう乗りたくないよ…あれには」

土橋はテーブルに両肘を突いた状態で、顔を両手で覆っていた。

「とりま経験者を集めないとねえ」

「集めるってどうやるんだよ」

野島が疑問を呈した直後、小会議室の扉が開いた。

疲労困憊な一同のけだるげな視線を向けると、佐伯と鹿屋が立っていた。

「何の御用ですかあ？」

塚野がこれまたけだるげに言った。

「御用もクソも無いわよ全く」

佐伯は予想外の事を口にした。「戦車道に参加するわ」

驚きで4人の疲れが一斉に吹き飛んだ。

「参加…？」

「会長の命令よ。後は聞かないで」

国崎が佐伯に下すもう1つの処分として、戦車道に参加し、協力する事が言い渡されたのであった。

「私は志願するよー」

鹿屋は自分の意思だが、あの蒸し風呂地獄に懲りていないらしい。

鹿屋は一同に混じったが、佐伯は隅つこの椅子に座つてぶつぶつ文句を言った。

「何でこうなるの…」

「これで5人だねえ」

「留年生の命令を聞くなんて癪だわ」

と、遠慮なく毒を吐く佐伯だが、塚野はどこ吹く風だった。

「とりまよつろしくう」

手を振って来る塚野を、佐伯はジロリと睨みつけた。

「仮にも先輩なんだけど、私…」

「私はそんなの気にしないんだけどなー。先輩後輩なんてどうでもいいしー」

と、鹿屋がのんびりと言った。

「あなたはちよつとおかしいのよ」

「まあまあ、仲良く行きましよう！…こうなりや一蓮托生！」

佐伯はむつつりと押し黙ってしまった。

様々な困難が前途に待ち構えているが、フロンティア学園の戦車道は漸くスタートラインに立ったのであった。

〈第1話・終〉

第2話 戦力整備

チャプター1 依頼

「隊長車に照準！あれをやれば指揮系統が崩れる筈！」

逸見エリカは、隊長車撃破に活路を見出そうとした。殲滅戦ルールだが、指揮官を失えばたとえ一瞬にしても隙が出来る筈だ：とだけ言えば聞こえは良いが、実際には至難の業だった。

正確な照準を行う為には一端停止しなければならないが、敵戦車隊の猛烈な弾幕の中でそのような事をするのは自殺行為だ。

ガギーン！

前後運動で回避するティーガーIIの正面傾斜装甲に、122mm徹甲弾が当たって弾かれ、衝撃と轟音が車内を揺るがせる。

この衝撃と轟音も正確な照準を妨げ、砲手の集中力を奪っていた。苛立ったところで無意味な事は頭で分かっているが、エリカは苛立っていた。

「…隊長車にロックした!？」

と、切羽詰まった口調で砲手に催促するが、

「まだです！」

砲手も歯を食いしばり、なんとかスコープの中心線に、敵隊長車のIS-3をたとえ0.1秒でも捉えようとする。

と、赤星小梅のより一層緊張を帯びた声が通信機に入る。

「隊長！3時の方向から、敵戦車隊が新たに6輛現れました！」

「ぬっ!？」

双眼鏡をそちらに回すと、はたして十字砲火を組もうと回り込んできた6輛のIS-3とT-44の部隊が横一列に展開しつつあった。

「…塚野達が危ない…！」

10日前。

『会長日誌。西暦20XX年9月12日。当校史上初の戦車道は、どうにか再スタートを切った。まだ仮承認の段階だが、今後に期待した』

い』

「では、これで始末書とします」

生徒会長の国崎マイは、手元のA4用紙に万年筆で手書きのサインを書き込んだ。

『始末書』との内容は、先日行われた戦車道のオリエンテーションにおける砲撃戦で校舎にもたされた様々な被害に関するものだった。

2台のカヴェンターの撃ち合いにより運動場には穴が穿たれ、校舎の窓ガラスは割れ、窓ガラスを突き抜けた40mm徹甲弾は建物内にも若干の被害をもたらしたのである。

幸い、その場所に人はいなかったため、怪我人は出なかったが。

「まあ、書いたのは私ですけどね」

と、副会長の佐伯ユキネが肩をすくめた。

諸般の事情により、本来参加するつもりはなかった戦車道に、国崎の命令で強制的に参加する事になってしまったが、詳細は第1話を参照されたい。

「窓ガラス割ったのは副会長でしょうに」

そうとぼけるのは、フロンティア学園に史上初めて設置された戦車道の初代隊長である塚野スズネだ。

「隊長でしょ？あなたが書きなさいよ」

「感謝してますっつえ」

「白々しいわね」

と、そこへ執務机の上の電話が鳴り、国崎が手を伸ばして受話器を取った。

「はい……えっ？」

どうやら生徒会員の1人と話をしているらしく、何度か電話向こうの相手に相槌を打ちながら、国崎は塚野を横目で見た。「ええ、いるわよ……うん。繋いで」

2、3秒の間があり、国崎は背筋を伸ばした。

「はい、生徒会長の国崎です……はい、初めまして。塚野ですね？お待ち下さい」

そう言うと、受話器を塚野に差し出す。「田張整備工場の田張工場長から」

「え、マジっすか?」

「そう、マジですよ」

国崎から受話器を受け取ると、

「おひさです!」

すると、あの懐かしきフレンドリーな工場長の声が耳に入ってきた。

「やあ。娘からこの間のオリエンテーションの事は聞いたよ。成功して良かった」

「あ、有難う御座います」

「うんうん。ああ、それで早速本題なんだけど、ちよつと頼みを聞いて貰えるかな?」

塚野は首を傾げて国崎と目を合わせた。

「…頼み、ですか?」

続く

チャプター2 朗報

田張工場長の頼みとは、塚野は勿論、戦車道のメンバー達にとって朗報だった。

「え、この前来てくれた子が？」

塚野の話が終わると、土橋が驚いた声を上げた。

今や戦車道チームのブリーフィングルームとなった小会議室には、塚野と佐伯の他、副隊長の野島カエデ、漫画部と戦車道を掛け持ちする土橋アンナ、生徒会広報で戦車道チームに志願した鹿屋リナ、そして彼女達を取材する報道部員の萩原ミツキの6人がいる。

外は夕立の模様で、窓には時折斜め風に吹かれた雨粒が叩き付けており、室内はエアコンが冷房モードで静かに唸っている。

「仮承認段階である事は伝えたのですか？」

この質問は萩原である。

フロンティア学園戦車道は、現時点では仮承認でまだ『存在』を正式には認められていない為、途中で頓挫し立ち消えになる可能性が、正式設置されている部活や履修科目よりも確率が高かった。

そして正式承認される条件はまだ決まっておらず、完全手探り状態である。

「うん。その上で、だって。マジびっくり」

「戦車は足りねえ、人も足りねえ、さりとてカネもねえとこによく来る気になったな」

野島がそう言うと、塚野が更に2つの問題点を付け加える。

「まだ倉庫も直ってないし、練習用の敷地も無いのマジやばい」

椅子にふんぞり返りながら組んだ両手で後頭部を支えている。「とりま戦車にはシート被せてっけど」

戦車の保管場所として生徒会から認められた、元テント倉庫だった骨組みには未だテントが張り直されておらず、そこに置かれた2台のカヴェナンター巡航戦車は、雨曝しを防ぐ為に青色の防水シートが間に合わせに被せられていた。

佐伯が鼻を鳴らす。

「あれじゃ放置ね。保管じゃなくて」

「全く、副会長様の御指摘通り」

塚野は弾みをつけて身を起こした。「誰も声上げてくれないんですかあ?」

「今のところはね。もしかしたら、全然駄目かもよ?」

フロンティア学園は100年近くも戦車道無しで運航されてきた学園艦だ。

その為、戦車道に対する理解がある住人はゼロで、佐伯を通じて戦車道の敷地を提供してくれる所を探索してはいるものの、土地の提供に協力してくれる人は今のところ現れていない。

塚野が継るように野島の方に体を傾ける。

「ねえノイジー。おじいちゃんのポリテイカルパワーで何とかかなんない?」

「おじいちゃんはこの船の船長であって政治家じゃねえよ」

渋い表情を浮かべながらそう答える野島。

野島カエデの祖父は元海上保安官で、このフロンティア学園の学園艦の艦長を務めていた。野島は祖父が働く操舵室へ遊びに行く事が時々あるが、いつ行っても歓迎されている。

「でつかい船動かしてるから影響力あるのかなあって」

「ねえよそんなの」

「けど元海上保安官じゃん?」

「それ関係ねえだろ」

すると、萩原がボールペンを握る手を挙げた。

「あ、あの。それで、隼高校ってどんな高校なんですか?」

「ああ、それぞれ。サンキュー」

塚野は話題を元に戻す。「20年前まで戦車道があった高校なんですけど、財政難に陥って、金策として戦車を売る為に戦車道が廃止されたんだって。んでそうは言っても戦車道の廃止を惜しんだ当時の人達が、機械部を立ち上げたらしいよ」

「機械部…ですか?」

と、萩原がメモの手を止めて聞き返した。

他のメンバーも同じように、聞いた事が無い単語に首を傾げている。

いや、正確に言うとは漢字には脳内変換出来るが、どういう意味なのかと図りかねたのである。

「なんか機械とか車輛の修理とか整備やってて、戦車を改造した作業車を持つてるらしいよ」

「ああ、戦車を残す為にわざわざ機械部を始めたってわけか」

と、野島が言った。「てことは、その作業車が手に入れば、実質戦車を手に入れたも同然ってわけか」

「でも、どうしてわざわざさうちに来る事になったの？」

と、土橋が尋ねた。

「なんか廃校になっちゃうんだって。それで解散する事になってたみたいだけど、ここで会ったが百年目だから受け皿になってくれないかって」

「あのな、それ仇討ちのセリフだぞ」

「結局財政難が仇になったのかしら」

と、佐伯が考え込みながら言った。学園艦の運営に関わる立ち位置の生徒会副会長だから、その辺りの事情については色々と詳しく、思うところがあるのだろう。

「でもそう言えば…」

萩原に1つ思い当たる事があるようだった。「文科省が学園艦の統合を進めていて、それで廃校にされる高校が続出しているみたいです。今年の戦車道全国大会で優勝した大洗女子学園もそうでしたし、隼高校もその煽りを食らったのかもしれない」

そう説明すると、この場にいる人間の不安そうな、しかし質問するには恐ろしくて言葉に出せないという視線が、佐伯に向けられる。

彼女達の視線に気付いた佐伯は、しかしキツパリと断言する。

「何も言われてないわ。だから大丈夫よ」

「ふう、良かったー」

「広報の癖になんで知らなかったって顔してるのよ」

安堵の溜息を吐く鹿屋に呆れながらツツコミを入れる佐伯。

「まあそんなわけで、明後日会いに行くよ」

「どっか寄港するのか？」

「いんや。ヘリで直接隼高校に行こっかなって」

フロンティア学園には、航行中でも外部とコンタクトが取れるようにヘリコプターや軽飛行機、小型船が民間企業の手で運航されている。

「あたしはいいけど、他のみんなは時間あるのか？」

野島が一同を見回すと、萩原が真つ先に手を上げた。

「私は大丈夫です！」

「うん、こっちも行けるよ」

と、土橋が首肯した。

しかし、生徒会の2人は用事を抱えているようだった。

「行ける行けるー」

と、鹿屋が言ったが、

「何言ってるのよ。合同説明会の準備に行かないと」

「え、でも4日後なんだから別にいいんじゃないのー？」

「資料とかパワーポイントの準備いつも遅いじゃないの」

「大丈夫だつてー、徹夜するからさー」

「すぐ寝落ちするでしょ」

「今度は大丈夫だつてー」

塚野が口論に割って入った。

「えっと、合同説明会って何なの？」

「ああ、今から説明するわ」

佐伯は口論を中止すると、「廃校になった高校生を対象に日本全国で開かれるんだけど、横浜も会場になってるから、そこに出席するのよ」

「何それ、聞いてないし」

「今日決まった事よ」

隼高校の話題が終わり次第、佐伯はこの合同説明会の事を切り出すつもりでいたが、鹿屋との口論ですぐに話に出せなかったのであった。「そこで戦車道経験者の募集をしようって事になったわけ」

機械部自体は20年前に廃止された戦車道の名残ではあるが、戦車道はやっていないので経験者は別途募集する必要があった。

確かに田張のケースで見られたように、戦車を動かす事は出来るが、チームの指揮や戦術についてはまた別の話なのだ。

「ネットで募集はかけないんですか？」

と、土橋が言うと、鹿屋が答えた。

「もうやってるよー。でも全然集まらないんだよねー」

広報の鹿屋が主導して、フロンティア学園の公式サイト内に戦車道経験者の募集ページが設けられたのだが、今のところまだ連絡は来ていなかった。

「そもそも何人見てるか分からないしな」

野島の言う通りだった。何しろインターネットサイトは星の数ほどもある。その中からピンポイントでフロンティア学園のホームページ、尚且つ戦車道メンバー募集ページに辿り着く現役高校生は果たして何人いるのか。

ましてや戦車道経験者をターゲットに絞っているので、より至難の業だろう。

しかし行政主催の合同説明会であれば、少なくとも説明会に参加した生徒全員は、基本的に一度は目にする筈だ。

実際に何人話に応じてくれるかどうかはまた別問題だが、やっている価値はある。

「あ、本当だ」

土橋は愛用のラップトップコンピュータで検索を掛けていたが、「うーん。やっぱり仮承認段階だから余計に人が来ないんじゃないかなあ？」

募集ページには、カヴェナンターの写真と共に、発足したばかりのフロンティア学園戦車道チームに戦車道経験者を募集する文章が掲載されている。

しかし同時に、『仮承認段階』である事が但し書きされていた。

「もし私が戦車道経験者だったら、ちよつと行くの躊躇っちゃうかも」「でも後で揉めるのも嫌だしねー」

『あとの喧嘩を先にする』と言う諺の通り、もし興味を持って入って来てくれても、仮承認段階でまだ正式に『存在』を認められてない事を隠し通せる筈は無く、それを転校生が知った時の一悶着を避ける為に但し書きが入れられたのである。

「じゃあ、お二人は合同説明会の準備って事でオツケー？」

「悪いけど、それで宜しく」

「行きたいな」

「あなたは早く資料作成して」

続く

チャプター3 隼高校

そして2日後。

1機のAS332シユペルピューマ汎用ヘリコプターが、海原を眼下に飛行していた。

窓から覗き込むと、海面は太陽光でキラキラ反射させており、高速で前から後ろへと過ぎ去っていく。

シユペルピューマ機内には、フロンティア学園の生徒である塚野、野島、土橋、萩原の4人が乗っていた。

携帯電話のディスプレイに表示される時間を見た野島が、隣で寝息を立てている塚野の脇腹を肘で小突いた。

「もうそろそろだぜ」

塚野はまだ眠そうに両目をこすりながら欠伸した。

「ふあ…え、もう着いたの?」

「ちげえわ。もうそろそろだっつつつてんだよ」

「ふーん。あふ…じゃ、着いたら起こして」

二度寝を敢行しようとする塚野だったが、野島がまだ脇腹を小突いた。

「だから寝るんじゃねえ」

そこへ、機長の声がヘッドセット越しに入ってきた。

「到着まであと5分です。ベルトをしっかり固定して下さい」

キャビンアテンダントが立ち上がり、6人のフロンティア学園生徒1人1人のベルトを念入りに確認して回った。

安全確認が終わると、キャビンアテンダントはリップマイクに手を添えてコクピットに報告した。

やがて機内が右に傾き、ヘリコプターが右旋回を始めた事を教える。

「あ、あれだよー」

窓の外を見ていた土橋が指差す方向に目を向けると、空母に似た巨大な船舶、即ち学園艦が航行しているのが見えた。

ヘリコプターは右旋回を続けながら、一度学園艦の艦首の前を横

切った後、学園艦の右舷側を平行にすれ違う形で水平飛行し、艦尾を越えると、今度は急激に右旋回して艦尾の後ろに付き、艦尾に設けられているヘリポートに着陸した。

隼高校は、旧日本陸軍が保有していた航空母艦『あきつ丸』の全通飛行甲板時代の姿をモチーフにしたデザインの学園艦であった。

今から20年前に学園の財政難により戦車道が廃止されるといいう、大洗女子学園と似たような経緯を辿っていたが、隼高校ではチーム解散を惜しむ有志により、名残として機械部が設立され、これまで存続してきていた。

ヘリポートでは、田張ともう1人が塚野達の到着を待っていたが、もう1人は田張の一步後ろで、手を背中で組んで立っている。

塚野達がヘリコプターのサイドドアから下りると、田張が始めに挨拶した。

「隼高校にようこそ！」

塚野が片手をひよいと肩の高さにまで上げ、軽い口調で挨拶を返す。

「ちいっすーおひさー！」

「おひさにはもうちよつと日数が要りますね」

田張は苦笑しながらそう応じつつ、「パパから話を聞いていると思いますけど、ここで機械部のリーダーをやってます。こちらが副リーダーの…」

副リーダーが一步進み出て、田張の右隣に立った。

「安藤アイリでさあ。田張部長とおんなじ、2年生だぜ」

「うお、すっげえユニーク…」

しかし人懐こそうに手を差し出してきた安藤に多少戸惑いながらも、塚野は握手に応じた。

他の面々との自己紹介も一通り済むと、田張は早速、機械部の拠点へ先導しながら、道中に学園艦の案内をした。

「ガラガラですけど、見ての通り、元々は教室なんです」

右手に見える校舎を示しながら田張は説明した。「でも廃校が決

まっつてから、誰もいなくなっつてしまひました」

「あの、廃校つて、やっぱり例の文科省の政策の影響なんですか？」

と、萩原が遠慮がちに尋ねると、意外にも田張は首を横に振つた。「いいえ。去年から廃校の手続きが始まっつていたんです。うちの高校、20年前から財政的に厳しくなっつていたらしくて」

20年前の金策として行われた戦車道廃止は、ちよつとした延命措置にしかならなかつたようである。

「あたしら、ここが廃校になつたら解散する事になつてたんでさあ」

と、安藤が相変わらず特徴的な喋り方で補足する。「短かつたけど、なんだかんだ思い出も色々あつたもんだから、残念で残念で腐つちまっつてたんだ。でもそこへ、あんたらと合流するつて話が来たつてわけで、正に渡りに船つてとこですかね」

それから一同は、田張や安藤からガイドを受けながら暫く歩き続けた。

「にしても、ここまで人がいねえと殺風景だな」

野島が辺りを見回しながら言つた。「みんな、もう転校が済んだのかな？」

「いえ、みんな自宅か寮にいます。もう登校する意味が無くなつたので、校内にはいないだけです。今は荷造りしてゐるんじゃないかと」

と、田張が答えた。「私達を含めて、ここに用事がある生徒がほんの一握りといつたところですよ」

「愛想がねえ連中だよなあ全く」

と、安藤が田張に同意を求めように見たが、田張は困つたように唸るしかない。

「んまあ、それは人それぞれですよ」

「…お、そろそろつきますぞ」

果たして曲がり角の先に、機械部が拠点とする倉庫があつた。

その中には2輛の重機、即ちクレーン車らしき装軌車輛と、ブルドーザーらしき車輛が保管されており、機械部の人間2人が整備を行つていた。

「あれが元戦車の作業車？」

「その通り。あたしらが使ってる作業車…SPK―5自走クレーン車と、アレクト・ドーザーでさあ」

安藤がアレクト・ドーザーのドーザーブレードを軽く叩きながら言った。

「確かに車体が戦車みたいですね」

と、萩原が初めて見た感想を言うのと、田張は頷いて見せた。

「はい、クレーン車の方がT―34中戦車かその派生型、ブルドーザーの方がハリー・ホプキンス軽戦車に改造出来ます」

前者は旧ソ連の作業車、後者は英国の作業車で、どちらも戦後に誕生したが、前者はT―34―85中戦車を改造し、後者はオープントップのアレクト自走砲を改造したものだ、これも元を辿ればマークVIII・ハリー・ホプキンス軽戦車に至る。

「ふむふむ。T―34って色々バリエーションがあるんですね」

早速ラップトップコンピューターを開いていた土橋が言った。

画面は日本戦車道連盟の公式サイトで、開いたページにはT―34シリーズや、この戦車の車体を利用した固定砲塔式のSUシリーズが掲載されている。

「なので一考の余地があると思います。手に入れる主砲によっては、強力な戦車に出来ますよ」

と、田張は補足説明を加えた。

「でもまあ、なんていうか寂しいもんですなあ。いざ戦車に先祖返りするってなると…」

安藤が名残惜しそうに頭を掻いた。

「安藤さん、よく乗ってましたからね」

「他に戦車に出来る…その、乗り物ってあんの？」

塚野がそう聞くと、安藤は首を横に振った。

「いいや、生憎これで全部でさあ」

「2輦増えるだけでも御の字だろ」

と、野島が窘めるように言った。

「じゃあ、あと3人メンバーがいるので、紹介しますね」

「あれ、2人じゃないの？」

塚野の疑問通り、田張の言葉を合図に集まって来たのは、この倉庫で作業していた2人だった。

「カズサちゃんならLCUの整備ですよ！」

アレクト・ドーザーの整備をしていた方が言った。なかなか元気が良く、親しみが持てるようだ。

「ついさっき出て行ったので、入れ違いですね」

と、SPK―5の整備をしていた方が言った。こちらは落ち着いていて、クールな印象を受ける。「五十嵐セイナと申します」

「中村ホノカだよ！」

「3人目は尾鷲カズサという名前です」

と、田張が言った。「中村さんの言う通り、この下でLCUを整備しています」

「えるしーゆー？」

塚野が聞き返すと、安藤が説明した。

『Landing Craft Utility』の略で、和訳すると汎用揚陸艇ってゆうんでさあ…上陸用舟艇と言う方が一般的ですかね」

「あー、なんか砂浜に乗り上げて兵隊とか戦車とか下ろすやつ？戦争映画で見たかも」

「そういう事ですな。見に行ってみますかい？」

「うん、見てみたい」

「大歓迎っでもんですよ」

田張と安藤に先導され（中村と五十嵐は引き続き作業車の整備を続けた）、倉庫に隣接する鉄製の急階段を下り、更に狭いエレベーターで下降して行った先にLCUを収容する格納庫があった。

格納庫は広々としていて、2艇のLCUが横並びに並んでいたが、まだまだ数艇を余分に収容できる余裕はありそうだった。

「1年前まではまだ4艇残っていたんですが、資金不足で2艇売ってしまっって、今はこの有様です」

「まあ、残り1艇も売っちゃまうんですがね」

と、安藤が言った。「二束三文にしかならんでしょうが」

「買ってくれるだけ有難いですね」

田張はそう言ってから、「尾鷲さーん！」

と呼び掛けると、操舵室の中から尾鷲カズサの顔がひよいと出て来た。

「なんすかー!?!」

「昨日話してたフロンティア学園の皆さんですよ！」

「あー!ちやつす!」

挨拶も手短かに、尾鷲はまた操舵室に引っ込んでしまった。操舵系統を弄っているのだろうか、完全に窓の下に隠れてしまっている。

「超忙しそうじゃんね」

「ちよつとぶつきらぼうですが、本当はいい子です」

すると塚野は、なぜか野島に目配せした。

「なんか分かる」

「何が分かるんだよ」

野島のツツコミはさておき、田張は状況を説明した。

「これに2台の作業車を乗せて、明日は母港に揚陸する予定なんです。場所は焼津なんです、そちらの母港はどこですか？」

「あー、こっちは横須賀…ええつと、ヤイツってどこだっけ？」

「静岡よ」

と、佐伯が信じられないと言うように首を振った。「とんだ隊長ね」

「という事は、そちらに移すのは少し時間が要りますね。直近で横須賀に寄る予定はありますか？」

「明後日に寄港予定で、停泊は2日間よ」

と、佐伯が手帳を取り出してスケジュールを確認しながら言った。

「それまでに横須賀まで回さないと、置いてけぼりになるわね」

「じゃあ、すぐ手配してきませう」

安藤はそう言うのと、エレベーターに戻って行った。

「あ、そうだ」

塚野が何か思いついたようだ。

「何ですか？」

「あの2輛を、2日後に横浜でやる合同説明会に持って来れないかな

あつて」

「それ、良い案だと思う！」

土橋も賛同した。「展示したら興味持ってくれるかも！」

「そう言えば廃校の生徒を対象に開かれますね」

田張も合同説明会の件は知っているようだったが、「でも作業車で
すよ？」

「改造予定って書いてけばダイジョブだと思うんだよねえ」

「いやまあ、それはそうですが…」

「うちの戦車も出すし、ちよつとでも賑やかになったら嬉しいなあ」

「で、実際問題、合同説明会に出すとして、初日から展示出来るのか？」

と、野島が疑問を呈すると、田張は腕組みしてちよつと考えた後、

「多分、大丈夫だと思います。元々競技用戦車向けの輸送網は整備されて
いますし、事情を話せば急いでくれるかもしれません…運賃をど
れだけ取られるか分かりませんが」

「まあ、何とかなるっしょ」

「そうですね。まずはやってみましょう」

続く

チャプター4 合同説明会

そして合同説明会当日。

学園艦が横須賀に寄港すると、朝早くから塚野と野島の2人はJRを利用して横須賀駅から横浜駅に移動し、そこからベイサイドブルーと呼ばれる連接バスで合同説明会用の貸会場があるパシフィコ横浜まで移動した。

会場より海を臨む方角にある臨港パーク南口広場では、2輦のカヴェナンターと共に既に佐伯と鹿屋が待っていた。

「おっはー」

「ちゃんと挨拶してよ」

「グツモーニング」

「…はいはい」

佐伯はうんざりしてスルーした。「隼の車輛はまだよ。今日の午後に到着予定みたい」

2輦のカヴェナンターは広場の右側に配置されており、スペースがある左側がSPK-5とアレクト・ドーザーの為に空けられていた。そして広場には運動会等で見られる白屋根のテントが2つ並び、その下に折り畳み机や折り畳み椅子、パワーポイント用の機械にまだ展開されていないスクリーン、何か道具が入っているらしい段ボール箱やクーラーボックスが積み上げられている。また、海風から書類や身を守るための仕切りも立てられていた。

「え、ここでやんの？」

「戦車は中に入れられないわ」

と、佐伯が会場の方を指差した。

「入れてもいいと思うんだけどなー」

「だから無理だって言ってるでしょ」

「そんない」

「クーラー利いてないのマジやばいんですけどお…」

と、塚野は早速暑さにやられる自分を想像してしよげている。

「ちよつと我慢も出来ないの？」

「つかそろそろ始まるぜ」

野島の言葉で、4人は最後の準備に取り掛かった。

因みに土橋と萩原は、少し遅れて到着する事になっていた。とは言え、早々経験者を引き入れられるものでは無かった。

広場に展示されている戦車を見に来る来場者は多いものの、説明を受けに来る人間はなかなか現れなかった。

それでも3人が興味を持ってくれたが、やはり『仮承認段階』である事が引つ掛かって席を立って行ったのだった。

「厳しい状況ですね…」

と、戦車の前で記念撮影する来場者を見ながら萩原が言った。

物珍しさに『客入り』はいいが、『交渉』は散々だ。

「ネットクはやっぱり仮承認だよね…覚悟してはいたけどさ…」

と、土橋が物憂げに言った。「うまくいくか不安になってくるね…」

「まだ始まったばかりだし、まだまだこれからよ」

そう言いながら、塚野がクーラーボックスから冷えた緑茶のペットボトルを取り出した。「ねえ、ブラックコーヒーは無いの？」

佐伯がポカンとした表情で塚野を見た。塚野のため口に反応したのではない。もう面倒になったので、その辺は無視する事にしたからだ。

彼女が気になったのは、『ブラックコーヒー』である。

「…は？」

「ブラックコーヒー。缶でもペットボトルでも」

「そんなの飲むの？」

「よく飲むよお。で、あんの？」

「…無いけど。買って来たら？」

「そうしよっかなあ」

しかし今日はよりによって日差しがきついし、ましてや太陽が最も昇る正午に近い時間帯だ。

実際、外を歩く人々の顔は汗だで、日差しを受けて辛そうに目を細めている。「まあだるいし、お茶でもいっか」

ペットボトルのキャップを回して外し、一気に3分の1まで飲み干

す。

「ふう。すつきりするう」

と、そこへ。

「あのすみません。戦車道経験者を募集してるって話聞いたんですが」

全員がハツとして声の主を見ると、1人の女子高生がテントの前に立っていた。その手には今回の合同説明会の案内パンフレットが握られている。

「はいはい、座って座って」

と、塚野は緑茶のペットボトルを持ったまま椅子を指し示した。

相手もそれに応じて椅子に座った。

ただ、これまでに3人が席に座り、フロンティア学園の戦車道が『仮承認段階』である事を知ると失望して去って行った。なので、誰ももはやぬか喜びなどはせず、今回も同じように去って行くだろうと思っていた。

先の3人と同じように概要を説明し、しかし『仮承認段階』なので本当にこのまま続くかどうかはまだ分からないと注釈を付ける。

だが、今回はなんと反応が違った。

「じゃあ、正式承認目指して頑張りましょうよ！」

予想外の反応に、塚野は驚いて相手を見返した。

相手は熱心に話し続ける。

「折角始めたんですから、正式承認を勝ち取るべきですよ！」

「ま、まあ、そうだけどさあ…」

「私で良ければ、力になりますよ！」

と、相手は少し身を乗り出してきた。「実は私も、戦車道を立ち上げようとしていたんですが、そうなる前に廃校になってしまいました…なので、あなた達の活動に共感出来ます！」

「元々はどこ出身？」

と、佐伯が尋ねると、

「大鳥高校です」

と、相手は答えた。「大地ヒデミです。2年生です。お会い出来て

嬉しいです!」

「どれくらい戦車道やってたんですか?」

これは萩原の質問である。別に疑うわけでは無いが、それでも戦車道歴がどのくらいかは確認しておきたいものだ。

「えーつとですねえ。小4くらいから始めてるんで、大体6年ですかね。地元の大鳥高校で戦車道チームを立ち上げたいと思って頑張ってたんですが、実を結ばず、この通り漂流の身です」

「じゃあ、来てくれる?」

「凄く即決だね」

と、土橋が苦笑しながら感想を述べつつ、「いや、反対じゃないけどね」

「確かにこれと言った実績は無いですけど…」

と、大地は弁明するように言う。「それは実際の練習や試合等で証明していければと思っっています」

「ほら、こう言ってるし、そんな疑わなくていいじゃん」

「まあ、隊長はスズネだしな」

と、野島がそう指摘した。「決定権は隊長にあるからな」

「そうゆう事」

野島は暗に、決定権の掌握は同時に責任も伴う事を示したわけだが、塚野に迷っている様子は無かった。

人材確保を急いでいた事もあるし、何よりこの大地という人物の言葉に嘘偽りといったものは感じられなかった事もあった。いわば塚野自身の直感だが、信じて問題は無いという思いがあったのである。

「なるほど。あなたが隊長ですね。宜しくお願いします!」

「ごっちこそよろつす!」

塚野が手を差し出し、大地がそれに応じて互いに握手を交わした。

「期待してるよお!」

「はい、頑張ります!」

そして時刻が正午となり、一端昼休憩となった。

「それでカヴェンターを」

「すつげえなんか掴まされたって感じ」

「でも、あとその2輛があるんですよね？」

「そうそう。ちよつちい予想外だったけどねえ」

塚野と大地は、合同説明会に合わせて出店した飲食店の屋台から買ったカレーライス入りの容器を収めたビニール袋を手に提げながらテントに戻っているところだった。隊長として、この戦車道経験者の事を知っておく必要があった…まあ、こちらは素人で、相手は経験者なのでなんだか奇妙な感覚だが。

因みに他のメンバーは他の屋台で買い物をしているらしく、一緒にいない。

とにかく、歩きながら大地が話した簡単なプロフィールとしては、彼女の元在籍校である大鳥高校は名古屋を母港とする学園艦をプラットフォームとしており、学園艦は旧日本海軍の香取型練習巡洋艦をモチーフにしたデザインで、大きさは学園艦としては小ぶりな3000mらしく、これまで戦車道は設置された事が無かった。

しかし、四日市市出身の大地が入学以来、戦車道発足に向けて活動を開始しており、当初は見向きもされなかったが1年強も粘った結果、漸く生徒会や学園長といったトップの人間にも検討が始まるどころまで漕ぎ着けていた。しかしその直後に文科省による学園艦の統合政策における廃校の対象に選ばれてしまい、計画は頓挫するという憂き目を見たのであった。

だからこそ塚野達の取り組みに共感し、参加を決意したというわけである。

当時の大地の計画では、軽戦車を中核とした編成で、その中に切り札となる高火力小型戦車を1、2輛程組み込む予定だったらしく、その高火力小型戦車とはヘツツアー軽駆逐戦車だったらしい。

塚野も近年の戦車道の試合の動画を視聴しているので、本当は大洗の運用するヘツツアーも見ているわけだが、今はまだ名前と姿が一致しなかったので、その場では首を傾げるしかなかった。

さて、話を2人の会話に戻そう。

「戦車の配置が不自然だったんで、多分そうなのかなあって思っていました。やっぱり他に戦車があったんですね、やっぱり」

隼高校の機械部の保有する作業車の事だ。午後から到着予定だが、まだそれらしき車輛が来ている様子が無いので、少し気になっていた。

「戦車つつうか…クレーン車とかブルドーザーだけどねえ」

「いえいえ、戦車に改造できるから実質戦車ですよ！」

名前を聞いただけで、大地はそれぞれどういう種類の戦車に改造出来るか熟知しており、塚野も大地の知識量に感心していた。

「やっぱ経験者は違うなあ」

「いやいや、そんな事無いですよ」

その時大地は、擦れ違った女子高生に気になる点があったのか、鼻をクンクンさせた。相手がその行為に気付いて不審げに目を細めて振り返って来たので、慌てて背中を向けたが、塚野は何だろうと気になった。

「…どしたの？」

「いや…あの人…微かにオイルの臭いがした…」

と、呟くように言う大地。「…ひよつとして、あの人戦車道経験者かも…？」

そしてまた振り返ったが、その時には『オイル臭』のした女子高生は人混みに紛れて見えなくなっていた。

「なんで臭いで分かんのか？」

「戦車道やってる人は、特徴的なオイルの臭いがするんです。って言うっても、意識しないと分かんないんですが、どうも私は鼻が利く方みたいなんです」

「へえ。すげえじゃん」

「あんまり自慢出来た事では無いですけどね…」

と、苦笑しながら大地は答えた。

少し気にはなるが、テントに近付いてきたのでその話はそれで終わりとなった。

やっと腰を落ち着けて昼飯にありつけるようになったが、現実は意地悪とでも言うべきか、すぐにお預けになってしまった。

「あ、塚野さん。あれじゃないですか!？」

大地の視線を追うと、トレーラーの荷台に乗せられてやって来る3輻の装軌車輛の姿があった。

…そう、3輻である。

「…3輻?」

塚野が思わずキョトンとすると、

「多分、もう1輻を見つけて来たのではないですか?」

「ふーむ。行ってみよっか」

よく分からないまま、トレーラーに向かって歩き出す。また、荷台の上には3輻の他に長大な牽引砲も積載されており、益々訳が分からなくなった。

続く

チャプター5 碧眼の少女と偽物

SPK―5やアレクト・ドーザーと一緒に積載されていたのは、フランス製のルノーUEと呼ばれる小さくて古臭い装甲トラクターと、旧ソ連製の100mm対戦車砲D―10Sであった。

そしてこの2つの便乗者の持主は、伊関ナナと桐山シノという女子高生で、デイスカバリー総合高等学校という高校出身だった。こちらが文科省の統合政策で廃校対象となった高校である。

「なんか戦車道経験者って言うらしいんでね、それで連れて来ちまつたってわけでさあ」

と、安藤が経緯を説明した。「んまあ、戦力にはなるんじゃないですかね？この100mm砲はSPK―5に装着すりやあSU―100になりますぜ」

塚野もSU―100なら知っていた。土橋から日本戦車道連盟の公式サイトでT―34とそのバリエーションを一通り見せて貰っていたが、中でもSU―100は無砲塔戦車ながら主砲が非常に強そうな印象を受けたものだった。

「というわけで、宜しく頼みます」

伊関と塚野が挨拶を交わす中、パシフィコ横浜と国立大ホールを繋ぐペDESTリアンデッキの上から塚野達を見下ろしている1人の女子高生の姿があった。その女子高生は、ちよつと前に塚野と大地が擦れ違った人物だった。

「倉庫から引っ張り出してきたんですが、すっかり錆びついてしまっていて、レストアにえらく骨を折ったもんです」

「そのデイスカバリー高校にあったのって、これで全部？」

「はい。正直これだけじゃどうしようも無いんですが、うちの高校、なかなかどうして貧乏で」

桐山が言った。何となくがさつそうな伊関とは違い、こちらは丁寧そうな印象を受ける。トラクターや大砲のレストアをしたのが彼女だろうか？

そんな事を考えていると、塚野と大地が擦れ違った人物がどこからともなく現れ、いきなり伊関にこう言った。

「手を見せて」

伊関は仰天したが、それもそうだろう。いきなり見知らぬ人間に『手を見せろ』などと言われて、『はいどうぞ』と反応など出来るわけがない。

「…えっと、占い師？」

「いいから見せて」

有無を言わずその女子高生は伊関の右手首を握って掌が上に来るように引つ繰り返した。

「あいた！」

「…あなた、本当に戦車道やってたの？」

伊関は手を振り払って不機嫌そうに答える。

「そ、そうだよ」

いきなり現れた女子高生は、しげしげと伊関と桐山を見た。

「…どうだか。多分、嘘ね」

「え？」

大地が困惑する。「でもオイルの臭いはしていたし…」

すると女子高生は、大地がこちらの臭いを嗅いでいた事を思い出したようだ。

「ああ、それであんな変な事を」

「え、まあ…」

女子高生は、今度は塚野に顔を向けた。

その時塚野は、彼女がどうやら欧米系のハーフの顔立ちをしている事、虹彩が淡いブルーである事に気付いた。

「あなた、この隊長？」

「は、はい…そうです…」

この女子高生が見せるブルーの虹彩のようにクールな迫力には、塚野も思わず敬語になった。

「この2人、偽物よ。あなたの隣は本物だから安心して」

そう言うのと、伊関と桐山の横を擦れ違うようにして立ち去ろうとし

た。

「あ、あのー！」

呼び止めたのは土橋だった。碧眼の少女は立ち止まり、肩越しに土橋を振り返った。

「何？」

「ひよっとして、戦車道の経験者ですか!？」

「だとしたら、なんなの？」

一瞬迷ったが、塚野は誘ってみる事にした。

この様子だと、厳しそうだが…

「うちのチームに入ってくれたら嬉しいなあって…ダメです？」

「お断りよ」

にべもなく断ると、碧眼の少女はまた歩き出し、塚野達をその場に残して立ち去って行った。

「…あーあ。臭いだけじゃ駄目だったねえ」

「そのようです」

塚野の指摘に、大地はあっさりと認めた。「でも私は本当に経験者ですよ？」

「…大丈夫、信じてっから」

その頃、野島が伊関と桐山に詰め寄っていた。あまりの剣幕に、2人とも決まり悪そうに固まっていた。

「おい、なんで嘘ついたんだよ？」

と、野島が問い質すと、伊関が口を開いた。

「私達、本当は吹奏楽部なんです」

「ん？どういう事だ？」

この場にいるみんなが、吹奏楽部とトラクター及び大砲が繋がらなくて首を傾げた。

「私達の高校には吹奏楽部の砲術部というチームがあつて、大砲を使った演奏に参加していたんです」

と、桐山が説明した。「チャイコフスキーの1812年とか、アメリカ

カ野砲隊のマーチとかの演奏です」

「聞いた事あるわね」

と、佐伯が言った。「本物の大砲を使って空砲射撃をするんだっ
たっけ？」

「はい、そうです」

と、桐山は首肯した。「あの大砲は、その時使っていたもので、トラ
クターは大砲の牽引用でした。特殊な役目で私達も楽しくやってい
たんですが、急に廃校になって、私達は解散させられる事になりまし
た。でも私達はそれが嫌で、せめて自分達への餞別として、トラク
ターと大砲を持ち出したというわけです。元々廃棄処分にする予定
だったので、誰も気にしませんでしたし」

「どうしてもトラクターと大砲を失いたくなくて、それで正体を偽っ
たんです」

「列車で移動する途中で2人を見つけて、トラクターと大砲が気に
なつて、戦車道の経験者かと聞いてみたらそうだと言ったので、その
まま一緒に乗せて来たんです」

と、田張が便乗の馴れ初めを語った。その時は作業車と一緒に列車
に持ち込んだ補給物資の管理や整備にも多忙で、深くは尋ねなかつた
のである。

「かなり思い入れあるんだねー」

鹿屋がそう言うと、伊関と桐山は同時に頷いた。恐らく二人は1門
の大砲を受け持っていたコンビなのだろう。

「はい。家の都合で楽器を持ってなくて、本当は吹奏楽部を諦めていた
んですが、砲術部のおかげで参加出来たんです」

伊関が言った。「楽器こそ演奏出来ませんが、大砲でみんなと合わ
せる事が凄く楽しくて、まさか夢が叶うとは思ってもいませんでし
た」

「他にもメンバーはいたの？」

と、塚野が尋ねると、

「いましたが、解散と同時にみんな離れて行ってしまいました」

「お願いします。私達も戦車道に参加させて下さいー！」

桐山がそう言って頭を下げると、伊関もそれに倣った。「嘘ついた
事は謝ります！戦車道経験者限定の募集だと言うので、何とか入って

しまえばごつちのものだと考えていたんです！」

「…塚野さん。部外者の私が言うのもなんですが…」

と、それまで黙って話を聞いていた萩原が遠慮がちに言った。「参加を認めてもいいのではないのでしょうか…？」

塚野もそれについて考えていた。伊関と桐山が身分を偽って自分達に近付いてきた事を抜きにしても、戦車道経験者の募集を目的にここまで来たのだ。とは言え、2人の話を聞くに、無下にするのも気が引ける。

「スズやんスズやん」

土橋がテントの下から自分のラップトップコンピューターを持って歩いて来た。「今デイスカバリー高校のサイト見てるんだけど、吹奏楽部に砲術部があったのは本当みたい」

横から差し出されたラップトップコンピューターのモニターを覗き込むと、活動報告の中に吹奏楽部が大砲を使った曲の演奏を行った記事と写真が載っていた。その中には伊関と桐山の姿も写っており、彼女達が持参した100mm対戦車砲D-10Sも写っていた。

「私も賛成かな。彼女達をチームに引き入れるのに」

「うーん。どうすっかなあ…」

「隊長はあなたよ。さっさと決めたら？」

佐伯が不愛想な口調で促す。鹿屋と野島は、静かに塚野の決定を待っている。塚野がイエスと言えば伊関と桐山の参加は認められ、ノーと言えば2人の願いを聞き入れず、有無を言わず追いつ返す事が可能だ。

しかし、2人の参加によってもたらされるメリットの方が大きい。何よりもあの牽引砲だ。あれを手に入れば、現状チームで最大火力の戦車を手に入れる事が出来るのだ。そして伊関と桐山は、あの大砲の扱いに慣れている。

それに、嘘を吐いたとは言え、こちらの募集条件を見た上での判断だし、こちらを頼ってやって来たのだ。まだ戦車道経験者は大地だけになるが、それは残りの時間を使って探せばいい。さつき伊関と桐山の嘘を見抜いて行った女子生徒も気になるし、もしまだ転校先が決ま

らず会場に残っているのであれば、勧誘するチャンスはまだ残されている。

「オツケー。でももう隠し事は無いよね？」

伊関と桐山の表情が一気に明るくなった。心底ホツとした事が、目に見えて分かる。

「ありません！」

「そんなじゃ、2人ともウエルカムって事で！」

「有難う御座います！」

と、2人とも礼を言ってもう1度頭を下げた。

「トラクターは豆戦車に改造出来るので、戦力は5輜になりますよ」

と、田張が塚野に言った。

「お、いいねそれ」

1日目はそうして幕を閉じ、2日目に持ち越しとなった。

あの碧眼の女子高生が転校先をまだ決めていなければ、会場のどこかで遭遇出来るだろう。

続く

チャプター6 戦力吟味

結論から言うと、合同説明会2日目は散々だった。

結局、戦車や装軌作業車との記念撮影を希望する者は多かったが、フロンティア学園の戦車道に参加を希望する経験者は、あれから誰も現れなかった。

「あの人、やっぱり他の高校に転校したのででしょうか？」

2日間に渡る合同説明会が終了し、撤収作業を手伝っていた萩原が言った。

昨日の昼休憩に出会った碧眼の少女の事だ。

伊関と桐山が偽経験者だと暴いた後、自分が戦車道経験者だという事を認めたが、戦車道への参加は拒否した…と言うよりは、戦車道に関わる事を避けているように見えたが、気のせいだろうか。

「…はあ、2日目は散々だったねえ」

塚野が折り畳み机の脚を折り畳みながら溜息を吐いた。

「でも来た甲斐はあっただろ。まさかメンバーも戦力も増強出来るとは思ってたかったぜ」

野島が言う『メンバー』、即ち大地、伊関、桐山の3人は、フロンティア学園艦に引越す準備の為、昨日の時点で先にそれぞれの自宅に帰宅していた。

荷造りが終われば、ひとまず最低限の荷物を持った上でフロンティア学園艦に先行して乗り込む手筈となっている。

引越用の荷物は、出航前の最後の貨物便に混じって学園艦に積載される予定なので、かなり大忙しの筈だ。

「…ま、あんまり贅沢は言えないよねえ」

思えば非常に幸運だったと言える。

収穫ゼロで終わる、という確率の方が格段に高かった筈だが、そのような事態だけは避けられたというわけである。

とは言え、やはりしよげているように見えたらしい。

遠くから撤収作業を眺めていた碧眼の少女は、一度背を向けて1、

2歩進んだところで立ち止まり、

「…ああもう。だから駄目なのよ、私は」

と、自嘲気味に小さく呟いたが、意を決したように塚野達の方へ身を翻した。

碧眼の少女の名前は村江カルラで、新戸学園と言う高校出身の3年生で、イタリア人の母と日本人の父の間に生まれ、苗字のカルラは母の祖母の名前が由来との事である。

「どうしてまた気が変わったんです？」

屋外ブースの撤収作業中に転校を申し入れて来た村江に、塚野はそう尋ねた。

相手は他所から来た3年生という事で、さすがに初対面からため口は躊躇ったようだ。

「結局転校先が決まらなかったし、あなた達がなんだか惨めに見えたから放っておけなくなったのよ」

「そんなに惨めだったかなあ」

「傍から見てもたらね」

「でも、これで経験者は2人だな」

と、野島が言った。「これは大きいぜ」

「ああ、あの鼻が利く子ね」

村江にはフロンティア学園の戦車道チームの現状を説明したが、その上で彼女は撤回しなかった。

ただ、大地や伊関、桐山に対してもそうだが、元々は塚野の退学回避を賭けた創設であるという事は言えなかった。大洗女子学園の活躍に影響を受け、便乗した形のチーム創設であるという説明にしてあった。

村江の気が変わった理由については、聞かないで欲しいとの要望だったので、突っ込んで尋ねるとい事はしなかった。

もしそんな事して気が変わられたら痛手だ。

翌日から、村江は大地と一緒に廃倉庫前に並んだ5輻の戦力の前に

立っていた。

まだ制服を購入していないので、元居た高校の恰好のままだが。

「この戦力、あなたはと思う？」

腕を組んで戦力を眺める村江の横で、大地は右手を腰に当てていた。

事前に話を聞いていても、いざ目の前にすると頭が痛くなってくる。

「うーん。やっぱりカヴェンターがネックですね」

「やっぱりそうなるわよね…」

すると、SPK-5の右側の転輪の1つをチェックしていた田張が振り向いた。

「一応改造で、蒸し風呂地獄になるまでの時間を遅らせてありますよ」

村江はゆっくりと息を吐きながら田張を見た。

「戦車道は長期戦になる事も多いから、蒸し風呂になるカヴェンターはその点不利になりやすいのよ。乗ってる人は大変だから」

村江にとつては、蒸し風呂地獄になる事が問題なのだ。

試合中に自滅してしまうのは好ましくない。

「いや、オリエンテーションの時は本当に悪夢だったよ…」

土橋はオリエンテーションの時の事を思い出して顔をしかめていた。

「確かに。あれはきつかったですね」

田張も苦笑しながら頷く。

彼女は特にラジエーターの過熱が直に伝わる操縦席にいたから尚更だろう。

「私もちよっと調子崩しました」

萩原も右に同じくである。

「とは言え、ここの貴重な戦力ですし…」

大地が頭を捻りながら言った：そうすれば知恵が絞り出て来るかのように。「なんとか使いこなさないと」

「そうね。でも戦車が戦車だし…」

カヴェンターの持つ悪い特性故は、他の戦車道チームも運用を敬

遠する程だ。

代わりは幾らでもあつたので、今までカヴェナントーの活用法を考えた事が無かった。

このチームは予算がかなり限られており、当分使っていくしかなさそうだった。

欠点があれば欠点があるなりに工夫すべきだが、今すぐには思いつかない。

「ただ、人数の問題もありますし、カヴェナントーは一旦棚上げでいいかと」

人員の割り振りとしては、ルノーUEが2名、ハリーホプキンスが3名、SU-100が4名、そしてカヴェナントーが1輛につき4名の、合計8名。

即ち定員を満たす為に17名が最低限必要となるが、今の人数は14名で、あと3名足りない。

そこへ塚野と野島がやって来た。

「新しい会議室の許可取れたよお！」

戦車道のメンバーが増えた事で、今までの小会議室では手狭になる為、新たな会議室の使用許可を生徒会に取りに行っていたのだ。

塚野が手にしているA4書類は、正にその申請書類だった。

因みに佐伯と鹿屋は、先日の合同説明会の報告書作成に時間を取られていて欠席だ。

「テント張りの申請は？」

と、村江が骨組みだけのテント倉庫を指差した。

いつまでも戦車を吹きさらしにしておくわけにはいかないからだ。

「凄いね。本当に生徒会から校舎設備の修繕目的で費用を出して貰える事になったんだけど」

塚野が3年生の村江に普通の話し方しているのは、村江が今後は普通に話してくれても構わないと言っていたからであり、決して塚野が非礼というわけでは無い。

「ほら、うまくいったでしょ？」

と、大地が得意げに言った。

これは村江や大地の提案で、色々と費用が掛かる戦車道で出来るだけ出費を抑える為、設備の修繕や補給物資の入手に、校則を活用した裏技を身に付けていた彼女達ならではの知恵だった。

「あと、倉庫増設の方はどうなりました？」

「うーん。こっちは駄目だった。正確には『検討する』だったけど」「それだとダメそうね…」

村江が手狭な敷地を見回して溜息を吐いた。「まあ元々狭いから、逆に増設しない方がいいかもしれないけれど…」

テント倉庫跡の面積はあまり広くない。

まだ2、3輦の戦車を収容する余裕はあるが、5輦を搬入した時点で重箱に詰め込んだような様相であった。

「んで、さっきは何の話してたの？」

「人数の話。17人必要だけど、3人足りないのよ」

村江がそう説明した時、塚野は萩原と目が合い、1人増やすアイデアが閃いた。

「そうだ。おハギもカウントしない？」

「え!？」

塚野の唐突な提案に、予想していなかったおハギこと萩原が驚愕で目を丸くした。「私に乗るんですか!？」

「そ。密着取材できるし、やったね？」

「あ、でも…勿論戦車に乗れたら文字通りの密着取材は出来ると思いますけど…」

「ヘッドセットカメラにしたら解決するだろ？」

と、いつもなら塚野に異議を申し立てる野島も、今回は塚野の意見に賛成の様子。

「え、なんか乗る雰囲気になってますが…」

冷や汗を流しながら助けを求めるように他のメンバーを見回す萩原だが、

「でもミツキちゃん。きつといい画が撮れると思うよ?」

土橋もどうやら萩原を引き摺り込むつもりのようなようだ。

とは言え、確かに手持ちカメラでは無く、頭に録画用カメラを装着

すれば、ドキュメンタリー映像を撮影出来る筈だ。

それに、傍観者ではなく、当事者としての記事は、当然質が違ってくる筈だ。

最初は不意打ちで動揺していたが、そう考えると自分も戦車に乗りながら取材するのは良いアイデアのように思えて来たし、何より、デスクの座を射止める確率が高くなるかもしれない。

「…では、割り振りはお任せします」

「うっし、1名ご案内」

「それで15名。意外と何とかかなりそうですね」

大地の意見に、村江も首肯した。

「そうね。じゃあ次はこれだけど…」

村江が話題をSPK―5に移すと、田張が車体を叩きながら説明する。

「これはSU―100に改造します。現状、こここの最大戦力になるでしょう」

村江はSPK―5の隣に並ぶ100mm対戦車砲D―10Sを見た。

田張の言う通り、SU―100はこのフロンティア学園の戦車道チームで中核となるだろう。

「黒森峰やプラウダ相手に、正面を張れるのはこれだけね」

「ハリーホプキンスとルノーUEは、索敵要員になるかと」

大地の所見に、村江も頷き返す。

「索敵で敵の居場所を先に把握して、SU―100は有利な場所で待ち伏せ：現実はその簡単に行かないけれど、まずはそんなところかしら」

「でも、そもそもの話をして悪いんだけど、練習用の敷地が無いと始まらないよね…」

土橋の指摘は一理も二里も三里もあるが、塚野や野島は「うーん」と難しそうに唸る。

「生徒会の話じゃ、もう無理かもって話なんだよねえ…」

「何とかありませんか？ぶっつけ本番では瞬殺されます」

大地の問いに、野島がかぶりを振る。

「こればかりは何か他の手を考えないと駄目だな」

「一般公開練習はどうですか？ほら、自衛隊もやってるあれです」

萩原が指していたのは、年に一度、東富士演習場で陸上自衛隊が主催する総合火力演習の事だったが、

「アウェイなのに強行したら余計に反対されると思うよ？」

と、土橋が言った。

しかし、このまま手をこまねいているわけにもいかない。

このままだと、悪戯に戦車とメンバーを持つているだけの、ただの置物チームと化してしまう。

「なんかさ…その…貸会場みたいなのって無いのかなあ…？」

塚野がなんとなしにそう呟くと、村江がポケットに手を突っ込み、

「…宮口先輩なら何か知ってるかしら」

そう言いながら取り出した携帯電話を弄る村江に、塚野が問い返す。

「…宮口先輩？」

「先輩と言っても10くらい年が離れてるけれど…」

続く

チャプター7 イズベスチャ社

3日後、塚野達は列車の中にいた。

電気機関車を先頭に、客車を数両と、フロンティア学園戦車道チームの全戦力5輛を1台ずつ積載した台車5両の編成であった。

そして作業車だったSPK―5とアレクト・ドーザーはSU―100対戦車自走砲とハリ―ホプキンス軽戦車に、非武装だったルノーUEは右座席部分に箱型戦闘室が増設され、ボールマウントに7mm機銃が搭載された豆戦車仕様に改造されていた。

田張たち機械部の功勞である。

この特別列車は、山梨県内にあるイズベスチャ社という会社に向かっていた。

村江の10年先輩、宮口恵良は塚野達に耳寄りな情報をもたらしてくれた。

彼女と同期で親友でありライバルでもあった足羽香林という人物が、政府や日本戦車道連盟が支援する戦車道人材育成企業であるイズベスチャ社を創設したばかりであり、ここに塚野達のチームを最初の教導相手として頼み込んでくれる事になったのだ。

村江の話では、宮口はサンダース高校卒業生、足羽はプラウダ高校卒業生で、試合で相対する度に砲火を交えて来た仲だったらしい。

また、萩原や生徒会広報の宣伝で、学園艦に住む一般人から10人ばかりの見学者も参加を表明して特別列車に同乗しており、今回のイズベスチャ社での訓練は、フロンティア学園戦車道の活動を理解して貰う良いイベントになるだろうと期待された。

見学者の中には、学園艦艦長である野島の祖父も加わっている。

訓練期間は2日だが、敷地内には豪華では無いが快適な宿泊施設もあり、時間や経済力が許す限り、何日でも滞在が可能だった。

「ねっむ…」

口を大きく開けて欠伸する野島の鼻先に、ブラックコーヒー入りのボトル缶が突き出された。

持主は塚野だ。

「飲む?」

「いらねえよ。余計な事すんな」

迷惑そうに軽く振り払う野島だが、欠伸をかみ殺しても歯の間から空気が漏れ出る。

「欠伸したらおじいちゃんにお叱りを受けるんでしょ?」

「いいからいらねえつつつてんだろ」

時刻は9時を回ったところだが、朝早くから行動した事もあり、今になって眠気が襲ってきたのである。

周りのメンバーはと言うと、窓際にもたれたり、背もたれを後ろに傾けた状態で眠っているが、塚野や野島は、それぞれ隊長と副隊長としての立場からか、頭がスッキリしていた。

2人の他には、村江と大地がA4用紙の束を手何か話し合っているものの、内容までは聞き取れない。

それから更に1時間くらい走ると、特別列車は漸くイズベスチャ社の敷地内に入った。

イズベスチャ社の敷地内の一部には、この特別列車の為に線路が敷かれており、鉄道経由で直接乗り入れる事が可能となっているのだ。た。

駅ではわざわざ足羽教官が塚野達の到着を待っていてくれた。

「みんな初めまして。足羽香林よ。カリンカ教官と呼んで頂戴」

「隊長の塚野スズネです」

「宜しくね」

握手をしながら、塚野はカリンカ教官の事を背の高い人だと思っ

た。それに、この前出会った蝶野教官と比べるとクールな感じだが、同時に話しやすそうな印象も受ける。

プラウダ高校の生徒は、こんな感じなのだろうか?

「恵良から聞いているわ。2日間だけど、練度向上を目指しましょう」

「はい、宜しくお願ひします」

すると、カリンカは不思議そうに塚野を見た。

「ふーん。ちよつと意外ね」

「え、何がですか？」

「いや、なんだかギヤルっぽいから、もうちよつとこう、フランクなのかなあつて思つてたんだけどね」

塚野は最初のオリエンテーション以来、化粧を最低限にしているが、やはり雰囲気は出てしまうものらしい。

「ああ、今は借りて来た猫です」

「こら、余計な事言うなし！」

野島とのやり取りを見て、カリンカは納得だと言うように何度も頷きながら笑つた。

「なるほどなるほど。確かにその方が自然ね」

そう言つた後、「それで、あなたが副隊長？」

「はい。野島カエデです」

「あなたも同じその…ギヤルっ子？」

「そんな感じですよ。自分で言うのもなんですが…」

「ノイジーも十分『借り猫』じゃん」

すると村江が咳払いをして、

「ええ、早速ですが…」

「そうね」

カリンカは一瞬で顔を引き締めた。

さつきまでの話しやすそうな印象とは打つて変わつて目つきが鋭くなり、その場の全員の思わず身を引き締めた程だ。

「では、塚野隊長。宿舎に荷物を預けたら、みんなを車庫に集合させるように。戦車はこつちで下ろしておくわ」

塚野もここは集中して、ハッキリと返答する。

「…はいー」

でない、恐らく良い結果にはならないだろうし、敢えて冒険する勇気はさすがに無かつた。

それから15分で、カリンカの指示通りに宿舎へ荷物を預けると、塚野はメンバー全員を車庫前に集合させた。

車庫は横に15棟並んだ一群が2つ、互いに向かい合っており、30輦の戦車を収容可能だった。

その内の5棟に、フロンティア学園の戦車が収容されている。

まだを5輦分を満たす人員は揃っていなかったが、ひとまず前日までに割り振りを終えていた。

「うちにもこんなのがあったらいいなあ…」

塚野がそう呟いた直後、カリンカが現れ、塚野達の前に立った。

やはりクールながらキビキビしている。

「じゃあみんな。まずは基礎訓練から始めるわよ」

カリンカは最初にそう言った。「ここを出て左に折れて、真っ直ぐ進んで行った所に練習所があるから、まずはそこまで戦車に乗って移動する事。いいわね？」

誰に言われたわけでもなく、全員が一斉に「はい！」と返事した。

乗員の割り振りは、SU-100に村江、伊関、桐山、萩原の4名、ハリー・ホプキンスに大地と土橋と五十嵐の3名、ルノーUEに佐伯と鹿屋の2名、そしてカヴェナンターは1輦目に塚野と田張と尾鷲の3名、2輦目に野島と安藤と中村の3名となっていた。

但し固定の配置では無く、車輛や役割を交代しつつ、各メンバーの適性を確かめて行く予定であった。

因みに佐伯と鹿屋は、蒸し風呂地獄になるカヴェナンターに乗る事を揃って嫌がって豆戦車を選んでいった。

エンジンを始動させると、塚野が乗るカヴェナンターを先頭に、SU-100、ハリー・ホプキンス、ルノーUE、最後に野島が乗るカヴェナンターの順番で車列を組み、カリンカが指定した練習所まで移動した。

ルノーUEを除く4輦は、操縦手を戦車道経験者や機械部が担当した事で移動はスムーズだったが、素人の2人が乗るルノーUEは列からはみ出たり、急に加速して前のハリー・ホプキンスにぶつかりそうになったりと『落ち着き』が無かった。

「ちよつと。ちゃんと運転してよ！」

「佐伯ちゃんがやってよー！」

「あなたの方が？み込みいいじゃない！」

「慣れるまでダウンロードが長いんだってー！」

その瞬間ルノーUEは急に加速したので、鹿屋は慌てて制動を掛けたが、前のハリー・ホプキンスに追突してしまった。

「ああ。やっちゃったー」

追突されたハリー・ホプキンスの砲塔のハッチが開いて、大地が心配そうな顔を覗かせた。

大地が咽喉マイクに手を当てると、佐伯と鹿屋の耳に大地の声が入って来た。

「代わった方がいいですか？」

「ああいや、ごめんね！平気平気！」

戦闘室のハッチを開いた佐伯がジェスチャーを交えて断ると、大地はまだ心配そうにしつつ砲塔内に引っ込んだ。

一方で鹿屋は佐伯に愚痴を垂れていた。

「なんで断るのー！代わりたかったー！」

「後で交代するから、我慢して」

そういうハプニングもあったが、5輜は練習所に辿り着き、そこではカリンカがT-70軽戦車の車上に立って待っていた。

いよいよ塚野達にとって本格的な訓練が始まる。

続く

チャプター8 くじ引き

泥の中でハリー・ホプキンス軽戦車が、車体を少し左に傾けた状態で動けなくなった。

「スタックしました!」

「了解」

村江はSU-100のキューポラから身を乗り出してその様子を確認していた。

大地の報告に咽喉マイクに手を触れて応答すると、

「みんな、出るわよ」

伊関、桐山、萩原があちこちのハッチを開けて出て来る中、自分もキューポラの縁に手を掛けて天板の上に立つ。

車上から村江は、停車してこちらに注目している塚野達を見た。

これからスタックした戦車を仲間の戦車で救助する手本を見せるのだ。

「あの、村江さん」

車体後部の牽引用ワイヤーを取り外しながら萩原が言った。

頭にはヘッドセットカメラをバンドで装着しており、現在も録画中だが、何とも不思議な恰好だ。

村江は萩原を見下ろした。

「何?」

「…あの中に入るんですか?」

村江は、ギョツとした表情の萩原が指差す泥濘コースを一瞥すると、平然と答えた。

「ええ、そうよ」

「嘘、足が泥だらけになっちゃうんですけど…」

そう言う伊関の足下は黒のスニーカーだ。

あの泥の中に入ればスニーカーは泥で台無しになるだろうし、恐らく足首以上も泥沼に浸かる事になるだろう。

「だから何?」

と、村江は平然と言つてのけると、自分から泥濘エリアの中に足を

踏み入れて行つた。

2、3歩進んでから、3人を振り返る。

「ほら、早くしなさい」

有無を言わせぬ口調に3人は観念して、村江の後に従つた。

それから数分後。

「あーあ。これ買つてまだ1週間なのになあ…」

後ろでカヴェンター同士のスタック救助練習が行われる中、スニーカー同士を擦りつけて泥を落とそうと悪戦苦闘しながら伊関がぼやいた。

一方の村江は、軍人が履くようなブーツを履いていたので、泥まみれではあるが『サマ』になつていた。

戦車道をやっていた時に身につけていたのだろうか。

「本当は制服とか靴も揃えたいんだけど、如何せん予算が無いのよね…」

と、村江が言つた。「補助金も取れないなんて…」

フロンティア学園戦車道は仮承認であり、その為に与えられた予算も非常に少ないので、どうにかしてやりくりしていくしかない。

ただ、今は政府が戦車道にテコ入れしている時期でもあるので、本来なら補助金の獲得が可能だし、それで予算問題を解決出来る筈なのだ、それも仮承認が邪魔している。

一応、仮承認である事は承知の上でここに転校したが…やっぱり不可解な思いにもなる。

どうしてこうも慎重なんだろう。

「ああ、かなり長いこと戦車道を設置してきませんでしたし、予算もかなり必要なスポーツなので慎重にならざるを得ないのかと…」

萩原がそう言つたが、納得出来る理由では無い。

それに、質問したわけでもないのに、なぜわざわざ回答するように発言したのか？

「補助金を獲得出来るチャンスなのに、どうしてここの生徒会はそんなチャンス逃す真似をするのかしら。私には理解出来ないわ」

「ま、まあ。生徒会に何か考えがあるのかもしれないね」

「…ひよつとして萩原さん、何かご存知ですか？」

そう不意打ちを掛けたのは大地だった。

予想もしていなかった質問に、萩原はビクツと体を震わせた。

「え、いえ。私は何も…」

「あなた、知っているわね？」

と、村江が畳みかけた。「それなら教えてほしいわ。生徒会を説得出来ると思うから」

これに萩原は、視線をキョロキョロさせながらもじもじと居心地悪そうにした。

「どうやら、自分の不用意な発言に気付いて困っているらしい。」

「そ、そんな事はありませんよ」

村江は腕を組んだ。

疑惑を深めている事は明らかである。

「報道部なのに妙ね」

「よつぽど言いにくい事情なんですか？」

「別に気にしないわよ。どんな内容かは知らないけれど」

村江がそう促した直後、歓声が上がったのでそちらに目を向けると、塚野のカヴェナンターが、野島のカヴェナンターを泥濘からワイヤーで引つ張り上げたところだった。

目の端で萩原の動きに気付き、横目で様子を窺うと、萩原の複雑そうな心境の視線が塚野に向けられているのに目を留めた。

ほぼ同時に大地と目が合ったが、彼女も村江と同じ考えのようで、互いに小さく頷き合い、無言の会話を交わした。

ただ、今は練習に集中だ。

この件は後回しでも構わない。

その後も登板やS字カーブ走行、悪路走行、砲撃訓練等、様々なメニューをこなす事で午前はあっという間に過ぎ去って行った。

横にスライドする、戦車をかたどったようなボード型の標的が粉碎されたところで12時を迎えた。

「ほほう、いい腕してんじゃん」

塚野は双眼鏡を下ろすと、右隣で今しがた100mm砲を放ったSU-100を見た。

そちらでは、村江がキューポラの前に倒したハッチに肘を乗せて双眼鏡を覗いていた。

「300m…まだまだ序の口よ」

こちらに体を向けながら平然と言つてのけた村江に、塚野は口をあぐりとさせた。

「はっ・マジっ？」

「…ちよつとは褒めて欲しいですつてば！」

砲手を担当していたらしい、伊関の抗議が通信に割つて入ったが、村江はそれを流して話を続ける。

「この主砲なら、まだまだ長射程を撃てるわ」

「え、射程距離どんくらい？」

「14000～16000mよ。まあ、1km前後が力を発揮しやすけれど」

この回答に、塚野はちよつと顎を引いて考えた後、

「…まあ、そりゃ褒められないかあ」

「隊長も酷いつてば！」

また伊関の声が抗議した。

昼食は施設内の食堂を利用した。

ポケットマネーで各々が好きなメニューを選ぶか、事前に自前で作つて来た弁当、あるいは買って来た弁当やサンドイッチ等を持ち込んで、思い思いのテーブルで暫しの休息を嗜んだ。

「えっと、午後は練習試合だったよねえ」

「チーム分けはまだだったな」

正確に言うとは車輛分けまでは決まっついていて、カヴェンター2輦から成るAチームと、SU-100、ハリー・ホプキンス、ルノーUEの3輦から成るBチームとに分かれて、チーム対抗戦形式での練習試合を行う事になっていた。

ただ、やはりカヴェエナントーがネックだった。

「でも、ぶつちやけあのサウナに乗りたがらなさそうだし…」

塚野とテーブルを挟んで向かい合って座る野島は、食堂のざるそばを摘まみ上げる割り箸の手を止めた。

つゆの入った小さな陶器には、ネギの輪切りがいくつか浮かんでい

る。

「じゃんけんでもすんのか？」

「いや、あたしじゃんけん弱いし…」

「じゃあどうすんだ？」

塚野は、野島が握る割り箸に目を留めた。

「…くじ引きにしよっかな」

「良い案ね、それ」

と、野島の隣に座る村江が相槌を打った。

午後の練習試合の打ち合わせをする為、この3人に加えて大地と田張も一緒にいた。

「…え、使い終わった割り箸を集める感じですか？」

と、大地がギョツとしたように尋ねると、塚野は頷いた。

「新品使うのは悪いしさあ。でもちゃんと半分に折るよ？」

「…であれば、まあ」

すると村江が、

「私はカヴェエナントーに乗るから、宜しく」

4人がほぼ同時に目を丸くして村江を見た。

「本当に乗るんですか!？」

と、田張が思わず声を上げたが、村江は当然だと言うように落ち着き払っていた。

「ええ。カヴェエナントーの有効活用方法を考えないといけないわけだし…」

それから塚野を見て、「と言うか、あなたも隊長ならカヴェエナントーに乗りなさいよ。なんで部下に蒸し風呂地獄を押し付けようとしているのよ?」

「いやだってさあ、あんなの乗りたくないし」

村江もそれ以上無理強いするつもりはなかったようだが、少し嫌味っぽく

「…まあ人それぞれだし、好きにすればいいわ。とりあえず、私は乗るから14本でいいわよ」

村江はそこで、最後の白米を口に運んで完食となった。

彼女はサバ味噌煮の定食だったようである。

自分の使った割り箸をその場で半分に折ると、汚れていない方を塚野に差し出した。

「はい。これを使つて」

くじ引きの結果、こうなった。

Aチームは村江、塚野、安藤、中村、鹿屋、伊関の6名、Bチームは、野島、土橋、萩原、大地、佐伯、桐山、田張、尾鷲、五十嵐の9名となった。

しかし蒸し風呂を味わうのが嫌でごねる者が出る。

「うわーん、ユキネちゃん。くじ譲つてよ」

「何言ってるのよ、決まりは決まりでしょ」

今にも泣きそうな顔でくじの交換を懇願してくる鹿屋に、佐伯は突き放すように言うのと、

「そんなく酷い。この前仕事代わつてあげたのに。この裏切者！恩知らず！」

と言う鹿屋の反論に、思わず言葉が詰まってしまった。

「う…ま、まあ…あれは…一応感謝してるわよ」

「ここで借りを返してよ」

「今度そうしてあげるから、我慢しなさいよ」

そう言つて何とか蒸し風呂地獄行きから逃れようとする佐伯だったが、鹿屋は尚もごねてきた。

とうとうすすり泣くような声で訴え始める。

「ぐすん…ユキネちゃん、本当は感謝なんかしてないでしょ。自分だけ良かったらそれでいいでしょ。他の人の事なんてどうでもいいんだよね」

佐伯は喉の奥で唸ったが、観念したように鹿屋の手から『当たり前』のくじをもぎ取り、自分のくじを鹿屋に突き出した。

「ほら、分かったわよ。私が乗るから、もういいでしょ」

途端に今にも泣きだしそうだった鹿屋の顔が、嘘のように晴れ渡った。

「やったー！ユキネちゃん愛してるー！」

「ちよっ…マジでやめてよ！離れてってば！」

飛びついて抱き着いてきた鹿屋を無理矢理引き離そうともがく佐伯。「誰か助けてよ！」

少し離れた所では、塚野が野島と土橋にくじの交換を交渉していた。

「あ？駄目に決まってるんだろ」

「私も嫌かな…」

野島と土橋は、友人の頼みを切り捨てた。

それもその筈だ。あの蒸し風呂地獄の経験は、乗った者にとっての生涯のトラウマだ。

ただ、チームで最初にそれを経験したのは他でも無い塚野であるわけだが…

「…ねえノイジー、ツツチー」

急に改まったような口調の塚野に、野島と土橋は首を傾げた。

「ん？」

「どうしたの？」

「友達って…何なんだろうね…」

「ごちやごちや言ってるねえで乗れってんだよ」

塚野が投げかけた哲学っぽい話題を、野島はそう言って無理矢理終了させた。

こちらは交換交渉に失敗したのであった。

機械部の5人の方は、カヴェンター乗車を賭けたじゃんけんを行い、最終的に田張と五十嵐の2人が蒸し風呂地獄に乗り込む事になっ

た。

伊関と桐山もじゃんけん勝負をして、こちらは結果が覆らなかった。

そんな様子を傍観していた村江が、溜息交じりに言う。

「みんなよっぽど乗りたくないのね…」

「かなり痛い目を見た感じですよ…」

ひきつった苦笑を浮かべる大地に、隣でカメラを回していた萩原がうんうんと相槌を打った。

自分はカヴェナンターを免れたからか、幾分リラックスしている様子だ。

「そりやもう…一度あんなの経験したら二度と乗りたくありませんよ」

「やれやれ…」

「あの、村江さん。私、塚野さんとくじを交換してきましたよ？」

塚野は凄くガツカリした表情で自分の当たりくじを見つめているので、大地はその姿が不憫でならないらしい。

だが、村江はキツパリと止めた。

「駄目よ。互いのチームに経験者がいないと、フェアじゃないでしょう？」

「それは、そうですが…」

「ここは、心を鬼にしなさい」

その後、塚野は萩原にくじの交換を嘆願したが、やはり断られてしまったのだった。

一応、ヘッドセットカメラのレンズが曇って撮影しづらくなる可能性と、温度にやられて壊れてしまう恐れがあるという理由づけはしたようである。

続く

チャプター9 練習試合

さて、なにはともあれチーム編成が終わった塚野達は、くじの割り当てに従って戦車に乗り込み、チームごとに足羽教官の指定ポイントに移動した。

試合形式はどちらかが全滅すればゲームセットとなる殲滅戦で、互いのスタート地点は知らされている。

「一同、礼！」

足羽教官の号令で、向かい合って立つチーム同士が、

「宜しくお願ひしますー！」

と言いながら一斉に頭を下げ、その後は各々の持ち場に戻って試合開始の合図を待った。

村江や大地を除けば、練習とは言え全員が初めての本物の試合形式を経験する事になる。

それから程無くして、足羽の声がスタートを告げ、合図の砲声が大きな演習場に響き渡った。

ここは本格的な練習試合が可能な面積を持ち、起伏のある平原や山地があり、一角には模擬市街地が配置されている。

「出発！」

Bチーム隊長を担当する野島の号令で、横一列に並んでいた3輛の戦車が一斉に前進を開始した。

「ひとまず、Aチームのスタート地点に向かきましょう」

と、ハリーホプキンスの車長を務める大地がそう提案した。「偵察にルノーUEを派遣するのがいいでしょう」

「オツケー。鹿屋広報」

「なんですかー!?!」

鹿屋は機銃座の配置についており、ルノーUEの操縦はしていない。

今回操縦しているのは、不愛想な尾鷲である。

「あたし達より先に進んで、Aチームのスタート地点へ偵察に向かつて」

すると、鹿屋から思いもかけない言葉が返って来た。

「えー機関銃でどうしろってんですかー!？」

「…あ?」

野島は一瞬、信じられないという風にルノーUEを見やり、再び咽喉マイクに手を触れた。

相手は3年生だが、こちらはBチームの隊長だ。

冷やかに返答する。

「偵察だっつってんでしょ。誰が攻撃しろっつたんすか?」

「うう、本当にどうなつても知りませんよー?」

野島は痙癢を炸裂させて声を荒らげた。

「早く行けっつってんでしょーが!」

「わわっ、分かったってー!」

やっとルノーUEは命令に従って、SU-100とハリホプキンスから離れてぐんぐん前に出て行った。

「うーん。やっぱり私が行った方が良かったのかなあ?」

悩む大地だが、確かにハリホプキンス軽戦車でも偵察は十分に務まるので、ルノーUEでは無く、自分達が偵察に行くという選択肢もあった。

だが、万一カヴェンターと接近遭遇した場合、固定砲塔のSU-100は不利だ。

幾ら蒸し風呂地獄のカヴェンターと言えど、回転砲塔と持ち前の機動力を活かせばSU-100を追い詰められるだろうし、弱点狙撃をされればおしまいだ。

そしてAチームには、自分よりも経験値が高い筈の村江がいるのだ。

もし、彼女の乗るカヴェンターを相手にする事になれば、より上記の危険性が増す。

蒸し風呂地獄か、戦車そのもののオーバーヒートを警戒してあまり動いていないという可能性はあるが、本当にそうするという保証はどこにもない。

かと言って、ルノーUEを護衛に残しても殆ど役に立たない。

鹿屋も言っていたが、あの車載機関銃でどうにかなるわけがない。だからこそルノーUEは、その小柄な車体を活かした隠密偵察がお似合いだが、それはまた別の機会に学ぶ事になるだろう。

回転砲塔が無いSU-100を単独で残すというリスクは、大地には取れなかったのである。

「止まって」

と、砲塔から上半身を出している村江がそう言うと、今しがた発進したばかりの2輻のカヴェエナントはガクンと前のめりに傾いてから元の姿勢に戻ってストップした。

スタート地点から、ほんの10mしか離れていない。

戦車道では、試合開始の合図で一度走り出さねばならないというルールがあり、最初から発進を待つ事をしなかったのは、その理由からである。

さて、村江は地図を広げて何か考えているようだ。

「どうすんのお？」

隣のカヴェエナントの砲塔から、やはり上半身を出している塚野が尋ねた。

「本来なら偵察を出して、相手の動向を探るのが定石だけど、カヴェエナントでは負担が大きいわね」

「でも待ってるわけにもいかないじゃん？」

「だから、移動するポイントの候補を選んだわ。あとは隊長のあなたが決めてちょうだい。地図、あるわよね？」

「あるよん」

塚野は、村江が持っているものと同じ地図を開いた。

「ここから北西に1キロ進んだ先にある模擬市街地に行けば、少なくとも正面戦闘は避けられるわ。射程距離の不利もカバーしやすい」

土地の起伏の影響で今いる場所からは見えないが、地図では確かに模擬市街地がある事を示す

すマーカーが記されていた。

「1キロかあ…」

「遭遇するまで操縦手以外は外に出ていてもいいかもね…乗り心地は良くないと思うけれど…」

「んまあ、暑さにやられるよりはいいか…んで、他の候補地ってあんの？」

「東に700m進めば小高い丘があるわ。頂上に陣取って、上から撃ち下ろす作戦が可能よ。ただ、SU-100の射程距離にアドバンテージがあるから、一方的に狙撃されるわ」

村江の言う通り、東に視線を転じると、緩やかな勾配の小さな丘が見える。

丘の周囲は平原で、どこから接近してきてもすぐに発見出来るだろう。

「あつちにはアワビがいるから、その可能性はあるね」

と、伊関が村江の意見に同意した。「私より100mm砲の扱いがうまいから」

「うーん…でも、丘の上に行けば、動かなくていいって事っしょ」

「それはそうだけど…」

村江は迷っている様子だが、あくまで隊長は塚野である事を忘れない。「どっちにする？」

塚野はもう1度地図を見下ろし、西の模擬市街地と東の丘を交互に見た。

「…おっし。丘から撃ち下ろしで」

「了解」

村江のカヴェナントーが最初に右に転回し、前を横切るのを見ながら塚野のカヴェナントーも方向転換して、右斜め後から続いた。

「ちよつと、どいてくれない？」

塚野の足下に、砲手兼装填手を担当する佐伯が顔を覗かせた。

「ああ、めんごめんご」

軽い口調の後輩に、佐伯は一瞬ムツとした表情になったが、やれやれと首を振りながら傍をよじ登って砲塔の上に出た。

「あーもう。やっぱり代わらなきや良かったなあ…」

佐伯は、鹿屋の泣きつきに負けてくじの交換に応じた事を後悔して

いた。

「えー。意外と優しいって思ったのになあ」

「ただのお人好しよ」

と、佐伯は素っ気なく応じた。塚野には背を向けて、周囲にBチームの戦車が現れないか見回している。

ルノーUEは長く曲がりくねった林道を抜けた。

この先を更に進むと、Aチームのスタート地点がある筈だ。

「敵はいますか?」

と、尾鷲の短く乾燥した質問に、

「まだ見えないよー」

鹿屋は開いた銃座のハッチから顔を出して、双眼鏡で前方を見回していた。「尾鷲ちゃんはどう思うー?」

「知りません」

「素っ気ないよー」

「何がですか?」

と、その時。

鹿屋の目の端で動くものを捉えた。

ハツとしてそちらに双眼鏡を向け、左上に少し動かすと一瞬、2輛のカヴェナンターを追い越した。

「いたいたー!」

「2 輛ともですか?」

「正解! 丘を登ってるねー」

「追いかけます」

尾鷲は素早くルノーUEの針路を、2 輛のカヴェナンターの方へ修正した。

地図を全て把握していたらしく、丘という単語を聞いただけで、方向が分かったようだ。

「撃たれないように気を付けてねー」

「分かっています」

それから数秒走らせた後、「ところで、報告はいいんですか?」

「…あ」

鹿屋は慌てて回線を開いた。「こちら鹿屋！Aチームを見つけてましたー！」

「場所は？」

と、野島の声。

「えっと、丘に登ってるよー！」

「地図の東側にある小さな丘ですか？」

大地の緊張しているが冷静な声が確認してきた。

「んーと、そうだと思う！」

「はい。その丘です」

鹿屋の曖昧な応答を、尾鷲の断言が補足した。

「市街地に行くかなって思ってたんですが…」

と、大地が考え込む表情で言うと、ハリーホプキンスの操縦を担当している土橋が質問した。

「市街地だと有利になるんですか？」

「射程距離が関係無くなりますからね。こつちにはSU-100がありますから」

「でも、敢えて丘に行つたと…」

野島はそう言った後、「ああ。多分、なるべく中に乗っていたくないんだろうな…」

土橋も同意する。

「確かに。スズネちゃんなら考えそうだね」

「だろ？」

それから野島は、全車に「丘まで前進」と告げた。

丘へと近付いて行くルノーUEに、野島からの通信が入った。

「こちら野島。敵の射程距離外から監視を続行せよ」

「ええっと、了解」

通信を切ると、「ねえねえ。2ポンド砲の射程距離ってどれくらいだったかなー？」

質問を受けた尾鷲は、面倒臭そうに溜息を吐くと応答する。

座席が隣り合っていないなくて、心底良かったと思った。

「撃たれなければ問題無いかと」

「それもそうかー」

「ねえ、なんだかだらけていないかしら？」

試合の様子をライブ配信する空中ドローンのカメラを通して、野外設置の大型モニターに映し出された丘上のカヴェンターの様子を見ながらフロンティア学園からの一般見学者の女性が眉をひそめた。

ちやうど空中ドローンのカメラは、車外に出て涼む塚野達の姿を捉えていた。

その女性の後ろに座っていた初老の男性が、理由を説明する。

白髪交じりの頭と、よく日焼けした褐色の肌、そして屈強そうな逞しい体つきをしている。

「あの戦車はどうやら、時間が経つと蒸し風呂状態になるらしいですよ。だから外にいるんでしょ？」

女性は、その初老の男性に振り向いた。

「そうなんですか？野島船長」

野島と呼ばれた初老の男性は頷いた。

「孫から聞いた話なので、間違い無いでしょう。それに、私も実際に調べてみて、あの戦車…カヴェンターがそういう性質を持つ戦車である事が分かりましたぞ」

「ああ、そう言えば野島船長は孫が戦車道に参加したから見学に参加されたのですか」

「ええ。目に入れても痛くない、とは正にこの事なのだ、と実感しておるところです」

「目標確認！」

双眼鏡で丘上のカヴェンターを確認した大地が叫んだ。「既に100mm砲の射程圏内です！」

「よっしゃ。100mm砲の威力を思い知らせてやるか」

そうほくそ笑む野島だったが、大地が注意事項を付け加える。

「あ、でも。確か弾数は34発なので、無駄撃ちはしないで下さいね」
「なに、一発必中で行ってやりませう」

と、何故か安藤が気合いを込めて言った。「まあ、あたしは操縦手なんですがね」

「砲の扱いならお任せあれです!」

桐山は、装填手の萩原に顔を向けた。「装填して下さい!」

「はい!」

予め徹甲弾を抱えて待機していた萩原は、素早い動作で装填作業を行った。

今もヘッドセットカメラは、作動中である事を示す小さな赤いランプが点灯している。

「敵戦車発見!11時方向より接近!」

砲塔の上に立って双眼鏡を回していた田張の報告に、村江が乗車を促す。

「みんな乗車して!砲撃が来るわよ!」

塚野達は慌ててそれぞれのカヴェンターに潜り込んだ。

ハリーホプキンスが加速して、SU-100より先行した。

「こちらはそのまま丘に向かいます。そちらは狙撃で私達を援護して下さい!任意のタイミングで砲撃してOKです!」

「あいよ」

大地の言葉に野島はそう応じると、「ストップ!」と命じ、SU-100は速度を落として停車した。

ハリーホプキンスはそのままSU-100を後に残して、Aチームが陣取る丘に向かってぐんぐん進んで行った。

「攻撃準備!…って、なんか初めて言うぜ」

野島が気分を高揚させる中、SU-100は主砲の仰角を上げて、丘の頂上に照準を合わせ始め、やがて砲の動きがピタリと止まった。

「ターゲット、ロックしました」

と、桐山が砲撃準備完了を報告する。

「フアイヤー！」

続く

チャプター10 燃えよ！カヴェナンター

唸りを上げながら飛んできた100mm徹甲弾は、塚野車と村江車の正面5m程手前に着弾し、その衝撃が車内を揺るがした。

「うわっ！」

「す、凄い衝撃……！」

村江車の中で、田張と伊関が思わず首をすぼめた。

まきあげられた土や砂利の音が天板に落下したらしい、バラバラという音が頭上で鳴り響く。

大口径弾がもたらす大音響や振動は、今回の練習試合が初めての経験なので、動揺しても不思議ではない。

そんな二人を見て村江も、初めて戦車に乗り、練習で砲撃戦を交わした時の事を思い出したが、その時の反応はやはり二人と同じようなものであり、なんとなしに懐かしさを感じたのだった。

「落ち着いて。やられたわけじゃないわ」

冷静な口調でクールダウンを促した村江は、着弾時も怯まずに頭を出していた。

さすがは戦車道経験者だけあって、こんな事には慣れっこの様子だ。

「村江さん、バックしていいですか？」

田張がそう聞いてきたが、村江は

「ちよつと待って」

と言いながら双眼鏡で一度正面の様子をざっと確認した。

最初にSU-100を見ると、長大な100mm対戦車砲D-10Sを小刻みに動かして照準を調整している様子が見て取れた。

それから手前が見えるよう倍率を下げると、丘に向かって来る2台の戦車が見えた。

「ルノーは右から接近して下さい！こちらは左から接近します！」

大地の指示に従って、ハリーホプキンスとルノーUEは左右に広がり始めた。

ハリーホプキンスはこちらから見て右から、ルノーUEは左から回り込んでくるつもりだ。

ルノーUEは機関銃しかないので、カヴェナンターにとって厄介なのはハリーホプキンスだ。

乗っているのは、恐らく大地だろう。

それから村江は、左にいる塚野車を見た。

「そっちは大丈夫!？」

さっきの攻撃で動揺しているとまずいと考え、声をかけたのだが、予想外の反応が返ってきた。

「すっごいじゃんー！これ最高じゃね!？」

ハッチを開いて顔を覗かせた塚野の表情は、実際動揺とは真逆の、興奮で高揚しているように見えた。

「それ本気で…」

佐伯が塚野を見上げた直後、SU-100が第2弾を放ち、今度は塚野車と村江車の間に着弾した。

「さっきより近い…いい腕してるわね」

そう呟く村江に対し、塚野は

「うっひょおーもつと撃ってこーい！」

と、完全に有頂天状態である。

変わった反応だが、ひとまず隊長としての適正はありそうな気がする。

が、このままでは危険だ。

「少し後退。3発目が来る前に」

「本当ですね」

田張が待つてましたとばかりに操作の腕を動かして村江車を4m程度後退させると、塚野車もそれに倣って村江車と同じぐらいの距離を後退させる。

できればSU-100に直接反撃したいところだが、生憎敵は2ポンド砲の有効射程外、1km以上先にいる。

「隊長、私が指示するのもあれだけど、お願いがあるわ」

「何なりとどうぞぞ！」

「左から回り込んでくるルノーを撃破して。ハリーホプキンスはこっちで食い止めるから」

「でもSU—100はどうするの？」

塚野は意外と平静さを取り戻すのが早いらしい。

これは頼もしい限りだ、という感想を村江は抱いた。

「後で始末するわ」

「オツケー！」

「敵が奥に引きました。どうしますか？」

桐山が照準器から目を離しながら、野島に指示を仰いだ。

「ここに居ても仕方ねえってことだよな……」

そう呟くが、相手がこちらにまた姿を晒して来た時の事を想定すると、やはり動くべきではないのではないか、という考えも頭をよぎる。

こちらは2ポンド砲の影響を受けない優位な距離から砲撃しているので、接近するとその優位を捨てる事にもなる。

まあ、正面装甲は厚めなので、よもや簡単に白旗を上げるような事態にはならないと思うが、SU—100は固定砲塔の対戦車自走砲だ。

側背面に回り込まれると一瞬で主砲の能力が封じられてしまう。

実際のところ、どちらが正しいか判断はつかないが、野島としてはここでじつと構えているのは性に合わなかった。

「こちら野島。こっちも前進する」

対する大地の返答は予想していた制止では無かったが、ちよつと考えたようで、一瞬の間があった。

「…了解。敵はもう射線に入っていないでしょう」

「おっし。前進だ」

「合点できあー！」

安藤の応答と同時にエンジンが一声唸りを上げると、SU—100は前進を開始した。

「丘を登り切ったら、敵戦車同士の間割って入りながら煙幕を展張してください！」

「まじですかー!?!」

機関銃のグリップを握りしめる鹿屋の視線の先には、こちらに砲口を向けるカヴェンターの姿があった。

丘の上から狙われているからなのか、酷く圧迫感を感じる。

グリップを握る手に、更に力が入った。

「もうちよつと車体を動かして！」

「はい！」

2ポンド砲の狙いをつけている佐伯の注文に従って、中村は車体をもう少し左によじらせた。

緊張のせい、車内の温度が急激に上昇したように感じる。

佐伯は左手の甲で額の汗を拭った。

照準器の中では、横切るように移動するルノーUEを捉えていた。

塚野からは、任意のタイミングで射撃しても良いと許可されている。

砲塔を少し回し、照準点を未来予測点に置く。

やがてルノーUEの小柄で背の低い車体が射線に入り…

「発射！」

が、2ポンド砲から弾丸は飛び出さなかった。

「何?!:不発?!:」

塚野が困惑した口調で問うが、佐伯も何が起こったのか理解出来ていなかった。

その間にルノーUEは塚野車の射線から完全に逃れ、更に数メートル進んだところで土を飛び散らせながら左に急転回すると、斜面をよじ登り始めた。

村江車から発射された砲弾がハリーホプキンスのすぐ後ろを掠め、相手に回避行動を取らせた。

「くっそー!外した！」

「落ち着いて狙って！」

舌打ちする伊関に、村江はそう声を掛けながら次弾を装填した。

装填手が不足しているので、村江がその代理となり、伊関には砲撃に集中して貰っているのである。

「当たれ！」

伊関は再び発砲したが、今度は前方を掠めたのであった。

「うわ！近いですね！」

五十嵐が目の前を通過していった砲弾に驚いて、思わず声を上げた。

「こっちも負けてられないよ！」

土橋が砲塔を回しながら叫ぶ。「返り討ちにしてやる！」

「停止射撃は出来ませんよ！」

「構いません！」

しかし案の定、こちらも明後日の方向に外した。

「…あ…」

佐伯は不発の理由をすぐに突き止め、そのとんだ凡ミスに思わず間の抜けた声を上げた。

ただでさえ暑くなってきた車内で、佐伯の体が恥ずかしさでカーツと熱くなった。

鏡があれば、自分の顔がみるみる朱に染まっっていく様子が見られないに違いない。

「どしたの？」

「ごめん！装填し忘れてたわ！」

「え、ちよ、マジ!？」

塚野の焦る声を頭上に受けつつ、佐伯は大慌てで砲弾をラックから引き抜こうとするが、汗で手が滑って思うように手が掛からない。

しかしどうしてこんな簡単な事が頭から抜けていたのだろうか。

そんな事を考えているとどうしようもなく自分に腹が立ち、内心自分を罵りながら佐伯はやつと砲弾を引っ張り出して装填に取り掛

かった。

「ルノー、こっちに向かって来ます！」

中村が注意を促した直後、豆戦車の機関銃が火を噴き、無数の銃弾がカンカンとカヴェンターの車体を叩いて火花を散らした。

弾丸を体に食らっては洒落にならないので、塚野は思わず車内に体を引っ込めた。

その代わり、こっちも同軸機銃の引き金に右手の人差し指を掛ける。

隣では、まだ佐伯が装填作業を行っている。

「撃たれたら撃ち返すんじゃあ！」

塚野車の機関銃も応戦し、互いに銃弾のシャワーを浴びせ合いする形となった。

「ひやあ！撃ち返してきたよー！」

鹿屋が悲鳴を上げて、思わず引き金から人差し指を放した。

狭い箱型戦闘室だと銃弾が当たって跳ね返される感触が、なぜか肌で感じられて嫌な鳥肌が立ち、顔が冷や汗に覆われるのだった。

「大丈夫なので撃って下さい」

と、尾鷲が冷淡に言った。

彼女自身も頭を保護するドーム越しに銃弾が当たる音を聞いている筈なのに、鹿屋とは対照的に平気なようだ。

「あと、いちいちリアクションが大げさだと思います」

「そんな事ないってー！」

そう反論しながら、鹿屋は機関銃を構え直して射撃を再開した。

夢中になって撃っていると、カヴェンターの砲塔が思い出したように再び動き出し、今度こそこちらに狙いを定めた。

が、佐伯は装填忘れの動揺からまだ立ち直っておらず、焦りからスコープの中心がルノーUEのギリギリ頭上に向けられた状態で発射してしまった。

徹甲弾は操縦手を保護するドームのてっぺんに引っ掻き傷を作っ

ただけで、ルノーUEには命中せず、その後ろの地面に食い込んだ。
「外したわ！」

佐伯の動揺が余計に広がったのを見て取り、塚野も漸く自分が装填手を兼任する事を思いついた。

「ノープロブレム！次！」

そう佐伯を励ましながら2発目を砲尾に押し込む。
しかし時すでに遅し。

「うわーな、何これ！」

中村の声に顔を上げ、潜望鏡越しに外の様子を伺うと、視界全体が真っ白になっていた。

村江が後ろの気配に気付いて振り向くと、ちょうどルノーUEが後部から白煙をもくもくとふかしながら横切っていくのが見えた。

塚野車と村江車の間に白煙のカーテンが仕切られ、互いを視認出来なくなってしまう。

咽喉マイクに手を触れる直前、佐伯の動揺した声が耳に入ってきた。

「すみません！仕留め損ないました！」

原因を聞く前に、村江は分断された状況をどうにかする方へ思考を集中した。

「そっちに合流するから待ってて！」

「え、どうやって…」

塚野の疑問を無視して、村江は田張に命じる。

「真つすぐバック！急いで！」

「りよ、了解！」

田張も困惑しつつ、村江の言われた通りにした。

ハリーホプキンスの砲弾が砲塔を掠めたところで煙幕の中に後ろから飛び込み、長く感じられる2、3秒の後、煙幕の向こう側に出た。

見回すと、右側に塚野車がいた。

「一体何があったの!？」

「砲弾を装填し忘れていて…それで対処に遅れました…」

佐伯は言いにくそうにしつつ、しかし真相を正直に話した。

あそこでヘマをやらかしていなければ、恐らくこうはならなかっただろう。

すると、直後に塚野の声が割り込んだ。

「ああ…それ、あたしが確認してなかったから…」

「何言ってるのよ、私の責任でしょ」

「隊長は私だし」

「それより、ここから降りた方がいいわね」

村江の言葉で現状に話題が戻った。

「降りる？」

「ここはもうダメ。丘の上という優位は失われたわ。すぐに行動しない」と

しかし、相手の対応は予想以上に早かった。

塚野車の向こうに、丘の斜面を回り込みながら頂上まで登って来たハリーホプキンスの姿が見えた。

「目標確認！」

土橋が叫びながら、スコープ越しに手前のカヴェナンターに塚野が乗っている事を認めた。「あ、スズネちゃんだ！」

「停止！手前のカヴェナンターを盾にしてください！」

五十嵐は言われた通りにした。

これで村江車は、間にいる塚野車が邪魔でこちらを攻撃出来ない。

「土橋さん、今です！」

「はい！」

土橋は既に横っ腹を晒している塚野車に狙いをつけており、あとは撃つだけだ。

塚野車の砲は反対側を向いており、こちらに砲塔を回し切るまでに仕留める時間はたっぷりとある。

「バック!!」

ハリーホプキンスが停止した瞬間、塚野はそう叫んでいた。

どうして咄嗟にこの命令が出たのかは分からない。

ただはつきりしていた事は、後退すれば村江車に射線を通せるという事だ。

中村もすぐ命令に応じてカヴェンターを後退させ、レールの上を滑る門のように村江車に射線を開いた

村江も塚野車の行動の意図をすぐに察し、狙いをつけていた。

対するハリーホプキンスは、遠近感が急に変わったのですぐに反応出来なかった。

村江のカヴェンターが先に発射し、砲弾は被弾経始を考慮して斜めに構えた車体正面ではなく、垂直に構えられた砲塔正面の右側に命中した。

ハリーホプキンスはその衝撃で少し身を震わせた後、力無く白旗を上げた。

「ナイスショットオー！」

と、塚野が両手でガッツポーズを取った。

「すぐに後退してくれて助かったわ」

村江も塚野の判断を労うと、「次はSU-100を仕留めるわよ」

「ルノーは？」

「後回しでいいわ。機銃だから撃ち合いでは怖くないから」

村江はそう言いながら、額の汗を拭った。「それにしても早く決着を付けないと」

「ですね…」

伊関もハンカチを取り出して目の周りの汗を拭き取る。「そろそろしんどいです」

田張の方は、顎の先から汗の滴をポタポタと床に垂らしながら、辛うじて蒸し風呂地獄を耐え忍んでいた。

「すみません、やられましたー！」

大地からの通信を聞いた野島達は、少なからず動揺した。

残るはSU-100とルノーUEだが、ともに撃ち合えるのはSU-100だけで、おまけに心強い経験者を失った。

そして相手には、まだ経験者が生き残っている。

「ど、どうしますか…?」

と、萩原が野島を見た。

野島は体を包みつつある動揺を押しつけるように唸る。

「どうもこうもねえよ。やるしかねえんだろやるしか」

やがて丘の上に、姿を消していた2台のカヴェナントアが姿を現した。

最初はSU-100の主砲を警戒していたのに、今は堂々としていく。

まずい事に、SU-100は大地達と合流する為にかなり前進しており、丘の麓まで100mと迫っていた。

そして見てみると、2台のカヴェナントアは左右に広がるように丘を駆け下り始めた。

こちらを左右から挟撃するつもりらしい。

さながら獲物を狩ろうとする捕食動物のようだ。

「おいルノー、今どこだ!?!」

その頃ルノーは、丘の頂上に戻って来たところだったが、2台のカヴェナントアがSU-100目掛けてまっしぐらに突っ込み出した直後の事だった。

因みにハリーホプキンスがやられた事は、無線で聞いて把握している。

「おいルノー、今どこだ!?!」

野島の呼びかけに鹿屋が応答する。

「丘の上だよー!」

「援護してくれ!カヴェナントア2台に襲われてるんだ!」

尾鷲がルノーUEを移動させ、SU-100を見下ろせる位置でアイドリングさせた。

眼下には、逆八の字を描くように左右に広がりながらSU-100に迫る2台のカヴェナントアが見えた。

「こちらの事はガン無視ですね」

と、尾鷲が言った。

「うわー。舐められたもんだねー」

「で、どうします?」

尾鷲は相変わらず淡々と喋り続けているが、実際のところ、どう行動すべきかを決めなければならなかった。

ただ、鹿屋にもどうすべきかは判断しかねた。

しかし行動しなければならぬ。

機関銃を構え直して叫ぶ。

「突撃ー!」

「分かりました」

ルノーUEも、カヴェナンターの後を追って丘を駆け下り始めた。

「えっと、どうするつもりなんでしょう?」

と、スコープ越しにルノーUEの行動を見た桐山が困惑気味に言った。

「…まあ、いいだろ…って、それよりこつちがやべえんだわ」

2台のカヴェナンターは、尚も左右に広がりながら丘を下り切り、いよいよSU-100への間合いを詰め始めた。

「どっち狙うんでさあ?」

と、安藤が聞いた。

SU-100は無砲塔戦車だ。

主砲は限定旋回式で、その可動範囲外を狙うには車体を旋回させなければならぬが、そうすると反対側の敵に接近する隙を与えてしまう。

そのリスクを承知の上でやるしかないわけだが…

「…右からやるぞ」

「右ですな」

安藤はSU-100を右に回した。

このカヴェナンターは、左側のと比べて幾分距離の詰め方が早かった。

よって、一番近いこちらから対処しようというわけであった。

SU—100から見て右から迫るカヴェンターは村江車だった。
「…狙われてます!」

田張の目が緊張で見開かれる。

蒸し暑さによる息苦しさが、余計に締め付けられるようだ。

「大丈夫。向こうからしたら、斜めに動いている敵は狙いにくいから」
「いつ勝負をかけるんです?」

汗まみれの顔をハンカチでふきふき伊関が息も絶え絶えに尋ねた。
もうすっかりハンカチは汗を十分に吸い込んで濡れ雑巾のようになっっている。

「もう少し間合いを詰めてからよ」

それから塚野に連絡する。「隊長。準備はいい?」

「いつでも!合わせるよお!」

「了解」

村江は潜望鏡でSU—100の動きに注視し始めた。

「もう少し右!」

「あいよ」

桐山の指示に従い、安藤はまた少し右旋回させた。「これくらいでさあ?」

「十分です!」

照準を針路の先、つまり未来予測位置に置いて:「発射!」

「今!」

村江がそう言った瞬間、田張は車体を右へ急カーブを切った。

読み通り、同じタイミングで放たれた100mm弾は空振りに終わったのであった。

しかしここで村江車が限界を迎えた。

右に急カーブした直後、だしぬけにエンジンが咳き込むような音を立てながら黒煙を噴き上げ、よろめきながら完全に停止すると白旗が上がった。

エンジンがオーバーヒートを迎え、走行不能の判定となったのである。

「…自滅しましたね」

桐山が野島を見ると、野島は安堵のため息を吐いていた。

呆気なかったが、これで挟撃は免れた。

「よし、あと1輦か…」

SU-100が塚野車に向き直っている横で、村江車からオーバーヒートした3人が命からがら這い出て来て、向こう側に転がり落ちて行った。

「うわ、形勢逆転じゃん」

塚野はそう呟いたが、同時に他人事ではなかった。

こちらのカヴェンターも、いつエンジンが断末魔を上げるかわからないし、自分達もいつまでサウナ状態に耐えられるか…と言うより、今すぐにでも脱出したかった。

しかしその前にSU-100とルノーUEを倒さねばならないのだ。

幸い、ルノーUEは後ろを追いかけてきているので探す手間は省けたが。

「どうします!?!」

中村が聞いてきたが、やり直しは利かないので、答えは1つだ。

「そのまま突撃!」

ぐんぐんSU-100に迫る。

SU-100は車体を尚も旋回させており、距離を詰めに入った事で旋回半径が狭くなったこちらに砲口を向けつつあった。

「撃て!」

野島の号令で桐山は100mm砲を発射した。

弾丸は確かにカヴェンターの通過点と交差していたが、着弾は車体の真下の地面であり、その衝撃でカヴェンターは一瞬浮き上がった。

たものの撃破とはならなかった。

左履帯から接地したカヴェナンターは小刻みに蛇行した後、再び一直線に走り出し、そのまま車体を右に傾けながら急旋回してSU—100の10m程真後ろで急停止した。

それから砲塔が回りだし、不利になってもこちらに砲を向けようと車体を回すSU—100の戦闘室真後ろに照準を合わせた。

「…貫ったわ」

佐伯がそう言った直後だった。

照準器の中を爆走するルノーUEが横切ったかと思うと、そのまま白の世界に塗り潰されてしまった。

武器が機関銃だからとノーマークだったルノーUEが、丘の上でした時と同じように煙幕を張ったのだ。

今度はカヴェナンターとSU—100の間を仕切ったわけだが、おかげで照準感覚が狂ってしまった。

「くそっ、とりま撃てえー」

塚野の命令に従って発砲したが、手応えが無い。

ついさつきまでそこにSU—100がいた筈だが、今の一瞬で射線から逃れたのだろうか？

佐伯の隣で、塚野が弾薬ラックから次弾を引き抜いて砲身に押し込む。

「オッケーー！」

塚野が装填完了を告げた直後、何かが砲塔に当たる『ゴン』という鈍い金属音が車内に響いた。

「…何？」

佐伯が首を傾げる中、塚野は砲塔ハッチを押し開けて外に顔を突き出すと、音の正体に気付いて口をあんぐりさせた。

「あ…」

細長い金属の棒が、塚野車の右斜め前方から伸びてきて砲塔に突き付けられている。

「どうしたの？」

と、佐伯が声を掛けて来たが、塚野の耳に入っていなかった。

棒の根本に向かつて視線をゆつくりと辿らせていくと、薄れていく煙幕の中にぼんやりと浮かび上がる角ばったシルエットが目に入った。

そのシルエットは紛れも無く、今正に仕留めんとしていたSU—100だった。

こちらが煙幕に困惑している間に旋回を終え、しかも運良く塚野車の居場所を煙幕の中から突き止めたようだ。

まるでピストルを頭に突き付けられたような感覚だった。

「で、何なの？」

佐伯が苛立たし気な口調で尋ねながら塚野の後ろから出て来たが、彼女もSU—100の存在に気付いて言葉を失った。

SU—100側も、塚野や佐伯がこちらを見ている事に気付いたらしい。

キューポラのハッチが開いて野島が顔を覗かせた。

「…チェックメイトだな」

「ねえノイジー」

「ん？」

「降伏してもいい？」

野島は顎を引いてちよつと考えたが、

「…この前吹っ飛ばしといてよく言えるな」

それはオリエンテーションで野島の乗るカヴェナンターを、塚野車が接射で吹き飛ばした時の事だった。

野島が手を振った。

「あばよ」

瞬間、塚野と佐伯は穴の中に逃げ込むウサギの如く車内に頭を引っ込めるのと、SU—100が接射で塚野車を弾き飛ばした。

高速でスピンしながらカヴェナンターは向こう側へと吹っ飛び、最後に小さな岩場につまずいた事で横転してから白旗を上げた。

「…私、吹っ飛ばされたのこれで二回目なんだけど…」

塚野の上に仰向けに折り重なった佐伯がそうぼやいた。

SU-100の右横に戻って来たルノーUEが停車した。

「ナイス援護だったぜ」

それぞれの戦闘室から出て来た鹿屋と尾鷲に、野島はサムズアップして見せた。

その上空に、空中ドローンが滞空する。

「Aチーム、残存車輛無し。よって、Bチームの勝利！」

判定係のカリンカ教官が野島チームの勝利を告げると、観客席の見学者達から、自然に拍手が湧き上がった。

〈第2話・終〉

第3話 初陣

チャプター1 黒森峰女学園

まだエンジンから黒煙が燻っているカヴェナンターを、背中合わせにワイヤーで繋げたT-34戦車回収車が引つ張っていく光景を横目に、村江は上から差し出された田張の手を借りてGMCトラックの荷台によじ登った。

このT-34戦車回収車は戦中生まれの作業車輛で、田張達が保有していた戦後生まれのSPK-5とは違う車種である。

壊れていない方、塚野が乗っていた方のカヴェナンターも、別のT-34戦車回収車に牽引されていた。

「…おつかれえ…」

トラックの運転手から差し入れされたスポーツドリンク入りのペットボトルのキャップを外しながら、塚野がカヴェナンターの乗員達に労いの言葉を掛ける。「マジで死にそうだったよねえ」

「もう勘弁してください…」

田張が結露まみれのペットボトルを額に当てながら言った。「ホント死にそうです…」

運転手が荷台後部の仕切り板を固定して運転席に戻ると、程なくしてエンジンが始動して走り出した。

その際に吹き付ける風が、蒸し風呂地獄で汗まみれになった体に心地よい。

思わず塚野達は「ホッ」と安堵の溜息を吐いた。

「まずはシャワーね」

村江はそう言うと、冷えたスポーツドリンクを一刻も早く体内に流し込もうとがぶ飲みし始めた。

「あー、シャワー最っ高ー！」

熱々のシャワーをたっぷり顔面に浴びた田張の歓喜の声が、風呂場に反響する。

宿舎には戦車道の練習を終えた人間が汗を流し、リラックス出来る大浴場が設けられていた。

「リナ、補充の制服の手配は？」

「ああ、ちゃんとやってきたよー」

広い浴槽の一角では、遅れて風呂場に入って来た鹿屋が佐伯の隣に腰を下ろしていた。

今回の合宿では、各々2着分の制服を持参していたが、余分が必要だという考えから佐伯は鹿屋に国崎会長へ制服の追加を送って貰うよう依頼させていたのである。

本来は佐伯の仕事だが、カヴェナンターの蒸し風呂地獄でほとんど消耗し切っていたので、まだまだ元気だった鹿屋に引き受けて貰ったというわけだ。

「生き返るねー」

「ホント、生き返る」

お湯は体中に沁み渡って心地よく、その疲れも徐々に抜け出て行く感覚がした。

「あ、そうそう。ついでに会長も明日来るよー」

「え？忙しいだろうに…」

「なんか直々に訪問したいんだってー」

その2人の左斜め前方では、村江と大地が今回の練習試合について話し合っていたが、シャワーを終えて浴槽に歩いてくる塚野と野島を目の端に捉え、そちらに顔を向けた。

「あ、隊長、副隊長」

「普通に名前で呼んでくれていいよお」

そう言う塚野に、野島が

「そもいかねえだろ」

と、反論するが、大地が

「じゃあ、スズネ隊長、カエデ副隊長でも宜しいですか!？」

「もう全然オツケー!」

「なんであたしも巻き込んでんだよ」

塚野と野島は、村江と大地の近くでお湯に足を踏み入れた。

「お呼びのご用件は？」

塚野の問いに、村江は最初に「うん」と頷いた。

「今日の練習試合だけれど、みんな筋は悪くなかったと思うわ。特に、ルノーの2人がMVPね。私も実は…所詮豆戦車だと侮っていたわ」それを聞いた鹿屋が拳を突き上げた。

「イヤッホー！褒められちゃったー！」

「大袈裟過ぎ…」

と、鹿屋のリアクションに慣れない様子の尾鷲がボソツと呟いた。

「ただ…」

村江が塚野に言った。「声掛けはもっと意識した方がいいわね」

丘の上でルノーUEに煙幕を張られて一時的に分断された時の事だ。

村江は冷静に対処したが、ハリーホプキンスを牽制する事に集中していたので不意打ちに近かった。

「そうでないと、丘を捨てる事態にはならなかったかもしれないから。結果論だとは分かっているけれど、チームの情報共有は必要よ」

「うん。気を付けるよお」

「まあ、こっちも気を配るべきだったと反省してはいるけれど…」

「でもでも、凄い戦いだっただよね」

と、土橋も肩から下を水面の下に沈めた状態で4人の所に合流してきた。「今書いてる漫画の参考にしようかなあつて」

「あ、そうだ、タイトルって決まったの？」

塚野が聞くと、土橋はまだ納得が行ってなさそうに首を傾げながら

「一応、『タンク・ウィズ・ガールズ』にしようかなって」

「なんだか、『ダンス・ウィズ・ウルブズ』みたいですね」

と、大地がケビン・コスナー主演の1990年公開のハリウッド映画のタイトルを言ったが、

「あ、実はそれをもじったものなんだ」

と、大地はその映画タイトルに影響を受けている事を認めた。「でもどうも納得出来なくて…他にいいタイトルがあったら、それにしようかなあつて。まだ発表は先の予定だし…」

「んまあ、思いついたら提案すっかなあ」

「タイトル募集中だから待ってるよ」

その後も塚野達は心行くまでお湯につかり、明日に向けて英気を養った。

「ふう、サツパリしたあ」

宿舎に向かう廊下を野島や土橋と一緒に歩きながら、塚野が気持ち良さそうに大きく伸びをした。

替えの制服なので、馴染みの制服にも関わらずスッキリして新鮮な着心地だ。

「でもなあ、カヴェナンターを使い続けたものか、ちよいと考えどころだよな」

右を歩く野島も蒸し風呂地獄を経験しているからこそ、その言葉は一考の余地があるものだった。

大地は有効活用法を探ると言っていたが、どうするつもりか皆目見当がつかない。

「また明日も頑張らないとね」

と、野島の更に右を歩く土橋が言った時、後ろから呼び止める声があり、振り向くとカリンカ教官が見知らぬもう1人を伴って歩いて来るところだった。

カリンカよりやや背が高く、髪型はカリンカのミディアムに対してこちらはボブだ。

「お疲れ様。今日は大変だったわね？」

練習の時には厳しい一面を見せていたカリンカだったが、オフの時は初対面直後にも見せていた、とても柔和で親しみやすさが出ていた。

フレンドリーで、それでいてどこか豪快だった蝶野とは違う印象を受ける。

「あ、まあ…あれは…」

それでも練習の時のイメージがまだ脳内に残っており、塚野は慌てて伸びの姿勢を解いたが、もう1人のボブヘアが笑いながら、

「まあまあ、今は肩の力抜いていいからいいから」

そう言いながら塚野や野島、土橋の肩を、まるで昔からの友人かのように親し気にポンポンと叩いて回った。

その様子を見たカリンカが呆れたように、

「エラ、初対面なのに慣れ慣れし過ぎるわよ」

「エラって確か…」

塚野はそう言っただけですぐに思い出した。「あ、ひよつとして…宮口…

エラ…さんですか…!?!」

村江カルラの10年先輩、宮口恵良はウィンクしながらニツコリして見せた。

「That's collect!! カルラちゃんがお世話になってるようね。感謝してるわ」

「は、はじめまして…」

「宜しくね!」

塚野達と熱のこもった握手を交わすエラを見ながらカリンカが首を振った。

「…全く、サンダーズ時代から変わってないわね」

最後に土橋と握手すると、エラは肩をすくめながらカリンカに首を振り向けた。

「カリンカだって全然プラウダの時から変わってないじゃない」

「どこがよ」

「ワーオ。無自覚なのね」

カリンカはまたまた首を振り振り話題を変える。

「…まあいいわ。ところで、呼び止めたのは別の要件なの。明日、うちのアグレッサチームと黒森峰女学園の練習試合があるんだけど、見学する?」

「え、黒森峰が来るんですか!?!」

塚野は驚いて思わず目を丸くした。

「きつといい勉強になるわよ」

と、エラも誘った。「まあ、私はアグレッサーじゃなくて見学だけ」

因みに明日も今日と同じように基礎訓練と練習試合をこなすメニューになっているが、強豪校の黒森峰女学園とアグレッサチームの練習試合の見学は、違った学びをフロンティア学園にもたらずに違いない。

「どうする、隊長？」

野島が塚野の判断を仰いだ。

「個人的には見学したいかなあ」

と、土橋が意見として述べたが、塚野も既にどうするかを決めていた。

「はい、見学します」

「All right! そうなこっちゃー！」

「なんであなたが返事してるのよ」

悪びれずにカリンカに振り替えるエラ。

「ええ？だって私だってこの子達をあなたに紹介したんだから、言う権利あるでしょう？」

「…はいはい」

カリンカはそう軽くスルーすると、再び塚野達を見た。「じゃあそうと決まったら、明日のスケジュールを調整するから、夕食の後でいから事務所に寄ってちょうだい」

「分かりました」

エラが右手首に付けた腕時計を見た。「もうすぐ黒森峰が到着するけど、どんな戦車が来るか、見に行ってみない？」

黒森峰女学園の戦車を積載した列車が近づいて来るにつれ、次第に荷台の上の戦車が何れも巨大でパワフルな外観をしている姿が見て取れるようになって来た。

「やばそう」

そう呟いた塚野に、野島は

「デブいとか言ってたか？」

「あんだけいたら逆にびびっちゃうよお」

田張整備工場で見た時は3輦だったが、今回は只事では無い。

3 輛どころか、ざっと見ただけでも10 輛以上が確認できる。

ティーガーI、ティーガーII、パンター、ヤークトパンター、IV号
駆逐戦車…

「すっげえ。マジで鋼鉄の猛獣じゃん」

「お前にしてはまともなセリフだな」

「いつもまともだし」

塚野と野島の言い合いをよそに、土橋が感慨深げに呟く。

「…昔はあれが何百台もいたってことだよね…」

それに対し、カリンカが簡単に説明した。

「ティーガーIの生産数が大体1350 輛、パンターの生産数が大体
5900 輛。他の車種は…ちよつとど忘れちゃったわ」

「凄い数ですね…」

目を丸くする土橋に、カリンカは意味ありげにニッコリ微笑んで見
せた。

「フフ。でもね、旧ソ連のT-34は終戦までに57000 輛近く生
産されたのよ…あ、これ終戦までの話で、戦後も生産は続いているわ」
「え…」

その圧倒的な数字に口をあんぐり開いた土橋を見ながら、エラがゲ
ラゲラ笑った。

「凄い数よね。シャーマンの約50000 輛よりも多いんだから」

「そ、そっちも多いですけど…」

「まあね〜」

そうこうしているうちに、列車が減速しながら駅に停車し、暫くし
て客車部分から黒を基調としたパンツァージャケットを着用した黒
森峰女学園の戦車道チームメンバーがぞろぞろと下車してきた。

最後に出て来た2人組のうちの1人が塚野と野島に気付いて
ちよつと手を挙げて見せると、塚野と野島も小さく手を振り返した。

「知り合いか？」

彼女の動きに気付いた隊長らしき人物がそう尋ねると、

「はい隊長。この前、田張整備工場に行った時に会いました」

「そうか」

「それにしても、パンター2輦の整備が遅れて冷や冷やしましたよ」
「まあ、カールの砲弾だから仕方あるまい」

整列した黒森峰チームの前にカリンカが歩み出て行く中、塚野が聞こえないように小声で、

「ふむふむ。あの隊長、なかなか愛想が無さそうだねえ」

そのような感想を述べた塚野の尻を野島が強くつねった。

「ぐえ」

「あの人が西住まほ隊長ですよ」

土橋の解説に、塚野は「あー」と、大きく頷いた。

「動画で見たあの子かあ」

「お前嘘でも後輩だろ」

「ノイジーもそうじゃん…っていった…！」

また野島が塚野の尻を強くつねったのだ。

「お望みなら野島先輩って呼ばせるぞ」

痛みの追い打ちに顔を歪めながら体をよじる塚野の様子に気付いた何人かの黒森峰の隊員が、不思議そうにこちらを見てきたが、知らぬ顔で通した。

こうして黒森峰女学園の戦車道チームがイズベスチャ社に到着したのであった。

続く

チャプター2 励まし

「いやあ、やばそうな戦車ばっかだったねえ」

宿舍の一室の二段ベッドの下で、両手を枕に寝転ぶ塚野が言った。この部屋は4人部屋で、塚野の他に野島、土橋、萩原が同室者である。

二段ベッドは部屋の左右に1つずつ、壁際に設置されており、塚野は部屋の出入口から見て右の方を使っていた。

「あんなチーム相手に勝てるのでしょうか？」

部屋の奥の窓際の机の椅子でヘッドセットカメラの記録映像を確認している萩原が言った。

脇には『予備バッテリー&SDカード』と書かれたラベルが貼られたプラスチック製の小箱が置いてある。

向かい側の席には土橋が座ってラップトップコンピューターを開いており、その後ろに立つ野島が画面を覗き込んでいる。

黒森峰女学園に関してフリー動画サイトで出回っている映像を見ており、タイトルは『第63戦車道全国高校生大会決勝戦／大洗女子学園vs黒森峰女学園』となっていた。

「…火力と装甲に物を言わせてるよね…あ、ヘツツァーが乱入してる！」

「ほうほう、隊形を崩されたな」

「聞くところによると、黒森峰は隊列を組んだ砲撃戦を得意としていますが、崩されると弱いみたいです」

「でもさあ」

と、塚野が身を起こしてベッドから下りた。「それって簡単には行かないっしょ」

野島がモニターから塚野に目を転じた。

「てか隊長のお前も見ろよ」

「えー、この前見たし」

「今も見ろ」

「ほーい」

塚野も野島と並んで試合映像記録を見た。

映像はちょうど大洗チームがポルシェティーガーを先頭に高地の斜面を駆け下って敵中突破を成し遂げるところだった。

投稿主の編集で試合映像は飛び飛びになっているが、それでも試合経過を確認するには十分だった。

「今日の練習試合ってこれをまねたのか？」

「まあ、そんなところ」

塚野がそう答えた直後にドアが2回ノックされた。

「隊長、ちよつといいかしら？」

ノックの主は村江で、開いてみると大地も一緒に立っていた。

「エンジンがお釈迦です」

開口一番、カヴェンターの後部の上で身をかがめていた田張はそう言いながら、作業用手袋をはめた右手で額の汗を拭いた。「パーツを交換しないと再起不能ですよ」

今日の練習試合で野島が車長を務めていた方のカヴェンターだ。車庫に運び込まれた後、田張たち隼高校組がエンジンや車体前部の冷却系統の様子を調べてくれたのだが、おかげで風呂上がりにも関わらず、田張達は顔が煤やオイルで汚れ、体全体が汗まみれになっていた。

「けどよ……」

野島が言った。「そこまでして直す価値あんのか？」

この問いに全員が言葉に詰まった。

カヴェンターの蒸し風呂地獄を一度味わうと、また直して使いたいかと聞かれると即答出来ない。

それでなくとも、試合中にオーバーヒートを起こされる心配をしなから乗らなければならぬ義理は無いというものだ。

本当は替えの戦車が欲しいところだが……

「でも他の戦車を買う予算無いなんだよねえ」

「やっぱりパーツを交換した方がいいのでしょうか？」

と大地が言うと、土橋が

「え、乗りたくないな」

「だよな」

「で、隊長。結局どうするの?」

村江が塚野に最終判断を仰いだ。

「うくん…やっぱ後で修理すつかな。なんだかんだ貴重な戦車だしさ」

「じゃあ、その方向で」

「なんだかジレンマですな」

と、安藤が言った。

「世の中、あんな代物もあるものなんですね」

田張がそう言いながらカヴェナンターから飛び降りる。

「よし、また風呂だー!」

幾分疲労の色を顔に浮かべた中村が、自分を奮い立たせるようにスパナを持った手を突き上げた。

「二度風呂めんどくさい…」

そうぼやく尾鷲の肩を、五十嵐がポンポン叩いた。

「まあまあ。そのままだと部屋汚しちゃうから」

「分かってますよ」

本日二度目の入浴に向かう田張達と分けられると、塚野は自販機で何か買って来ると言って野島達とも分かれた。

横に3台並んだ自動販売機の内、2台がドリンク、1台がカップ麺や総菜パンといった軽食を売っていた。

缶コーヒーを買ってから正面玄関に戻ってくると、外に出て夜風に当たりながらタブを押し上げて開封した時、

「あ、君」

左から声を掛けられてそちらに顔を向けると、あの『愛想が無さそうな』黒森峰の隊長と副隊長のエリカが立っていた。

多分、車庫で自軍の戦車を見回っていた帰りだろう。

西住まほ隊長を駅で見かけた時も静かな迫力のようなものを感じたが、こうして対面してみると、何故か自分が隊長として相応しいの

かどうか、内心疑問を抱く思いであった。

やや圧倒されてしまったらしく、塚野は

「あ、こんばんは…」

と返答するのが精一杯だった。

相手の緊張を見て取ったのか、西住まほは表情を和らげた。

「そう硬くならなくていい。エリカから話は聞いている。君がフロンティア学園…だったか？の隊長だね？」

「は、はい…」

まほは「うん」と頷くと、

「ちよつと話をしないか？嫌だったら…」

「え、そんな事ないですよー！」

どうしてその返答がすぐに出たのかは自分でも分からなかったが、まほ同様に相手に対する興味があつたのだろう。

エリカが確認するように言う。

「隊長、最終打ち合わせは…」

「なに、長話するわけでもあるまい」

「そうですね」

その後、5分くらい立ち話をしたが、田張整備工場でのエリカとの出会いや、塚野がそもそもどうして戦車道を始めたのかという話題がメインであった。

さすがに退学回避の為に戦車道を始めたという事は口に出さなかったが、それでもフリー動画サイトで見た大洗のIV号戦車と黒森峰のティーガーI重戦車の最終決戦を見て大きな影響を受けたという事自体は本当だったので、理由付けとして十分だった。

そのティーガーIに乗っていたのがまほである事は分かっていたので、ちよつと遠慮がちに説明したが、まほ自身は特に気分を害した様子が無かった。

「ああ、あれは」

と、まほは逆に懐かしむように言った。「完敗だったな。そうか、もう1か月以上前か」

「来年こそは優勝したいです」

「3連敗は避けたいところだろうな」

「でも隊長不在になるわけですよね。なんだか不安です」

「私はそういう風にお前を育てた覚えはないぞ」

するとエリカはハツとして背筋をしゃんとした。

「は、はい！申し訳ありません！」

それからまほは、塚野の目にもエリカと似たような不安の色があるのを見て取った。

「君も不安そうだな」

「そりゃ…自問自答しちやいますって。なんか、隊長として相應しいかどうか…」

「相應しくなるように頑張るしかないな」

エリカは他人事ではないらしく、その言葉にちよつと縮こまっている。

「いや、その…西住さんのような人を見てたら…」

「私は回答の1つに過ぎないさ」

塚野は意外そうにまほを見た。

まほは言葉を続ける。

「私はあくまで、西住流を体現する、一人の人間だ」

西住流という言葉は、ここ最近で塚野も知った言葉であった。

一度目を通したが忘れてしまったそのモットーを、まほは淀みなく口にする。

『撃てば必中、守りは固く、進む姿は乱れなし。鉄の掟。鋼の心。これが、私の戦車道よ』

「西住さんの…戦車道…」

まほは塚野の目を覗き込むように言う。

「ああ。同じように、エリカにはエリカの戦車道。塚野さんには塚野さんの戦車道。そして、あなたはフロンティア学園の隊長としてチームを引っ張っていかねばならない。あなたの戦車道で」

「わ、私の…戦車道…」

塚野の口の中はすっかりカラカラに乾いて掠れ声になっていた。「そうだ。まだ形になっていないようだが、これから作っていけばい

い。胸を張って誇れる、あなたの戦車道を」

まほの静かな励ましに、塚野の心の内で新たな意欲が湧いてくる感じがした。

「…はい…」

まだ声は掠れ気味だが、その返事は決意に満ちたものであった。

夜が明けると、イズベスチャ社の車庫は黒森峰チームの最終準備で慌ただしくなった。

履帯、サスペンション、転輪、エンジン、冷却系統、砲塔旋回装置等、各所のチェックに砲弾の積載作業、潤滑油の注入に燃料計のチェックといった様々な作業が手早く進められたのであった。

「隊長、全車コンディションOKです」

自分が座乗するティーガーI重戦車の砲手から何事か報告を受けた直後のまほに、エリカがそう報告した。

「よし。全員を乗車させろ」

「はい」

エリカは一度その場を辞そうとして、再びまほと向かい合った。

「隊長」

「なんだ？」

「昨夜の隊長の言葉、私も力付けられました」

「ああ。エリカも頑張れ。今度は君が黒森峰を引っ張って行くのだからな」

その重みにエリカは一瞬硬直しそうになるが、声を出す事で恐れや圧迫、緊張を撃退する。

「はい…」

今度こそエリカが離れて行くと、まほは黒の略帽を被り、左手で押さえながら左右にちよつと回して頭にフィットさせた。

同じ頃、塚野達は見学席で試合開始を今や遅しと待っていた。

今日は追加の制服を連れの生徒会員と一緒に持参した国崎生徒会長も一緒だ。

「なんだか面構え変わったかしら?」

塚野にそう声を掛けて来たのは佐伯だった。

「え?」

「急に引き締まったというか…キリっとしたというか…」

昨夜の事は話していなかったが、まほとの話は、やはり塚野の中で大なり小なり何かしらの変化をもたらしていたらしい。

しかしとぼけて見せる。

「あー。気のせいじゃない?」

「ふーん?」

佐伯は疑わし気な表情をしながら塚野の前を横切ると、国崎の隣に座った。

「佐伯さん、調子はどうですか?」

「はい…意外と仲良くやっています」

「それは良かったです」

それから2人は、暫し無言で観客席前の大型モニターに映し出される黒森峰女学園戦車隊がスタート地点まで移動する様子を見ていた。

沈黙を破ったのは国崎だった。

「私は塚野さんの成功を願っています。あなたはどうですか?」

「いやまあ…確かに頑張ってるとは思いますが。それは認めます」

「おお、一歩前進ですね」

国崎は語を継いだ。「ところで、昨日見学に参加した女性から私に電話があったんですが、敷地の提供と義援金の寄付を検討してもいいと言ってきてくれましたよ」

佐伯は驚いて国崎に顔を向けた。

「え、そんな事が…!」

「はい。多分、直接生徒会に話を通そうと思ったのかもしれませんが…佐伯さんが参加している事は知らなかったみたいです。話してみたら向こうもびっくりしていましたよ」

「…なんかちよつと悲しいです」

「少しずつ進展しているようで何よりです」

「その件、塚野には伝えたんですか?」

「いえ。野島船長に言って貰う事にしました」

国崎は塚野の方を見た。

佐伯も視線を追うと、孫を挟んで座る野島船長が塚野に何か話しており、それに対して塚野の表情が明るくなっているところを見ると、どうやら佐伯が今しがた知った情報を野島船長が塚野に教えたらしかった。

「よし。じゃあ戦力拡張できんじゃん」

「人が足りねえのが問題だな」

と野島が言うと、祖父が

「まあまあそう焦りなさんな。1つずつ何とかしていけばいいさ。全部いっぺんにやろうとするとしんどいぞ」

その直後、萩原が観客席の前に設置された大型モニターを指さした。

「あ、始まりますよー！」

モニターではちょうど黒森峰女学園のチームメンバーと、イズベスチヤ社のアグレッサチームのメンバーが向かい合って立つところが映し出されていた。

程無くして試合開始の前の挨拶が行われたが、今回の審判長は蝶野教官だった。

「一同、礼！」

両チームが一齐に「宜しくお願いします！」と頭を下げた後、どちらもキビキビした動きで反転して持ち場に向かった。

全員が戦車に乗り込むと、1分後に試合開始のアナウンスが鳴り響き、両軍の戦車隊が一齐に前進を開始した。

続く

チャプター3 黒森峰女学園 V S イズベスチャ社

この練習試合は殲滅戦ルールであった。
殲滅戦ルールが基本となるプロリーグを睨んだ練習試合なので、このようになつていた。

黒森峰は南東から、イズベスチャ社は北西からスタートしている。
「うん。修理は問題ないみたいでよかったよかった」

観客席に座る田張工場長が、観戦用大型モニターに映る黒森峰のティーガーIIやパンターを見ながら、満足げに何度か首を縦に振つた。

昨日は来られなかったが、昨夜の黒森峰チームを乗せた列車に便乗してやって来たのである。

聞けば、どうやら黒森峰から、もう一つ仕事の依頼があつたらしい。
「もう、パパったら自信もつと持つてよ」

娘の言葉に父親は恥ずかしそうに頭を掻きながら、
「いやあ、万一エンストでも起こしちゃったら、うちに仕事来なくなっちゃうからね。そうしたら明日の飯に困っちゃうだろ？」
「まあ、そりやそうだけど」

一方、進軍する黒森峰女学園チームでも、田張親子の会話と似たようなやり取りが行われていた。

「赤星、パンターの調子はどうだ？」

「はい隊長。問題なく動いています！」

「よし」

赤星との交信が終わると、次はエリカに尋ねる。

「エリカ、そっちはどうだ？」

「快調です。さすがは田張整備工場ですね」

「ああ。技術と経験値の積み重ねといったところだな」

そう応じながら、西住まほ隊長は双眼鏡で右に広がる森をサツと右から左へなぞるように見回した。

エリカはそれ見て一度地図を確認し、

「右折ポイントはあと1km先です」

「分かっている」

ちよつと首を傾げて隊長の考えを推測すると、

「…敵も同じ手を使つてる可能性ですか?」

尚も双眼鏡を覗きながら、まほは小さく頷いた。

「ああ。向こうはこちらより機動力がある。それでいて火力持ちだ。奇襲は食らいたくない」

その森を挟んで進軍中のイズベスチャ社アグレッサーチーム。

「こちら前方偵察隊。会敵予想地点に到達しましたが、未だ黒森峰の姿は見えません」

「了解。指示あるまでその場で監視を続行せよ」

「了解。監視を続行します」

一端偵察に先行させたT-44中戦車との通信を閉じると、IS-3重戦車に座乗するカリンカは半開きの地図に手を添えた。

彼女のIS-3の左右には、2輜ずつのIS-3、周囲には14輜ものT-44が隊列を組んで足並みを揃えて走っていた。

どちらの戦車も旧ソ連製で実戦には投入されなかったが、T-44は戦後ロシア主力戦車の設計に大きな影響力を与えた中戦車で、IS-3はその防御力を考慮して多用された曲面や傾斜装甲と強力な長砲身122mm砲で、当時のアメリカや英国といった西側諸国を驚かせた重戦車である。

「模擬市街地に向かったのでしょうか?」

左方手前を走るIS-3に座乗する田村真美子がそう言ったが、

「…うーん。あり得なくはないけど…」

カリンカは得心が行かぬ様子で、無線機を取ると、「後方警戒、右翼の森の向こうを偵察せよ」

イズベスチャ社の戦車隊は、本隊の前方だけでなく、後方にも警戒用のT-44を配備していた。

こちらにも1輜で、後方から不意打ちしようとする敵を発見する役割を担っている。

後方警戒のT―44が命令を受領すると、再び田村が口を開いた。

「…敵はこちらとすれ違うタイミングで方向転換して、こちらの後方に回り込む形で横槍を入れるとお考えですか？」

カリンカはゆっくりと頷いた。

「ええ、あり得るわ。それを今から確かめるのよ」

「こちら3号車、敵戦車隊を発見！」

Ⅲ号戦車J型からの報告は、右折ポイントまであと600mに差し掛かった時であった。

Ⅲ号戦車J型は、途中まで黒森峰本隊と進軍した後、単独隊列を離れて森の中へと消えて行き、互いに「直進」した場合の会敵予想地点が見える場所まで来ると、そこで茂みに身を潜めていた。

少し前に、イズベスチャ社が前方索敵に放った1輦のT―44も見しており、その情報から、まほはアグレッサーチームがこちらの居場所を類推し始めたと分析していた。

問題は、相手がどちらに注意を向けるか、だが…

「敵の針路は？」

と、まほがⅢ号戦車の車長に尋ねると、

「針路変わらず」

「…迷っているな」

「こちら側にいるか、北東側にコースを取っているか、ですね？」

エリカが言うと、まほは首肯した。

「ああ。だが感づかれるとまずい。予定を変更して、森を突っ切るぞ。敵が索敵方向を変える前に」

「了解」

エリカは周囲の味方を見回しながら森の方へ右手を振った。「全車右折！森の中を突っ切るわよ！」

突然の方針変更にも動じず、熊本県の強豪チームは1つの生き物のように隊列を右に転じて森に向けた。

まほは再度地図を確認しながら、

「この分だと、敵部隊の真横につけるな」

「こちら後方警戒。敵部隊を発見。全車右折して森に向かっています！」

「そこね」

カリンカは右手でガッツポーズを取った。

続いて後方警戒車輛からもたらされた位置情報から、このまま進むと黒森峰がこちらの真横から攻撃を入れられる位置取りになると分かった。

「こちらも相対して迎撃しましょう」

と、田村が意見具申したが、カリンカは地図を眺めながら、

「北東に転進」

「え？」

「敵はどこかに索敵車輛を配置して、こちらの動きを監視しているわ。だからタイミングよく方向転換したのよ。そしてその索敵車輛は巧妙に擬装していて、こちらも簡単には発見出来ない。となれば、逆手に取るわ」

「…では、模擬市街地に向かうのですか？」

「ええ。でも市街地には入らない。ちよつと考えがあるわ」

カリンカは無線機をオンにして、「前方偵察隊…」

「え、北東に？」

Ⅲ号の報告に、エリカは首を傾げた。

部隊は今しがた、森の中に入ったところであり、悪路の中を進軍するので進行速度は少し鈍っていた。

ただ、黒森峰チームはこういった悪条件のコース走破訓練もみっちりこなしているので、極端に遅くなるという事は無い。

「敵は…我々が北東にいると踏んだ…？」

「ふむ…」

まほは敵の行動を吟味した。

相手は社会人チームで、しかもアグレッサーチームだ。

当然、こちらの居場所を少なくとも二通りは考慮する筈で、それら

の候補に素敵車輛を送り込んで確認してもおかしくない。

が、相手はそうする素振りも無く北東に転進した。

その先には模擬市街地があるが…

「我々が模擬市街地に陣取ると考えたのでしうか？」

「否定はしないが、根拠としては薄い。我々はこちらから市街戦を仕掛けるという事は無い。よもや市街戦を想定したとしても、まずそこに我々がいるかどうか、先遣隊を派遣する筈だが…」

そう言ってからまほは、結論に辿り着いた。「敵はこちらの居場所を掴んでいるという事が…」

「え!？」

エリカが目を丸くしたが、

「そうとしか考えられん」

「じゃあ、敵の行動は陽動、という事ですか？我々を釣り上げる為の」
「あり得る。逆に市街戦に誘い込もうとしているとするなら、どうだ？」

「なるほど、確かに」

「だが足の速さは向こうの方が上だ。Ⅲ号に追跡させて、位置情報を常に把握させよう」

そう言うのと咽喉マイクに手を触れ、「隊長から3号車へ。敵に見つからないよう追跡しろ。位置を常に把握しておきたい」

「3号車、了解!」

通信を切ると、まほは一人呟いた。

「森を抜けるまでに、どれだけ引き離されるか…」

「市街戦に誘い込む気でしょうか？」

「プラウダの引き込み作戦を狙っているという可能性は確かにあるわね」

村江の疑問に、宮口も一定の同意をしつつ、「でも、どうもそんな気はしないわ」

「どこかで反転して、仕掛けると?」

「そう。やられた事あるのよ」

それから5分が経過した。

黒森峰戦車隊は既に森を抜け、増速して平原を走っていた。

「こちら3号車・T-44にやられました!」

追跡中のⅢ号戦車からの悲報に、エリカが思わず声を上げた。

「え、どういう事!?!見つかったの!?!」

「いえ…偵察車輛にやられました…」

「本隊に合流すると見せかけて、Ⅲ号を探していたらしいな」

と、まほが結論付けた。

「そんな、こちらは目を失ったも同然です!」

「狼狽えるな。突発的な遭遇に備えるぞ」

「敵部隊、坂まで4分!」

尚も森の中から黒森峰の動向を探っていた後方警戒T-44から報告を受けると、カリнкаは部隊を見回した。

「攻撃準備」

そして4分後、黒森峰戦車隊は坂を上り始めた。

勾配は全体的に緩やかだが、重量級の戦車が多い黒森峰にとってはこれでさえ速度が遅くなる。

しかし、この坂を越えれば模擬市街地まではまた平原続きである。双眼鏡で周囲を見回したエリカが、

「…現れませんね」

「…やはり市街地で待ち伏せか…」

全く仕掛けて来る気配を見せないアグレッサーチームに、まほも本当に敵は市街戦に誘い込もうとしているという可能性を考慮し始めた。

指揮を執るカリнка教官は、元プラウダ高校生徒である。

プラウダ高校戦車道チームは、相手を引き込む戦術を得意としているので、カリнка教官もプラウダの戦術を使うつもりなのか。

やはり疑念が残るまほの耳に、エリカのイライラしたぼやきが入

る。

「…鬱陶しい坂ね。早く終わらないかしら」

その瞬間、まほの脳内に直感の警報が鳴り響いた。

「…全車！迎撃態勢！」

その直後、轟音と共に坂の向こうからT-44の集団が現れた。

黒森峰の隊列の左右に広がるように坂を駆け下って包囲網を完成させていき、あっという間に一番先頭を走る車輛が背後まで回り込んで退路を断ってしまった。

監視役の後方警戒T-44から逐一送信されてくる情報を元に、カリンカは一斉攻撃の機会を窺い、一気に仕掛けたのだ。

包囲完成の時と同じくして、黒森峰の真正面に立ちはだかるようにカリンカの乗るIS-3が現れた。

「固定砲塔の履帯を破壊せよ」

カリンカがそう命じると、T-44部隊の主砲が次々と火を噴き、信地旋回でT-44の隊列に向き直ろうとする固定砲塔戦車の履帯を次々と破壊した。

カリンカの狙いは、まず固定砲塔戦車の履帯を破壊して動けなくさせる事で、反撃能力を削ぐ事であり、履帯を切られて旋回出来なくなった車輛は、無防備に晒した側面に徹甲弾を受けて白旗を上げて行った。

黒森峰側は今のところは撃ち返してこないが、隊列は崩れていない。

さすがは強豪校といったところか。

「こちら17号車、履帯を破壊されました！」

ヤークトパンターに続いて四号駆逐戦車から悲痛な通信が入り、まほは敵の作戦をすぐに理解したが、同時に反撃を命じる。

「各車、手近な車輛に照準！私の合図で砲撃！」

緊迫しているが落ち着いた声音に、敵の猛攻の中で黒森峰の隊員達は落ち着きを取り戻し、それぞれの近い敵戦車に照準を合わせた。

照準が重複していたとしても問題ない。

それは集中砲火の形になり、撃破の可能性が高まるからだ。

「撃て！」

偶然にも完璧な同時射撃となり、黒森峰戦車隊の反撃は腹にこたえる1つの重々しい砲声となって轟いた。

砲弾は全方向にばら撒かれた形となり、なんとこの砲撃で4輦のT—44が撃破された。

まほは周囲を見回して、今の反撃で右翼のT—44部隊が怯む様子を見逃さなかった。

「全車、右翼の敵部隊に突撃！ 包囲を突破する！」

それに対しエリカが、

「ですが動けない固定砲塔車が！」

「諦めろ！」

黒森峰戦車隊は、健在な車輛が我先にと右翼の敵に殺到し、強引に食い破るようにして包囲網を突破した。

見捨てる形となった、履帯を切断されて動けなくなった何両かの固定砲塔戦車は各個撃破されていった。

「…すまん」

肩越しにその光景を見ながら、まほは小さくそう言った。

しかし、気を抜いている間は無かった。

「包囲網突破！」

「次の敵襲に備えろ！」

そう警告した直後、

「前方に敵集団！」

赤星の報告通り、針路上に4輦のIS—3が展開して、こちらの退路を断とうとしていた。

思わずたじろいだ数輦が速度を緩めかけたが、まほが語気鋭く、

「突破しろ！」

黒森峰の操縦手達が反射的に増速させた直後に、IS—3の長大な122mm砲が一齐に火を噴き、1発はティーガーIの車体左側面を掠めた。

幸い、今回の損害はゼロだった。

「強行突破する気です！」

部下の報告に、田村は次弾装填が間に合わない判断した。

「ぶつけてでも阻止して！」

田村の言葉に、IS―3部隊は斜めに構えるようにして黒森峰戦車隊を止めようとしたが、どれも上手に間を通り抜けて阻止銭の向こう側に飛び出した。

ティーガーIが砲塔を真後ろに振り向けると、こちらに向き直ろうとしているIS―3部隊の1輜に徹甲弾を叩き込んだ。

側面の履帯と転輪の間に命中して有効打となり、このIS―3からは白旗が上がった。

「今度こそ突破したか」

阻止部隊のIS―3がまた撃ってきたが、これも外れたり地面を抉ったりした。

その後ろでは、隊長車のIS―3とT―44が再集結して隊列を整えながらこちらに向かって来るのが見えた。

「隊長、こちらは残り10輜です」

「半数がやられたか」

エリカの現状報告に衝撃を受けるよりも、まほは次の事への思考に集中した。

この短時間で固定砲塔車輛は軒並みやられ、偵察のⅢ号戦車も失った。

しかし相手はまだ15輜残っており、数的不利に立たされている。

「このまま距離を離しますか？」

「いや。相手の方が足が速い。すぐ追いつかれるだろう」

「では…」

「全車反転！敵集団と相対しろ！」

黒森峰戦車隊はぐつと踏み止まると、車体を旋回させてイズベスチヤ社アグレッササーチチームと対峙した。

「黒森峰、こちらに向き直りました！」

「逃げても追いつかれると分かっているようね」

田村は追いついてきたカリンカを振り返った。

「また包囲しますか？」

「いえ。今度は堂々と撃ち合うわ。あれだけ堂々としている隊長を見ていると、こちらも嬉しくなるわ」

カリンカは不敵な笑みを浮かべていた。

彼女達を見ていると、全国大会で激戦を繰り広げた当時の自分を思い出して血沸き肉躍る思いになる。

「こちら後方警戒隊、ただいま合流しました」

後方警戒のT-44も合流し、これで全戦力が整った。

「さすがは西住流。でも、接近戦はどうかしら？」

カリンカは無線機をオンにした。「接近戦に持ち込むわ！有効射程に入り次第、砲撃開始！」

一方、黒森峰側は強固な楔形陣形を組んでイズベスチャ社戦車隊に向かつて増速していた。

「まずはT-44だけを狙え。数を減らして数的不利を覆す」

まほのティーガーIも、IS-3とIS-3の間に見えるT-44に狙いを付ける。

それから緊張の数秒間が過ぎた。

「撃てー！」

黒森峰が先制攻撃をかけ、カリンカはその全てがT-44を狙ったものだという事に気付いた。

今の攻撃でT-44が1輛やられたが、それはIS-3とIS-3の間を通過した徹甲弾：即ちティーガーIのものであった。

更に被害報告も入る。

「こちら8番車！砲塔故障！」

カリンカは2発目が来る前に指示を出す。

「IS-3は前方に突出！T-44を守りながら距離を詰めるわよ！」

「こちら砲撃準備完了！」

「砲撃開始！」

先に射程距離に入ったIS-3の122mm砲が火を噴き、直後に黒森峰から第2弾が放たれ、砲弾と砲弾が飛び交う砲撃戦が幕を開けた。

「T-44を更に1輛撃破！」

「撃ちまくれ！乱戦になる前に出来るだけ減らすぞ！」

しかし敵側も防御力の高いIS-3が盾となって前進してくる為、なかなか当てづらい。

それでも1輛ずつ数を減らしていくが、思うようにいかない。

やがて敵のT-44も発砲を開始し、砲撃戦が更に激しさを増した。

モニター越しでも、試合の迫力は伝わっていたようだ。

「すっげえ砲撃戦じゃん…」

塚野は本物の戦車道の試合の迫力や激しさを見て、圧倒されると同時に自分が何かとんでもない世界に気軽に足を踏み入れたのではないかという疑問を感じていた。

そもそも彼女が戦車道を始めた理由は、退学回避の為であって好き好んでやり始めたわけではない。

とは言え、戦車道の試合の動画を見て、それに大きな刺激を受けた事も事実だったが、この練習試合の観戦で心境に何かしらの影響を与え始めていた。

他のフロンティア学園戦車道メンバー達も、冷静かつ真剣に観戦している村江と大地を除いては塚野と同じように圧倒されている様子だった。

土橋に至っては、目は観戦モニターに釘付けながらラップトップコンピュータのタイピング速度がまるでアンドロイドのような高速ぶりを披露しており、しかも一言一句にタイプミスが無かった。

両者は撃ち合いを続けながら更に距離を縮め、互いに目と鼻の先に迫った。

「隊列を解いて交戦！」

その命令に、しかし黒森峰の隊員達は機敏に反応した。

黒森峰の得意技は隊列を組んでの統制射撃だが、それだけでは勝てない試合がある事を、今年の全国大会決勝戦で身をもって学ばされ

た。

まほはあくまで隊列を組んだ連携を中心にしつつ、同時に隊列を解いた戦い方にも対応出来るようチームを指導してきた。

この練習を始めてからまだ1か月程度しか経っていないが、メンバーは柔軟に順応してきていた。

今年の全国大会における大洗女子学園の戦いぶりや、大学選抜チームとの試合の映像を手本として見せて、イメージを付けやすくした上で練習を繰り返してきたのが効果的だったようだ。

左右に散開した黒森峰戦車隊に、カリンカは一瞬目を見開いた。

上述の通り、従来の黒森峰の戦い方では無かったからだ。

しかし、こちらにも経験を積んだ社会人チームだ。

「各車自由射撃！応戦せよ！」

両チームが入り乱れた事で撃ち合いに激しさが増し、あちこちで地面が抉れ、砲撃音と跳弾音が響き、数十台の戦車のエンジンの咆哮の合唱が支配した。

戦いは撃つて撃たれてを繰り返し、一方的に撃破される車輛、相打ちになる車輛、ぶつかり合う車輛があちこちで展開され、互いに数をすり減らしていった。

「赤星！11時方向のIS-3を撃破するわよ！」

「了解副隊長！」

エリカのティーガーIIと、赤星のパンターの砲口が、11時方向で別のティーガーIIを狙うIS-3に向けられた。

それは田村のIS-3だったが、それは知る由も無かった。

「田村！狙われてるわよ！」

カリンカの警告で田村が振り返り、こちらを狙う2輛の戦車を見つけたが、時既に遅し。

「撃てえ！」

88mm砲弾はIS-3の車体後部の傾斜装甲に弾かれたが、75mm砲弾は砲塔と車体の境目に有効打となって田村車から白旗を上げさせた。

「よし！やった！」

大物重戦車を仕留めた赤星は両手でガッツポーズを取ったが、直後に物凄い衝撃が車内を走り、装填手の方に吹っ飛ばされた。

カリンカがカバーに放った砲弾が、赤星のパンターの車体右側面に当たったのだ。

こちらにも有効打となり、赤星車は白旗を上げる。

「次、ティーガーII！」

カリンカはエリカ車を狙わせようとしたが、

「正面にティーガーI！」

その言葉に正面へ顔を振り向けると、今しがたT-44を返り討ちに遭わせた西住まほ隊長の乗るティーガーIが、こちらに車体に向けているところだった。

「隊長、援護します！」

エリカがそう叫んだが、まほは

「いやーそっちは敵の数を減らしてくれ！」

「了解！」

まほの指示に従いティーガーIIが照準を別の敵に向ける中、ティーガーIとIS-3が対峙する。

「目標変更！ティーガーI！」

カリンカ車は主砲をティーガーIに向かって回しながらティーガーIに突撃した。

まほもティーガーIをカリンカ車に向かって突撃させる。

すれすれのニアミスコースを取りながら、2輜が主砲を向け合う。

「撃て！」

「発射！」

ほぼ同時に放たれた88mm砲弾と122mm砲弾は、前者が砲塔に直撃したが曲面に力を受け流され、後者が車体側面の表層を削り取っていった。

直後に金属の擦れる、神経が逆撫でされる音と共に火花を散らしながらニアミスした両車は、すぐに急停止して向き合った。

まほが咽喉マイクに手を触れ、

「目標、車体正面下部！」

「照準よし！」

「装填完了！」

「撃て！」

先に装填し終わった88mm砲から徹甲弾がカリンカ車の車体正面下部に向かつて放たれ、見事に直撃したが、斜めから入った事でまともコースの向きを逸らされ、弾頭を地面に捻じ曲げられた。

カリンカ車の真下の地面に直撃した砲弾の衝撃は、車内を激しく揺るがした。

「うわ！」

特に操縦手は真下から突き上げられるような衝撃を受けて声を上げたが、IS-3に損害は無かった。

恐るべき防御力である。

「装填急げ！」

まほの見ている前で、カリンカ車が主砲の狙いをぴたりとこちららにつけた。

さすがのまほのこめかみにも汗が一筋流れたが、

「完了！」

「撃て！」

まほもほぼ同時に放たれた両者の砲弾は、今度は共に有効打となった。

ティーガーIの砲弾はIS-3の主砲の基部の下側に、IS-3の砲弾はティーガーIの正面の垂直装甲に直角に入っていた。

両車から白旗が上がった時、まほとカリンカは辺りが静寂を取り戻している事に気付いた。

風に流される硝煙の臭いが立ち込める中、2人が周囲を見回すと、周辺は白旗を上げて擱座する両軍の戦車が『死屍累々』としていた。死んではないいけないけれども。

「黒森峰女学園、残存車輛無し。イズベスチャ社アグレッサチーム、残存車輛無し。モニター判定中につき、暫くお待ちください」

審判席では、蝶野や審判員が数アングルから録画された複数の映像を交互に、綿密にチェックしていた。

チェック対象は、最後の相討ちとなったティーガーIとIS-3の映像で、どちらの砲弾が先に相手に到達しかを判定し、勝敗が決定されようとしていた。

「蝶野教官……」

審判員の1人が蝶野に顔を向けると、蝶野は更に数秒俯き加減に考えした後、

「うん、これはどう見ても……」

顔を上げてマイクを取り上げると、

「モニター判定の結果が出ました。ティーガーI、IS-3双方の砲弾は同時に着弾を確認。よって……結果は引き分け！」

続く

チャプター4 打診

午後も黒森峰女学園とイズベスチャ社アグレッサーチームの練習試合があり、それに備えて昼休憩と戦車の整備の為の時間が取られた。

その間に塚野は野島と一緒にエリカから黒森峰戦車隊の詰める車庫群へ呼び出され、2人を待っていた西住まほは開口一番、午後の練習試合に誘ったのだ。

「ああ。ふと思いついたのだがな」

目を丸くする塚野と野島に、西住まほは静かに頷いた。

まほの一步後ろに立つエリカも、塚野と同じように驚きと困惑の表情で自分の隊長を見ている。

「どうやら2人を呼び出す事までは言われたが、この話はここで初めて聞いたようだ。」

「しかし隊長、どうして…」

まほはエリカに振り返った。

「午後の練習試合はお前が隊長だ。この機会に他校との連携と統率を学ぶと良い」

エリカが午後の練習試合で隊長を務める事そのものは打ち合わせ済みであるらしい。

それだけでもエリカは大きなプレッシャーを感じていたが、加えてもう一つ課題が課せられた。

「は…ですが見ず知らずの高校とチームを組むのは…」

「だから良い機会だと思ったのだ。とは言え…」

まほは再び塚野達を見た。「君達の同意を得られたら、だが」

塚野はまほの『打診』にまだ戸惑っていたが、自分はどうしたのかと心の中を探ってみて、2秒後には決心を固めていた。

ただ、これは自分の一存で決めるわけにもいかなかったので、

「勿論参加したいです。ただ…」

「チームメンバーとの相談だな？」

先を言い淀んだ塚野だったが、まほは万事心得ているようだった。

「分かっている。元々、私の無茶ぶりだからな」

まほはポケットから懐中時計を取り出してパチンと開いた。

「試合まであと30分ある。どうするか、それまでに教えてくれ」

塚野は自分達の戦車を收容している車庫前に全員を集めると、早速黒森峰女学園からの誘いを話して聞かせた。

メンバー達にとっては、思いがけない突然の話だった筈だが、
「面白そうですね」

腕組みした状態でカヴェナンターに寄りかかっていた安藤が言った。「あたしは賛成でさあ」

「黒森峰って確か、強豪校だよな」

土橋がネットサーフィンで得た情報を思い出しながら言うと、
「全国大会じゃ決勝戦の常連…いや、いつも優勝候補のトップよ」

と、村江が補足説明すると、土橋は目をキラキラさせながら
「凄いじゃん。こんな機会滅多に無いよ」

「お、強豪校とコラボって事であれば是非！」

と伊関もやる気満々で、桐山も

「いいですね！強者の胸を借りるつもりで！」

「これはレベルアップのチャンスですね！」

大地の言葉に、左隣に立っていた田張が

「ボーナスタイム！」

と気合十分に掛け声。

そう、全体的に反応は悪くなかった。

話するまで躊躇されるかと思っていた塚野には嬉しい誤算だった
…渋い表情を浮かべている2人を除いては。

「ノイジー。なんでそんな怖い顔してんの？」

野島は気が乗らなさそうに塚野に向けた。

「なあ。本気なのか？」

「え？チヨ一本気」

「足引っ張ったりしねえか？」

「こつちが素人集団なのは百も承知で誘ってきたとは思えけれど」

野島の懸念を和らげようとして村江がそう言うと、大地もうんうんと頷きながら

「確かに。村江先輩の仰る通りですよ」

しかしもう1人の渋面、佐伯が、

「でも私達の学園艦の住人はどう思うかしら。こう言っちゃなんだけど、下手すると恥晒しになりかねないわよ」

「それなんだよな」

野島も首肯した。「おじいちゃんから聞いたんだけどよ。敷地と義援金提供を検討しても良いって言う申し出があったらしいんだ。ここで取り下げられるリスクをわざわざ取る意味はあんのかってな」

「でもさあ、これってチャンスだと思っただけ」

「リスクが大きすぎるわ」

「ハイリスクハイリターンって言うじゃん？」

「まだ始まって1か月弱のよちよち歩きに何が出来ると思ってるわけ？」

塚野は奥歯をギリツと歯ぎしりさせた。

「…っーかなんでそんなに邪魔したがるわけ？」

すると佐伯は塚野を睨み返した。

事情を知る者同士の、無言の対立がそこにあった。

しかしこの時の佐伯は塚野を敵視しての事ではなく、心配しての事だった。

「…心外ね。自分で自分の首を絞めるのはやめなさいよ」

「へえ。心配してんの？」

「当たり前じゃない」

「塚野。一回落ち着いて考え直せよ」

腰に両手を当てて一度2人に背を向けた塚野はまたくるりと向き直り、

「じゃあ2人は見学してて良いからさ、こっちは出るよ」

とうとう野島と佐伯を抜きにする所まで踏み込んだ塚野に、口論を静観していた他のメンバー達はギクリとして動きが固まり、目だけが3人の間を交互に見比べて動いた。

野島と佐伯は顔を見合わせた。

「ねえ、彼女本気なの？」

「いや、リスクを分かかってねえみたいです」

「リスクなんて分かっているし！」

とうとうムキになって言い返した塚野に、大地が目をぱちくりさせた。

大地の関心を引いたのは、塚野の反論が野島や佐伯のネガティブな意見にムキになったところではなく、どうもそれとは別の、何か切羽詰まったようなものを感じた雰囲気である。

大地が村江を見ると、村江も同じ考えだったようだ。

「…どうしたんだろう…」

田張もどうやら、何かを感じ取ったらしい。

それに野島や佐伯は、塚野がムキになって反論した意味を理解しているのか、2人を外すと言われて尚、冷静に受け止めているようだった。

「村江さん…」

大地が囁くと、村江は頷いてから一歩進み出た。

「何かあるようね。裏事情が」

「え？」

こちらを見た佐伯の目を見据えながら、村江は続ける。

「仮承認なのは承知しているけれど…どうしてそこまで仮承認に拘るか分からないわ。ここまでやって来ているのに。おかげで必要な資金も仮承認という理由で手に入らない。一体どういう事よ？」

「実際に正式承認するかは、まだ判断する時期じゃないからよ」

「じゃあ、黒森峰と組んで練習試合する方が正式承認に近くなると思うのだけれど？」

「負けたら評価されなくなるからよ」

「誰から？どういう理由で？」

「だから一般見学者からだって…」

「それなら幾らでもフォロワーしてやるわ」

これに佐伯が更に言葉を重ねようとすると、塚野が遮った。

「原因はあたしよ」

「おい…」

それまで渋面だった野島が一転して慌てて止めようとしたが、
「いいよノイジー。いつか言うつもりだったしさ」

村江は遂に答えに辿り着いたと確信し、塚野を振り向いた。

「と言いつつ…」

「すつげえ恥ずい話なんだけどさ…」

そう前置きしつつ、塚野は正直にフロンティア学園に戦車道が設置された本当の理由を告白した。

元々は自分が退学回避の為に始めた事、仮承認から正式承認に至る実績を積み重ねなければならない事、今も綱渡り状態で活動の継続に支障が出たと判断されればその時点で戦車道は活動停止処分を受け、そうなれば成績点がどん底の自分は問答無用で退学処分になる事。

そして、黒森峰とチームを組んでアグレッツサーチームとの練習試合に臨もうとしているのは実績を積んで評価を得る為であり、成功すれば戦車道の活動継続が更に認められる事になる。

確かに無様な姿を晒せば危うくなると思うが、自分はこれがチャンスだと思っている事。

これらの事を塚野が話している間、全員が口を挟まず、塚野の言う事に耳を傾けていた。

いつの間にか国崎もやって来ていて一同に混ざっていたが、みんな塚野に注目していたので気付いた者はいなかった。

話し終わると、塚野は肩をすくめながら自己嫌悪するように言った。

「サイテーよね。自分の目的の為にこんなチームにいれちゃってさ…詐欺よね」

それから数秒の沈黙が支配したが、腕組みして聞いていた村江がやや俯きながら、

「…私よりずっと立派じゃない」

と自嘲気味に小さく呟いたので、

「え？」

と、塚野が聞き返すと、村江は顔を上げて塚野を見た。

「理由はどうあれ、あなたは戦車道のチームを作り、ここまで育てて来た。『退学回避用』にしては、随分と愛情がこもっているように見えるけれど?」

「え、どういう事ですか?」

大地が聞き返すと、

「さっきの練習試合、隊長はモニターを食い入るように見ていたわ。あなたも見たでしょう?」

「はい。すっかり夢中でした」

「退学回避の為だけでやってるなら、あそこまで熱心になるかしら? 昨日の練習試合だって頑張っていたと思うわ」

「私も見た見た」

加勢したのは土橋だった。「スズやんすっかり興奮してた!」

「私も見ました」

と、伊関も証言を足した。「と言うか、今聞かされた話がとても信じられないくらいなんですがね」

「だよねえ」

桐山が伊関に賛同して何度も首を縦に振った。

村江が再び塚野に確認するように問う。

「あなた、動画サイトで見た戦車道の試合に刺激を受けたって言うってたわよね。退学回避の手段として選んだのかもしれないけれど、愛着があるのも事実じゃないの?」

「そ、それは…まあ…そうかも…」

村江の指摘は、塚野にしても意外だった。

しかし今、ハッキリとそう意識するようになった。

そう、自分はこの戦車道チームに愛着を抱き始めている…いや、既に抱いている。

「じゃあ、ますます退学出来なくなったわね。せっかく育てて来た戦車道を取り上げられるなんて」

「だから止めたんですけどね」

野島が右手の親指で塚野を何度も指した。「こいつの将来が掛かっ

「てんですよ」

「ノイジー」

「あ?」

「あたしがどうすつかは、あたしで決めっから」

「おめえ、そんな事言ってる余裕あんのか?」

その時、まるでタイミングを見計らっていたかのように国崎が進み出た。

「野島さん。塚野さんを心配する気持ちは分かります」

「か、会長、いつの間にな?」

国崎は佐伯に顔を向けた。

「塚野さんは敢えてリスクを取りました。他でもない塚野さんが自分で決めたのです。私はそれを評価します」

「でも会長。さっきの練習試合を見たでしょう?あんなレベルの戦い方が出来るかどうか…」

「まだ駆け出しのチームなのは分かっています。ひよつとしたら味方の足を引っ張ってしまうかもしれないでしょう…でも、頑張っている姿は、人は分かるものです。今の塚野さんなら、当てはまると思いますが。どうでしょう?」

国崎にそう論されては、佐伯もこれ以上の反論は引っ込めざるを得ない。

「…分かりました」

野島も観念したように首を横に振りながら溜息を吐いた。

「…ちっ。あたしも付き合っぜ」

こうして、フロンティア学園戦車道チームは黒森峰女学園と組んで午後の練習試合に臨む事が決まった。

続く

チャプター5 貸与

それから塚野は、まほに午後の練習試合に参加する旨を伝えた。

まほはフロンティア学園の戦力とチームの人数を確かめたが、やはりカヴェナンターで引つ掛かった。

「カヴェナンターか…」

「やっぱり評判悪いんですか？」

「ああ。継戦能力に問題があるからな…乗った事は無いが、乗りたいとも思わない」

そんな戦車に乗ったのが塚野であった。

少し居心地が悪くなり、穴があつたら入りたい気持ちとはこういう事なのだろうと思った。

「隊長、レオパルトはどうでしょう？」

「ん？」

「ああいえ。あくまで提案に過ぎませんが…」

まほの反応が好意的では無いと思ったエリカは慌ててそう補足したが、

「…よし、それでいこう」

今のまほとエリカのやり取りの事が、塚野は気になった。

レオパルトがどんな戦車かは知らないが、貸し出しの判断に数秒要したのはなぜだろうかと気になったのだ。

「その…何か条件とかある感じですか？」

「レオパルトは日本戦車道連盟に引き渡し予定で、今最終テスト中なんだ。だから連盟に一度話を通さねばならない」

「許可が出ないかもしれないのよ」

「まあ話を通ったとしても、人数を聞いた限りじゃ2人あぶれるようだが。レオパルトは4人乗りだからな」

2輦のカヴェナンターにそれぞれ割り振られていた人数は3迷ずつ、即ち6名だ。

まほの言う通り、2人も爪弾きにされてしまう。

「いえ、それは何とかします」

「分かった。まずは蝶野教官に話をしに行こう。どのみち、君達の試合参加は予定外だからな」

幸い、蝶野教官はフロンティア学園の参戦とレオパルトの貸し出しを快諾してくれた。

その場にいたカリンカ教官も許可してくれたので、黒森峰女学園とフロンティア学園の合同チーム結成が決まった。

「あなたラッキーね。この機会にたくさん学びなさい」

と、カリンカは塚野を励ましてくれたが、この練習試合での結果如何に自分の行く末が掛かっている塚野に押し掛かる重くどんよりとしたプレッシャーを晴らすには至らなかった。

いや、自分の行く末だけではない。

自分が折角ここまで育て上げて来た、そしてこれから大きくしていくつもりで戦車道チームの運命も掛かっていると行って良い。失うものが1つ増えたのだ。

いつそ、自分だけが退学になるならまだ気楽だったかもしれない。自分の積み重ねて来たものが取り上げられ、自分はそこから永久に追放となるのだ。

そんな事は想像するだけで背筋に冷たいものが走った。

しかしそれはモチベーションでもあった。

村江の言う通り、この戦車道チームに自分は愛着を抱き始めている。

もし今まで通り退学回避だけを目的としているのなら、敢えて黒森峰とチームを組む必要など無いと考える筈だ。

なぜなら無用なリスクを冒すまいという思考になるからだ。

だが、今回の自分の決断はその範疇を越えている。

退学回避だけを考えるなら安全志向を取るのが普通だ：目的達成だけを目指すなら。

そう、この戦車道チームは自分にとってのアイデンティティーになりつつあった。

そう考えると、急に力が湧き水のように全身に漲って来るのを塚野

は感じた。

仲間と準備を進めながら空を見上げると、どんよりとした曇り空の中に出来た隙間から、太陽の光線が幾筋か差し込む瞬間が目に入った。

自然と両手が拳を握り締める。

「特別なものとなりつつありますね」

国崎がいつの間にか塚野の後ろに立っていた。「『あなた』の戦車道」

この生徒会長は人の心を直接覗き見る異能の持ち主なのだろうか？と、塚野は訝った。

「かもしれない」

「しっかりと頑張ってください。この『初陣』は、あなたの今後を左右するでしょう」

「おい隊長！」

野島と呼ばれ、塚野はそちらに向かって走って行った。

その背中を国崎は暫し見送ると、観客席に戻るべく踵を返した。

フロンティア学園の参加の手続きは佐伯に任せ、蝶野教官が理事長にレオパルト貸し出しの話を通してきている間、塚野、野島、村江、大地の4人はまほとエリカと一緒にレオパルトを見に行った。

昨日塚野達が操縦や砲撃の訓練を行った練習場では、ちょうどレオパルトが起伏のある道をガクンガクンと車体を揺らしながら走破しているところだった。

このレオパルトは、勿論戦後生まれの主力戦車の事では無い。

VK16・02レオパルトは、戦中にドイツがII号戦車系列の16t級戦車として試作していた軽戦車で、パンター中戦車やティーガーII重戦車を前後から圧縮してデフォルメ化したような見た目をしている。

最終的に重さは軽戦車としては重量級の21.9tに落ち着いたようである（参考までにII号戦車は8.9t、M24チャーフィーは18.4t）。

主砲はⅢ号戦車等が装備していた50mm砲で決して強力では無いが、鈍重そうな見た目とは裏腹に幅広の履帯のおかげで機動力は高く、オンロード走行では時速60kmが見込まれていたようである。

1943年4月から試作車の組み立て作業が始まり、かなり工程は進んだようだが、最終的に中止になり、未完成に終わった経緯がある。「まさか動くレオパルトを拝めるなんて…」

そう呟いた村江に、エリカが横で説明を加える。

「うちとか連盟とかドイツの有志が協力して、部品やら資料やらをかき集めて組み立てていたみたいなの。足りない分は既存の部品を加工したり新規製造を特例で認めたりとかしてね」

当時、黒森峰女学園は機動力重視の戦術から、主に対プラウダ高校に重点を置いた重装甲重火力戦術への移行を進めており、レオパルトもその一環として組み立てられており、偵察要員に予定されていたようである。

ただ、結局Ⅲ号戦車で偵察は十分務まると判断された事や、軽戦車としては整備が大変である事、更にはレオパルトに使う予算をティーガーやパンター等と言った重戦力導入と整備に優先的に回す事が決定された事から、レオパルトは『戦力外通告』を受ける事となった。

とは言え、完成までは漕ぎ付けた上で日本戦車道連盟に譲渡される事となり、引き渡しに向けた最終運用試験をこのイズベスチャ社の練習場で行っていたのである。

と、説明が長くなってしまったが、有力な戦車が少ないフロンティア学園のチームにとっては、このレオパルトは貸し出しとは言え頼もしい戦車に見えた。

どっしりした佇まいもそうだが、何より50mm砲はSU-100の主砲に次いで強力と言えるのだ。

「なんか強そう」

「光栄ね。レオパルトにとってはこれが初陣よ」

「え、そんなじゃあたし達と一緒にじゃん」

その近くでは、大地が村江と相談していた。

「人選はどうしましょう？私が乗りますか？」

「いえ、私が乗るわ。あなたは他の子達のサポートをお願い」

「え、でもそれなら村江さんの方が…私より先輩ですし…」

「それはあなたの方が適任よ」

「そう…ですか…」

「ええ。頼んだわよ」

村江は微笑みながら頷くと、「あとは田張と彼女の部下が1人…それと鹿屋といったところかしらね」

「鹿屋さんを？」

「ああ見えて、意外と飲み込みが早いよ。特に砲撃がうまいわ」

「…でもそれなら桐山さんが一番上手では？」

「だからこそよ。あの子にはSU-100の砲手をやって貰うわ」

マイペースでのんびりした言動が多いものの、チーム内で最も上達
が早いのは鹿屋であり、それを見込んでの人選だった。

それから数分後。

レオパルトの50mm砲が火を噴き、放たれた徹甲弾は静止している戦車型の標的板を撃ち砕いた。

「え、当たったー!？」

「ええ。初弾命中。凄い腕を上げたわね」

そう誉め言葉を掛けながら、村江は砲弾を装填してあげた。

レオパルトの乗員構成は車長、砲手、操縦手、通信手で、装填手は存在していないのだ。

「でもまぐれかもー」

「じゃあ次は…あの横移動してるやつ」

村江が指定したのは、ゆっくりとスライド移動している標的板だった。

「アイアイサー」

数秒の照準作業の後、「よーし…撃てー!」

一呼吸おいて発射された2発目は、またも標的を粉々に破壊した。

「ビンゴーやっぱり砲手に向いているわね」

「そうですかー?えへへー」

照れながら右手で後頭部を撫でる鹿屋。「じゃあ決まりですかー？」

「ええ。あなたにやって貰うわ」

こうしてレオパルトは、貸し出しとは言えフロンティア学園の戦力として戦列に加わる事となり、黒森峰チームと一緒にスタート地点に配置されると、このユニークなデザインの軽戦車の周りをメンバー達がぞろぞろと囲った。

その中には好奇心で寄って来た黒森峰のメンバーもいる。

「すっごい、こんなかわいらしいデザインもあるんだ！」

早速土橋はレオパルトの外観を喜々としてスケッチしていた。

彼女は『爪弾き』にされる2人のうちの1人だったが、第三者視点からの記録係としての役割を任されていた。

午前の黒森峰とイズベスチャ社の試合の事細かな文章記録が、村江や大地から評価されたらしい。

「早いですね〜」

土橋のスケッチブックを覗き込んでいるのは、黒森峰女学園チームのメンバーの1人だった。

彼女の言う通り、土橋は物凄いピッチでレオパルトを描き上げていた。

しかも履帯の形から主砲のマズルブレイキの形状等、細かな部分まで見落としが無かった。

「慣れですよ、慣れ」

「それにしても細かいなあ。羨ましい限りだよ」

心底羨ましそうなこの黒森峰の隊員に、

「じゃあ、これプレゼントしますね。赤星さん」

「え、本当!?!有難う！」

赤星小梅の顔がパツと明るくなった。

「野島さん。試合頑張ってください」

そう声を掛けた萩原の頭にはトレードマークのヘッドセットカメラが無かった。

彼女が今回の試合で『爪弾き』にされたもう1人だった。

しかしこれは、萩原が敢えて自分を『ある意味部外者』として外れたのであって、決して疎んじられたのではない。

それに、土橋と一緒に試合の記録を外部視点から取る目的もあった。

「ん？ああ、そうだな」

「まだ心配してるんですか？」

「あたりめえだろ」

「カエデちゃん。すっかり副隊長っぽくなったね」

「うるせえな」

一方、黒森峰戦車隊の前では、塚野が逸見に挨拶していた。

「逸見さん。今回は一緒にチームを組んで頂いて有難うございます。

まだまだ駆け出しの中の駆け出しですが、宜しく願います」

「こちらこそ宜しく。まあ私だって、隊長あんまりやった事ないから、

お互い頑張りましょう」

「副隊長、そろそろ」

エリカは後ろからそつと声を掛けた部下に肩越しに振り向くと、

「分かったわ」

と返事をした。

両校のメンバーは蝶野率いる審判団の前に集合すると、イズベスチヤ社のメンバーと向かい合い、蝶野の号令に従って頭を下げ合った。

「いよいよ初陣ですね」

モニター越しにそれぞれのチームがそれぞれの持ち場につく様子を身ながら、国崎が横に座る萩原に言った。

土橋は萩原の隣で、ラップトップコンピューターのキーボードに指を置いて記録準備は万端だ。

「うまくいくといいですが…」

「そうとは限らないでしょうね。でも、どうやって試練を乗り越えるのか、それが試されると思います」

「国崎会長は、どう思いますか？」

「何がですか？」

「塚野さんが、試練を乗り越えられるかどうかです」

「ええ、期待しても良いと思っっていますよ」

国崎の言葉に嘘偽りは無かった。「土橋さんはどう思いますか？」

「私も、スズやんは大丈夫だと思います！」

土橋がそう即答した直後、試合開始のナレーションが響き渡った。

続く

チャプター6 黒森峰・フロンティア連合VSイズベスチャ社

試合開始から15分以上が経過した。

「ルノーUEより入電。『敵部隊発見』。繰り返す。『敵部隊発見』」

通信手の報告を受けて、エリカは手元の地図に敵部隊の所在を示すバツ印を書き込んだ。

地図には偵察ポイントを示すアルファベットのAとDの文字が書き込まれていたが、ルノーUEは『D』表記はエリカ達のいる所から東側に行った所にある丘で背の高い草原が生い茂っており、極端に車高が低いルノーUEを隠すにはうってつけだった。

「編成は？」

「：IS-3が1輛、T-44が3輛。時速30km前後で移動中」

「遊撃隊かしら？」

そう呟いた後、通信手に「他に情報は？」

「いえ、今のところはこれだけです」

「分かったわ。別動隊Bと繋いで」

偵察ポイントCとDの後ろには、エリカが差し向けた別動隊のマークがあった。

戦力は自チームのIV号駆逐戦車が2輛と、フロンティア学園のSU-100、そして黒森峰が貸し出したレオパルトの計4輛である。

同じように、偵察ポイントAとBの間に『別動隊A』が待機している。

通信手は程無くして作業を終えると、

「出ました」

「こちら隊長、聞こえる？」

本来の隊長である西住まほは観客席なので、今回は自分が隊長だが、どうも慣れない。

モニター越しにこちらの一挙手一投足を観察されていると思うと、プレッシャーで無意識に体中の筋肉が緊張で強張り、息苦しさを覚え

る。

だが、まほ隊長は自分より先に黒森峰女学園を卒業するから、その後はエリカがチームを引っ張って行かなくてはならない。

これはその為の準備であり、己が通るべき試練なのである。

同じ頃、エリカが呼び出した別動隊Bの指揮を執るレオパルトでは。

「こちら別動隊B、どうぞ」

応答したのは別動隊Bの部隊長に任じられた塚野だった。

当初、塚野は別車輛に乗る予定だったが、本人の希望でレオパルトに決まり、村江は車長の座を塚野に譲ったうえで自分は通信手に移動していた。

『ルノーUEが遊撃隊らしき敵部隊を発見したわ。予想進路付近に隠れて待ち伏せ攻撃せよ』

「……ここが良いと思うわ」

真後ろの塚野を見上げながら、村江は地図の一点を指で押さえた。

屈みこむように村江の提案を見た塚野はうんうんと頷きながら、

「えー、了解。待ち伏せの配置につきます」

『宜しくね』

エリカも村江が戦車道経験者である事を自己紹介の際に聞いており、彼女から待ち伏せポイントの提案があったのだろうと想像しながら無線を切った。

塚野が配下の戦車に指示を出すと、レオパルトを先頭に移動を開始した。

「それにしても敵の本隊はどこかしら」

塚野との通信を終えた後、エリカは敵本隊の所在が不明な事に気を揉み始めていた。「赤星はどう思う?」

「偵察ポイントD以外からはまだ連絡が無いんですよ?」

と、今回の練習試合の副隊長となった赤星小梅は言った。

彼女のパンターは、楔形陣形の先頭を走るエリカのティーガーIIの

左斜め後ろを走っている。

「うん。どこもきちんと周囲を見張れるから…どこ行つたのかしら？」

「…森に隠れているとか？」

「私達が来るのを待ち構えているというわけ？」

黒森峰戦車隊は、午前の練習試合でアグレッサチームの待ち伏せ攻撃を受けた丘を通過するルートを進んでいる。

その先は平原だが、前方に広がる森の中に隠れている可能性を赤星は推測したのだ。

「断言は出来ませんが…」

「じゃあ、さつき発見された4輦の敵部隊はどう説明すればいいかしら？」

「それなんですよね。待ち伏せに最適の森はそこから距離がありますから」

赤星もエリカと同じ疑問を抱いているようだった。

偵察ポイントDで敵部隊は発見されたが、待ち伏せに良い森の場所は偵察ポイントBとCの間で、どちらかと言うとB寄りだ。

赤星の言うようにDから距離があり、森にいる（と仮定した）部隊と連携して十字砲火を組むには、時速30km前後の進行では間に合わない。

間に合わせるならもっと早く走るだろうし、IS-3やT-44はそれが出来る。

「スタート地点から全く動いていないという事も考えにくいですし…」

「全く気配が無いというのが不気味ね…」

4か所も偵察ポイントを配置すれば、かなり広範囲を監視下に置く事が出来る。

こちらの進軍先は勿論の事、その左右もカバーしているから、少なくとも敵の不意打ちは防げる筈だ。

「こちらの方が高地ですし、見つけやすいと思うのですが…」

今回は黒森峰が高地の北スタート、アグレッサチームが低地の南

スタートとなっていた。

高地側のこちらが低地を見渡せるので、北に向かって進軍してくれば比較的早く発見出来る。

「よっぽど大きく迂回しているのかしら…」

「こちらの進路を読み切っていれば…あるいは…」

「でもそれだと、こっちに追いつくまで時間が掛かるわ」

エリカが頻りに頭を捻っていると、塚野から通信が入った。

『こちら別動B。敵戦車隊を確認！』

一端疑問を脇に置いてから、エリカは思考を集中した。

「了解。そちらのタイミングで攻撃せよ」

こちらが潜伏している茂みの前を左から右へ横切るコースを走る敵戦車4輛が見えた。

「見えた見えた」

塚野が「攻撃用意」と告げると、隣の鹿屋が徹甲弾を「よっこらせー」と言いながら砲身に押し込んだ。

こちらの声は相手側には聞こえないのに、つい声を潜めてしまう。

装填を終えた3輛の駆逐戦車は、塚野の合図を待った。

塚野は予め、相手の隊列がこちらの射線に対して直角になった瞬間を狙おうと頭の中でプランを立てていた。

じりじりするような秒刻みを経て、敵戦車隊は塚野のプランとなる砲撃ポイントに差し掛かって来た。

緊張が高まり、塚野も黒森峰の隊員達もいよいよ集中力を高めてまなじりを決する。

が、ここで思わぬハプニングが起こった。

「うーん。ちよつと車体を右に回してくれない？」

SU-100の砲手の桐山が操縦手の中村にそうリクエストを出したのだが、これがまずかった。

中村は桐山に言われるがままに車体を右旋回させたが、その際に茂みの外側に砲身がはみだし、太陽光を反射してしまったのである。

砲撃ポイントに対して射界を広げる為だったが、それは暗闇の中で

灯りをともしてしまつたに等しい。

「え、ちよつと、何してるの!?!」

SU-100の右隣にいるIV号駆逐戦車の車長が驚愕して思わず声を上げたが、全ては遅かつた。

「ん?」

塚野達が狙っている敵戦車隊のIS-3に乗る部隊長は、目の端で何かが一瞬キラリと光るのを捉え、すぐその方向に双眼鏡を向けた。少し左右を見渡すと、茂みの中にSU-100の輪郭が目に入った。

それに、その横には2輦のIV号駆逐戦車が並んでいるではないか。更にその3輦の後ろに、正体は分からないがもう1台。

「1時の方向、敵戦車4輦!正面を向けるわよ!」

アグレッサーチームの小隊は回頭して、別動隊Bに単横陣となつて相対した。

隊列を整え直しながら、部隊長はカリンカに報告する。

「こちら先遣小隊!敵戦車4輦の待ち伏せ陣地を発見!これより攻撃に入ります!」

「うわ、こつち来るし!」

「SU-100の砲身が光つたんだわ:動いた時に」

ペリスコープ越しに敵情を確認していた村江が原因を冷静に分析した。

「す、すみません!ばれるとは思つてなくて:!!」

しかし桐山の謝罪に応じている余裕は無かつた。

敵戦車隊はこちらに気付いており、いつ撃つて来るか分からない。「こ、攻撃開始!」

塚野が緊張で上ずつた口調でそう叫んだ直後、既に照準を置いていた2輦のIV号駆逐戦車が一齐に砲撃した。

狙いはT-44が1輦ずつだったが、どちらも命中せず手前の地面に着弾した。

「おい、早くしろ!」

SU—100車長の野島が桐山を急かすが、先の失態で焦っていた桐山は尚も照準固定に数秒掛かった。

「…よし…発射!」

SU—100の発砲と、敵戦車隊の発砲はほぼ同時だった。

100mm弾は、IS—3の丸みを帯びた砲塔の右側面を滑るように弾かれ、敵側の砲弾はこちらの手前やすぐ横に着弾し、その衝撃で車体を震わせた。

「撃つて撃つて撃ちまくれえ!」

「隊長、逸見さんに知らせないと!」

通信機を弄る村江の言葉で、焦りで命令を出す事ばかり考えていた塚野はハツと我に返った。

生唾を飲み込んでひりついた喉の言う事を聞くようにすると、

「こちら別動隊B!こちら別動隊B!緊急事態発生!敵戦車隊がこっちに気付いて攻撃してきました!現在応戦中!」

待ち伏せ失敗を悟ったエリカは原因を訝った。

『え、どういう事?どうして見つかったの!?!』

塚野は正直に、洗いざらい話した。

怒られてしまうだろうが、責任を誤魔化す気はさらさら無かった。

「えーと…うちのSU—100が動いた時に、砲身がどうやら…太陽に反射したみたいで…」

『…ああもう!何やってんのよ!』

「すみません!私の責任です!」

『んーと…よし。すぐその場を放棄して、もと来た道に戻って来て!増援を送るから!』

「分かりました!」

エリカとの通信を終えると、「みんな!ここを放棄してもと来た道に戻るよお!」

次々と命令受領の返事があると、2輦のIV号駆逐戦車が最初にバツクして反転し始めた。

その間、SU—100と隣に並んだレオパルトが援護射撃する。

攻撃対象が2輦に減った事で敵の射線がそれだけ集中しやすくなったが、どちらも歯を食い縛って逃げ出したい衝動を押さえつけた。

幸い、敵は走りながら撃ってきているので、命中率は低かった。

平原とは言い上、地表はぼぼこしているので車体が揺れたり傾いたりするので照準が定まりにくいのだ。

塚野は1度振り向いて、2輦のIV号駆逐戦車がもと来た道を戻り始めた事を確認すると、SU-100に後退を指示する。

「こっちは後から行くから、後退して！」

「はいよー！」

SU-100も後退して反転した時には、敵戦車隊はこちらまで100mに迫っていた。

「おっし、こっちもずらかるよお！」

その直後にレオパルトの砲塔をIS-3の122mm弾が掠め、塚野の全身から冷や汗が噴き出した。「やばいやばいやばい、撤退撤退撤退！」

早口の指示に従うかのようにレオパルトは機敏にバック、反転すると先に逃がした3輦の駆逐戦車の後を追った。

その頃、増援にパンター2輦と四号駆逐戦車2輦を送り込んでいたエリカは、再びルノーUEからの情報を受け取っていた。

『敵戦車多数：10輦以上…いやもつと！本隊の可能性あり！』

「え…という事はつまり…敵戦車はこっちを進軍してきたの!?!」

佐伯の報告を聞きながら、エリカは地図を再確認した。

敵戦車は全て、偵察ポイントDの方向に集中していたらしい。

「…道理で他から連絡が無いわけね」

しかしそうになると、こちらも動きやすくなる。「全車、北東の川まで移動！別動隊Bの撤退を援護しつつ、川を挟んで敵本隊と交戦！」

更にエリカは、偵察車輛には遊撃、別動隊Aにはこちらと合流するよう追加指示を出した。

続く

チャプター7 後退

右に左にジグザグ走行するレオパルトの周囲に、追いつがる敵先遣隊の砲弾が次々着弾した。

レオパルトも負けじと50mm砲で撃ち返すが、照準器が上下左右に大きく揺れてはさしもの鹿屋も命中させる事は出来ない。

「あー。また外しちゃったよー」

「撃たなかったらもつと詰めて来るわ」

塚野が装填している間に村江が言った。「だから撃ち続けて」

「りようかーい！」

どちらも命中弾を得られていないが、ジグザグに走る分スピードが限定されるレオパルトに対し、IS-3やT-44は真っ直ぐに走って来る。

しかもSU-100やIV号駆逐戦車は固定砲塔なので砲を後ろに向けられず、応戦出来るのはレオパルトだけなので殆ど回避行動しない。

そしてレオパルトの主砲では、真正面から対抗するにはあまりに厳しい。

「くそお！もつと早く走ってよお！」

「これが限界なんです！」

必死に試作ドイツ軽戦車を操作しながら田張はそう叫び返した。

「うわもう来たし……」

双眼鏡で敵先遣隊の遙か後方に敵本隊を見つけた塚野は小さくそう呟いた。

敵本隊の存在については、既に通信で聞いている。

『こちら隊長。援護するから急いで川を渡って』

「了解！」

塚野は配下の駆逐戦車3輻に、「みんな！味方が援護してくれるからその間に川を渡るようにって！」

「隊長、先に黒森峰の人達を渡らせましょう！」

そう言ったのは桐山だった。

やはり待ち伏せ作戦を台無しにした責任を感じているようだ。

それは塚野も同じで、直接的な責任では無いが、フロンティア学園のチームを纏める立場としての思いだった。

塚野は2輦の四号駆逐戦車を呼び出す。

「こちら塚野。黒森峰のみんなは先に渡つちやつて下さい。その間援護するんで！」

「…え？あ、さっきの事気にしてるなら、もう大丈夫だから！」

塚野の気持ちを察した16号車の車長の声が応答した。

「ドンマイドンマイ！」

と、17号車の車長の声も快活に応じた。「だからみんなで渡つちやお！」

そうは言われても、素直に『はいそうですか』とは答えにくかった。

「うーん。でもさすがにちよつちい…」

「うだうだ言っていないで渡るよ！いいからいいから！」

尚も渋る塚野の背中を、16号車の車長の言葉が押した。

「ミスしない人間なんかいないって！」

と、17号車も励ますと、桐山の声が割って入った。

「あの、本当にごめんなさい…」

「へこんでる暇があったら急いで川を渡る！」

「そっちの方が敵の攻撃がばらけるから安全だよ！」

「あ、有難うございます…！」

桐山と黒森峰メンバーの通話を聞いて、塚野もやっと気持ちを切り替えた。

「おっし！全車で渡河するよお！」

「川が見えたわ」

一度ハッチを開けて前方の光景を確かめた村江が言った。「味方も見えたわ」

「別動隊B発見！」

赤星が報告した時には、エリカも双眼鏡で敵戦車隊の砲撃に晒されながら逃げて来る別動隊Bを見つけていた。

敵戦車隊もこちらを見つけたらしい。

減速してこちらの様子を窺うように砲を向けて来たが、まだ有効射程外だから安全だ。

恐らく、後続の敵本隊との合流を待っているのだろう。

「全車、煙幕弾装填！」

塚野達と敵戦車隊の間に煙幕を張って視界を遮り、渡河を援護する作戦だ。

しかしはたして、うまくいくだろうか。

何か見落としている点はないだろうか？

エリカは腹に力を入れて、ふつふつとこみ上げて来る得体の知れない不安を押し殺し、目前の作戦手順に意識を集中した。

「別動隊B、間もなく川に到達！」

「停止！」

黒森峰戦車隊は楔形陣形から横一列陣形に移行する形で停車し、砲塔の向きと主砲の仰角を調整した。

「…急げ。時間が無いぞ」

観客席では、まほが小さくそう警告していた。

モニターには、中継ドローンから送信されてくるリアルタイム映像が黒森峰とフロンティア学園の合同チーム、そしてイズベスチャ社のアグレッサーチームが同じ画面内に映し出されていた。

「…これ、大丈夫でしょうか？」

萩原が不安そうに国崎と土橋を交互に見た。

「隊長、スモーク準備完了！」

田村副隊長の言葉に、カリンカは頷くと

「撃て！」

瞬間、5輻のIS-3の主砲が火を噴き、5発の煙幕弾は次々と川面に落下し、一瞬のタイムラグの後に濛々と濃い白煙を膨らませ始めた。

「IS―3が煙幕弾を発射した模様！」

「くそっ、これじゃ援護出来なくなるじゃない！」

エリカは愕然として川に広がっていく煙幕を凝視した。

相手は確かにまだこちらに射程が届かない位置にいるが、まさか妨害の手を打って来るとは思っていなかった。

「いや、どうしてこんな事を予想出来なかったのか？」

エリカは自己嫌悪に襲われて、砲塔の天板に左の拳を叩きつけた。

しかし赤星の声が正気を取り戻させた。

「どうしますか!？」

「くっ…弾種切り替え！徹甲弾！」

「敵戦車増速！」

16号車の車長が叫んだ。

かなり動揺していて、目が大きく見開かれている。

「おい、早くしないと追いつかれるぞ！」

さすがの野島も焦りの表情で塚野を見る。

「…あたし達で気を引こっか」

「あ？」

言ってしまうと、塚野は急に肝が据わる感じがした。

これが覚悟を決めた、と言う事だろうか。

「黒森峰には先に渡河して貰って、こっちは援護するつきやないよ！」

「何言ってるのよ、こっちも応戦するから！」

16号車がいり返してきたが、塚野は部隊長権限で一蹴した。

「黒森峰は渡河！これは命令だし！」

「…了解。やられないでよね」

「き、気を付けてね…！」

16号車と17号車は、SU―100とレオパルトを後に置いて渡河を開始した。

敵の砲弾が再び降り注ぎ始め、周りの地面を抉り、水柱を上げた。

見ると、本隊と合流しつつあった敵先遣隊が前進を再開し、じりじりと距離を縮めて来ていた。

「ちつ、100m砲を舐めんなよーらあ！」

SU-100が負けじと撃ち返したが、それに対して返って来る砲弾の量はこちらを怯ませた。

「このままじゃやられちゃうよー！」

「泣き言言つてねえで弾を込めろ！」

伊関は野島に叱咤されつつ砲弾を込めた。

「装填ー！」

「ファイヤー！」

「ここが踏ん張りどころだよー！」

中村が鼓舞するように言った。

それは同時に、この激しい攻撃に対して自分自身を落ち着かせる為でもあったが、緊迫した状況に操縦桿を握る手は否応にも力が入っていた。

「やっぱりこれ…私のせいですよね…」

またまた自分の発言による失態が脳裏に蘇って来た桐山は、もはや半ベそをかいていた。

「いいから撃ちやがれ！」

野島はそう言い返した。

「横に回り込みながら攻撃するよお！」

「分かりました！」

田張はレオパルトを発進させると、アーチを描くようにしてアグレッサーチームの側面に回り込むコースを取った。

全長に対して横幅が広いレオパルトだが、幅広の履帯のおかげで機動力は非常に高い。

アグレッサーチームも、こちらの横を取ろうとするレオパルトに注意を向けざるを得ない。

本隊も間もなく攻撃を開始するだろうから、焼け石に水にしかならないだろうが、塚野達にとっては2輦の四号駆逐戦車を逃がす目的を達成すればそれで良かった。

一方、村江は通信機をつまみを動かして仲間を呼び出そうとしてい

た。

「勇敢ね。でも・・・無謀だわ」

カリンカは、味方の渡河を援護しようと思死の抵抗を試みるレオパルトとSU-100を見て評価しつつもそう言った。「手近な車輛はレオパルト及びSU-100に照準！」

カリンカの言う『手近』なIS-3やT-44の砲塔が回り、レオパルトとSU-100に向けられた。

それ以外の車輛は、渡河が半分には差し掛かったIV号駆逐戦車に照準を合わせており、IS-3は定期的に煙幕弾を川に撃ち続けて煙のカーテンを維持し続けている。

発射命令を出そうとした瞬間、後方で軽い調子の銃撃音が響き、何発かの銃弾がカリンカのIS-3の車体にも当たって跳ね返った。

「うん?」

身を捻って振り返ると、相手はルノーUEタンケット仕様だった。

8mm機銃以外にロクな武装が無い、小さくてかわいらしいフランスの装甲車輛が、健気にもこちらに突撃しながら断続的に機銃弾を浴びせかけてきている。

「あれは無視して・・・発射用意・・・！」

息を大きく吸い込んでいると、またしても集中力を邪魔された。

「3時方向!ハリーホプキンス!」

味方からの報告と同時に鋭い砲撃音が3時の方角から轟き、ハリーホプキンスから放たれた2ポンド砲弾が一番右側にいたT-44の砲塔に当たって上向きに弾かれた。

そこにレオパルトとSU-100からの砲弾が着弾する。

「全く、ちまちまと小うるさいわね」

田村の声が低くぼやき、「どうします?」

「まずはレオパルトとSU-100からよ」

そして今度こそ、目下脅威度の高い標的に射撃命令を出そうとした直後。

「カリンカ隊長!黒森峰本隊が渡河してきました!」

またも命令を中断して川に双眼鏡を向けると、煙幕の壁の中からティーガーIIの主砲のマズルブレーキがぬつと突き出て来る瞬間が目に入った。

「煙幕を抜けました！」

操縦手がホツとしたように言い、エリカがハッチを開いて身を乗り出す。

「よし、行進間射撃用意！」

エリカは対岸の味方を助ける為に固定砲塔戦車隊を後方に待機させ、回転砲塔戦車だけで渡河してきたのだった。

別動隊Bを逃がしたあと自分達もバックして、それを待機させている固定砲塔部隊に援護させるというわけだ。

ティーガーIIやパンターは川をぎぶぎぶとかき分けながら砲塔を動かして前方にずらりと並ぶIS-3やT-44の集団に狙いを定める。

相手もレオパルトやSU-100からこちらに狙いを変えて砲口を向けて来るのが見えたが、ただでさえ重い重戦車が川を渡っているこの状況では、余計に回避行動をままならなくしていた。

「16号車と17号車が煙幕に入りました！」

様子を見届けた赤星が言った。

「よし。撃てー！」

ドイツ戦車隊が発砲すると、ソ連戦車隊も撃ち返してきた。

地面を抉ったり水柱を上げたり跳弾したり掠めたりと、互いに有効弾は得られなかったが、照準を調整して次は撃破せんとする。

そして再び砲弾の応酬。

「こちら11号車！撃破されました！」

「こちら7号車！左履帯に異常！ですがまだ動けます！」

一方で黒森峰もT-44を1輛撃破したが、ジリ貧になるのは目に見えていた。

「あと2輛は…」

と、右前方の河原で砲撃音が轟き、そちらに視線を転じると、SU

—100がまだ渡河を始めず砲撃に加わっていた。

「隊長からSU—100へ。早く川を渡りなさい！」

『わ、分かりました！』

野島の声と共に、SU—100は信地旋回するとエリカの言葉通りに川に分け入り始めた。

それからエリカは、これまた横槍を入れ続けているレオパルトに向かって渡河を促す。

「レオパルトも早く渡河しなさい！」

隊長の命令とあつては塚野も命令に従わざるを得ない。

『あつ、わっかりました！』

田張が巧みにレオパルトを反転させて川へ一目散に戻り始めた。

何発か後を追ってきたが、何れも後ろを掠めただけに留まった。

「世話を焼かせるわねもう…」

しかし同時に、新参者ながら勇敢に戦いを挑む彼女達に好感も抱いた。

思わずちよつと頬を緩ませたところで、重戦車隊は川を渡り切つて対岸に上陸した。

これで足に地を付けて腰を据えた砲撃が出来る。

「停止！」

エリカは右腕を上げて隊列を停止させる。

がくんと前に一度つんのめってから顔を上げるように姿勢が元に戻ると、砲塔と主砲を少し動かしてアグレッサチームに狙いを付け直す。

「撃てっ！」

この撃ち合いでまたパンターが1輜撃破され、今度はこちらが敵に与えた損害はゼロだった。

エリカは後方の駆逐戦車隊に催促を入れる。

「まだ煙幕は晴れないの!？」

『…やつと薄れてきました！』

駆逐戦車隊の指揮を執るヤークトティガーの車長がそう答えたので、一瞬後ろを振り返ると、薄れつつある煙幕の向こう側に駆逐戦

車隊の姿がうつすらと見え始めていた。

「じゃあ早く援護して！」

『もう少し待って下さい……！』

ヤークトティーガーの車長はそれから数秒沈黙し、『援護射撃開始！』

瞬間、後方の隊列からフラッシュが瞬き、エリカ達の頭上を駆逐戦車隊の砲弾が通過してアグレッサーチームに殺到していった。

特にヤークトティーガーの128mm砲の弾丸は強力で、IS-3を1輻ノックアウトしたのだった。

「IS-3、1輻撃破！」

赤星が嬉しそうに言った。「あ、レオパルトも渡河を開始しました！」

「よし、後退！長居は無用よ！」

履帯の後ろが川に浸かり始めた直後、エリカは我が目を疑った。

なんとアグレッサーチームが急加速し、突撃し始めたのだ。

20秒程でこちらに到達するが、こちらを抱き込んで駆逐戦車隊の攻撃を封じるつもりだ。

数で圧倒的だから、殲滅も楽勝だろう。

それでもエリカは冷静を保とうと努め、息を深々と吸い込むと、

「隊長車に照準！あれをやれば指揮系統が崩れる筈！」

逸見エリカは、隊長車撃破に活路を見出そうとした。

殲滅戦ルールだが、指揮官を失えばたとえ一瞬にしても隙が出来る

筈だ：とだけ言えば聞こえは良いが、実際には至難の業だった。

正確な照準を行う為には一端停止しなければならないが、敵戦車隊の猛烈な弾幕の中でそのような事をするのは自殺行為だ。

ガギーン！

前後運動で回避するティーガーIIの正面傾斜装甲に、122mm徹甲弾が当たって弾かれ、衝撃と轟音が車内を揺るがせる。

この衝撃と轟音も正確な照準を妨げ、砲手の集中力を奪っていた。

苛立ったところで無意味な事は頭で分かっているが、エリカは苛立っていた。

「…隊長車にロックした!？」

と、切羽詰まった口調で砲手に催促するが、

「まだですー!」

砲手も歯を食いしばり、なんとかスコープの中心線に、敵隊長車のIS—3をたとえ0.1秒でも捉えようとする。

と、赤星小梅のより一層緊張を帯びた声が通信機に入る。

「隊長!…3時の方向から、敵戦車が新たに6輛現れました!」

「ぬっ!？」

双眼鏡をそちらに回すと、はたして十字砲火を組もうと回り込んできた6輛のIS—3とT—44の部隊が横一列に展開しつつあった。

「…塚野達が危ない!…」

この新手は、塚野達が待ち伏せ地点を放棄した後、カリンカが隊列から分離して回り込ませるコースで川に向かわせていたのだった。

そしてレオパルトは未だ渡河中で、エリカ達の隊列の一番外側にいるから真つ先に狙われるだろう。

しかしエリカ達や後方の駆逐戦車隊も、突撃してくる正面の敵部隊に手一杯だ。

もう敵戦車隊はあと10秒もあればこちらに達する筈である。

「一気に抱き込むわよ!」

カリンカは先頭を走るT—44のすぐ後ろのIS—3の車長用キューポラから身を乗り出していた。

エリカ達は十字砲火を組まれた上に押し潰されようとしていたが、諦めるわけにはいかなかった。

「…全車、隊長車に照準!」

もう1度敵隊長車の撃破に賭ける。

しかも今度は、エリカのティーガーII単独では無く、味方の全射線を集中するのだ。

照準にじりじりする数秒を使う。

「撃てっ!」

カリンカ車に向かって黒森峰の全射線が降り注ぎ、先頭のT—44

を巻き込む形で何発か命中し、カリンカ車の履帯が千切れ飛んで急停止した。

車体は至近弾による土煙で覆い隠される。

しかし効果はあった。

随伴車輛は隊長車への一点集中に虚を突かれたのか一斉にブレーキをかけ、隊長車を守るように陣形を整え直し始めたのである。

「やった…!?!」

エリカはペリスコープの向きを、カリンカ車を覆う土煙に回した。くどいようだが殲滅戦ルールなので、隊長車撃破＝勝利ではないが、それでも心理的ダメージは大きい筈だ。

が、やはり現実は甘くなく、すぐ前を走っていたT-44は砲身を破壊され車体のあちこちから黒煙を噴き上げながら白旗を上げて擱座していたが、カリンカ車は撃破されていなかった。

恐らく巻き込まれたT-44が壁となって砲弾を何発か吸収したのだろう。

カリンカ車も履帯が千切れ飛び、車体後部の燃料タンクが直撃弾で引火して炎上しており、見た目は派手だがIS-3の防御力は伊達では無かった。

「うーん。ダメみたいですね…」

赤星が残念そうに歯噛みしたが、

「休まず撃ち続けて!」

エリカが更に砲撃を集中させた事で、防御力の高いIS-3が正面に立ちほだかり、T-44が左右に寄り添うようにしてカリンカ車を守った。

相手も撃ち返してきたが、近距離での撃ち合いに耐えかねたらしく、発煙弾をカリンカ車の周囲に投射して目隠しした。

こちらにも撃てなくなるが、相手側もそれは同じである。

3時方向から詰めて来た敵6輛も砲撃で牽制されてそれ以上は近づいてこようとせず、距離を取つての撃ち合いに留まっていた。

「この間に川を渡り切るわよ」

エリカ達は煙幕の外側にいる敵戦車との撃ち合いを続けながら川

の中を後退し、やがて駆逐戦車隊が待つ対岸に逃れる事に成功した。しかし無傷では済まず、ティーガーIIが1輜とパンターが2輜撃破されてしまった。

敵戦車隊の監視に自チームのIII号戦車と、フロンティア学園のハリーホプキンスとルノーUEを残すと、エリカは態勢を立て直す為に残った味方車輛を引き連れてその場を離脱したのだった。

損害はこちらの方が大きかった。

続く

チャプター8 意見具申

その後、黒森峰女学園とフロンティア学園の連合チームは、模擬市街地に向かって移動を始めた。

模擬市街地とは言い上、高層ビル等の現代的な外観の建物は建っておらず、一昔前の街をイメージしたような建物や道で構成された場所であり、全体的に前後に長い土地の片側が街をなぞるようにして川が流れ、幾つか橋が通されている。

一方イズベスチャ社のアグレッサチームも、隊長車の修理を終えると行動を開始し、後を追って川を渡った。

両軍の再激突が時間の問題となる中、観客席ではフロンティア学園からの一般見学者の1人が先の戦闘についてじつと考え込んでいた。

その人物は、フロンティア学園の戦車道チームに義援金と敷地の提供を検討してもいいと表明した女性だった。

「どうしました?」

と、野島船長がその女性の様子に気付いて後ろから声を掛けると、女性はおもむろに振り返り、

「今凄く悩んでいるのですが…」

「何をですか?」

「さっきの戦い、うちのチームが足を引っ張りましたよね?」

「え? ああ…待ち伏せがばれた事…ですか?」

「ええ」

と、女性は首肯した。「いや、確かにその…駆け出し?のチームなのは分かっているのですが…その後の事を考えると…私の中で不安が出て来まして…」

「と、言いますと?」

あくまで冷静に野島船長は先を促すが、内心は女性が何を言い出すか予想出来ていて気が気でなかった。

自分の孫が所属するチームにもしもの事があつたらと思うと、祖父としては気に掛かるものである。

「戦車道のチームとして、果たしてこの先うまくやっていく事が出来

るのかどうか…しかも隊長って…お聞きしたところでは未経験者だとか…」

野島船長が国崎、土橋、萩原の方に顔を向けると、土橋がそれに答えた。

「はい。確かに仰る通りですが…」

「後で経験者が入って来た事は本当ですか？」

「はい。それも仰る通りです」

「ではどうして、その人に隊長を任せなかったのですか？」

「いや、それは…今の隊長がこのチームを立ち上げたからです」

それについては女性も納得したように「あく」と頷いたが、

「でもやっぱりこの先がなんだか不安なので…義援金と敷地の提供について再検討せざるを得ないと…」

「いや、井上さん。ミスは誰にでもある事では？」

と、野島船長が待ったをかけたが、井上と呼ばれた女性はまだ悩んでいるようだった。

「私としてもいきなり取り下げるのはあれなんです…」

「少し宜しいでしょうか？」

落ち着いた声が別方向から割って入り、一同がそちらを見ると、立っていたのは黒森峰女学園の現隊長、西住まほだった。

「あなたは…黒森峰女学園？の…」

「はい。隊長の西住まほです。赤の他人が口出しするのは気が引けますが…」

と、まほはそう前置きした上で、「確かにあれは致命的なミスですが、その後、あなた方のチームの隊長がどうするかを観察してみても如何でしょうか？」

「西住隊長は…確信と言うか、予感があるみたいですね」

そう言ったのは国崎だった。

まほの言動の響きと佇まいから敏感に感じ取ったようだ。

まほは国崎を見た。

「ええ。昨夜に隊長の塚野さんにお会いして少しお話した時もそうでしたが、さっきの戦いで見せた姿勢からそう思いました。塚野さんな

ら、もう何か策を講じているか、あるいは考えている最中かもしれない。このまま済ませるとは、到底思えません」

「確かに黒森峰の戦車を先に逃がそうとしてたなあ」

と、土橋が言うと、萩原も何度も首を縦に振り、

「はい。私なら咄嗟にあんな事が出来るかどうか…自分が直接ミスをしたわけじゃないにしても…それで頭が真っ白になっているんじゃないかなあって思いましたもん」

「そうそう。そうだよね。私もそうなると思う」

「ですから井上さん…」

と、まほは改めて井上に体を向けた。「もう少し、待ってみてはどうでしょうか？」

井上は、初対面でこそあったが西住まほから漂う歴戦の強者としてのオーラや自信、矜持、確信を感じ取った。

「分かりました。西住隊長の言葉に従ってみます」

「市街地まで10分…ギリギリ配置につけるかしら…」

前方に姿を現した模擬市街地を見てエリカはそう呟いた。

監視に置いた3輦のうち、Ⅲ号戦車から送られてきた情報によると、アグレッサチームは数分前に行動を再開し、渡河も終えてこちらの後を追っているとの事だ。

ただ、T-44による攻撃で3輦とも追い返されてしまったので追跡は出来なくなっており、エリカは3輦とも模擬市街地に向かうよう指示を出していた。

「逸見隊長…」

塚野が話しかけて来たので、エリカは思考を中断して右を並走するレオパルトを見ると、砲塔から体を出している塚野がこちらを見ていた。

「何？」

「先程はこちらのミスで待ち伏せ場所がばれてしまって、本当に申し訳ございませんでした！」

塚野はそう言って深々と頭を下げたが、エリカは柔和に微笑んだ。

そう言えばこちら悪態を突いたが、逆にこちらが恥ずかしくなってきた。

「もう気にしていないわ。それより、私達の戦車を先に逃がそうとしてくれたそうね」

「あ、いや。あれはこつちがミスしたものですから…」

「そうだとしても、感謝しているわ。16号車と17号車のみんなも、そう思っている筈よ」

「あ、有難うございます…」

塚野は恥ずかしそうにもじもじしたが、褒められるのがそんなに珍しい事なのか、どこか挙動不審で逆にエリカは一瞬きよんとしてしまった。

「まあ、これからが大事だから、気を引き締め直しなさい。もうじき市街地に到着するから、あなた達にも協力して貰わないと」

「はい、頑張ります！」

塚野はそう言った後、まだ何か言いたそうに右手の人差し指を頬に当てて考え込んだ。

「…どうしたの？」

「その…ちよつちい作戦を思いついたんですが…」

「ん？」

エリカは興味をそそられて首を傾げた。

それから十数分後。

「…見えた。攻撃用意！」

先頭のIS-3に乗る田村副隊長はそう命令しながら、双眼鏡を左右にじっくり動かして状況を確認する。

カリンカ教官の読み通り、敵は模擬市街地に防衛線を張っている。

因みにカリンカは別行動を取っていてこの場にはおらず、今は田村がこの部隊の指揮を執っている。

「それにしても何のつもりかしら…」

田村の注意は、模擬市街地の前を横断する川より前に出て来ている、4輻の戦車の事が気になった。

左からパンター、エレフアント、ティーガーII、そしてパンターだ。
「副隊長！2時方向に別の敵戦車隊！」

双眼鏡を向けると、レオパルト、ハリーホプキンス、ルノーUEの3輦が真つ直ぐこちらに向かって来る様子が確認出来た。

田村は双眼鏡を下ろした。

「時間稼ぎかしら？配置が完了するまでの」

川向こうを見ると、ヤークトティーガーやヤークトパンターが煉瓦造りの塀で車体を隠しつつこちらに砲の狙いをつけていた。

「どうしますか？」

「右翼のT-44小隊は隊列から外れて2時方向の敵戦車を排除。あとはIS-3を前に出して前進を続行するわよ」

と、その時だった。

不意にこちらへ向かって来る4輦の黒森峰戦車がが左右に方向転換した。

「ん？」

田村が首を傾げた直後、左右に分かれた4輦の黒森峰戦車の背後の茂みに潜む、背の低い駆逐戦車の姿を認め、その事を予想だにしていなかった田村は息を呑んだ。

「撃てー！」

エリカが気合を込めて下令した瞬間、SU-100とIV号駆逐戦車3輦からなる待ち伏せ部隊がアグレッサーチームに向かって一斉砲撃をかけた。

4発中、2発がT-44に対して有効弾となり、1発はIS-3の正面を捉えたが弾道を逸らされ、もう1発はT-44の砲塔側面を掠めて行った。

「倒した!？」

有効弾を与えた1輦であるSU-100では、桐山が歓喜の表情でスコープを覗いていた。

スコープの中では、黒煙を上げるT-44が白旗を上げるところだった。

「どんぴしゃり！やったな！」

野島もガッツポーズを取り、伊関は桐山とハイタッチを交わす。

中村も振り向いて

「やったね！」

と破顔している。

「発射！」

勢いに乗った桐山が更に砲撃し、他のIV号駆逐戦車も合わせて砲撃する。

更にこの待ち伏せ部隊の存在を隠していたエリカ達4輦の戦車も砲撃をかけ、不意打ちから立ち直っていないアグレッサチームは急停止するとそのまま後退に入った。

「おっし、突っ込めえ！」

「怖すぎますって！」

塚野の命令に従いつつ、田張が文句を返す。

レオパルトとハリーホプキンスは、後退を続けるアグレッサチームの隊列の中に飛び込み、右に左に軽やかに回避しながら砲撃を加えた。

さながら逃げる草食動物の群れの中を走るネコ科の猛獣のようだが、打撃は与えられなかった。

しかしそれでもアグレッサチームを掻き乱す事に成功し、応戦しようとして砲塔を回したT-44がエリカのエレファントに撃破された。

レオパルトとハリーホプキンスは、一撃離脱の要領で突入地点とは反対側に飛び出すと反転せず、そのまま離脱していった。

「休まず撃ち続けて！」

エリカは敵がすっかり遠ざかってしまふまで砲撃を続けさせた。

漸く砲撃が止むと、塚野の興奮で上ずった声が、

「すっごいですね、逸見隊長！」

「いえ、あなたのアイデアを下敷きにしたに過ぎないわ」

塚野はエリカに、自分が思いついた作戦としてフロンティア学園の戦車隊が前に出て気を引き、あるタイミングで方向転換すると背後の黒森峰の戦車隊の一斉砲撃で敵戦車を撃破するアイデアを出していた。

エリカはこのアイデアを発展させ、先程のように川沿いに点在する
茂みを利用して4輦の駆逐戦車を待ち構えさせ、その存在を察知され
ない為にエリカ達4輦の黒森峰戦車がわざと突出し、それを援護する
かのように見せかけて市街地にヤークトティイガーとヤークトパン
ターの2輦を配置、更に遊撃隊と見せかける為にフロンティア学園の
レオパルト、ハリーホプキンス、ルノーUEを突撃させたのである。
「でもマジで効くなんて…」

「ええ。実は私も驚いているわ」

そう言った後、エリカは笑顔から真顔に戻り、「みんな、市街地に
入って。敵はすぐに戻って来るわ。次に備えるわよ」

続く

チャプター9 贈り物

「そろり…そろり…」

カリンカはT-70軽戦車の狭い車内で一人そう呟いていた。

「カリンカ隊長。こちらの侵入は気付かれていないようです」

操縦手がペリスコープを回して周囲の様子を窺いながら言った。

「上々ね。じゃあ、ちよつくらいたずらタイムといきますか」

そう、カリンカはIS-3からT-70に乗り換えて、自分だけが知っている小道を通って、模擬市街地に単独で忍び込んでいたのだ。

田村副隊長達が不意打ちを食らって一時撤退に追い込まれたのはちよつと意外だったが、そういう事態も織り込み済みではあった。

「ふふ、あの子達の未来は明るいわね」

カリンカは不敵に微笑みつつ、「でもここまでよ」

その直後、カリンカは交差点を通って行ったハリーホプキンスとルノーUEを発見した。

どこかに配置につこうと急いでいるのだろうか。

「こちらカリンカ。侵入ポイントまでどれくらい？」

『あと数分下さい』

「了解。じゃあ、先に行ってるから、到着したら予定通り行動して」
『分かりました』

カリンカは通信を切ると、

「じゃ、まずはあの軽戦車2輦から」

「了解」

「こちら大地！広場に到着しました！

「こちら佐伯。同じく広場についたわ」

「オツケー。んじゃあ敵に注意ね」

「りようか…」

瞬間、ハリーホプキンスが被弾して白旗を上げた。

「え、何!?何が一体!？」

突然の事に動揺した佐伯が右を見た瞬間、こちらに砲口を向けるT

—70が真横に滑りこんできた。

事態が飲み込めず、佐伯は口をぽかんとさせた。

「…なんて顔してるのよ」

カリンカは思わずぷつと噴き出したが、容赦なく45mm砲でルノーUEを弾き飛ばした。

「こちら大地！T—70にやられました！ルノーも同じです！」

「は!?!どゆこと!?!」

エリカは瞬時に事態を察知した。

「敵に侵入されたわ！他にもいるかもしれないから気を付けて！」

しかしエリカの警告も空しく、

『こちら3号車、T—70に撃破されました！』

『こちら6号車、自分が追いかけます！』

「待って！持ち場を離れないで！」

『あ、すみません！』

塚野はどういうわけか、自分が何をすべきか分かっていた。

「逸見隊長！うちでT—70を倒します！」

「頼んだわよ！こっちは敵の本隊を食い止めるから！」

「りよーかい！ノイジーもおなしやす！」

「あいよ」

レオパルトはティーガーIIやSU—100と分けられると、模擬市街地の中に入って行った。

味方からの通信に従って曲がり角や交差点を右に左に方向転換を繰り返すと、大通りを悠々と走るT—70を発見した。

「いたぞおーいたぞおおおおおおおおおお！」

塚野の叫び声と同時に50mm砲がT—70に向かって火を噴くが、T—70は軽く右に車体を捻って回避した。

妙に余裕を感じさせる動きだが、その答えは砲塔ハッチが開いた時に判明する。

顔見せしたカリンカが、塚野に向かって人差し指と中指をくっつけた右手のポーズで投げ敬礼してきたのだ。

「食らえー！」

再び鹿屋は砲撃したが、またもT-70は軽い身のこなしで砲弾を交わすと、そのまま交差点を左に方向転換していった。

「待あちやがれええええええ！」

煽られた塚野は、何が何でもカリンカのT-70を撃破してやろうと決意を固め、「たばりん！絶対逃がさないでよ！」

「任せてくださいー！」

田張も操縦桿を握る手に力を込める。

が、T-70はこちらに撃ち返してきながら左右にふらふらと蛇行運転して模擬市街地内の入り組んだ道路を縦横無尽に逃走する。

「当たらないよー！」

「弾切れまで撃つちやえー！」

「絶対当ててやるー！」

「残弾管理はしっかりね」

と、村江が釘を刺したが、懸念が膨らむのを感じざるを得なかった。「どこから入って来たのかしら…」

「敵集団、再度正面から迫ります！」

「砲撃用意！もうこれ以上1輛たりとも侵入させられないわ！」

「はい！…でも、一体全体、T-70はどこから入ったんでしよう？」

村江と同様に赤星も首を傾げたが、エリカにも検討がつかなかった。

「…分からないわ。でも小柄な車体を活かして姿を隠しながら侵入してきたのかも。私達は敵がIS-3とT-44だけと思っ込んでいたのも盲点になったのかもしれないし…」

「他にも来ている可能性があるのでは？」

「それに備えて配置させているわ」

「そうですね」

やがて正面の敵戦車隊が射程圏内に入り、砲撃戦が始まった。

しかし30秒も経たないうちに、

「こちら16号車！背後からT-44に撃破されました！」

「こちら17号車、こちらもやられました！すみません！」
「くっ、やられた…！」

エリカは歯噛みしたが、それと同時に厳しい訓練で沁みついた思考で、「敵は何輛!？」

「2輛です！2輛侵入した模様！」

その後も次々とT―44発見の報告や撃破された報告が矢継ぎ早に送信されて来た。

「隊長！このままでは…！」

赤星がそう言っている間にも動揺がチーム内に瞬く間に伝染しており、砲撃がまばらになって統制が取れていない。

「防衛線が崩れてかけているわ」

田村は防衛線の綻びを見て取り、全車両を増速させると市街地との距離を一気に詰め始めた。

「見失いました…」

「ちっ。どつか隠れてんじゃない？」

そうは言ってみたものの、塚野は周りを見回しながら途方に暮れた。

おまけに通信を聞いた限りでは市街地にT―44が更に2輛侵入してきたという。

あまり夢中になって追いかけていると、どちらかに出くわして撃破されてしまうリスクもある。

レオパルトの50mm砲では、T―44相手に分が悪い。

『こちら隊長！市街地を放棄する！繰り返し、市街地を放棄する！』
『うっそ…立てこもって何分よ!？』

その時、愕然とする塚野の眼前を攪乱作戦を取っていたT―44の1輛が素通りしかけて急停止し、少しバックしながら砲塔をこちらに向けようとしてきた。

塚野は一瞬反応が遅れたが、

「…やっぱ！逃げて逃げて！」

田張は緊張のあまり、思わずレオパルトをT―44の射線上を横切

るコースを取ってしまったが、相手もまさかそんな行動を取って来るとは思っていなかったようで発砲が遅れ、砲弾は幸いにしてレオパルトのすぐ後ろを通過しただけで命中はしなかった。

「追ってきてる？」

村江の言葉に塚野が振り向くと、さっきのT-44が転回しながらこちらを追いかけて来ようとしているのが見えた。

「来てる来てる！マジやばいんだけどお！」

「来ないでー！」

鹿屋が1発放ったが、T-44の傾斜した正面装甲は50mm弾を余裕で弾き返した。

「そこ左！」

「はい！」

田張も夢中でレオパルトを操作し、道路を左に折れた直後にT-44の砲弾が建物の角に当たって破片を撒き散らした。

「次また左！」

「はい！」

が、次に曲がるまで30m程の距離があり、T-44は再び曲がられる前に仕留めようと思ったのか、停車して慎重に砲塔を動かして砲の狙いを付け始めた。

「えつとお、えつとお…やっぱ左に見せかけて右！」

「わ、分かりました！」

しかしその前にT-44はこちらをターゲットロックしたようだ。

砲塔と砲身の動きがぴたりと止まる。

直感でやられると思った瞬間：

T-44の背後にティーガーIIが現れ、そのまま曲がって来た勢いでこのT-44に後ろから体当たりした。

約70トンの重戦車に約32トンの中戦車はひとたまりもなく突き飛ばされ、直後に発射された砲弾は右側の建物の壁にめり込んだ。

体勢を立て直す間もなく、T-44はティーガーIIに車体後部を撃ち抜かれ、白旗を上げた。

「ストップストップ！」

塚野はレオパルトを停止させ、自分達を助けたティーガーIIのハッチが開けてエリカが顔を出すのを見た。

「あなた達、大丈夫!？」

「は、はい！ピンピンしてますー！」

「OK！一緒について来て！街を出るわよー！」

「了解！」

田張はレオパルトを道路の中で巧みに旋回させて向き直ると、走り出したティーガーIIの後を追った。

因みにティーガーIIの後を赤星のパンターと、生き残っていたヤークトパンターの2輜が続いているようだ。

レオパルトはヤークトパンターの後ろについた。

しかし市街地は既に包囲が始まっており、川とは反対側に出て来た瞬間、待ち構えていたIS-3やT-44の砲撃を受けてエリカや塚野達は市街地内に押し戻される結果となった。

強行突破しようとして撃破されたらしい、パンターやヤークトパンターが擱座して白旗を上げている姿があちこちに見られ、押し戻された市街地内を走り回っている間にも次々と被弾白旗の報告が入ってくる。

ただ、SU-100からはまだ何も報告が入って来ない…生き残っているのだろうか？

「残ったのは私達だけみたいですよ…！」

と、赤星が元気の無い声で言った。「隊長…どうしますか？」

しかしエリカは毅然として、しかし優しい声で応じた。

「何言ってるのよ赤星。最後まで抵抗するわ。黒森峰は最後まで諦めない。そんな風に黒森峰は…私達は西住隊長に育てられた覚えは無いわ！」

エリカの激励を聞いて、赤星の表情が力を取り戻し、目元がキリッと引き締まる。

「…はい隊長！」

「黒森峰の力、もう1度思い知らせてやりましょう！」

それから塚野を見て、「あなた達もね…フロンティア学園の隊長さ

ん」

「うっしーやってやりましょかあ！」

塚野は右腕に力こぶを作ろうとしたがあまり様にならず浚面を浮かべた。

「残敵確認！・追撃します！」

とある交差点を通過したレオパルトを見つけたIS―3が後を追いつ始めた。

近くにいたT―44も2輜加わる。

交差点を左折しようとした瞬間、通過して行った筈のレオパルトがIS―3の脇を掠めるようにして通過していった。

慌てて後続の2輜のT―44が道を塞ごうとするが、間一髪ですり抜けられてしまう。

「小癩な真似を！」

IS―3の車長はすぐに転回して追いかけるよう指示する。

交差点を抜けて横道に入ったレオパルトの後を追いかけて、最初にT―44が横道に入った。

が、このT―44は先にあるものを見て急ブレーキをかけて後退しようとした。

横道の出口で待ち構えてたヤークトパンターは、罠にかかったT―44の正面に、ティーガーIIやエレファントと同じ71口径88mm砲の弾丸を叩き込んだ。

バックの途中だったT―44は、車体と砲塔の隙間に被弾して白旗を上げた。

「T―44一輜撃破！」

ヤークトパンターの車長が冷静に、しかし高揚した口調で報告した。

後ろに下がって道を開けたヤークトパンターの足元を、レオパルトが慎重に通過する。

「ナイスショット！」

と、塚野が手を振ると、ヤークトパンターの車長も手を振り返した。

『さて、もう一発行くわよ!』

エリカの声がそう指示して、レオパルトとヤークトパンターはその場を離れ、途中でティーガーIIとパンターと合流した。

「逸見隊長、そっちはどうでした?」

「仕留め損なつたわ」

そう塚野に答えた直後、正面にさっきのIS-3とT-44が姿を現した。

更に背後から別のT-44が飛び出して来た。

「散開!」

もう1度さっきのペアに分かれて逃げようとしたが、ヤークトパンターが122mm弾を側面に浴びて擱座した為、レオパルトが孤立してしまった。

「ヤークトパンターがやられました!」

赤星の報告にエリカはギョツとしたように振り返った。

「塚野さん!こっちに合流出来る!」

「あー、無理ですわこれ!適当に逃げときます!」

「中央広場で合流で良い!」

「りようかい!」

「:何だか楽しそうですね」

と、赤星が今の通信の感想を述べると、逸見は自分でも場違いに思う程に笑い声を上げた。

「そうですね。でも私も何だか楽しいわ!」

「奇遇ですね。私もです!」

「じゃあ、中央広場に急ぐわよ!」

「了解!」

先に中央広場に辿り着いたのはレオパルトだった。

ティーガーIIとパンターの姿はまだ見えない。

「こちら塚野!中央広場に到着!」

『もうすぐだから頑張つて!』

そこへ残敵掃討の最中のIS-3が現れ、こちらに気付いて砲口を

向けて来た。

続けて右に気配を感じて目を転じると、T―44が、更に左にもう1輦のT―44が現れた。

どちらもこちらに気付いて砲塔を旋回させる。

レオパルトは囲まれていた。

「あの一。今すぐSOSですう…」

『…え？』

エリカが聞き返した直後、IS―3が一瞬前につんのめり、後部から黒煙を噴き上げながら白旗を上げた。

左右のT―44も、レオパルト以上の脅威を察知してこちらに注意を向ける。

そして今しがた倒されたIS―3の横を通って現れたのは…

「うわお、ノイジー生きてたし！」

車長用キューポラから顔を出していた野島が、無線機が壊れているという感じのジエスチャーをした。

中央広場に入ろうとするSU―100を2輦のT―44が狙うが、駆け付けて来たティーガーIIとパンターが1台1殺で仕留め、SU―100と共に中央広場に合流する。

「ふう、間に合った！」

エリカはティーガーIIを、レオパルトの隣に前後逆になる形で停車させた。

赤星のパンターは、レオパルトの右から攻撃しようとしていたT―44の残骸を盾にするようにして配置につく。

SU―100もやるべき事を心得ているのか、赤星のパンターが砲を向けている方向と反対側の方向に主砲を向けて配置につく。

「SU―100、生きていたのね」

「無線が壊れてるみたいです」

「なるほど。それで」

「これからどうするんです？」

塚野の疑問に答える代わりに、周囲にIS―3やT―44、更にカリンカの乗るT―70が現れ、両者は睨み合うように暫し対峙した。

「ふふ。決まってるじゃない」

と、エリカは不敵に微笑んだ。「撃って撃って撃ち結ぶのよ！かくなる上は1輦でも多く道連れにしてやるわ！」

その言葉が合図かのように、アグレッサチームが包围網をじりじりと狭め始め、砲撃してきた。

残存4輦の周囲に砲弾が落下する。

「撃てっ！」

エリカの号令一下、黒森峰女学園・フロンティア学園連合は最後の抵抗を試みた。

もはや戦局を引つ繰り返せない、敗北が決定的な状況だったが、4輦は戦意を失う事無く応戦を行った。

途中、T-44を更に3輦撃破してみせたが、引き換えにこちらもSU-100、赤星のパンターと次々撃破され、残るはレオパルトとティーガーIIだけとなった。

しかし、塚野やエリカ、そして乗員達の表情に浮かんでいたのは敗北や屈辱感では無く、満足感だった。

やがてティーガーIIが田村のIS-3に撃破され、回り込んできたT-70がレオパルトの側面を取って45mm砲を突き付けてきた。

すると塚野は、カリンカが先程自分達にしてきた、くつつけた人差し指と中指の投げ敬礼を返した。

「ちーっす」

直後にT-70がレオパルトに止めを刺し、試合はイズベスチャ社の勝利に終わった。

『イズベスチャ社アグレッサチームの勝利！』

蝶野のアナウンスが終わると、観客席は万雷の拍手と歓声に包まれた。

あの井上という女性も、懐疑的な姿勢と打って変わって惜しみない拍手をモニター越しのチームに送り届けていた。

「負けたけど…凄かったね…」

土橋は良い意味で呆けた顔で、ラップトップコンピュータのキー

ボードの上に指を置いたままだ。

そのうちの1本が、無意識に句読点のキーを押さえ続けて連打状態となっている。

「これは…間違いなく良い記事になりますよ…!」

報道部らしい感想ながら、萩原も興奮を隠しきれない様子だ。

土橋は脳内で、萩原の頭から黒煙が濛々と噴き上がっている様子を漫画の一コマとしてぼんやり想像していた。

観客席が熱狂に包まれる中、少し俯き加減に考えていた様子の西住まほが静かに立ち上がり、立ち去って行くのに気付いたのは、国崎ただ1人だった。

試合が終了してから30分後、黒森峰の戦車が運び込まれた格納庫前で、塚野は思わぬ申し出を受ける事となった。

「え…本当に貰えるんですか!?!」

「ああ。どうだね?」

「も、勿論、貰います!有難うございます!」

まほは修理中の戦車…レオパルトを振り返った。

試合におけるレオパルトの活躍、黒森峰チームとの連携プレーに感銘を受けたらしい。

「最初は冷や冷やしたが、後半は良かった。まあ…市街地に侵入を許したのは反省点だがな…!」

「すみません、隊長。私が迂闊でした」

副隊長に『復帰』したエリカが頭を下げたが、

「まあいい。最大の目的は、『連携』だったからな。今回は大目に見てやろう」

「でも、本当にいいのですか?レオパルトを貰っても…」

「ああ。どのみち、我が校では使わないし、連盟に譲っても買い手がつくまで出番があるわけでもなし…それなら君達に使って貰うのが良いと思っいな」

「では…申し出をお受けします!」

「レオパルトの事、頼んだぞ」

まほは頷いて見せると、「まあ、また連盟に話をつけに行かねばならんがな」

その後、まほの口添えもあり、レオパルトをフロンティア学園に譲渡する事が日本戦車道連盟に承認されたのは言うまでもない。

更に井上という女性からは義援金と敷地の提供も正式に決定され、フロンティア学園戦車道チームは更なる高みを目指して前進する事が可能となった。

だがそれは同時に、より厳しい試練が待ち構えている事も意味していた。

〈第3話・終〉

第4話 予選リーグ チャプター1 エントリー

イズベスチャ社での練習試合から数日後のフロンティア学園の週末。

ここは、塚野達の奮闘ぶりに感銘を受けた井上という一般見学の女性から提供された敷地である。

特別大きくは無いが、駐車場ぐらいにしか役に立たなかった、校舎内の戦車道チーム用のスペースと比べると格段に余裕があり、ここに移動させてきた戦車達も、これまでのすし詰め状態から解放されて心なしかゆったりしているように見える。

その一角に建つ元倉庫の建物の中に置かれた折り畳み机の前に立つ野島が、携帯電話を開いて表示された時刻を確かめた。

野島の他にもフロンティア学園戦車道チームの面々がいるが、隊長の塚野の姿が見えない。

「おせえな…」

その時、慌ただしく走る音が近づいてきて、野島は顔を上げた。

他の隊員達も音の方向に顔を向ける。

息を切らしながら走って来るのは、塚野、土橋、萩原の3人だった。

「おい、早くしろ!」

野島が3人に向かって腕を振りながら怒鳴る。

倉庫に飛び込むと、

「いやあ、遅刻遅刻!」

「ごめんね!遅くなっちゃった!」

「すみません!」

「隊長が何やってんだ」

「ちよつと寝坊しちゃってさあ」

本当はちよつとどころか30分遅れなのだが、野島は敢えてそれに触れず、

「ツツチー、眠そうだけど大丈夫か?」

トレードマークのラップトップコンピューター入りのリュックサックを背負った土橋の目は実際腫れぼったく、目も血走っていた。

「いやまあ。ギリギリまで取材メモを纏めてたからねえ」

「どう？黒森峰は楽しかったかしら？」

村江がそう尋ねると、眠そうな土橋の表情が一瞬で生氣を取り戻す。

「ええ、勿の論！滅多に出来ない経験だし、取材も捗った感じ！」

「土橋さん、すっごいはしゃいでましたもんね」

土橋の横で萩原が苦笑する。「塚野さんとか羨ましがってましたし」

実は塚野、土橋、萩原の3人は、あの練習試合後にダメもとで黒森峰の西住まほ隊長に見学と取材を申し込んだところ、それならばという事でなんと学園艦に招待を受けたのである。

当然、3人は即座に飛びついたのだった。

そういうわけで、明け方になると3人は黒森峰に同行する形でチームと分かれ、暫く黒森峰女学園の学園艦を訪問する事になった。

塚野はまほとエリカ他数名の幹部と共に、今回の練習試合に関する解説に耳を傾け、萩原は記事用のネタとして、土橋は戦車道漫画を執筆する上での情報を求めて、黒森峰の学園艦に戻る道中でもメンバー達に質問攻めを浴びせて貪欲に情報収集を行った。

メンバーそれぞれの戦車道を始めた動機、経歴、お気に入りの戦車、逆に苦手な戦車、更には好きな食べ物や趣味、マイブームに至るまで徹底的に情報を吸い上げたものである。

まあ勿論、あまり話したがらないメンバーもいたので、そこは素直に引き下がったが、黒森峰側としても割といい刺激になったようで、例えば土橋がレオパルト軽戦車のスケッチをプレゼントした赤星小梅は取材に最も長時間応じてくれたメンバーだった。

おかげで土橋と赤星は個人的に連絡先を教え合うまでに仲を深めたのであった。

塚野も限られた時間の中で学びを深め、吸収していった。

3人がフロンティア学園に帰って来たのはつい一昨日だが、土橋と

萩原は学業と戦車道活動をこなしながら取材で集めた膨大な情報を整理するとなると睡眠時間を削らなければならなかったようだ。

黒森峰女学園での取材奔走に加え、徹夜の情報整理が連日続いたものだから睡眠不足の影響が目に出るのも無理はない。

塚野は単純に疲労でぐっすり眠り込んだだけのようである。

「こちらも色々聞きたい事はあるけれど、まあニュースに間に合って良かったわ」

村江がそう言いつつ、テーブルの上のポケットラジオを取ってスイッチを入れた。

フロンティア学園には放送部の専用ラジオチャンネルがある。

これは生徒会が認可したもので、周波数を合わせれば艦内のどこでも聴く事が出来るようになってる。

塚野は事前にこの周波数にチャンネルを調整していたので、ラジオを起動して数秒後にニュース開始を告げる電子的なセコンド音が鳴った。

最後に長いピーツという電子音が鳴ると、ニュースが始まった。

『放送部のフロンティアニュースです。今日は晴れのち曇り、海も風いでいて絶好の航海日和です。それでは早速、今朝のニュースです』

物静かな口調の声の主が言い終わると、別の声の主がニュースをハイテンションな口調で読み上げ始めた。

『ハローーじゃ早速、1つ目のニュースですよ！なんか今年の2学期からスタートした戦車道なんですけど、なんとなんと驚いた事に、今のところ順調みたいです！あーでも、でもでもですねえ、このような大きな試みが成功した例は非常に少なくても少なく、なんかここ10年はゼロ！皆さんいいですか！ゼロみたいです！ワオ！んまあ、それはそうと、はたして10年ぶりに我が校の歴史に新たな1ページが刻まれるかどうか、今後も注目していきたいところなんですけど、さあさあ戦車道チームの運命や如何に！』

そして再び最初の物静かな口調の声の主にバトンタッチされ、フロンティア学園に関する話題は終わりを告げた。

『それでは、次のニュースです』

村江は素っ気ない動作でハンドサイズのポータブルラジオのスイッチを切った。

「…の、ようね」

「…言ってくれるじゃんねえ」

塚野が不本意そうに口を尖らせた。

「あの妙にハイテンションな人って誰なの？」

村江の疑問に萩原が答える。

「放送部長の羽佐間さんですね」

「羽佐間さん？」

「はい。最近、あの調子のニュースで注目を集めているみたいです」

「あまり嬉しそうには見えないわね」

「実は私たち報道部と放送部は張り合っています、どっちが人気を取れるか競争しているんですよ」

「いきなりインパクトなデビューしたよねー」

鹿屋がポータブルラジオに手を振りながら言った。「最初聞いた時ビックリしたよー」

「にしても、どっちかってえと…うまくいかないって思ってたやがるな」
「でもギャフンと言わせてやっからさあ」

野島の感想が切っ掛けとなって、塚野は本題に入る。「予選リーグのグループ表が送られてきたよお」

そう言いながら土橋からラップトップコンピュータを受け取り、みんなにモニターが見えるようにくりりと回す。

画面は日本戦車道連盟の公式サイトの子選リーグに関するページで、『第64回 戦車道 全国高校生大会 予選リーグ グループ表』と表記されたタイトルと数行の説明文の下に、4つの塊に分けられている文字の羅列群の内、上から2番目を指すと全員の視線がその先に集まる。

「うちらはここだったて」

「B集団…か」

野島がそう呟きながら、目を上下に動かしてフロンティア学園の他にB集団に入っている高校名を読んだ。

高校名は頭文字のあいいうえお順で並んでおり、フロンティア学園は4番目だった。

4つあるグループ、もとい集団はそれぞれA、B、C、Dと銘打たれており、4校ずつ割り振られている。

「青師団高校、エクセルシオール大学附属学院…うちらとばしてバラトン工業高校…」

一通り高校名を聞いた村江が喉の奥で小さく唸り、鹿屋が村江の様子に気付いた。

「どうしたのー?」

村江は鹿屋をちらと一瞥してから周囲を見回した。

因みにこの場には現在、大地、佐伯、田張、安藤4人が所用で欠席しているが、予定通りなので問題は無い。

「なかなかハードね。強敵が2校、実力不明が1校だわ。そのラップトップ、こつちに貸して貰える?」

村江は塚野から押し出されたラップトップコンピューターを回し、1校1校を指差して説明する。

目の奥は色々と思案している事が窺える、鋭く真剣そのものだ。

一同が息を?んで耳を傾ける中、村江は一呼吸吸って説明を続ける。

「青師団高校…ここは全国大会の常連校よ。スペイン系の高校で歴史もそれなりに古くて、チームはドイツ、ソ連、スペインの戦車で構成、台数も充実しているわ。まあ、黒森峰みたいに重装甲では無いけれど…強力な主砲を持つ戦車もいるわ。こちらの戦車を正面から撃ち抜けるくらいの主砲をね」

「それってSU-100くらいの?」

倉庫の中からも見えているSU-100を見やりながら質問する塚野に、村江は首を横に振った。

「いいえ。そこまでじゃないけれど…そう…大洗のIV号戦車並みの火力ね」

「あれかあ…」

塚野は、自分が戦車道をスタートする切っ掛けとなった今年の全国

大会決勝戦の決着シーンを思い出していた。

大洗女子学園のIV号戦車が、黒森峰のティーガーI重戦車の背後に回り込んだ映像だったが、ティーガーIの主砲には見劣りするものの、IV号戦車の主砲も確かに強そうだった。

「なに、SU-100で迫り来る敵戦車を片っ端から粉碎してやりますから！」

SU-100の砲手の桐山が気合十分に言うが、村江は言い含めるように注意を促す。

「とにかく、侮れない火力よ。経験値でも差があるから、相当気を付けて戦わないと…冗談抜きに瞬殺されるわ」

「あーそっかあ。確かフラッグ戦？だったっけ」

「ええ。フラッグ戦よ」

塚野の言葉に村江は首肯した。「ルールは覚えているかしら？」

「ういっす。チームの1台にフラッグを付けて、そのフラッグを付けた戦車がやられたら負け…だったっけ？」

「そう。だから試合開始直後にフラッグ車を一瞬で潰される可能性もあるから、気を付けないと…まあ、青師団に限らず、だけれど…」

「なるなる。んで、エクセルなにがしも強敵枠？」

「いいえ。ここは未知の枠よ」

村江は青師団高校の下に記載されているエクセルシオール大学附属学院に指を移した。「私もここは初めて見る高校よ」

「むらっちも知らない事あんだねえ」

「他にも知らない高校があるわ」

エクセルシオール大学附属学院の話題を一端置いて、村江は他のグループに指を動かす。「A集団は…エンタープライズ高校とエンデバー高校、それにホライゾン高校、C集団は羊の丘学園に名誉高校、D集団は…ええと…ケルヴィン産業高校とコクレーン航空高等学校が知らない高校ね」

「…結構知らないの多くね？」

「うるさいわね」

村江は軽く塚野を睨みつけたが、すぐに平静さを取り戻す。「…多

分だけれど、私達みたいに新参校が続々と名乗りを上げた可能性があるわ」

「政府の戦車道人材育成プロジェクト、が関連しているのでしょうか？」

と、萩原が村江の言いたい事を言葉にすると、村江は感心したように頷きながら、

「さすがは報道部ね。久々に予選リーグが開催されたのも、戦車道の新参校が増えたからかもね」

そう、戦車道運用高校の減少に伴い予選リーグの開催が停止されていたのだ。

しかし萩原が言及した日本政府の戦車道人材育成プロジェクトに呼応して戦車道を新規設置する高校が増えた為、予選リーグが復活する運びになったのである。

2年後のプロリーグ開催に向けて、政府は既存の高校に加えて新たな人材育成にも着手する意向であり、その為の予算枠も作成していた。

予選リーグ出場の要素としては、過去の実績が判断基準となり、歴史を持つ戦車道設置校でもボーダーラインを下回ったり今年の第63回全国大会における成績等が芳しくなかったりすると、運悪く予選リーグ出場が決まってしまうルールとなっていた。

なお余談だが、過去に戦車道をやっており戦車が学園艦中に放置されていたとは言え、メンバーが一新されてゼロからスタートも同然の大洗女子学園が今年の全国大会にエントリー出来たのも、予選リーグが停止状態にあったからこそである。

さて、村江は最後の高校の説明に入った。

「で、バラトン工業高校だけれど、ハンガリー系の高校で、ここもそれなりに歴史が古い高校よ。全国大会の常連ではないけれど、ここも侮れない相手よ。戦車はハンガリーやドイツのもので構成されているけれど…確かハンガリー戦車で統一するという計画を聞いた事があるわ」

「ええと、ハンガリー戦車って強いのか？」

「まあ…ドイツ戦車ほどではないけれど…侮れないスペックよ。後でハンガリー戦車を紹介するわ」

「サンキュー」

「でさ、予選リーグってよ」

野島が言った。「確かグループそれぞれ勝ち点が上位2校が全国大会の出場権を貰えるんだったよな？強敵2校相手ってなったら1勝出来るかどうかも怪しいんじゃないかねえのか？エクセルシオールもどんな相手か分かんねえって言うし」

予選リーグは自分以外の3校と1回ずつ戦い、勝利すれば勝ち点を獲得し、その数が多い2校が第64回全国大会の出場権を獲得するルールとなっている。

上位1校にしなかったのは、既存校だけでなく新参校も出場できるチャンスを増やそうと言う考えからだろうか？

「ノイジー。試合する前から弱気でどうすのんさあ」

「油断は禁物だろ。あとさ、おめえ中間テスト大丈夫か？予選リーグって中間テストの真っ只中だろ確か。間に食い込んでるだろ」

『中間テスト』というワードに塚野の心臓がドキリと脈打ったのは言うまでもない。

忘れてはならぬのが、塚野が戦車道を始めたそもその切っ掛けは退学回避の為の成績点稼ぎであり、それも定期テストの成績と何らかの活動の評価点を合算した数字で初めて可能な話なのである。

…即ち、定期テストの成績も当然高得点でなければならぬのだ。

もししくじれば…退学が待っている。

「え、大丈夫だし。うん」

「おめえの成績で良い科目見た事ねえぞ」

「いやだから、ちゃんと勉強してるし！」

強がってみたが、やはり不安を隠し切れるものではない。

「ああ。隊長は…そうだったわね」

塚野と野島のやり取りを見た村江も、イズベスチャ社での喧嘩を思い出したようだった。「まあ、普通に勉強やっていたら問題無いんじゃないの？」

「ま、まあね…」

「…まあ、もし不安なら勉強教えてあげるから、遠慮しないで言つてね」

「じゃーそれなら佐伯ちゃんもいいかもねー」

「そうなの？」

村江が鹿屋に顔を向けると、鹿屋は何故か自信満々な表情だった。

「うちもよく教えて貰ってるんだよねー。あと宿題も見せて貰ったりとかー」

「それ自慢する事かよ」

「前途に広がるは茨の道…」

さつきから頭をこっくりさせていた土橋が、ぽつりと消え入りそうな声で呟いた。

眠気を必死にこらえてはいるが、どうも限界そうだ。

「漫画の一節？」

「うんスズやん。私の漫画の一節」

「つーかよ、眠いなら無理すんなよ」

「大丈夫だよカエデちゃん…大丈夫…」

そう繰り返しながら土橋の目がとうとう固く閉ざされ、間もなく規則正しい息遣いになりだした。

立ったまま眠るとはなかなか器用だ。

「まあ、寝かせてあげよっか」

とうとう眠気に屈した土橋をパイプ椅子に座らせておいて、塚野はブリーフィングを再開し、今度は自軍の戦車の吟味に入った。

続く

「んで、あたしらの戦力は…」

直後に村江がポケットで着信バイブしだした携帯電話を取り出して画面の表示を見た後、

「ちよつとごめん。すぐ終わるから、話を続けておいて」

「タバっち？ 大地ちゃん？」

「いいえ。気にせず続けて」

村江は足取りも少し慌ただしく倉庫の外に出て行った。

「…なんだろう？」

首を捻りつつ、横並びに駐車している戦車を見ながらカウンントを再開する。「ええと…レオパルトにSU-100、ハリーホプキンスにルノーUE、カヴェンター、あとラムII…だっけ？」

ラムIIはカナダの開発した巡航戦車である。

アメリカのM3リー中戦車をベースに開発されたが、37mm砲の砲塔と車体右側に固定の75mm砲の2門態勢のリーに対し、ラムIIは特徴ある見た目の丸みを帯びた四角っぽいデザインの砲塔に6ポンド砲を搭載した戦車である。

IIとある通り、ラムI型もあるが、こちらは2ポンド砲搭載となっている。

この機体はカナダ系の高校であるメイプル高校戦車道チームが保有していたが、I型とII型合わせて数輦が放出品セールとして出品されており、フロンティア学園は打撃力が高い方のII型…もつと細かく言及すると、車体側面ハッチがある前期型を1輦購入したのであった。

理由は前期型の方が、側面ハッチが無い後期型より安価だったからだ。

購入が1輦だったのは、井上と言う女性から得られた義援金を戦車の購入費や整備費、燃料費、潤滑油費等の割り振りを考慮すると、1輦の購入で限界だった。

他にも候補となる戦車は幾つかあったが、今回導入したラムIIと同じぐらいの性能でも希少価値で異様に高価格だったり、逆にそれなりに台数が現存している戦車でも日本全国や世界各国の戦車道チームに引つ張りだこで在庫切れ状態だったり、それでいて手頃な価格の戦

車は性能的に不満があったりと、なかなかフロントティア学園戦車道チームに理想的な戦車は見つからなかったのである。

「まあそんなとこだな」

「メイプル高校、だっけ？折角自分達の戦車を売っちゃうとかさあ、なんか勿体なくね？」

「うちらには好都合だから有難く貰ったところぞ」

「でもあのサウナ戦車にはもう乗りたくないよー」

もはやカヴェンターと呼ばれる鹿屋の意見に、塚野も野島も一様に首を縦に振った。

「だよねえ。でも貴重な戦力だし…」

「んまあ、ギリギリまで棚上げかなあ」

そこへ電話が終わったらしい村江が戻って来た。

「それ以前に人手不足ですしね…」

五十嵐が物憂げに言う。「今は15人…ある程度役割を兼任させるとしても、これだと…」

「うんうん。足りないよね」

中村が後を引き取った。「鹿屋さん。募集はどうなってますか？」

「一応3人名乗り出てくれたよー。報道部の記事が宣伝になったみたいだねー」

「おかげで注目集まってる感じだし。良い感じじゃね？」

塚野がポータブルラジオをデコピンした…おでこは無いが。

「それで、誰と誰ですか？」

萩原が尋ねると、塚野がメンバーの名前を告げる。

「えーとねえ…井上サクラって子と、桑田クミって調理部の子と、大川ユリカって仕立て屋さん」

「井上って、あの井上さんと何か関係が？」

伊関の質問に、塚野は頷きながら答える。

「正解バナナ。あの井上さんの孫だって。今回の件で興味を持ったらしいよお」

「なるほど」

萩原にもまた思い当たる人物がいたようで、

「まさか大川さんが参加するとは…」

「あ、オハギ知ってたんだ？」

「はい。よくお世話になってますから」

「実はタンクジャケットのデザインも頼んでるんだよねえ。知ってた？」

「はい、それも知ってます！」

「えー、そこは知らないって言おうよお」

一方で鹿屋はもう1人の事が気になるようだ。

「桑田ちゃんよく入る気になったねー」

「ああ、あの…がめつい？商人氣質の人ですよ」

と萩原も桑田の事を知っているらしく苦笑する。「あ、でも商人のみんなをがめついとは思ってませんよ？」

どういうわけか急いで鹿屋に弁解する萩原に対し、当の鹿屋は別に気分を害した様子は無かった。

「気にしないでー。分かってるよー」

「あ、鹿屋さんってお父さんが自営業か何かの人なんですか？」

「そうだねー。金物屋やって、あちこち飛び回ってるよー」

「なるほどそれで」

中村は納得して頷いた。

「3人はいつ来るのかしら？」

と、村江が聞いた。

そう、この場にはまだ集っていないのだ。

「用事終わらせてから来るんだって」

「そう。まあそれで18名。カヴェナンターを戦力から外せばいけるわね」

ここで戦力扱いの戦車の定員を整理しておくと、レオパルトが4名、SU-100が4名、ルノーUEが2名、ハリーホプキンスが3名、そして新顔のラムⅡが5名であり、偶然にも18名がすっぽり収まる。

「んじやあカヴェは補欠つと」

塚野もカヴェナンターを外す理由が出来て安心したような表情

だった。

都合、3度あのサウナ戦車に乗り込んでいるのだから無理もない。しかしチャレンジャーがいた。

「なんとか改造して乗れるようにしますので、それまで楽しみにしていってください！」

「ホノカ、本気でやれるって思ってるの？」

怪訝そうな表情の五十嵐に対し、中村はあくまでもポジティブだ。

「機械部の腕の見せ所よ！」

「嫌だなあ……」

尾鷲がそう一人呟きながら腕時計を見て動きを止めた。「あ、そろそろじゃないですか？」

「え？ああ……」

塚野も携帯電話を起動して時間を確認した。「そろそろラムⅡ来る時間じゃん」

その時、またも村江の携帯電話がバイブし始め、画面を覗いた村江はその場で通話ボタンを押した。

「もしもし、大地？ええ、聞こえるわ……え、遅れる？分かったわ。慌てないで来て……ええ、それじゃ」

「遅れる？」

「そうみたい。事前に打ち合わせたルートが途中で緊急補修工事で閉鎖されたとかなんとか言っていたけれど……」

塚野は野島と顔を見合わせた。

2人も村江や大地と一緒に新規導入のラムⅡが、井上と言う女性が提供してくれた敷地にやって来るまでのルートの事前打ち合わせに参加しており、実際にルートの下見も行ったが車幅や道路の状態も問題は無かった筈である。

「今日も大地からラムⅡを受け取りに行く時にルートの最終確認をして貰ったけれど、その時も問題無しって連絡だったわ」

と、村江が首を傾げた。「道を間違えたとも思えないし、一体どう言う事かしら……？」

「ひよつとすると老朽化のガタかなー」

普段はマイペースで楽天的な鹿屋が、珍しく考え込む表情になっている。「最近、あちこちで緊急補修の報告が来てるんだよねー」

「100年以上の歴史ですしね…そろそろガタが来ても不思議は無いかもしれないね…」

と、萩原が言った。

「んじゃあ、そろそろ行こっか。遅れるつつつてもそんなにかからな
いっしょ」

塚野がそう言った直後、噂をすればなんとやらでエンジン音が聞こえて来た。「お、意外と早いじゃん。おーいツツチー、起きろお」

足取りがおぼつかない土橋に肩を貸す塚野と野島を筆頭にみんなが戦車を迎えに倉庫を出る中、村江は一旦立ち止まると、また携帯電話を起動して着信履歴を呼び出した。

履歴欄には、さつき連絡してきた大地より前に掛かって来た電話の相手の名前が載っていたが、そこには『毛利隊長』と表記されていた。

村江は誰か自分の動きに気付いた者はいないか一度目を上げて確認してからまた履歴画面に目を落とし、数秒経ってから何かの思考を頭の中から追い出すように溜息を吐きながら電源を落として仲間達の後を追った。

しかし村江の目に入ったのは、困惑で立ち尽くす塚野達の背中だった。

その先を見ると、意外と早く到着したと思われたラムⅡではなく、別の戦車が佇んでいた。

「LVT…？…なんで違う戦車が…？」

村江も購入した記憶が無いアメリカの水陸両用トラックター、LVT(A)(1)の大柄な車体に比して小さい砲塔のハッチが開くと、姿を見せたのは報道部長の福地だった。

続く

チャプター2 新戦力

「んで、あたしらの戦力は…」

指折りでカウントしようとした直後に、村江がポケットで着信バイブしだした携帯電話を取り出して画面の表示を見た後、

「ちよつとごめん。すぐ終わるから、話を続けておいて」

「タバっち？ 大地ちゃん？」

「いいえ。気にせず続けて」

村江は足取りも少し慌ただしく倉庫の外に出て行った。

「…なんだろう？」

首を捻りつつ、横並びに駐車している戦車を見ながらカウントを再開する。「ええと…レオパルトにSU-100、ハリーホプキンスにルノーUE、カヴェンタター、あとラムII…だっけ？」

「まあ、そんなとこだな」

ラムIIはカナダの開発した巡航戦車である。

アメリカのM3リー中戦車をベースに開発されたが、37mm砲の砲塔と車体右側に固定の75mm砲の2門態勢のリーに対し、ラムIIは特徴ある見た目の丸みを帯びた四角っぽいデザインの砲塔に6ポンド砲を搭載した戦車である。

IIとある通り、ラムI型もあるが、こちらは2ポンド砲搭載となっている。

この機体はカナダ系の高校であるメイプル高校戦車道チームが保有していたが、I型とII型合わせて数輦が放出品セールとして出品されており、フロンティア学園は打撃力が高い方のII型…もっと細かく言及すると、車体側面ハッチがある前期型を1輦購入したのであった。

理由は前期型の方が、側面ハッチが無い後期型より安価だったからだ。

購入が1輦だったのは、井上と言う女性から得られた義援金を戦車の購入費や整備費、燃料費、潤滑油費等の割り振りを考慮すると、1輦の購入で限界だった。

「メイプル高校、だっけ？折角自分達の戦車を売っちゃうとかさあ、なんか勿体なくね？」

「うちらには好都合だから有難く貰ったこうぜ」

他にも候補となる戦車は幾つかあったが、今回導入したラムⅡと同じぐらいの性能でも希少価値で異様に高価格だったり、逆にそれなりに台数が現存している戦車でも日本全国や世界各国の戦車道チームに引つ張りだここで在庫切れ状態だったり、それでいて手頃な価格の戦車は性能的に不満があったりと、なかなかフロンティア学園戦車道チームに理想的な戦車は見つからなかったのである。

「でもあのサウナ戦車にはもう乗りたくないよー」

もはやカヴェンターと呼ばれる鹿屋の意見に、塚野も野島も一緒に首を縦に振った。

「だよねえ。でも貴重な戦力だし…」

「んまあ、ギリギリまで棚上げかなあ」

そこへ電話が終わったらしい村江が戻って来た。

「それ以前に人手不足ですしね…」

五十嵐が物憂げに言う。「今は15人…ある程度役割を兼任させるとしても、これだと…」

「うんうん。足りないよね」

中村が後を引き取った。「鹿屋さん。募集はどうなってますか？」

「一応3人名乗り出てくれたよー。報道部の記事が宣伝になったみたいだねー」

「おかげで注目集まってる感じだし。良い感じじゃね？」

塚野がポータブルラジオをデコピンした…おでこは無いが。

「それで、誰と誰ですか？」

萩原が尋ねると、塚野がメンバーの名前を告げる。

「えーとねえ…井上サクラって子と、桑田クミって調理部の子と、大川ユリカって仕立て屋さん」

「井上って、あの井上さんと何か関係が？」

伊関の質問に、塚野は頷きながら答える。

「正解バナナ。あの井上さんの孫だって。今回の件で興味を持ったら

しいよお」

「なるほど」

萩原にもまた思い当たる人物がいたようで、

「まさか大川さんが参加するとは…」

「あ、オハギ知ってたんだ？」

「はい。よくお世話になってますから」

「実はタンクジャケットのデザインも頼んでるんだよねえ。知ってた？」

「はい、それも知ってます！」

「えー、そこは知らないって言おうよお」

一方で鹿屋はもう1人の事が気になるようだ。

「桑田ちゃんよく入る気になったねー」

「ああ、あの…がめついい？商人気質の人ですよね」

と萩原も桑田の事を知っているらしく苦笑する。「あ、でも商人のみんなをがめついいとは思ってませんよ？」

どういうわけか急いで鹿屋に弁解する萩原に対し、当の鹿屋は別に気分を害した様子は無かった。

「気にしないでー。分かってるよー」

「あ、鹿屋さんってお父さんが自営業か何かの人なんですか？」

「そうだねー。金物屋やってて、あちこち飛び回ってるよー」

「なるほどそれで」

中村は納得して頷いた。

「3人はいつ来るのかしら？」

と、村江が聞いた。

そう、この場にはまだ集っていないのだ。

「用事終わらせてから来るんだって」

「そう。まあそれで18名。カヴェナントを戦力から外せばいけるわね」

ここで戦力扱いの戦車の定員を整理しておく、レオパルトが4名、SU-100が4名、ルノーUEが2名、ハリーホプキンスが3名、そして新顔のラムⅡが5名であり、偶然にも18名がすっぽり収

まる。

「んじやあカヴェは補欠つと」

塚野もカヴェエナントーを外す理由が出来て安心したような表情だった。

都合、3度あのサウナ戦車に乗り込んでいるのだから無理もない。

しかしチャレンジャーがいた。

「なんとか改造して乗れるようにしますので、それまで楽しみにして
いてください！」

「ホノカ、本気でやれるって思ってるの？」

怪訝そうな表情の五十嵐に対し、中村はあくまでもポジティブだ。

「機械部の腕の見せ所よー」

「嫌だなあ…」

尾鷲がそう一人呟きながら腕時計を見て動きを止めた。「あ、そろ
そろじゃないですか？」

「え？ああ…」

塚野も携帯電話を起動して時間を確認した。「そろそろラムⅡ来る
時間じゃん」

その時、またも村江の携帯電話がバイブし始め、画面を覗いた村江
はその場で通話ボタンを押した。

「もしもし、大地？ええ、聞こえるわ…え、遅れる？分かったわ。慌て
ないで来て…ええ、それじゃ」

「遅れる？」

「そうみたい。事前に打ち合わせたルートが途中で緊急補修工事で閉
鎖されたとかなんとか言っていたけれど…」

塚野は野島と顔を見合わせた。

2人も村江や大地と一緒に新規導入のラムⅡが、井上と言う女性が
提供してくれた敷地にやって来るまでのルートの事前打ち合わせに
参加しており、実際にルートの下見も行ったが車幅や道路の状態も問
題は無かった筈である。

「今日も大地からラムⅡを受け取りに行く時にルートの最終確認をし
て貰ったけれど、その時も問題無しって連絡だったわ」

と、村江が首を傾げた。「道を間違えたとも思えないし、一体どう言う事かしら…?」

「ひよつとすると老朽化のガタかなー」

普段はマイペースで楽天的な鹿屋が、珍しく考え込む表情になっている。「最近、あちこちで緊急補修の報告が来てるんだよねー」

「100年以上の歴史ですしね…そろそろガタが来ても不思議は無いかもしれないね…」

と、萩原が言った。

「んじゃあ、そろそろ行こっか。遅れるつつつてもそんなにかからないうっしょ」

塚野がそう言った直後、噂をすればなんとやらでエンジン音が聞こえて来た。「お、意外と早いじゃん。おーいツツチー、起きろお」

足取りがおぼつかない土橋に肩を貸す塚野と野島を筆頭にみんなが戦車を迎えに倉庫を出る中、村江は一旦立ち止まると、また携帯電話を起動して着信履歴を呼び出した。

履歴欄には、さつき連絡してきた大地より前に掛かって来た電話の相手の名前が載っていたが、そこには『毛利隊長』と表記されていた。

村江は誰か自分の動きに気付いた者はいないか一度目を上げて確認してからまた履歴画面に目を落とし、数秒経ってから何かの思考を頭の中から追い出すように溜息を吐きながら電源を落として仲間達の後を追った。

しかし村江の目に入ったのは、困惑で立ち尽くす塚野達の背中だった。

その先を見ると、意外と早く到着したと思われたラムⅡではなく、別の戦車が佇んでいた。

「LVT…?…なんで違う戦車が…?」

村江も購入した記憶が無いアメリカの水陸両用トラクター、LVT(A)(1)の大柄な車体に比して小さい砲塔のハッチが開くと、姿を見せたのは報道部長の福地だった。

続く

チャプター3 新メンバー

「サプライズ！みんな驚いたかな!」

福地は車上から親し気に塚野達に声を掛けたが、あまりにみんな驚いていたせいで、目をぱちくりさせるばかりだった。

ようやくと塚野が正気に返ったように、

「ええつとお…これがラムII?」

「何寝ぼけてんだよ」

野島が突っ込みを入れつつ、「つか、なんなんだこれ?」

「LVT (A) (1)。アメリカの水陸両用トラックターよ」

いつの間に2人の横に並んでいた村江が戦車の名を紹介した。「私も選んだ覚えが無いわ」

「私達が独自に買ったものなの」

福地がLVTから飛び降りた。

また、車体前部の2つのハッチがほぼ同時に開いて2つの顔が覗く。

「え、独自に、ですか?」

萩原は同じ報道部員として、どうやら話は聞かされていなかったらしい。

「ごめんごめん。内緒みたいになっちゃったよね」

福地はそう謝ってから、「ちよつと、放送部と賭けをやってて」

「賭け?」

塚野が首を傾げながら聞き返すと、

「さつきやってたニュースは、あなた達、聞いたかしら?」

「うん聞いた。でも塚野さん、すっごい腹立ったんですけどお」

「放送部がその…あなた達がうまくいくかどうか懐疑的で、私達はうまくいく方に…その、レイズしているのよ」

「それはいいけれど、どうして賭けとやらでLVTを購入するのかしら?」

村江の問いに福地は頭をカキカキしながら、

「実は放送部と報道部が統合される事になっちゃったんだけど、どち

らが軍門に下るかで揉めてて」

「え、そんなのどっちでもいいんじゃない？」

塚野の無関心な感想に、福地はやや気分を害したのか、

「古参の報道部のプライドとしてはそうはいかないのよ。放送部はいわばぽっと出みたいなものなんだから」

「そ、そうなんだ。なんかごめん」

福地もそれ以上は気にしなかった。

「いいのいいの。それで、放送部も放送部で嫌がってて」

「で、戦車道が賭けの対象になったってわけかよ…」

野島が後を引き取ると、福地は遠慮がちに頷いた。

「ええ。賭けの対象にしちゃって申し訳ないとは思ってるのよ。だから自分達も戦車に乗る事にしたの」

「でもデスク。だからって、自分達も巻き込まないで下さいよ！」

LVTの縁に腰掛けて足をぶらぶらさせている2人の報道部員の内の右側が口を尖らせた。

左側より幾分背が高く、赤のベレー帽がトレードマークだ。

「なんで私も行く事になってんですか」

左側も気怠そうに抗議したが、福地が

「二人とも興味あるって言ったじゃない」

「そりやそうですけど、乗るとまでは言っていないですって！」

赤のベレー帽がそう言って大きく欠伸をした。「徹夜で操縦を覚えただので昼寝したいです！」

「徹夜なんて日常茶飯事でしょ？」

「記事書きながらなんてしんどいですって！と言うかなんであなたも手伝わなかったんですかね！」

火の粉を振りかけられた左側は、

「そりやあ、あなた後輩だから当たり前じゃない」

「嘘ばっかり。マニュアルちよつと読んで投げ出したの見てましたからねー！」

「はいっ！」

左側がベレー帽に手を伸ばそうとしたが、

「じゃあ2人とも、自己紹介してね」

福地にそう言われて、2人は渋々といった様子でLVTを飛び降
りた。

「先輩からどうぞ」

「やーだね」

「へたれですね」

「ちよ…」

『先輩』が反論する隙を与えず『後輩』が先に自己紹介する。

「西中ジュンコです。報道部の2年生です」

更に西中は間髪入れず「で、こっちがへたれの井坂ミナです。私よ
り背が低いですがこう見えて3年生です」

「ねえ、酷くない？勝手に私の事紹介するとか」

「随分とへたれだったじゃないですか」

「後で覚えてなよ」

「まあまあ、喧嘩はそのくらいにしておいてね」

福地が2人の口喧嘩を止めると、「というわけで、飛び入り参加で
めんだけど、私達3人と、後ろのLVTを宜しく頼むわね！」

「随分と強引ね…」

村江が溜息交じりにそう言う横で、塚野は即決で福地達をチームに
引き入れる事に決めていた。

「オケオケ。んじゃあこれから宜しくねえ」

「いいのかよ。てかおめえ適応力たけえなおい」

「1台でも1人でも多い方が有難いしねえ、ノイジー」

「まあ、隊長の言う通りね」

村江も塚野の判断に異論を挟むつもりは無いようだった。

チーム内では最も戦車道の経験が長いが、決して自分が上に立って
教えるような事はせず、あくまで隊長が塚野、副隊長が野島である事
を尊重して自分は補佐するような役割に徹していた。

「じゃ、そーゆー事でよろ」

「あの、デスク」

心配そうな表情の萩原に、福地は

「安心して。あなたの独占取材を邪魔する気はないから」

「それでしたら、まあ…」

「いやでも、デスクって何するか分かったものじゃないわよ?」

井坂が脅すように言ったが、すかさず西中が

「先輩って人でなしですね。脅すなんて、ねえ?」

「今日やけに当たりが強くない?」

「先輩が私に全部マニュアルを押し付けるからですよ」

「はいはい2人とも…」

福地が再び仲裁に入ったところで、ラムⅡ巡航戦車が敷地内に入つて来た。

ラムⅡの車上には、新入りの井上サクラ、大川ユリカ、桑田クミの3人が乗っていた。

どうやら入りきらなかったらしいが…

「あれ、5人乗りじゃなかったっけ」

塚野が首を傾げたが、ラムⅡを受領しに行ったのは大地、佐伯、田張、安藤の4人だったので、あぶれている様子の4人中1人は車内に収まる筈だが、すぐにその理由が現れた。

「ほら、さっさと下りるんだ」

車体側面のハッチを開いた人物が、桑田に向かって身振り以示しながらそう言った。

「あ、小戸保安部長じゃん」

小戸は塚野を一瞥すると、また桑田に下車を促す。

「もたもたしてないで、ほら」

しかし桑田が小戸に負けじと言い返す。

「生憎あつしは高所恐怖症でね。踏み台になってくれたら有難いかな?」

瞬間、小戸の表情が変わり、桑田もその意味を理解したらしく、「わ、分かった、分かったよ。自分で下りるからさ。な?」

桑田は逃げるようにしてラムⅡから飛び降りたが慣れていないらしく、両足が地面についた時の衝撃をうまく吸収出来ずに直接響いた痛みに顔をしかめた。

「もう、しつかりしなさい」

佐伯が桑田を支えてやると、後から下りて来た小戸が、

「いけませんなあ副会長。こいつを甘やかしちゃ為にならないですよ」

「それは分かるけど」

一方、大地、田張、安藤の3人は、先着のLVTに塚野達と同じように驚いている様子だった。

「チーフ、あれは何でさあ」

「いや：私も正直驚いているわ」

安藤にチーフと呼ばれた田張も困惑していた。

大地も状況を把握しようと、LVTを指差しながら塚野に、

「これ、買ったんですか？」

「いんや。報道部が買ったんだってえ」

塚野は肩をすくめた。「つーか、ご苦労さん」

「いやあ、道路の閉鎖は想定外でしたよ」

「まあ、無事で何よりね」

村江もそう労いつつ、「細かい経緯は省くけど、これで戦力が1輛増えたわ」

「確か水陸両用ですよ？偵察とかに役立ちそうです」

「色々使い方は考えられるわね。ところで、小戸とか言う人も新メンバー？」

「いえ。桑田さんのお目付け役というか…」

「ああ、そう言えば萩原が、がめつい商人氣質の子だとかなんとか言っていたわね：相当やばい事していたのかしら？」

「たくさんの前科がありましたね」

小戸が桑田を引っ立てつつ話に入って来た。

左の二の腕を掴む手が痛かったらしく、

「痛いってば、離してくれよ！」

「自業自得だ。我慢しろ」

桑田の抗議を鼻で笑うと、「安物をぼったくり価格で売ろうとしたり、学校の備品を転売しようとしたり、認可物以外の物資を無断で仕

入れようとしたり、もうやりたい放題でしてね。調理部なのに色々やらかし気味で困ったもんです」

「その様子だと、毎日忙しそうね」

「そりやもう。あなたと副会長が乱闘騒ぎ起こした時も、こっちは摘発で手が離せなかつたですからね」

「乱闘？」

村江が塚野を見た。

あれは塚野が戦車道の最初のオリエンテーションに失敗した後に、佐伯が塚野を煽り、それに怒った塚野が手を出した事で起こった事件だ。

あの時は確かに保安部長の小戸は現れなかった。

保安部員の方は生徒会長室に詰めている数名が駆け付けようとしたが、直後に帰って来た国崎に止められている。

「ああいや、何でもないよお」

塚野は村江から目を逸らしながら適当に誤魔化すと、「それはそうとお、そんな『前科者』がどーしてまた戦車道なんかに？」

小戸は桑田を離すと腕を組んだ。

その隣で桑田は、相当痛かったのか掴まれていた左の二の腕をさすっている。

「これは司法取引と言うやつでしてね。今までの前科の積み重ねを軽減する代わりに、戦車道を履修するという事みたいでして」

「…みたい？」

微妙なニュアンスを塚野が読み取ると、桑田が口を開いた。

「元々あつしが持ちかけたんですよってにね。戦車道チームはメンバー不足って聞いているぜ。だからこのあつしが入ってやりや、少しは助かるってもんだ。そうなりや、あつしはお見逃し、あんた方は人員補充のウインウインってわけだ」

「今すぐ断る事も出来ませんがね。どうしますっ？」

小戸の質問には、断る方を期待している節が見られたものの、実際のところ桑田の言う通りチームは人員不足に悩まされていた。

「いや、普通に歓迎するよお」

桑田は手を打って喜んだ。

「そいつぁいい！じゃあ早速ですがね隊長。戦車道グッズのプランを…」

「早速金儲けか。随分とご熱心で感動ものだな」

呆れたように首を振る小戸に、桑田は

「いいやそうでもねえぜ保安部長さんよ」

と言ってから塚野にまた顔を向け、「グッズの相談はおいおいするとして、売り上げの何割かを戦車道に上納する。悪くねえ話だろ？」
「どうせ仕入れに戦車道向けの予算を流用するつもりだろうが。それでプラマイゼロにして、自分の懐に害は無いようにする。お前の魂胆は見え透いているぞ」

「冗談きついで！これは隊長とあつしのビジネス話だ。同じチームなのにそんなあくどい真似はしねえから！第一、予算も足りねえらしいから、これはれっきとした戦車道の活動に必要な話だよ」

と、桑田は色々と理屈を並べ立てたが小戸は万事心得ているようで、何度かゆつくり頷きながら

「なるほどね。お前の行動には逐一目を光らせているからな」

すると今度は、タブレット端末を小脇に抱えた大川が塚野に話しかける。

「あの、塚野隊長。先日ご依頼頂いたタンクジャケットの件なのですが…幾つか候補を作ってみました」

「え、もう？マジで？」

「予選リーグまで1か月もありませんから、早くデザインを決めて数を揃えたいと思っております」

大川が横から差し出したタブレット端末を受け取ると、画面には数種類のタンクジャケットのデザインが並んでいた。

「すっげえ…」

「どれに致しますか？今すぐに…とは申しませんが、何分時間も差し迫っている事ですし…」

「これがいいかなあ」

「どれどれ…」

塚野が指した候補を覗いた大川の表情がパツと明るくなった。「これは素晴らしい！私もこれを一番気に入っていたんです！それでは早速……」

「ああ、あと……これも捨て難いんだよねえ」

そのデザイン候補は左上にあつた。

大川もそれを数秒間吟味して、

「なるほど。では、隊長が最初に選んだこちらをメインに……もう一つ選ばれたこのデザインの要素を取り入れた折衷案にしてみました」「んじや、それで」

「私としても腕が鳴ります」

大川は右の人差し指を立てた。「早速取り掛かりたいので、今日はこれでお暇しても宜しいでしょうか？」

「オツケー。頼んだよお」

「それでは失礼致します」

大川が去ると、今度は井上がやって来た。

「塚野さん。井上サクラよ。宜しく」

こちらも礼儀正しいが、先程の大川みたいに仰々しくはない。

まあ、大川はあれが平常運転なのだろうが。

「あ、宜しく願いますねえ」

「おばあちゃんが散々話をしていたおかげで、こつちも興味が湧いちやったから」

「いやあ、ホントここ貸してくれて助かってるし。ありがとねえ」

「ここは遊んでいた土地だからちやうど良かったっておばあちゃんが言ってたわ」

メンバーと戦車が増えた。

あとは予選リーグまで出来るだけ練度を高め、備えるだけである。

続く

しかしその夜……と言うよりは日にちが変わった深夜3時の塚野の自宅。

「分つかんねえんだよなあ、マジでえ」

机の上の数学Aの問題と格闘していた塚野は、たまりかねたようにシャーペンをノートの上に放り出した。

傍にはアイスのブラックコーヒー入りマグカップと、お箸を突っ込んだポテトチップスの袋が置かれている。

今は中間テストの勉強中で、問題集に取り組んでいたのだが、からつきしわけが分からないのだ。

「まーじやべえんですけどお」

溜息交じりに塚野は椅子の背もたれに背中を押し付けてそのまま振り返った。「ぐはあ…」

翌朝。

「あ、スズネちゃんだ」

野島と一緒に登校中だった土橋が、前方に塚野を見つけて声を掛けようとしたが、挙動がおかしいのに気付いた。「あれ？」

「何やってんだ、あいつ？」

野島が啞然として、途中のコンビニで買った紙パックのココアを吸い上げるストローから口を離した。

2人の視線の先では、左右によるめきながらとぼとぼ歩く塚野が、本来右に曲がらねばならないT字路を今正に真つ直ぐ進もうとしていた。

他の登校中の生徒達も、塚野が本来の通学路から外れて行きかけている様子を先を急ぎながらも何度か振り返る。

「おいおい何やってんだよ」

2人は走って塚野に追いつくと、両側からそれぞれ腕を掴んで引き留めた。

塚野はハッと正気に返ったかのように顔を上げ、両側の野島と土橋に気付いた。

「え、あ…おっはあ」

「何が『おっはあ』だ、てめえ。見てみろよ」

「何があ…？あれえ…」

ぼんやりと野島が指す後ろを見やった塚野は、ぼんやりと自分が犯した間違いに気付いた。「あっちゃあ…」

「スズネちゃん、大丈夫？なんだか寝ぼけているみたいだけど…」

「ああ、全然平気だから、心配しなくていいし」

やんわりと2人の腕の間から抜け出ると、塚野はさつきよりしつかりした足取りで元の通学路に戻って行った。

その背中を見送りながら、野島と土橋は互いに顔を見合わせた。

「…どうなってるんだ？」

「ひよつとして、夜遅くまでテスト勉強してたとか、かな？」

「塚野さん！塚野さん！」

「ふえ〜」

机の上に突っ伏していた塚野は、自分呼び起こす声に気付いて目を覚ましたが、猛烈な眠気に制圧されている彼女の脳内はテレビの砂嵐の如く意識が朦朧としていた。

頭を上げるが、未だに何が起こっているか判別がつかない。

確かこうなる直前に数学Ⅰの授業が始まった筈だが…

そこで初めて自分の顔を目の前で覗き込む数学Ⅰ担当の先生の存在に気付いた。

「塚野さん、何居眠りしてるんですか？と言うか、大丈夫ですか？」

「ああ…はい、ダイジョブれすう…」

「じゃあ、この問題の答えは？」

先生が開かれた教科書の問題の1つに右の人差し指を置いたが、塚野の視線は定まっておらず、説明文の方にシャーペンの先端を置いてしまった。

「ええつとお…これすくあ？」

先生は諦めて首を横に振ると、別の生徒を指名した。

『隊長！隊長！あれ、無線壊れたのかな…？』

土橋の声が闇の向こうから聞こえて来る。

まるで現実味がない。

そんな事を考えていると、誰かに肩を揺すぶられて目を覚ました。そうだ、自分はいま今しがたまでレオパルトの中にいて…

「隊長！起きてよー！」

鹿屋が困ったようにこちらを見ていた。「ねーねー。どうしちやつたのー？」

「はあ。練習中に居眠りは困るわよ…」

こちらを振り返っていた村江が怪しむような目で塚野を見ている。

「本当にどうしたの？」

「ああ、ごめんごめん」

塚野は自分の両頬を叩いて眠気を追い払うと、「ええつと、なんだつたっけ？」

「ああもう」

村江は顔を下に向けて嘆息した。「これじゃあ練習にならないわね…」

それから数日後の生徒会長室。

「…という事ですが塚野さん」

国崎生徒会長は、正面に立っている塚野に説明を終え、「一体どうしたのですか？」

「殆どが居眠り…良くて目を開いたまま意識不明…って、何なのよこれ？」

数枚のA4用紙を見比べながら佐伯が言った。

「それに戦車道の練習中も居眠りしているとか…」

「ええ。おかげで連携プレーの練習が捗りません。チームメイトからも苦情が殺到しています」

国崎は塚野に椅子を回した。

「どういう事ですか、塚野さん？」

「あ、ええつと…それはですねえ…」

塚野はきまりが悪そうに頭を掻きながら、「テスト勉強を毎日夜通しやってる感じでして…それでえ…」

国崎は机の上のカレンダーに目を向けた。

「そう言えば、もうすぐですね…ああ、予選リーグも、ですか…」

「テスト勉強してるって言うのなら…」

佐伯が怪訝そうな表情で、A4用紙の束を国崎の机の上に置いた。

「小テストが壊滅的なのはどうしてなの？」

「いやそれがですねえ…」

一通り説明を聞いた国崎は、口をへの字にしている佐伯に、

「佐伯さん。ここでちよっと勉強を見てあげてはどうでしょう？」

佐伯は不意打ちを食らったかのようにビクツと体を震わせて国崎を見返した。

「え、わ、私が、ですか!？」

その反応がまるで不思議だというように、国崎は片眉を上げた。

「何もそんなに驚く事は無いでしょう?とりあえずそうですね…数学の問題を1問でもいいですから」

「ま、まあ…会長の、ご命令でしたら…」

佐伯は躊躇いながら、一番酷いと報告されている数学Aの教科書を手を取った。「ほら、そこに座って」

木製のテーブルを挟んで配置された応接用のソファーに向かい合って座ると、佐伯は塚野に数学Aの問題の1つを教え始めた。

始めは洪々と応じていた塚野だったが、数分後には表情が変化した。

「え、じゃあ…(ゆ)こと?」

佐伯から渡されたシャーペンで問題を解き始め、暫くすると「えつと…出来たけどお?」

佐伯は頷いた。

「はい、正解よ」

「マジ?」

「じゃあ、次、これやってみて」

別の問題が指定されると、塚野は早速取り掛かった。

姿勢も前のめりになっており、さつきまでとは打って変わり自信がついているようだ。

また暫くして問題が解き終わると、佐伯が答えをチェックして、

「はい、これも正解」

「うっそお！マジ最高じゃん!?!」

塚野が一人はしゃいでいると、国崎が椅子から立ち上がった。

「どうです？佐伯さん、教えるのが上手でしよう?」

「マジそれ、やばいです!」

「やばいって何よ…」

「佐伯さん、だから塾の先生が似合うって言ったでしょう?」

「いや…そんな事無いですって…本当に…」

佐伯はそう否定するものの、同時にまんざらでもなさそうだった。

「っーか。人教えるの初めてって事です?」

「私と鹿屋さん以外では…そうですね」

「そーいや…かのつちも副会長推薦してたっけかなあ」

「ああ…教えるのが2人に増えたのか…辛い…」

頭を抱える佐伯を見て、国崎がくすくす笑う。

「何言ってるんですか佐伯さん。トップクラスの成績を誇る優等生なのに」

「え、優等生?」

「はい。佐伯さんは全学年通じてトップクラスの優等生なんです」

「ワオ、そんなの聞いてないし」

「別に自慢する事じゃないでしょ」

佐伯は実際の所、優等生と呼ばれる事に全くと言っていいほど興味が無さそうだった。「それより会長。他の科目も見てあげないといけない、という事ですか?」

「塚野さんの進退が掛かっている事ですし、最悪の状況は、私としても避けたいところです」

「なるほど。よく分かりました」

「見返りは必ずしますので、まずは塚野さんの勉強を見てあげて下さい」

「まあ…いいでしょう」

「んじゃあ、佐伯先生、よろす」

「先生はやめて、性に合わないから」

「分かりました先生」

「教えるのやめるわよ?」

佐伯が講師となった事で塚野の生活リズムも元に戻り、戦車道の練習中も居眠りしなくなった事で仲間迷惑を掛ける事は無くなった。

更に数日が経過した頃、更に朗報が2つ入った。

1つは桑田が考案した戦車道グッズが好評で売れ行きが好調である事であり、桑田は約束通りに売り上げの一部を戦車道用の予算に献上したのである。

その予算は戦車の整備や燃料、弾薬費といった維持費用に充てられる事となり、当分新しい戦車の導入予定は無かった。

因みに戦車道グッズとは調理部らしく飲食物に限らず、大川に頼んで戦車道チームが掲げる校章をあしらった刺しゅうやコースター、タオルにコップといった特別商品をこしらえたのだが、これがなかなかに受けが良かったようだ。

飲食物は『特製戦車道焼きそばパン』やSU—100に似せたデザート等が用意され、特に焼きそばパンは携帯性の良さもあって飛ぶように売れたという。

「ま、こんなもんってとこだな」

調理部の使う小部屋のテーブルの上で小銭やお札を勘定しながら桑田はウキウキ顔で言った。

「くわっちってさあ、どこでもやってけそうねえ」

「ちよつとしたコツってやつだぜ。企業秘密だがな…いや、隊長になら教えてあげてもいいかもな!」

得意げに語る桑田だが、少し離れた場所でテーブルに腰掛けて腕組みしている小戸は澁面を浮かべている。

「全く、金儲けにかけては驚くほど情熱的だな」

「ここは生存競争が厳しいからな。自力で経済力を蓄えておかない

と、ある日ぽっくり廃部：なんて事もあり得るしな」

「放送部と報道部の合併の件もある事だし、それは否定しないが」

小戸は桑田の意見に一定の同意しつつ、「あくどい商売をしてまでやる必要があるのか？」

「あくどいだって？人聞きの悪い。今に見てな、このビジネスを絶対に成功させてやるからな」

すると扉が開いて、大川が入って来た。

掌を上にした左手には、折り畳まれた衣服が乗っている。

「失礼致します。タンクジャケットを仕立て終わったもので、早速持って参りました」

「お、いいじゃんねえ！」

塚野が跳ね上がるように立ち上がると、大川は持ってきたタンクジャケットをテーブルの上に広げた。

イズベスチャ社で出会った黒森峰女学園やアグレッツサーチームの制服に影響を受けつつ、パクリでもないそのデザインは十分満足出来るものだった。

「早速着てみて頂きたいのですが」

「おっし」

早速着替えようとする塚野だったが、小戸が一端ストップをかけた。

「待って下さい。仮にも人前ですよ」

桑田が奥の給湯室を指さす。

「だったらそのあそこぐらいしかねえぞ」

「まあ、そこならいいでしょう」

「お手伝い致します」

大川がタンクジャケットを持ち、2人は給湯室に入ってカーテンを閉めた。

やがてカーテンが開くと、タンクジャケットに身を固めた塚野が出て来た。

脱いだ制服は、大川の左腕に掛けられている。

「如何でしょう？」

「ワーオ。サイズもぴったしじゃん」

「あなたの体形に合わせて作ってあります」

塚野は腕を広げてその場で回りながらタンクジャケットをうつとりと眺めまわした。「マジ凄いじゃん。気に入ったし！」

「恐れ入ります。仕立て屋の冥利に尽きます」

「なかなかサマになってますな」

と、小戸も感心したように何度も首を縦に振っている。「なるほど。風紀委員の出番が無いわけだ」

「では、これでゴーサインという事で宜しいですね？」

「勿の論！」

これが2つ目の朗報であった。

そして迎えた予選リーグ前日の夕方。

中間テストも昨日で終わり、学園艦の寄港先で競技用戦車を試合会場に運ぶ特別列車の台車に戦車を積載する作業を横目に、メンバー達が続々と客車に乗り込んでいく中、最後に乗り込もうとした塚野が立ち止まり、ちょうど台車に乗せられたレオパルトを見た。

「おい、どうした？」

客車の入り口で振り返った野島が声を掛け、塚野の視線を追った。

「いよいよだな」

「…うん」

そこへ吹いてきたそよ風が、塚野のロングヘアを凧いだ。

初めて見る表情だ、という感想を、野島は抱いた。

「おめえ、そんなにかっこよかったか？」

「え？」

塚野が驚いて野島を見た。

「なんでもねえよ。ほら、時間ねえから、早くしろ」

塚野も野島の後に続いて列車に乗り込んだ。

席に着くと、早速桑田が焼きそばパン等の商品を詰めた首掛け容器を前に抱えて車内販売を始めていた。

「戦車道特製焼きそばパン、今なら安くしときますぜ！おまけに作り

たてだ！」

ちようど監視の小戸の隣に来て勧めたが、小戸は手を振って断つた。

しかし小戸の隣に座る鹿屋は拳手して買い求めた。

「1個頂戴——」

「お買い上げどうも！ついでに飲みもんどうだい？ミネラルウォーターにコーラ、オレンジジュースがあるぜ！」

「じゃーねー…オレンジジュースでー」

「お買い上げ感謝しますー！」

それから料金を受け取ると、注文の焼きそばパンとオレンジジュース入りペットボトルを渡した。

小戸が鹿屋に首をちよつと傾ける。

「買う必要はないですよ」

「ちよつと小腹がねー」

鹿屋は焼きそばパンを包むラップを半分剥がすなりかぶりついた。「おいふいー！」

焼きそばのソースのスパイシーな香りに、思わず小戸も鼻をひくつかせた。

いや、これまでもこの香りは鼻にしてきたが、とうとう我慢が限界に近付いてきたようだった。

桑田は小戸の鼻の動きを見逃さず、すかさず戻って来て

「どうです保安部長！焼きそばパン！」

「だからいらないう言っているだろう。何度言ったら分かるんだ？」

「そうは言っても、今あなたの鼻は正直にひくつきましたぜ。そりやそうだ、調理部特製…いや、この桑田様特製の調合ソースを使っているからには——」

「え、オリジナルのソースなのー？」

「ええそうですも。だから美味しきは折り紙付き、オリジナルリティーも担保されてるってわけだ」

しかし小戸はあくまで断ろうと、目の前に差し出された焼きそばパンを軽く振り払う仕草をする。

「どうでもいいから早くそいつを引っ込めろ」

「あ、じゃあさー。私のちよつと食べてみないー?」

「はあ…」

小戸は少し迷ったが、ここまで勧められたからには無下に断るわけにもいかず、鹿屋に千切って貰った分をつまんで口に放り込んだ。

その途端、桑田が苦心して研究開発したソースの魅力が口一杯に広がり、思わず両眉を上げた。

この上なく忌々しいが、調理部としての腕は確かなようだ。

「どうかな?」

「…なるほど、味は認めよう」

それでも断ると見た桑田は、

「じゃあこうしよう。特別サービスであんたにはタダで1個上げるから、受け取って貰えないかな?」

許可を貰うのも待たず、桑田は小戸の手に焼きそばパンを握らせた。

「分かった分かった。もう行ってくれないか?」

「毎度あり!」

桑田が車内販売の続きを始める中、小戸は暫く手の中の焼きそばパンを見つめていたが、やがて徐にラップを剥がすと、一口かじった。

このソースはよく研究されたものか食欲を増進するもので、あつという間に半分を食べ切ってしまった。

そこへまた桑田が戻って来て感想を尋ねる。

「へへへ、なんと言おうと顔は正直だ。『美味しい!』って書いてあるぜ」

小戸はかじった分を飲み込むと、

「これで安くしてくれたら何の文句も無いがね」

「もう赤字ギリギリで販売してんだ、勘弁してくれよ」

「前科1つ取り消すのと引き換えでどうだ?」

「3つで応じるぜ」

「1つだ」

「じゃあ2つ」

「ダメだ、1つだ」

「それなら勝手にしてくれよな」

「その代わり、トライポイントの加算を推薦しよう」

立ち去ろうとした桑田の足がぴたりと止まった。

「それホント？」

「本当だ。正直こんなにも美味しいとは思わなかったよ。その功績は認めよう」

小戸は保安部長としての職務上、目の敵にする桑田の料理に、これまで何一つ手をつけていなかったのであった。

食堂のメニューも、調理部が作った料理には調理部のマークがあり、どれも桑田の手がかかっているかいちいち聞くわけにもいかず、小戸はそれを意識的に避けていた。

「分かった。じゃあ値段下げよう」

「宜しい。じゃあまずは差額の払い戻しからだな」

「けっ。そこは見逃してくれよな」

そう文句を言いつつ、桑田は小戸の要求に従い、それが済むとまた販売の続きを始めた。

「明日はいよいよ予選リーグ。みんな、絶対勝つわよ！」

第一試合で当たる相手、青師団高校チーム隊長のエル呼びかけに、目の前に立つ隊員達は一斉に

「Bu eno!!」

と、スペイン語で元気と気合十分に返答しながら拳を頭上に突き上げた。

「隊長。グヤーシユ、本当にいいのですか？」

ハンガリーが誇るトゥウライン中戦車の上で、グヤーシユをスプーンで掬いながらバラトン工業高校チームの副隊長が念の為に確認すると、胡坐をかいている隊長のタールツアイは茶碗を掲げながら、

「いいのいいの。私はこれが落ち着くから」

茶碗の中身はお茶漬けで、付け合わせに白い沢庵も一切れ入っていた。

それを一気にかき込むと、タールツアイは幸せそうに深々と息を吐く。

「はく。お茶漬けって最高〜！」

バラトン工業高校は第二試合で当たる相手である。

「村江さん、フロンティア学園にいたとは驚きですね」

「私も最初はまさかと目を疑ったわ」

卓上の電気スタンドに照らされた試合会場のマップを吟味しているのは、エクセルシオール大学附属学院の毛利隊長と真加部副隊長だ。

「フロンティア学園も油断できませんね」

真加部の初見に、毛利も静かに頷くと、

「でも、編成は決まっているわ」

「村江さんがいても、関係ありませんね」

「ええ。それに、一戦も負けるわけにはいかないから」

それから更に少し時間が過ぎ、時刻が12時を過ぎた頃の試合会場内にある宿舍のロビー。

その一角にあるソファーに、塚野は近くの自動販売機の灯りに照らされながら一人座っていた。

手には自動販売機から買ったらしい、スチール缶が握られている。

「あ、ここにいたか」

そこへ現れたのは野島で、両手に湯気の立つマグカップが1つずつ持っている。「ったく、ちよつと待ってろって言ったのに勝手に部屋抜けやがって…」

そうぶつぶつ言いながら歩いてきた野島は、塚野の手に握られているスチール缶に気付いた。「あ、何飲んでんだ？」

「イタリアンローストのブラックコーヒー」

「バッカ野郎、試合中に寝る気か…!？」

少し声を上げてしまった事に気付कि、声のトーンを落とす。「そんなもん飲んでねえで、ほら」

塚野は自分の目の前に差し出されたマグカップを不思議そうにし
げしげと見つめた。

「何これ？」

「桑田特製のホットミルクだぜ」

「おこちやま…」

「ちげえわ。リラックス効果で寝つきが良くなんだよ。いいから飲
め」

「…分かった」

缶コーヒーを目の前のガラス卓に置き、ホットミルク入りのマグ
カップを受け取ると、それを一口含んだ。

まろやかで優しくホツとする味で、心なしか心身共に落ち着いてき
た。

「ほら、効果あるだろ」

塚野が落ち着いた様子を見せると、野島は向かいのソファーに腰掛
けた。「やっぱ緊張で眠れねえよな」

「そだねえ」

塚野はマグカップの中のホットミルクをぼんやり眺めながらそう
応じた。

「どうした？中間テストは手応えあったんだろ？」

「うん。珍しく勝ち確って感じ」

「じゃあ、やっぱり試合の事か？」

「まあ。それもあるんだけどねえ」

そこへ今度は佐伯が現れた。

「何してるのよ二人とも、早く寝なさいよ」

「そう言う副会長もお」

「生徒会として見回らないといけないから…鹿屋はぐっすり眠ってる
けど」

「ご苦労さん」

「副会長もちよつと寛ぎませんか？」

野島が隣の席を見ながら言った。

「まあ、どのみち話したい事があったから」

佐伯は野島の横に腰を下ろすと、ガラス卓の上の缶コーヒーに気付いた。

「缶コーヒー？」

「こいつがさつきまで飲んでたんですよ」

「馬鹿ね。眠れなくなるわよ」

「同じこと言いました」

「それで、話して何ですかあ？」

「ああ。これは特別情報だけど」

佐伯はそう前置きしつつ、「中間テスト、高得点よ」

塚野の両目が見開かれた。

「ワオ、マジ？」

「ええ。各科目の先生に最優先で見えて貰ったわ」

「やるじゃねえかよ…ていうか、なんであたしが教えた時はダメなんだよ」

「合わなかっただけじゃんね？」

「まあ、なんにしても良かったな」

「つーか、頭が冴えちやっただんですけどお」

苦情を申し立てる塚野に、佐伯は落ち着いて反論する。

「今に緊張が解れて眠れるようになるわよ」

「あ、確かにそうかもお」

それからホットミルクを一口飲む程の時間を空けてから、

「ねえ、聞きたい事があるんだけど」

「え？」

「あなた、あれだけ勉強出来るのに、どうして今までさぼって来たわけ？今回のテストの結果を見たら、猶更そう思うわ」

佐伯の問いに、塚野は言いにくそうに俯いて暫く口をつぐんでいた。

それを見た佐伯は、野島に顔を向けて、

「あなたは何か事情を知ってるの？」

「いんや。まあ断片的には聞いてますが、詳しい事はこいつしか分からねえです」

「…私、あまり家庭環境が良くないのよねえ」

その言葉に、野島と佐伯は同時に顔を塚野に向けた。

「どういう事?」

「別に暴力受けたりとかじゃないんだけどねえ…んまあ、親から褒められたり、注目されたりする事が無くって今まで育ってきてさあ」

「それって、あなたがどんなに何かを頑張っても…という事?」

塚野はこくりと頷いた。

「ああ、なるほど。だからおめえの顔を会長が褒めた時に戸惑ってたわけだな」

あれも佐伯と塚野が乱闘騒ぎを起こした時の事だ。

止めに入った国崎が佐伯を追い出した後、今までけばけばしい化粧を装っていた塚野の素顔が相当な美人である事を褒めると、まるでそれがむず痒いかのような反応を示していた。

「最初は褒めてほしくて色々頑張ってみたけど、結局褒めてくれなくってさあ。まあ、無視されてたってゆうのかなあ」

「ここに入ったのもアピールの一環?」

「まあ、そんなところ。結局ダメだったから、心がちよつくら折れちゃったって言うかさあ」

「それでズルズルと成績も落ち込んでいったと」

「そんでさあ。初めて会長になんか褒めて貰ったって感じ?」

すると野島が、

「いやいや、今まで親以外に誰かから褒めて貰った事はあるんじゃないかねのか?」

「まあ、そうだけどさあ、それを片っ端から親が否定していつてさあ。家に帰った後とか、『絶対に調子に乗るなよ』とか言われて…すっげえ傷ついたし、なんかもう色々空しくなってさあ…でも国崎会長の言葉ってまるで…身近な人の言葉みたいな…そんな感じがして…まるで家族のようにと言うか何と言うかさあ」

「ああ、確かに会長はそんな感じで生徒に接するわね」

佐伯は他の生徒よりも遥かに国崎の傍にいる事が多いから、塚野の推測に実感があるようだ。「それが魅力的で、私は会長を尊敬してい

るのだけど」

「ホント、安心感あるよな」

「激しく同意」

「なるほど。一応事情は分かったわ」

佐伯はそう言っ立ち上がると、「じゃあ、ここにあなたの居場所を作り上げなさい。今のところ、それはうまく行ってると思うから」

塚野はその言葉を噛み締めるように暫し黙って何度か頷いた後、

「サンキュー。じゃ、寝ますかね」

3人はそれぞれの部屋に戻り、就寝した。

続く

チャプター4 テスト勉強

しかしその夜……と言うよりは日にちが変わった深夜3時の塚野の自宅。

「分つかんねえんだよなあ、マジでえ」

机の上の数学Aの問題と格闘していた塚野は、たまりかねたようにシャーペンをノートの上に放り出した。

傍にはアイスのブラックコーヒー入りマグカップと、お箸を突っ込んだポテトチップスの袋が置かれている。

今は中間テストの勉強中で、問題集に取り組んでいたのだが、からつきしわけが分からないのだ。

「マジやべえんですけどお」

溜息交じりに塚野は椅子の背もたれに背中を押し付けてそのまま振り返った。「ぐはあ……」

翌朝。

「あ、スズネちゃんだ」

野島と一緒に登校中だった土橋が、前方に塚野を見つけて声を掛けようとしたが、挙動がおかしいのに気付いた。「あれ？」

「何やってんだ、あいつ？」

野島が唾然として、途中のコンビニで買った紙パックのココアを吸い上げるストローから口を離した。

2人の視線の先では、左右によるめきながらとぼとぼ歩く塚野が、本来右に曲がらねばならないT字路を今正に真っ直ぐ進むもうとしていた。

他の登校中の生徒達も、塚野が本来の通学路から外れて行きかけている様子を先を急ぎながらも何度か振り返る。

「おいおい何やってんだよ」

2人は走って塚野に追いつくと、両側からそれぞれ腕を掴んで引き留めた。

塚野はハッと正気に返ったかのように顔を上げ、両側の野島と土橋

に気付いた。

「え、あ…おっはあ」

「何が『おっはあ』だ、てめえ。見てみろよ」

「何があ…？あれえ…」

ぼんやりと野島が指す後ろを見やった塚野は、ぼんやりと自分が犯した間違いに気付いた。「あっちゃあ…」

「スズネちゃん、大丈夫？なんだか寝ぼけているみたいだけど…」

「ああ、全然平気だから、心配しなくていいし」

やんわりと2人の腕の間から抜け出ると、塚野はさつきよりしつかりした足取りで元の通学路に戻って行った。

その背中を見送りながら、野島と土橋は互いに顔を見合わせた。

「…どうなってるんだ？」

「ひよつとして、夜遅くまでテスト勉強してたとか、かな？」

「塚野さん！塚野さん！」

「ふえ〜」

机の上に突っ伏していた塚野は、自分呼び起こす声に気付いて目を覚ましたが、猛烈な眠気に制圧されている彼女の脳内はテレビの砂嵐の如く意識が朦朧としていた。

頭を上げるが、未だに何が起こっているか判別がつかない。

確かこうなる直前に数学Ⅰの授業が始まった筈だが…

そこで初めて自分の顔を目の前で覗き込む数学Ⅰ担当の先生の存在に気付いた。

「塚野さん、何居眠りしてるんですか？と言うか、大丈夫ですか？」

「ああ…はい、ダイジョブれすう…」

「じゃあ、この問題の答えは？」

先生が開かれた教科書の問題の1つに右の人差し指を置いたが、塚野の視線は定まっておらず、説明文の方にシャーペンの先端を置いてしまった。

「ええつとお…これすくあ？」

先生は諦めて首を横に振ると、別の生徒を指名した。

『隊長！隊長！あれ、無線壊れたのかな…？』

土橋の声が闇の向こうから聞こえて来る。

まるで現実味がない。

そんな事を考えていると、誰かに肩を揺すぶられて目を覚ました。

そうだ、自分はいよいよ今しがたまでレオパルトの中にいて…

「隊長！起きてよー！」

鹿屋が困ったようにこちらを見ていた。「ねーねー。どうしちやつたのー？」

「はあ。練習中に居眠りは困るわよ…」

こちらを振り返っていた村江が怪しむような目で塚野を見ている。

「本当にどうしたの？」

「ああ、ごめんごめん」

塚野は自分の両頬を叩いて眠気を追い払うと、「ええっと、なんだつたっけ？」

「ああもう」

村江は顔を下に向けて嘆息した。「これじゃあ練習にならないわね…」

それから数日後の生徒会長室。

「…という事ですが塚野さん」

国崎生徒会長は、正面に立っている塚野に説明を終え、「一体どうしたのですか？」

「殆どが居眠り…良くて目を開いたまま意識不明…って、何なのよこれ？」

数枚のA4用紙を見比べながら佐伯が言った。

「それに戦車道の練習中も居眠りしているとか…」

「ええ。おかげで連携プレーの練習が捗りません。チームメイトからも苦情が殺到しています」

国崎は塚野に椅子を回した。

「どういう事ですか、塚野さん？」

「あ、ええつと…それはですねえ…」

塚野はきまりが悪そうに頭を掻きながら、「テスト勉強を毎日夜通しやってる感じでして…それでえ…」

国崎は机の上のカレンダーに目を向けた。

「そう言えば、もうすぐですね…ああ、予選リーグも、ですか…」

「テスト勉強してるって言うのなら…」

佐伯が怪訝そうな表情で、A4用紙の束を国崎の机の上に置いた。

「小テストが壊滅的なのはどうしてなの？」

「いやそれがですねえ…」

一通り説明を聞いた国崎は、口をへの字にしている佐伯に、

「佐伯さん。ここでちよつと勉強を見てあげてはどうでしょう？」

佐伯は不意打ちを食らったかのようにビクツと体を震わせて国崎を見返した。

「え、わ、私が、ですか!？」

その反応がまるで不思議だというように、国崎は片眉を上げた。

「何もそんなに驚く事は無いでしょう?とりあえずそうですね…数学の問題を1問でもいいですから」

「ま、まあ…会長の、ご命令でしたら…」

佐伯は躊躇いながら、一番酷いと報告されている数学Aの教科書を手に取った。「ほら、そこに座って」

木製のテーブルを挟んで配置された応接用のソファーに向かい合って座ると、佐伯は塚野に数学Aの問題の1つを教え始めた。

始めは渋々と応じていた塚野だったが、数分後には表情が変化した。

「え、じゃあ…(こゆこと?)」

佐伯から渡されたシャーペンで問題を解き始め、暫くすると「えつと…出来たけどお?」

佐伯は頷いた。

「はい、正解よ」

「マジ?」

「じゃあ、次、これやってみて」

別の問題が指定されると、塚野は早速取り掛かった。

姿勢も前のめりになっており、さっきまでとは打って変わり自信がついているようだ。

また暫くして問題が解き終わると、佐伯が答えをチェックして、

「はい、これも正解」

「うっそお！マジ最高じゃん!？」

塚野が一人はしゃいでいると、国崎が椅子から立ち上がった。

「どうです？佐伯さん、教えるのが上手でしよう？」

「マジそれ、やばいです！」

「やばいって何よ……」

「佐伯さん、だから塾の先生が似合うって言ったでしよう？」

「いや……そんな事無いですって……本当に……」

佐伯はそう否定するものの、同時にまんざらでもなさそうだった。

「っーか。人教えるの初めてって事です？」

「私と鹿屋さん以外では……そうですね」

「そーいや……かのつちも副会長推薦してたつけかなあ」

「ああ……教えるのが2人に増えたのか……辛い……」

頭を抱える佐伯を見て、国崎がくすくす笑う。

「何言ってるんですか佐伯さん。トップクラスの成績を誇る優等生なのに」

「え、優等生？」

「はい。佐伯さんは全学年通じてトップクラスの優等生なんです」

「ワオ、そんなの聞いてないし」

「別に自慢する事じゃないでしょ」

佐伯は実際の所、優等生と呼ばれる事に全くと言っていいほど興味が無さそうだった。「それより会長。他の科目も見てあげないといけない、という事ですか？」

「塚野さんの進退が掛かっている事ですし、最悪の状況は、私としても避けたいところです」

「なるほど。よく分かりました」

「見返りは考えておきますので、まずは塚野さんの勉強を見てあげて

「下さい」

「まあ…いいでしょう」

「んじやあ、佐伯先生、よろす」

「先生はやめて、性に合わないから」

「分かりました先生」

「教えるのやめるわよ？」

佐伯が講師となった事で塚野の生活リズムも元に戻り、戦車道の練習中も居眠りしなくなった事で仲間迷惑を掛ける事は無くなった。

続く

チャプター5 試合前夜

更に数日が経過した頃、追加で朗報が2つ入った。

1つは桑田が考案した戦車道グッズが好評で売れ行きが好調である事であり、桑田は約束通りに売り上げの一部を戦車道用の予算に献上したのである。

その予算は戦車の整備や燃料、弾薬費といった維持費用に充てられる事となり、当分新しい戦車の導入予定は無かった。

因みに戦車道グッズとは調理部らしく飲食物に限らず、大川に頼んで戦車道チームが掲げる校章をあしらった刺しゅうやコースター、タオルにコップといった特別商品をこしらえたのだが、これがなかなか受けが良かったようだ。

飲食物は『特製戦車道焼きそばパン』やSU-100に似せたデザート等が用意され、特に焼きそばパンは携帯性の良さもあって飛ぶように売れたという。

「ま、こんなもんってとこだな」

調理部の使う小部屋のテーブルの上で小銭やお札を勘定しながら桑田はウキウキ顔で言った。

「くわつちってさあ、どこでもやってけそうねえ」

「ちよつとしたコツつてやつだぜ。企業秘密だがな…いや、隊長になら教えてあげてもいいかもな」

得意げに語る桑田だが、少し離れた場所でテーブルに腰掛けて腕組みしている小戸は澁面を浮かべている。

「全く、金儲けにかけては驚くほど情熱的だな」

「ここは生存競争が厳しいからな。自力で経済力を蓄えておかないと、ある日ぽっくり廃部…なんて事もあり得るしな」

「放送部と報道部の合併の件もある事だし、それは否定しないが」

小戸は桑田の意見に一定の同意しつつ、「あくどい商売をしてまでやる必要があるのか？」

「あくどいだって？人聞きの悪い。今に見てな、このビジネスを絶対に成功させてやるからな」

すると扉が開いて、大川が入って来た。

掌を上にした左手には、折り畳まれた衣服が乗っている。

「失礼致します。タンクジャケットを仕立て終わったもので、早速持って参りました」

「お、いいじゃんねえ！」

塚野が跳ね上がるように立ち上がると、大川は持ってきたタンクジャケットをテーブルの上に広げた。

イズベスチャ社で出会った黒森峰女学園やアグレッツサーチームの制服に影響を受けつつ、パクリでもないそのデザインは十分満足出来るものだった。

「早速着てみて頂きたいのですが」

「おっし」

早速着替えようとする塚野だったが、小戸が一端ストップをかけた。

「待って下さい。仮にも人前ですよ」

桑田が奥の給湯室を指さす。

「だったらそのあそこぐらいしかねえぞ」

「まあ、そこならいいでしょう」

「お手伝い致します」

大川がタンクジャケットを持ち、2人は給湯室に入ってカーテンを閉めた。

やがてカーテンが開くと、タンクジャケットに身を固めた塚野が出て来た。

脱いだ制服は、大川の左腕に掛けられている。

「如何でしょう？」

「ワオ。サイズもぴったしじゃん」

「あなたの体形に合わせて作ってあります」

塚野は腕を広げてその場で回りながらタンクジャケットをうつとりと眺めまわした。「マジ凄いじゃん。気に入ったし！」

「恐れ入ります。仕立て屋の冥利に尽きます」

「なかなかサマになってますな」

と、小戸も感心したように何度も首を縦に振っている。「なるほど。風紀委員の出番が無いわけだ」

「では、これでゴーサインという事で宜しいですね？」

「勿の論ー」

これが2つ目の朗報であった。

そして迎えた予選リーグ前日の夕方。

中間テストも昨日で終わり、学園艦の寄港先で競技用戦車を試合会場に運ぶ特別列車の台車に戦車を積載する作業を横目に、メンバー達が続々と客車に乗り込んでいく中、最後に乗り込もうとした塚野が立ち止まり、ちようど台車に乗せられたレオパルトを見た。

「おい、どうした？」

客車の入り口で振り返った野島が声を掛け、塚野の視線を追った。

「いよいよだな」

「…うん」

そこへ吹いてきたそよ風が、塚野のロングヘアを風いだ。

初めて見る表情だ、という感想を、野島は抱いた。

「おめえ、そんなにかっこよかったか？」

「え？」

塚野が驚いて野島を見た。

「なんでもねえよ。ほら、時間ねえから、早くしろ」

塚野も野島の後に続いて列車に乗り込んだ。

席に着くと、早速桑田が焼きそばパン等の商品を詰めた首掛け容器を前に抱えて車内販売を始めていた。

「戦車道特製焼きそばパン、今なら安くしときますぜ！おまけに作りたてだー」

ちようど監視の小戸の隣に来て勧めたが、小戸は手を振って断った。

しかし小戸の隣に座る鹿屋は挙手して買い求めた。

「1個頂戴ー！」

「お買い上げどうもー！ついでに飲みもんどうだい？ミネラルウォーター

ターにコーラ、オレンジジュースがあるぜ！」

「じゃーねー…オレンジジュースでー」

「お買い上げ感謝しますー！」

それから料金を受け取ると、注文の焼きそばパンとオレンジジュース入りペットボトルを渡した。

小戸が鹿屋に首をちよつと傾ける。

「買う必要はないですよ」

「ちよつと小腹がねー」

鹿屋は焼きそばパンを包むラップを半分剥がすなりかぶりついた。
「おいふいー！」

焼きそばのソースのスパイシーな香りに、思わず小戸も鼻をひくつかせた。

いや、これまでもこの香りは鼻にしてきたが、とうとう我慢が限界に近付いてきたようだった。

桑田は小戸の鼻の動きを見逃さず、すかさず戻って来て

「どうです保安部長！焼きそばパン！」

「だからいらないう言っているだろう。何度言ったら分かるんだ？」

「そうは言っても、今あなたの鼻は正直にひくつきましたぜ。そりゃそうだ、調理部特製…いや、この桑田様特製の調合ソースを使っているからにはー！」

「え、オリジナルのソースなのー？」

「ええそうですも。だから美味しさは折り紙付き、オリジナルリテイーも担保されてるってわけだ」

しかし小戸はあくまで断ろうと、目の前に差し出された焼きそばパンを軽く振り払う仕草をする。

「どうでもいいから早くそいつを引っ込めろ」

「あ、じゃあさー。私のちよつと食べてみないー？」

「はあ…」

小戸は少し迷ったが、ここまで勧められたからには無下に断るわけにもいかず、鹿屋に千切って貰った分をつまんで口に放り込んだ。

その途端、桑田が苦心して研究開発したソースの魅力が口一杯に広

がり、思わず両眉を上げた。

この上なく忌々しいが、調理部としての腕は確かなようだ。

「どうかな?」

「…なるほど、味は認めよう」

それでも断ると見た桑田は、

「じゃあこうしよう。特別サービスであんたにはタダで1個上げるから、受け取って貰えないかな?」

許可を貰うのも待たず、桑田は小戸の手に焼きそばパンを握らせた。

「分かった分かった。もう行ってくれないか?」

「毎度あり!」

桑田が車内販売の続きを始める中、小戸は暫く手の中の焼きそばパンを見つめていたが、やがて徐にラップを剥がすと、一口かじった。

このソースはよく研究されたものか食欲を増進するもので、あつという間に半分を食べ切ってしまった。

そこへまた桑田が戻って来て感想を尋ねる。

「へへへ、なんと言おうと顔は正直だ。『美味しい!』って書いてあるぜ」

小戸はかじった分を飲み込むと、

「これで安くしてくれたら何の文句も無いがね」

「もう赤字ギリギリで販売してんだ、勘弁してくれよ」

「前科1つ取り消すのと引き換えでどうだ?」

「3つで応じるぜ」

「1つだ」

「じゃあ2つ」

「ダメだ、1つだ」

「それなら勝手にしてくれよな」

「その代わり、トライポイントの加算を推薦しよう」

立ち去ろうとした桑田の足がぴたりと止まった。

「それホント?」

「本当だ。正直こんなに美味しいとは思わなかったよ。その功績は認めよう」

小戸は保安部長としての職務上、目の敵にする桑田の料理に、これまで何一つ手をつけていなかったのであった。

食堂のメニューも、調理部が作った料理には調理部のマークがあり、どれが桑田の手がかかっているかいちいち聞くわけにもいかず、小戸はそれを意識的に避けていた。

「分かった。じゃあ値段下げよう」

「宜しい。じゃあまずは差額の払い戻しからだな」

「けっ。そこは見逃してくれよな」

そう文句を言いつつ、桑田は小戸の要求に従い、それが済むとまた販売の続きを始めた。

「明日はいよいよ予選リーグ。みんな、絶対勝つわよ！」

第一試合で当たる相手、青師団高校チーム隊長のエルの呼びかけに、目の前に立つ隊員達は一斉に

「Bu eno!!」

と、スペイン語で元気と気合十分に返答しながら拳を頭上に突き上げた。

「隊長。グヤーシユ、本当にいいのですか？」

ハンガリーが誇るトゥラーン中戦車の上で、グヤーシユをスプーンで掬いながらバラトン工業高校チームの副隊長が念の為に確認すると、胡坐をかいている隊長のタールツアイは茶碗を掲げながら、

「いいのいいの。私はこれが落ち着くから」

茶碗の中身はお茶漬けで、付け合わせに白い沢庵も一切れ入っていた。

それを一気にかき込むと、タールツアイは幸せそうに深々と息を吐く。

「はく。お茶漬けって最高〜！」

バラトン工業高校は第二試合で当たる相手である。

「村江さん、フロンティア学園にいたとは驚きですね」

「私も最初はまさかと目を疑ったわ」

卓上の電気スタンドに照らされた試合会場のマップを吟味しているのは、エクセルシオール大学附属学院の毛利隊長と真加部副隊長だ。

「フロンティア学園も油断できませんね」

真加部の初見に、毛利も静かに頷くと、

「でも、編成は決まっているわ」

「村江さんがいても、関係ありませんね」

「ええ。それに、一戦も負けるわけにはいかないから」

それから更に少し時間が過ぎ、時刻が12時を過ぎた頃の試合会場内にある宿舎のロビー。

その一角にあるソファーに、塚野は近くの自動販売機の灯りに照らされながら一人座っていた。

手には自動販売機から買ったらしい、スチール缶が握られている。

「あ、ここにいたか」

そこへ現れたのは野島で、両手に湯気の立つマグカップが1つずつ持っている。「ったく、ちよつと待ってろって言ったのに勝手に部屋抜けやがって…」

そうぶつぶつ言いながら歩いてきた野島は、塚野の手に握られているスチール缶に気付いた。「あ、何飲んでんだ？」

「イタリアンローストのブラックコーヒー」

「バッカ野郎、試合中に寝る気か…!？」

少し声を上げてしまった事に気が付き、声のトーンを落とす。「そんなもん飲んでねえで、ほら」

塚野は自分の目の前に差し出されたマグカップを不思議そうに仕上げと見つめた。

「何これ？」

「桑田特製のホットミルクだぜ」

「おこちやま…」

「ちげえわ。リラックス効果で寝つきが良くなんだよ。いいから飲

め」

「…分かった」

缶コーヒーを目の前のガラス卓に置き、ホットミルク入りのマグカップを受け取ると、それを一口含んだ。

まるやかで優しくホツとする味で、心なしか心身共に落ち着いてきた。

「ほら、効果あるだろ」

塚野が落ち着いた様子を見せると、野島は向かいのソファーに腰掛けた。「やっぱ緊張で眠れねえよな」

「そだねえ」

塚野はマグカップの中のホットミルクをぼんやり眺めながらそう応じた。

「どうした？中間テストは手応えあったんだろ？」

「うん。珍しく勝ち確って感じ」

「じゃあ、やっぱり試合の事か？」

「まあ。それもあるんだけどねえ」

そこへ今度は佐伯が現れた。

「何してるのよ二人とも、早く寝なさいよ」

「そう言う副会長もお」

「生徒会として見回らないといけないから…鹿屋はぐっすり眠ってるけど」

「ご苦労さん」

「副会長もちよつと寛ぎませんか？」

野島が隣の席を見ながら言った。

「まあ、どのみち話したい事があったから」

佐伯は野島の横に腰を下ろすと、ガラス卓の上の缶コーヒーに気付いた。

「缶コーヒー？」

「こいつがさつきまで飲んでたんですよ」

「馬鹿ね。眠れなくなるわよ」

「同じこと言いました」

「それで、話して何ですかあ？」

「ああ。これは特別情報だけど」

佐伯はそう前置きしつつ、「中間テスト、高得点よ」

塚野の両目が見開かれた。

「ワオ、マジ？」

「ええ。各科目の先生に最優先で見えて貰ったわ」

「やるじゃねえかよ…：ていうか、なんであたしが教えた時はダメなんだよ」

「合わなかっただけじゃんね？」

「まあ、なんにしても良かったな」

「つーか、頭が冴えちやっただんですけどお」

苦情を申し立てる塚野に、佐伯は落ち着いて反論する。

「今に緊張が解れて眠れるようになるわよ」

「あ、確かにそうかもお」

それからホットミルクを一口飲む程の時間を空けてから、

「ねえ、聞きたい事があるんだけど」

「え？」

「あなた、あれだけ勉強出来るのに、どうして今までさぼって来たわけ？今回のテストの結果を見たら、猶更そう思うわ」

佐伯の問いに、塚野は言いにくそうに俯いて暫く口をつぐんでいた。

それを見た佐伯は、野島に顔を向けて、

「あなたは何か事情を知ってるの？」

「いんや。まあ断片的には聞いてますが、詳しい事はこいつしか分からねえです」

「…私、あまり家庭環境が良くないのよねえ」

その言葉に、野島と佐伯は同時に顔を塚野に向けた。

「どういう事？」

「別に暴力受けたりとかじゃないんだけどねえ…：んまあ、親から褒められたり、注目されたりする事が無くなって今まで育ってきてさあ」

「それって、あなたがどんなに何かを頑張っても…：という事？」

塚野はこくりと頷いた。

「ああ、なるほど。だからおめえの顔を会長が褒めた時に戸惑ってたわけだな」

あれも佐伯と塚野が乱闘騒ぎを起こした時の事だ。

止めに入った国崎が佐伯を追い出した後、今までけばけばしい化粧を装っていた塚野の素顔が相当な美人である事を褒めると、まるでそれがむず痒いかのような反応を示していた。

「最初は褒めてほしくて色々頑張ってみたけど、結局褒めてくれなかつてさあ。まあ、無視されてたつてゆうのかなあ」

「ここに入ったのもアピールの一環？」

「まあ、そんなところ。結局ダメだったから、心がちよつくら折れちゃつたつて言うかさあ」

「それでズルズルと成績も落ち込んでいったと」

「そんでさあ。初めて会長になんか褒めて貰ったつて感じ？」

すると野島が、

「いやいや、今まで親以外に誰かから褒めて貰った事はあるんじゃないのか？」

「まあ、そうだけどさあ、それを片っ端から親が否定していつてさあ。家に帰った後とか、『絶対に調子に乗るなよ』とか言われて…すつげえ傷ついたし、なんかもう色々空しくなつてさあ…でも国崎会長の言葉つてまるで…身近な人の言葉みたいな…そんな感じがして…まるで家族のようにと言うか何と言うかさあ」

「ああ、確かに会長はそんな感じで生徒に接するわね」

佐伯は他の生徒よりも遥かに国崎の傍にいる事が多いから、塚野の推測に実感があるようだ。「それが魅力的で、私は会長を尊敬しているのだけど」

「ホント、安心感あるよな」

「激しく同意」

「なるほど。一応事情は分かったわ」

佐伯はそう言つて立ち上がると、「じゃあ、ここにあなたの居場所を作り上げなさい。今のところ、それはうまく行つてると思うから」

塚野はその言葉を噛み締めるように暫し黙って何度か頷いた後、
「サンキュー。じゃ、寝ますかね」

3人はそれぞれの部屋に戻り、就寝した。

続く

チャプター6 開幕

そして予選リーグ当日の試合会場。

観客目当ての屋台が軒を連ね、実際に人々が観戦中に食べる料理をどれにしようかと、一軒一軒物色して行ったり来たりを繰り返していた。

その人込みの中を縫うようにして歩く佐伯と小戸の姿があったが、淡々としている小戸に対して佐伯は機嫌が悪そうだった。

「人使い荒いのよ、あの隊長とやら…」

「試合も近いですし、仕方ないでしょう。早いとこ探し出しますよ」

そう、佐伯は塚野から「お使い」を命じられて小戸と一緒に行動していたのだった。

その「お使い」の内容とは、召集を掛けても現れない桑田の搜索だった。

事前に今歩き回っている屋台を出店しているという事は聞いていたのでエリアは絞り込めたが、佐伯にはどうして自分が指名されたのか納得出来なかったのである。

愚痴をこぼす佐伯を宥めながら、小戸は屋台の列を左右に見回し、やがて一軒の屋台に目を止めた。

他の屋台と違う点は、横一列に並んだ六脚程の椅子と、外からは中の様子が窺えないよう暖簾が掛かっている事である。

「楽しみにしていてくださいなー！」

「おう、しっかり応援させて貰うよー！」

暖簾を捲って現れた客の1人の右手には、焼きそばパンと銀色の350mm缶が纏めて握られていた。

「何よあれ…」

銀色の350mm缶を見咎めた佐伯が動き出す前に、小戸がやんわり制止した。

「私が行ってきます。ここで待っていて下さい」

佐伯をその場に残して小戸が暖簾を潜ると、ちょうど桑田は背中を向けてゴソゴソ何か作業していた。

「らっしやい!ご注文は!」

「水でも貰おうかな?」

桑田は不意打ちを受けたかのようにビクツと体を震わせて振り向いた。

「なんだあ小戸ちゃんか。びつくりさせやがって」

そう言いながらも、ちゃんと注文通りにミネラルウォーター入りのペットボトルを置く。「ほれ、400円だぜ」

しかし小戸は桑田の値段提示を完全に無視して、

「ここで何してるのかな?」

「何ってあんた。屋台だぜ。調理部にとって大事なイベントだ。ちげえか?」

「そうじゃない。何を売ってるかって聞いてるんだ」

「ああ、そういう事か。今のお客さんね」

桑田は小戸の言わんとする事を察した。「ノンアルコールのビールにワイン、それにチューハイってとこさ。あとはソフトドリンクに、そのミネラルウォーターもな。なんにも悪い事してねえぜ」

「遠目では酒に見えるぞ」

小戸は桑田の後ろに置かれているコンテナを胡散臭げに見やった。

コンテナの内側に張られた氷水の中にペットボトルや缶が浮かんでおり、ノンアルコール飲料もたくさん見受けられる。

「心配してくれてありがとよ。でも残念だったな。もう申告済みさ。大体法律違反だろうが」

「お前の事は心配していない。ただ、我が校の面子に関わる話だ」

「ああ。あんたはその立場だったな」

「それはそうとお前、もう行かなくていいのか?召集が掛かっているぞ」

「何、もうそんな時間かよ…」

時計を確かめた桑田は、やれやれと首を振った。「まったく、時間が経つのは早いもんだぜ。言ったのってアインシュタインだっけか?」

小戸は後ろの暖簾をめくって外を見渡せるようにした。

「早くした方がいいな。副会長がご機嫌斜めだ」

その佐伯は腕組みをしてそわそわしながら右足で地面を叩いてい

る。

その様子を見て、桑田も急いで身支度を整え始めた。

「まずいまずい。あいつを怒らせたらとんでもねえ事になっちまう」

それから段ボール箱を抱えて裏から入って来た調理部員に向かって、「おい初坂！引き継ぎ頼んだぜ」

「各車、砲弾積み込みOKです」

「うっし。くれぐれも忘れ物とか無いようにねえ」

待機用の広場には、フロンティア学園が持ち込んだ戦車：即ちレオパルト、SU-100、ハリホプキンス、ルノーUE、LVT、ラムIIが横一列に並び、隊員達がそれぞれの持ち場たる戦車の整備と装備の確認に追われていた。

蒸し風呂のカヴェナントは、学園艦で留守番なのでここにはいない。

「みんな、緊張していますよ」

「正直、マジで緊張するう」

塚野の表情は青ざめて、少々やつれているようだ。

「お腹の痛みは、どうですか？」

他の隊員達と同じく、塚野もまた緊張していたが、隊長という立場や、今回の予選リーグの結果が自分自身の境遇も左右するとあつては人一倍のストレスに晒されていた。

おかげで朝食後に腹の調子が悪くなり、トイレに駆け込んだものもある。

「もー最悪。まだ一戦もしてないのにすっごい疲れたんだけどお」

その時、襟首を掴んだ状態で桑田を引っ立てる佐伯がやって来た。

一歩後ろに小戸が従っている。

「ほら、任務完了よ」

と、佐伯が桑田を前に押しやった。「全く、手を焼かせないでよね」

「まあまあそう怒らないでくださいって副会長」

「カヴェナントに閉じ込めて蒸し焼きにするわよ」

「あー。あれはやばかったよな…」

どうやら効果的だったらしい、逃げるようにして自分の持ち場として与えられたLVTに駆けて行く。

それから時間が数分経過し、野島が塚野と話し合っていた時だった。

「ズドラー・ストヴィチエ」

とロシア語で声を掛けられて振り向くと、オリブドラブを基調とした上着とワインレッドのシャツと黒のミニスカートを着た、クールそうで黒の長髪の背が高い女性が立っていた。

塚野は咄嗟に何と返して良いか思い浮かばず、

「え、ああ。ハ、ハロー！アンシャンテー！ダンケー！シエーシエー！」

「挨拶が多国籍になってんぞ」

横から突っ込みを入れる野島だが、相手の女性はすぐに日本語で、「大丈夫です。私も日本人ですよ。ごめんなさい。驚かせてしまいましたね」

「え？はあ…やっぱそうだと思った」

「嘘つけ」

塚野と野島の漫才をスルーして、ロシア語の少女が語を継ぐ。

「私はプラウダ高校のノンナです。準備でお忙しいところ申し訳ありませんが、実はお願いしたい事があります…」

「お願い？」

ノンナと名乗った女性は上着のポケットをまさぐってデジタルカメラを取り出し、それを持った手をSU-100の方に振った。「あの戦車…SU-100と私のツーショットを撮って貰えませんか？」

「え…あ、勿論、オッケーですよ！」

塚野はノンナからデジタルカメラを受け取ると、乗員達に一端どいて貰った上で、ノンナとSU-100がフレーム内に綺麗に収まる最適な位置取りを調整した。

立ち位置が決まると、手振れを起こさないように集中し…過度な緊張で消耗し、手元が震えそうになるのを必死に抑えながら…

「はあい、チーズ！」

と合図を出して数枚分を撮った。

「こんな感じでいいですか？」

「スパシーバ。SU―100、好きなんです」

返して貰ったデジタルカメラの画面を確認しながら、ノンナは撮影の動機を説明した。「高校の戦車道でSU―100を使っているチームはなかなか無いもので…」

「…あ、ひよつとしてうちのホームページ見た感じ？」

「はい。予選リーグの出場校で知らない名前を調べていたら、あなたの方がSU―100を使っている事を知りまして。それで一目見ようと」

「なるなる…あ、そう言えばプラウダ高校って…」

「何ですか？」

「確か戦車道の強豪の1つ…でしたっけ？」

「そう言われていきますね。でもそれは、たゆまない努力あってこそ保たれる名声です。そして名声は結果論に過ぎません。我がプラウダ高校は、プラウダの戦車道を世に知らしめ続けるだけです」

「なんか深い…」

その時、反対側のポケットに入っていたらしいノンナの携帯電話の着信音が鳴った。

塚野や野島は聞き覚えがあれど何かまで思い出せなかったが、その着信音は『コロブチカ』と呼ばれているロシア民謡の出だしだった。

「はい、ノンナで…」

途端に雷のような大音声が地吹雪のように、

『ちよつとノンナあ！今どこにいるのよお！私を置いて消えるなんていい度胸してるわね！』

地吹雪の如くまくし立てる勢いに、塚野と野島は思わずギョツとして顔を見合わせた。ノンナは慣れているらしく、一切微動だにせず表情一つ変えずに聞いていた。

しかも驚いた事に、明らかに耳が大音量に晒されているにも関わらず、携帯電話を遠ざける事すらしていない。

戦車の砲撃音を日常的に聞いているからだろうか…

一通り相手がまくし立て終わると、

「…何でもありませんカチューシャ。今から帰ります」

『だから今どこに…』

相手の声がまた問い詰めようとしたが、ノンナは構わず携帯電話を下ろしてそのままスイッチを切ってしまった。

それからまだ目を点にしている塚野と野島を見て苦笑し、

「びっくりしましたよね。カチューシャ隊長はいつも元気一杯なんです」

「は、はあ…それにしても元気一杯でびっくりしたあ」

「それがカチューシャのいいところです。では、私はこれで帰ります。予選、頑張ってくださいね」

立ち去るノンナが人込みの中に消えて行っても尚、塚野と野島はきよとんとした表情で棒立ちになっていた。

と、その直後。

「H o l a a !」

今度は親し気なスペイン語で声を掛けられたが、呆けていた状態だったので一瞬何と言ったのか分からず狼狽えた。

「え、あ、な、何ですか!?!」

振り返ると、2人の女性が立っており、片方はロングヘアでもう片方はショートヘアの赤バンダナを頭に巻いていた。

服装からして明らかに戦車道チームのようだが、まず最初に目を引いたのは胸元が実に開放的な青色の上着だった。

因みに下は抹茶色のスカートである。

「おいエル。どうやらびっくりさせちまったようだね」

と、赤バンダナがなんだか面白そうにエルと呼んだロングヘアに言った。

雰囲気からして、このエルという人物が隊長で間違いなさそうで、赤バンダナは恐らく副隊長だろう。

エルが最初の声掛けの時と同じように、親し気に手を差し出してきた。

「私はエル。青師団高校の隊長よ」

塚野の目が驚愕で見開かれると同時に、体中に電流が走ったように硬直する。

青師団高校：初戦の相手だ。

しかもこの後始まる試合でいきなり相手にする事になる。

「つ、塚野スズネです…フロンティア学園の隊長…です」

喉をカラカラにしながら握手に応じると、相手は力強くも温もりのある手で握り返してきたので、塚野は意表を突かれると同時になんだかこの人物に前から知り合いだったかのような親しみを感じた。

佇まいやその口調からも、相手が場数を踏んだ歴戦の経験者である事はすぐに感じ取れたが、それでいてなんだか安心感を与えてくれる人物という印象だ。

西住まほの影響を受けていると思われる逸見エリカが切れ味のある人物とするなら、このエル隊長は包容力がある人物と表現すべきか。

手を離すと、エルは後ろで腕を組んでいる赤バンドナに顔を向けた。

「こちらが副隊長のバスク。そちらの副隊長は…あなたで良かったかしら？」

「はい。副隊長の野島カエデです」

野島は塚野と対照的に冷静に努めているが、バスクには見透かされていたようだった。

「トップの2人が今からてんぱってるようじゃ、試合が思いやられるね…て言うか…塚野隊長…だっけ？腹でも下したのかい？そのままゾンビ映画にでも出られそうな面してるじゃんね」

「もう、やめなさいバスク」

と、エルが副隊長の冷やかしを嗜めると、2人に謝る。「ごめんなさい。でも、もうちょつとリラックスした方が良いのは確かだね」

塚野は気持ちを切り替えるように両頬を叩いた。

「そ、そうですよね！深呼吸して落ち着かないと…」

不思議とエル隊長には人を落ち着かせる能力が備わっているようだ。

大きな音で深呼吸する間、ふと塚野は、この人物の下でなら喜んで
隊員として献身的に動くのではないかなと言う考えがよぎった。

それ程にこのエル隊長には隊長としての魅力がある。

黒森峰の西住まほの時もそうだったが、各チームの隊長には人を惹
きつける何かが生来備わっているものらしい。

自分は果たしてどうか…

と、それはそうと…

「大丈夫？随分息切れしてるようだけど…」

気が付くとエルが心配そうにこちらの顔を覗き込んでいた。

深呼吸のし過ぎで却って息切れを起こしていたらしい。

「あ、まだ緊張してたかも…ハハ…」

「気にしないで。誰にでも初めてはあるものよ」

エルはよく分かるというようにうんうん頷いた。

その時、女性審判員のアナウンスが入る。

『間もなく、予選リーグ第1回戦、青師団高校対フロンティア学園を開
始。関係者は至急、試合会場に集合して下さい！』

10分後、青師団高校チームとフロンティア学園チームの隊員同士
が向き合って立っていた。

「両チーム、隊長、副隊長、前へ！」

蝶野の合図で、エル、バスク、塚野、野島が列の中から進み出ると、
まず蝶野が今回の審判長担当であると挨拶し、「一同、礼！」と言う合
図で両チームがお辞儀をし合った。

「それでは、試合開始地点に移動せよ。各チーム、全力を尽くすよう
に」

蝶野が踵を返して離れて行くのを見送った後、エルが更に進み出て
来て、フロンティア学園の面々、それから塚野と野島を交互に見た。

やはり威圧感は何れも皆無で、経験者としての余裕はあるが落ち着いてお
り、こちらも相手に敬意を払う気持ちにさせてくれる。

「いよいよね。お互い頑張りましょう」

「…はー」

どういいうわけか、相手のオーラに狼狽えるというよりは受けて立つという気合が湧き出て来る。

バスクにもそれが分かったらしく、

「…ほう？さつきとは面構えが違うねえ」

再び握手を交わし合ったが、なよなよしていたさつきとは違い、今度はこちらも力強く握り返す。

「宜しくお願いしますー！」

エルが微笑み返した。

「Buena suerte…幸運を！」

予選リーグの第一試合、青師団高校とフロンティア学園の戦いが火蓋を切って落とされた。

〈第4話・終〉

第5話 これが青師団高校の戦いです！

チャプター1 会敵

『こちらガリシア。フロンティア学園の隊列を発見。2台見受けられません。ハリーホプキンスと、ルノーUEです』

位置を確認すると、エルは手元の地図を指でなぞる。

「2台は偵察ね。多分、ここに……ここ、かしら？」

彼女が座乗するII号戦車F型の後ろには、もう2輦のII号戦車F型が従っている。

3輦は林の中の道を走っていたが、両側に生い茂った草のせいで道なき道を進んでいるように見える。

予選リーグに出せる車輛数の上限は8輦だが、青師団高校は上述のII号戦車F型が3輦と、先程エルに報告してきたガリシアが乗るBT―5が2輦、そしてベルデハ2軽戦車にIV号戦車H型とIII号突撃砲G型が1輦ずつの編成となっている。

地図を見ながら予想する限り、敵の偵察役（と思われる）ハリーホプキンス軽戦車とルノーUE豆戦車は、ここまで来ているとは思えない。

エルが率いるII号戦車部隊は、主戦場になりやすい中央の平原を大きく迂回するようなコースを取っており、しかも念の為に幅広の道ではなく長年手入れされていないような酷い悪路を走っているのである。

現在、フロンティア学園の本隊と思われる隊列は、どうやら教科書通りに中央の平原に向かって進軍しているようだ。

尚も数秒思考していると、ガリシアとは別のBT―5の車長を務めるエレナが意見具申してきた。

エレナ車はガリシア車とは別地点に潜伏しているが、作戦発動時にはすぐに両車とも合流出来るように考慮した位置取りをしており、エルもそのつもりで配置していた。

『エル隊長、作戦通りにガットンとやっつけにいつちやいましょう！』

慎重派のガリシアとは異なり、こちらはやや大胆な性格であり、その性格は口調にもなつて現れる。

因みにガリシアもエレナも1年生であり、青師団高校の将来を担つて立つてあろう。

血気盛んなエレナを、バス副隊長の声が嗜める。

『まあ待ちなエレナ。エル隊長もタイミングは心得ているさ』

『そ、そうですね！でも、早く攻撃しに行きたいです！』

『待てないなら首輪つけちやおうか？』

「エルからエレナへ」

『はい隊長！』

エレナの声は、これ以上待ち切れないといったような期待に満ちたものだった。

「ガリシアと合流し、合流したら任意のタイミングで陽動を開始して」
合流地点を伝えると、ガリシアとエレナの声が重なった。

「エル、私達も急がないと」

そう言ったのはエル車の通信手を担当するトリスターナだった。

エルの指示を待つまでもなく、操縦手のヴィリディアナがⅡ号戦車を加速させ、後ろの2輜もすぐに速度を合わせてついて来る。

「会敵まで4、5分…」

加速して強くなった向かい風にロングヘアをなびかせながら、エルはそう呟いた。「陽動隊が十分に引き付けてから、一気に仕掛けて…それから…」

『エル』

作戦を反芻中にバスクの声が割り込んできた。

「何？バスク」

『肩の力を抜きな。あたしには分かるよ』

「そ、そんな事は…」

『言つたら。みんなで勝ち取るって。あんただけ肩肘張つてもダメだよ』

この副隊長はテレパスか何かだろうか？

そう言えばSF映画やドラマには鉄板ネタとしてテレパスがよく

出て来るものだが、あれは現実に基づいているのか？

などと余計な事を考えている事に気付いた時、エルは不思議と体から良い意味で緊張が抜けていくのを感じた。

その直後にトリスターナが声を掛ける。

「エル。大丈夫？まだ今年の全国大会の事、気にしてるの？」

エルは微笑んだ。

「大丈夫よトリスターナ。ただちよつと…バスクがテレパスなんじゃないかって考えていたのよ」

トリスターナとヴィリディアナはぶつと噴き出した。

「何？エルってスタートレックとか好きな感じなの？」

「え、見た事無いわヴィリディアナ。あなたこそ…」

『エールー？聞いているのかーい？』

「あ、しまった」

エルは送話ボタンを押した。「ごめんなさい。もう力は抜けたわ」

『それなら安心したよ。じゃ、あとは宜しく』

まあ、こんな会話が出来るのであれば心配無用だろう。

バスクは今年の全国大会に敗北した責任を、隊長として自分ひとりで背負っていた。

予選リーグの対象校に選ばれたのも、自分のせいだと。

おかげで何としても来年の全国大会に後輩を送り出そうと焦り、練習ではチームに辛く当たって関係がぎくしゃくしてしまった事もあった。

が、バスクやヴィリディアナ、トリスターナといった親友を始め、仲間達から励まされてわれに返った。

それに、通常はライバル校の1つであるセントグロリアーナ女子学園の隊長からも力を得た。

自分は一人ではない。

改めて内心そう自分に言い聞かせながら、エルは時計を確かめ、呟く。

「あと3分…」

『敵戦車、確認出来ません』

「まだ見つからないかあ…」

ハリーホプキンスの車長を務める大地の報告は、これで2度目である。

ルノーUEからも2度報告を受けたが、こちらも発見出来ずじまいである。

フロンティア学園は、偵察の2輜を除き緩い楔形の隊列で中央平原に向かって進軍していた。

即ち、レオパルト軽戦車、SU-100対戦車自走砲、ラムII巡航戦車、LVТ水陸両用戦車の4輜である。

『隊長。敵は中央の平原を迂回するコースを取っている可能性が高いわ』

そう意見を述べたのは村江である。

彼女はラムIIの車長を担当しており、戦闘状態でないフリーの今は地図を広げて戦況を確認していた。

「迂回？でもそんな事するのは、ちょーめんどうくない？」

『私もそんな手間は掛けないと思っていたのだけど…今正に、敵はそれをやっていると思えない。こちらの側面に回り込んだところで、一気に仕掛けて来る。私なら…迂回させるなら、そうするわ』

中央平原まであと1分と数十秒。

つまり、村江の予想が正しければもう間もなく敵襲があるという事になる。

「マジ？そっちに偵察送ってないじゃん」

『一番近いのはルノーよ。今すぐ向かわせた方が…』

と、その時。

『こちら野島！正面からBT-5二輜！』

塚野と村江がほぼ同じタイミングで双眼鏡を向けると、レンズの中に2輜のBT-5を捉えた。

騎馬武者よろしく、こちらに向けて猛前と爆走してくる。

「フフフ。いた…いたわ。フロンティアの本隊！」

向かい風を受けながらエレナが不敵に笑う一方、ガリシアの声は不安そうだ。

「だ、大丈夫かな、エレナ？」

「やるつきやないわ！それにこう言うの、好きなの私！」

「そうなんだ…」

「こちらエレナ、敵部隊と会敵！これより陽動を開始します！」

『OK。頼んだわよ』

「お任せ下さい！」

エルと通信を終えると、エレナはガリシア車に手を振った。

ガリシアの方は、開け放たれたハッチの縁に両手を掛けて、両目から下は車内だ。

「ガリシア、先に行くからね！」

「どうぞお先に…」

「ピリ、いいわよ！」

「了解！」

エレナ車を操縦するピリは、BT-5を急加速させた。

『来るわよ！』

村江の警告に、塚野達は全身を緊張させる。

青師団高校とフロンティア学園の激突が始まった。

続く

チャプター2 前哨戦

2輦のBT-5のうち、こちらから見て左側の方が先頭切つて飛び出してきた。

つまり、エレナ座上のBT-5だ。

「いつでも撃てますよー!」

鹿屋がレオパルトの砲塔を、そのBT-5に指向させて指示を乞う。

因みにレオパルトが今回のフラッグ車である。

「うっし。撃て撃てえ!」

塚野の命令で、待つてましたとばかりに50mm砲が火を噴いた。しかし照準を誤り、弾道はBT-5の後ろを斜めに通過した。

BT-5は外側に向かって緩やかな曲線コースを描きながら、こちらの隊列の左側を通過していき、その際に撃ち返したが、高速走行下での安定しない走行間射撃は、近くの地面を抉つたに留まる。

「ひゃー!」

「やばいわー!」

井坂と西中がほぼ同時に悲鳴を上げ、操縦スティックを握る井坂が思わず隊列を乱しそうになるが、

『LVTの諸君、心配には及ばぬ!ヘーキヘーキ!』

と、塚野の余裕ある声が通信機からLVTに乗る4人：福地、井坂、西中、桑田…に呼び掛けた事で、動揺による硬直からすぐに立ち直つた。

他の車輛は今の攻撃に一切動揺していなかったが、それはイズベスチャ社のアグレッサチームとの凄まじい練習試合を経験した隊員達が乗っていたからであり、LVTにはその経験者が皆無だったからに他ならない。

塚野の声は続いて、

『LVTはさっきのBT-5に主砲向けといて!』

と命じ、桑田がそれに従つて小型の砲塔を旋回させてエレナのBT-5に主砲を向ける。

「隊長って言われるだけの度胸はあるもんだな」

桑田が言った。

「始まりましたな」

「ええ。練習の成果を發揮する時ですね」

いよいよ戦車戦に突入した事で、観客席は盛り上がり始めていた。野島船長や井上の祖母、桑田の配下である初坂や、それ以外の調理部員達もそれぞれフロンティア学園戦車道チームを応援する中、国崎と小戸は冷静に大型中継モニターに映し出される試合の成り行きを見守っていた。

但し小戸は桑田特製の焼きそばパンを頬張りながらの観戦である。

そして国崎は、小戸が桑田に対し多少は態度を軟化させた事を察していた。

また、フロンティア学園の学園艦の校舎では、試合のライブ中継が放送部の保有する大型液晶テレビによって映し出され、興味を持った生徒が大勢集まっていた。

住宅街でも、一般住民が各々の自宅でテレビやパソコンにライブ中継を映し出して試合観戦を行っていた。

これはひとえに報道部の萩原や生徒会広報の鹿屋、更には調理部の桑田による宣伝の効果の賜物と言えよう。

そしてもう一つ、宣伝効果をもたらした要素があり、その人物はちよつと面白くなさそうだった。

「やれやれ。逆宣伝になっちまったか…」

大型液晶テレビの前にひしめく生徒達を後ろから眺めながら、放送部長の羽佐間ミオは机の上に頬杖を突いて口を尖らせていた。

わざわざ大型液晶テレビを置いて予選リーグのライブ中継の垂れ流しを宣伝したのは、「注目度の低さを露呈させてその無関心ぶり」を事実として喧伝したかったから、と言うなんとも不純な動機からだったが、これまで展開してきたいわゆる「逆張り」の予想はかえってフロンティア学園の戦車道チームに対する注目をより一層集める結果

となつてしまつたようだった。

生徒の中には、チームの練習の合間に操縦や砲撃体験を楽しんだり、陸上自衛隊もイベントの名物の1つとしている戦車搭乗体験に参加する者が大勢出ており、注目は否応なしに集まっていたのである。

もはや注目度の高さは抗えないものとなつたが、羽佐間は敢えてそれを「ただ単に物珍しさが頼りの人寄せパンダ」と言う懐疑的な視点を持つ人間として振舞い今日に至っていた。

しかし結果は、目の前の人だからとなつて広がっている。

こちらの予想とは完全に真逆だが、これはこれで…

「…ま、悪くないか」

と、羽佐間は小さくそう呟いて自分の思考を締め括つた。

しかし次なる問題は、このままだと報道部の軍門に下る形で吸収される事だが、まあそれについてはまだ考える時間があるだろう。

「エレナに負けてられない!」

エレナ車が交戦を開始したのを見て、ガリシアも決意して気を引き締めた。「突撃してください!」

ガリシア車の突撃を受けて、ラムⅡの砲塔がこちらを向き、ガリシアは全身に冷や汗が走る感覚を覚えた。

どうも砲を向けられるのは慣れない。

隊列を維持するフロンティア学園の後ろには、獲物の隙を窺うように旋回するエレナ車の姿があり、LVTとレオパルトの砲塔がそちらに向き、ラムⅡの砲塔だけこちらを向いているようだ。

最も脅威の主砲を持つSU-100は固定砲塔なので、こちらの射界に収まっていない。

つまり射線はこちらに対して薄いから…

と、思った瞬間、狙い澄ましたラムⅡの6ポンド砲が火を噴き、砲弾はガリシア車の側面を掠めた。

「嘘!」

操縦手も動揺したらしく、コースを急激に変えた。

『こちらガリシア！敵のラムⅡに要注意です！射撃がかなりうまいです！』

「了解ガリシア。貴重な情報有難う！」

『Gracia！引き続き陽動します！』

部隊が勾配を登板し続ける中、エルは頭の中のメモに急いで注意書きする。

「ラムⅡが一番危険…なるほどね」

「エル！もうすぐ攻撃ポイントに到着するわ！」

ヴィリディアナの報告を受けて、エルはもう一度地図を確認した。何度も確認済みだが、念の為に。

「Bien、ヴィリディアナ。位置に着いたら、私の合図を待つて」

「了解！」

「このやろおおおお！」

エレナの叫びと共に再びフロンティア学園の隊列に突撃するエレナのBT-5。

しかし目的はあくまで陽動、決して無理はしない。

両チームの砲弾が交錯するが、有効打はおろか掠りもしなかった。

「エレナ、もうちよつと慎重に…」

「このくらいやらないと相手に舐められるわ！ガリシアも気合が足りないわよ！」

「そ、そんな事ないよ！」

エレナやガリシアは、陽動するに当たって「新参者」のフロンティア学園戦車道チームの隊列が足並みを乱すかと思っていたが、実際はそうならなかった事で、決して油断すべきでは無い相手と考えを改めていた。

2輦のBT-5は、羊の群れを狩ろうと隙を窺う狼のようにフロンティア学園チームの周りを旋回しながら近付いては射撃し、また一定の距離を保って旋回するという陽動を繰り返した。

「こりゃ本隊の到着を待つてるねえ」

『そうね』

塚野の分析を、村江は肯定した。『いつ現れてもおかしくないわ』

『じゃあどうすんだよ？このままじゃジリ貧だぜ』

そう問う野島の声は焦れていた。

野島は固定砲塔のSU-100の車長なので、射撃のチャンスが無くイライラを募らせていたのだ。

隊列は既に中央平原に突入しており、BT-5は乱舞し続け、こちららは隊列を維持して防戦に努めているが、敵本隊がいつ現れてもおかしくないし、このままだと集中力もいつかは途切れる。

「…偵察隊を呼び戻して増援にすっかな」

『私がちよつとBT-5に仕掛けるわ』

「え？」

『偵察隊は呼び戻していいわ。でもそれまで時間がかかる…』

その時、またBT-5が仕掛けて来たので一端会話が途切れる。

今度は機銃を乱射しながらの突撃だったので、被弾を避ける為に車内に身を隠した。

BT-5が去り、攻撃が止むと、また顔を出して会話を再開する。

早く方針を決めないと、また会話を中断させられてこちらが氣力を削がれる事になり兼ねない。

村江の声が早口で、

『偵察隊が合流するまで、私が奴らの相手をする。そっちは敵本隊を警戒して！』

「隊長！仕掛けますか!?!」

エル車のすぐ後ろにつくII号戦車の車長を務めるアンダルシアが、これでもう三度目の問い掛けを行った。

部隊は中央平原を見下ろす位置につき、あとはエル隊長が攻撃の判断を下すのを待つのみとなっていたが、エル隊長はなかなか首を縦に振らなかった。

エルは地面に腹ばいになり、双眼鏡でエレナとガリシアの部隊の陽動の様子をじつと追っていた。

Ⅱ号戦車は少し後ろで横一列に待機しており、下の中央平原からこちらが見えないように考慮されていた。

エレナとガリシアの反復攻撃に業を煮やしたのか、ラムⅡが隊列から飛び出してBT-5を追い回し始めた。

ガリシアが報告していた、『最も危険な』戦車だった。

あれには恐らく、自分と同じ戦車道の経験者が乗り込んでいるに違いない。

エレナとガリシアは、そのラムⅡによって攻撃を中断させられたように振る舞い、隊列から引き離し始めた。

勿論、ラムⅡも自軍の隊列から離れ過ぎないように注意している。

彼らが2輦のBT-5がまだ見ぬ他の部隊の到着を待つまでの陽動だと気付いているのは間違いないし、簡単に予想出来ただろう。

実際、ラムⅡ以外の戦車は気を散らさず周囲への警戒を怠っていない。

が、ラムⅡが隊列から僅かな距離でも離れたのはこちらにとって好機。

エルは起き上がってⅡ号戦車に駆け戻りながら、

「攻撃開始ー」

と告げた。

3輦のⅡ号戦車のエンジンがいなくなると、一斉に発進した。

続く

チャプター3 分断

最初に発見したのはLVTの車長を担当する福地だった。

急勾配を3輦のII号戦車F型が一糸乱れぬ横隊で駆け下りて来る。

「9時方向に敵戦車3台!」

そう報告を叫びながらもカメラを向けて撮影する福地は、BT-5との遭遇でもカメラを回していたが、もはや悠長に構えていられない事態となった。

「え、3輦だけ!?!」

塚野も同じ方向に顔を回した。

双眼鏡を構えるまでもなく、既に急勾配を半分まで下り切った青師団のII号戦車部隊がハッキリと見えた。

塚野が疑問口調で言ったのは、出場可能上限数の8輦のうち、まだ5輦までしか現れていないからだ。

野島も塚野の疑問を察しつつ、

「あと3輦が合流してきたらまずいぞ!」

「迎撃! 敵に正面を向けるよお!」

塚野がこう言ったのは、固定砲塔のSU-100の主砲も有効活用する為だ。

II号戦車に正面を向ければ、SU-100も迎撃に加われる。

「了解! こっちは引き付けておくから、しっかり頼んだわ!」

村江も塚野の考えをすぐに理解したようだ。

ラムIIが2輦のBT-5を相手にする間、レオパルト、SU-100、LVTは左に転回して突っ込んでくる3輦のII号戦車部隊と相対した。

「て、敵戦車3輦、こちらと向き合いました!」

「落ち着いてミランダ! 作戦通りに!」

「はい隊長!」

3輦目のII号戦車の車長のミランダは2年生だが、ややあがり症で想定外の事態や計画通りに進まないような形になると落ち着きをな

くす癖があるが、ミランダ自身も改善しようと努力しており、なかなか一朝一夕にはいかないがそれでも諦めずに努力していた。

急勾配を下り切ったⅡ号戦車部隊は、その勢いのまま迎撃しようとするフロンティア学園戦車隊に肉薄する。

「散開！」

エルの指示で、アンダルシアとミランダのⅡ号戦車隊は左右に散らばったが、エルのⅡ号戦車だけは、そのまま正面から突っ込んだ。

「嘘！こっちに来る！」

スコープの中で急激にズームアップするⅡ号戦車に、桐山が思わず怯んでスコープから顔を引いてしまった。

しかしキューポラの覗視孔からエルのⅡ号戦車に視線を据えている野島はそれに気付かないまま、

「撃てー！」

と命じてしまったので、それに反応した桐山が慌ててスコープを覗き直して発砲した時には既に照準は外れており、砲弾はⅡ号戦車の脇を空振りしてしまった。

他方、鹿屋が放った50mm砲はミランダ車の砲塔を掠め、ミランダを動揺させた。

野島が自分の命令に応じて桐山が発砲するまでに「不自然な」タイムラグが生じた事に頭を傾げる間もなく、エルのⅡ号戦車はフロンティア学園の戦車隊の懐に飛び込んでいた。

「Dispara！」

満を持したエルの号令一下、3輦のⅡ号戦車は高速ですれ違いざまに、それぞれの方向から主砲の55口径20mm機関砲KwK30を1クリップ分叩きつけて行った。

正面から突っ込んだエル車も、SU-100とLVTの間をすり抜けた。

「撃たれたわ！」

福地から通信が入り、塚野がSU-100越しにLVTの様子を見ると、LVTはみるみる減速して落伍し、やがて停車すると虚しく白旗を上げた。

塚野からは見えなかったが、アンダルシアのII号戦車がLVTの左側面にたつぷり弾丸をお見舞いしていき、その多くが装甲の薄いLVTにブスブスと突き刺さり、致命傷となったのであった。

「フロンティア学園、LVT、走行不能！」

観客席に蝶野の判定がアウンスとなつて響き渡り、それは放送部の大型テレビの前で観戦している生徒やそれぞれの自宅で観戦している一般住民にも伝わり、衝撃を与えていた。

一方、SU-100も有効打こそ免れていたが、車体後部左側に外付けされている円柱型の燃料タンクが撃ち抜かれ、大炎上して黒煙を上げていた。

「やりやがったな……！」

と、キューポラの外に顔を出して被害状況を確認した野島が拳を叩きつけて離れて行くII号戦車を睨んだ。

レオパルトも数発被弾したが、幸いにして食い込んだ弾丸は無かった。

攻撃したのはミランダ車だったが、レオパルトの砲撃の精度に驚いたミランダがてんぱったおかげで、落ち着いた照準にならなかったようである。

ラムIIが最も危険だと聞いていたので、レオパルトの砲手：担当は鹿屋だ：の腕も良いという事は想定外だったようである。

とは言え、これだけの肉薄攻撃はこちらを動揺させるに十分だった。

村江のラムIIを引き離れた上での強襲としか思えない。

「くそお……！」

だが、動揺している暇は無かった。

一度すれ違ったII号戦車隊は大きく弧を描くように方向転換し、こ

ちらにコースを取り直そうとしていた。

「ルノー！ハリー！すぐに中央平原に合流！やばい事になったし！」

「第一撃成功！」

Ⅱ号戦車を転回させながらヴィリディアナが嬉しそうに叫んだ。

「でも、フラッグ車撃破には至らなかったね……」

トリスターナが残念そうに言ったが、エルにとっては想定内だった。

「エル、次はどうするの!?!」

「作戦通りに行くわ。フラッグ車をトラップポイントまで追い立てるわ。あの50mm砲は危険ね」

「確かに……いい腕してたわね」

トリスターナが首肯する。

トラップポイントにはバスク座上のⅢ号突撃砲G型、Ⅳ号戦車H型、そしてフラッグ車のベルデハ2が待機している。

そこまで追い込み、一気に叩く。

それがエルの作戦だった。

「でもその前に……SU—100の履帯を切っておくわよ！」

「ワオ、性格悪い！」

そう言いながらもヴィリディアナはSU—100の後ろに停車させた。

20mm機関砲の弾丸では貫通出来ないが、履帯切断なら大丈夫だ。

エルは初めからそのつもりで、次は榴弾を装填していた。

「よし、撃て！」

エルが右側の履帯に集中攻撃すると、SU—100の履帯は哀れにも破壊されて切断されてしまった。

アンダルシアのⅡ号戦車も、左前方から20mmの榴弾を叩き込んでこちらも履帯の切断に成功した。

これで暫くは修復に時間を取られるから、トラップポイントへの誘導に集中出来るだろう。

「村江さん、どうしますか!？」

味方の危機に、砲手兼装填手の土橋は村江に指示を仰いだ。

元来は装填手が必要だが、人員の配置時に1人足りない状況になったので、砲手の土橋や車長の村江が柔軟に装填手として対応する形になっていた。

「合流するわよ!」

直後、BT-5の砲弾がラムIIを掠めて車内が揺れ、村江は一端言葉を中断し、「中村、BT-5には十分気を付けつつ、味方に合流して!」

「分かりました!なんとかやってみます!」

村江が次弾を砲身に押し込む。

「1輻が調子に乗りやすい感じだから、誘い込んで倒すわよ!」

「どうやります!?!」

村江はエレナのBT-5を見やった。

「わざとまっすぐコースを取って。多分、そいつが追いかけて来る筈だから」

「了解!」

あのBT-5はなかなか挑戦的で油断ならないが、もう1輻の慎重なタイプ：ガリシア車…と比べると策略に乗せやすい。

この短い間の戦闘で、村江は2輻のBT-5の車長の性格を見抜いていた。

案の定、エレナは村江の誘いに乗ってしまった。

「ラムIIを合流させるな! Vamos!」

「了解!」

ピリもまたノリノリで、こちらに背を向けて味方と合流しようと真っ直ぐ戻って行くラムIIに突っ込んで行った。

「あ、エレナー!ちよつと待って!」

ミランダが嫌な予感を覚えてエレナを引き留めようとしたが、エレナは聞く耳を持たなかった。

「わ、私達も行きますか？」

操縦手のソルが、自身も迷いの感情を見せつつミランダに尋ねた。

「いや、ダメよ」

何だか分からないが、行ってはいけない気がする。

それはガリシアの直感だったが、明確な根拠は無かった。

「スピナー！」

村江が予め中村に伝えていた作戦内容の実行を伝えると、中村は見事な操縦テクニクでラムⅡをスピナーさせ、何の躊躇いもなく突っ込んできたエレナ車に正面を向けた。

土橋が少し砲塔を動かして照準を調整する。

このBT-5は何の疑問も持っていなかったらしく、すぐに回避行動を取ろうとしなかった。

「発射！」

タイミングを任されていた土橋が射撃し、6ポンド砲弾は見事にエレナ車の正面を捉えた。

BT-5はその衝撃で2、3度飛び跳ねてから白旗を上げて停止した。

「お見事！」

「あ、有難うございますー！」

「こちらガリシア！ラムⅡがそっちに向かっていきますー！」

「Bien！こつちも見えてるわ！」

エルがラムⅡを振り返ると、ちょうどエレナ車を撃破したラムⅡが再びこちらに方向転換して走り出したところだった。

「アンダルシア！ミランダ！そつちは引き続きレオパルトをトラップポイントに誘導！こつちはラムⅡをガリシアと牽制するわ！」

「すまない！こつちは修理に時間がかかる！」

「ノープロ！終わったら助けに来てねえ！」

「はいよ！…ってノープロってなんだよ？」

「ノープロブレムだつてば!」

「ああ…そうかい」

野島との通信が終わると、今度は村江に呼び掛ける。

2輻のⅡ号戦車がしつこく絡んで来ては銃撃してくるが、こちらも回避運動しながら応戦して隙を突かれまいとしている。

「そっちはどう!?!」

「手強そうなⅡ号に妨害されてるけど、なんとか追いかけるわ!」

「オツケー!こつちもなんとか凌ぐから!」

「これ、本当に凌ぎ切れるのかしら?」

井上が不安そうに下から塚野を振り仰いだ。

「わかんない…でも、何とか凌ぎ切っから」

「本当に凌げるかしら?」

と、田張も井上と同じく不安そうだ。「もし敵が全部ここに集まったら…」

「偵察隊が戻ってきたら、なんとか…」

と、塚野が応じた直後、左から飛んできたⅡ号戦車の弾丸がレオパルトの鼻先を掠め、驚いた田張が針路を変えた。

すると今度は右から20m弾が掠め、田張は更に針路を変える形となった。

「ラムⅡに合流させる気が無いねー」

鹿屋がそう言った直後、塚野にある疑念が閃いた。

その疑念は、Ⅱ号戦車がある方角にレオパルトを誘導しようとしているような動きをもう一度取って来た事で、確信に変わりつつあった。

もつとも、見た目としてはラムⅡとSU-100からこちらを引き離して孤立させた上で、合流して包囲殲滅というシナリオもあり得るが…

「ハリー!聞こえるう!?!」

「はい、こちらハリーホプキンスです!まだ少し時間が…」

「いや、ちよつとやって貰いたい事があんの!」

一瞬大地からの応答に間があった。

「…何でしょう？」

「またもレオパルトの鼻先を20mm弾が掠めた。」

「続く」

チャプター4 トラップポイント

『敵フラッグ車、トラップポイントへ順調に誘導中!』

「その調子その調子、いい子だからこつちにおいで〜」

アンダルシアからの通信報告を聞きながら、三号突撃砲の砲手席でバスクは大きく伸びをした。

その横では、装填手のカサンドラが徹甲弾を砲身に押し込んでいく。

「装填完了!」

「ご苦労さん。ソフィア、そっちはどうだい?」

ソフィアは次期副隊長として有望視されている1年生であり、今はIV号戦車H型の車長を任されている。

これに加えてフラッグ車のベルデハ2軽戦車が一緒にトラップポイントに潜伏し、敵フラッグ車のレオパルトがここまで追い立てられてくるのを今か今かと待ち侘びていた。

その場所は、林を左右に挟んだ幅広の道の、右にカーブを描く地点で、IV号戦車とベルデハ2がカーブの外回り側、三号突撃砲が内回り側に潜伏し、茂みの中でカムフラージュしていた。

『準備OKです』

「落ち着いて狙いな。いつも通りやりやあぶれないさ」

『はい〜』

それから数秒が経過し、今度はベルデハ2の車長であるアルタの声が少し不安げに

『副隊長、うまくいくでしょうか?』

アルタは次期隊長として有望視されている1年生であり、ソフィアと共に将来の青師団高校戦車道チームを担って立つ存在だ。

計画としては、味方に追い立てられたレオパルトがこちらに来たところでIV号戦車が茂みから飛び出して気を引き、その隙を突いてバスクの三号突撃砲がレオパルトを仕留める算段だった。

バスクは苦笑しながら天井を見上げ、

「アルタ。あんたが隊長になってからもそんな事言うつもりかい?」

『あ…いえ…』

「もうすぐ奴さんがおいでになるよ」

指揮官が不安そうにしたりあやふやな態度を取ればチームの動きに関わる。

…とは言え、アルタの気持ちもよく分かる。

「まあ何かありや、いつでもあたしに相談しな」

『はい…有難うございます！』

バスクは身を起こした。

そろそろ射撃準備に入るとしよう。

「ペネロペ、レオパルトは見えたかい？」

車長席に座る2年生のペネロペは、潜望鏡を覗きながら首を横に振った。

「いえ、まだ見えません」

「そうかい。来たら報告しな」

それから数秒後。

通信機の向こう側が騒がしくなったので、バスクは送話ボタンを押した。

「騒がしいけど、どうしたのさ？」

『副隊長！ハリーホプキンスが…！』

動揺した口調でアルタが説明する。

「なんだって？」

バスクが潜望鏡を回すと、レオパルトが追い立てられてくる方向とは反対から、ハリーホプキンス軽戦車が時速20〜30km位の低速でやって来るのが見えた。

何か様子を窺いながら走っているようだが…

そのハリーホプキンスでは。

「うくん。いないなあ…」

双眼鏡を周囲に回しながら大地がそう呟いた。

今しがたまで開いたハッチから体を乗り出して一生懸命敵戦車を

搜索していたのだが、見つかる気配がない。

大地が車長のハリーホプキンスは、塚野の命令でレオパルトが追い立てられている道に青師団高校の戦車が待ち伏せていたり進軍していたりしないか調べていたのである。

しかしどうにも見つからず、大地は調べる場所を間違えたのかと考え始めていた。

もう既に、あと2、3分もすればレオパルトと合流する所まで来ている。

それにもかかわらず、敵は見つからない。

塚野は、自分達が追い立てられた先で青師団高校の有力なⅢ号突撃砲やⅣ号戦車が待ち伏せ攻撃をしてくるのではないかと予想していた。

最初は青師団高校の全戦車が集結して包囲してくるのではないかと考えられたが、塚野の推測も頷ける話であり、大地はルノーに別の道を調べさせ、自分は今の道を調べていた。

「大地から萩原さんへ。何か見つけましたか？」

『いえ、何も。そちらは？』

「こつちも…当てが外れたのかな？」

『どうします？』

囁き声でアルタがバスクに指示を仰いできた。

「じつとしてな。このままやり過ぎすよ」

『でもレオパルトがもうすぐ…』

「分かってるよ。なんならこのままレオパルトが来ても作戦実行するから」

バスクはそう言いながら潜望鏡をハリーホプキンスの動きに合わせてゆっくりと動かす。

「うくん。よし、このままレオパルトと合流して、Ⅱ号戦車をやっつけよう」

「なんだか気に入らないわね」

砲手担当の佐伯が言った。「私はあの子の推測通りかなと思っていたんだけど…」

「私もそう思っていたのですが…」

そこまで言った時、出し抜けに風が吹きつけてくると、大地の髪を横に風いだ。

その時、大地の目の端に林の中で不自然に動く物体を捉え、そちらに顔を向け、凝視した。

それから双眼鏡を目に当てると、赤に染められた三角形の旗が風に煽られた影響で左右に揺れていた。

赤い三角旗を支えるワイヤーを下に辿って行くと…

「え…バレた!」

潜望鏡越しに大地の双眼鏡と目が合った瞬間、アルタは息を呑んだ。「副隊長、バレました!」

『なんだって!?!』

バスクの問い返しに答えている暇は無かった。

ハリーホプキンスの砲塔が回り、こちらに向かって砲口が下がる。

「発進! 逃げて!」

夢中で喚くアルタに従い、急発進したベルデハ2のすぐ後ろに2ポンド砲弾が着弾する。

ベルデハ2は林の中を分け入るように逃走を開始した。

すぐに整備されていない林道に出ると、道なりにぐんぐん進んでいくが、その後ろにハリーホプキンスが滑り出て来ると、こちらを見て加速する。

『敵フラッグ車発見! ベルデハ2です!』

大地の一報は、フロンティア学園のメンバーに活気を与えた。

ルールはフラッグ戦。

これ即ち、フラッグ車を先に撃破したチームの勝利というルールである。

「オツケー! なんとしても仕留めて!」

『了解！』

塚野の指示を受けた後、大地は今度はルノーUEを呼び出す。

「萩原さん、聞こえますか!？」

彼女の右手には地図が握られており、視線はこの林道の先に据えられていた。

『まずい、フラッグ車が!』

慌てふためくソフィアだが、バスクはすぐに立ち直った。

「ソフィア! あんたはアルタを守りな!」

『は、はい!』

IV号戦車がベルデハ2とハリーホプキンスの後を追おうとする中、バスクは操縦手のバレリアに言った。

「バレリア、前進だ!」

バレリアは驚いて振り向いた。

ペネロペとカサンドラも同じように目を丸くしている。

「どうするんですか!？」

車長のペネロペが仲間の代わりに聞くと、バスクはペネロペを肩越しに振り返った。

「直接レオパルトを叩くよ! ぐずぐずしてないで、早くしな!」

「了解!」

バレリアはバスクに従って三号突撃砲を道の中に飛び出させた。

「このままレオパルトの前まで行くよ!」

「でももうすぐ来るじゃないですか!」

ペネロペが更に疑問を呈するが、バスクは早口でピシヤリと言う。

「罨はもうバレてるんだよ! それに、先にベルデハ2がやられたらおしまいだ! こっちから出張って早くカタを付けるよ!」

ペネロペはごくりと唾を飲み込むと、改めてバレリアに指示を与える。

「ペネロペ、レオパルトが見えるまで前進!」

「はい車長!」

バレリアは再び三号突撃砲を発進させた。

『バスク、やれる?』

エル隊長の声が問い掛けるが、バスクに迷いは無かった。

「任せな、エル」

『了解。頼んだわよ!』

エルとの通信を終えると、

「発見したら停止。そこで仕留めるからね!」

「頼みます、副隊長!」

とカサンドラが言うと、バスクは真剣な面持ちで頷き返した。

「撃て!」

ソフィアの号令でIV号戦車の主砲が火を噴くが、弾丸はハリーホプキンスを外れて木立の中に吸い込まれた。

ベルデハ2も砲塔を後ろに向けて牽制しているが、ハリーホプキンスも怯まずに撃ち返しており、この林道の中だといつ被弾してもおかしくなかった。

と言って、IV号も楽ではなく、曲がりくねった林道の中では照準を付けづらいし、それだけでなくもハリーホプキンスはIV号戦車の射線をベルデハ2となるべく重なるように動いていた為、なかなか撃ちづらかったのである。

「ダメです!撃てません!」

砲手が参ったと言うように首を横に振ったが、

「落ち着いて!チャンスを待つのよ!」

そう言いながらも、ソフィアは心の中でバスクがレオパルトを仕留めてくれる事を一心に願っていた。

これでもう何度目だろうか…またII号戦車の20mm弾が車体を引っ掻いて行った後、井上の声が警告する。

「前方、敵戦車1輜!」

そちらに顔を振り向けると、こちらと相對して三号突撃砲が迫って来るのが見えた。

「ち、おいでなすったねえ…」

「どうしますか!?!」

と、田張の声が塚野に指示を仰ぐ。

答える前に、塚野は周囲の状況を素早く見回した。

「停止!」

バリエアが制動を掛けると、三号突撃砲は前のめりに数メートル滑って停止し、ガクンと砲身をもたげた。

「距離、200m!」

目の前にフラッグ車、レオパルト。

射程は十分。

あとは落ち着いて狙えばいいが、その前に。

「II号は合図で左右に展開!」

『了解!』

『了解!』

アンダルシアとミランダから同時に返答が来ると、すぐに

「展開!」

誤射を防ぐ為、こちらから見てアンダルシア車が左に、ミランダ車が右に分かれる。

バスクは瞳を引き絞った。

「発射!」

直前、塚野の脳内が閃いた。

「左のII号のケツについて!」

田張は機敏に反応し、レオパルトを急減速させながら左のII号戦車…ミランダ車の後ろに滑り込んだ。

この行動は三号突撃砲の射撃とほぼ同時であり、レオパルトが塚野の命令に従った直後に砲弾が発射され、レオパルトの横を掠めて行った。

塚野は、三号突撃砲の徹甲弾が掠めた際の衝撃波を肌で感じて思わず顔をしかめた。

しかしともあれ、レオパルトは決着の弾丸を回避したのである。

「M i e r d a !」

バスクはスペイン語で悪態を突いた。

ペネロペ、バレリア、カサンドラの3人も、思わぬ展開に一瞬呆気に取られていたが、その常態をバスクはいつまでも許さなかった。

「おい、早く装填しな！」

「は、はい！」

慌ててカサンドラが腕の筋肉を盛り上げながら徹甲弾を持ち上げ、砲身に押し込める。

「そのまんま突破しちゃえ！」

レオパルトはミランダのⅡ号戦車を離れると、3輦の青師団戦車の間を右に左に縫うようにしてキルゾーンを走り抜けた。

振り向くと、三号突撃砲が旋回してこちらに主砲を向けようとしている。

再び前方を見ると、その先は間もなく右にカーブを描いており、なんとか逃げ切れそうだった。

「ダメか……」

レオパルトがカーブの向こう側に消えると、バスクは舌打ちした。相手はどうやら機転の良さの持ち主らしい。

「バレリア、追いかけて！」

ペネロペが言い、バレリアは三号突撃砲を発進させる。

その左右を、より速いⅡ号戦車が追い越していった。

バスクはエルとの通信を開いた。

「エル。すまない、仕留め損ねた」

「くっ、残念……」

ラムⅡを見据えながらエルは歯噛みした。

とは言え、今大事なのはこの先どうするかと言う事だ。

もはやラムⅡをここに引き留めておく意味は無くなり、目下追われ

ているベルデハ2を助けなくてはならない。

アルタの報告から、エルは頭の中に広げた地図でベルデハ2が今どこに向かっているかを思い描いていた。

それですぐに当座のプランを立てると、

「ガリシア、離脱するわよ！先に行つて！」

『は、はい！』

ガリシアのBT-5がラムIIに絡むのを中止し、自分の横を通つて行き、100m以上の距離を取るのを一瞥した後、

「ヴィリディアナ、私達も離脱！ベルデハ2と合流するわ！」

「OKエル！」

ヴィリディアナは巧みな操縦でラムIIから距離を取ると、BT-5の後を追った。

「敵が離れて行きます！」

「ベルデハ2と合流する気ね」

息を切らしながら村江は敵の動きを分析した。

体中は汗まみれである。

「追いますか!？」

再び中村の声が尋ねた。

だが、村江はSU-100の方を見ていた。

「…いや、まずはSU-100の修理を手伝うわ。それからレオパルトを合流する」

「了解！」

それから村江は、へたり込むようにキューポラの縁に両腕を置いてうなだれ、深々と疲労の溜息を吐いた。

「やっぱり装填手をつけるべきだったわ…」

そう、ラムIIは元来5人乗りだが、村江は敢えて4人になっていた。

5人乗せる事は出来たが、その候補となり得た日の浅いメンバーをLV-Tに押し込めてしまったのである。

結果、村江が車長と装填手を兼ね、土橋が砲手に専念したのだが、指揮と装填の両方をこなすのは思った以上に大変だった。

経験値と体力でカバーするつもりだったが、ずっと2輜相手に孤軍奮闘していたのでそれもすぐに意味を成さなくなったのである。

村江は再び、去って行くII号戦車とBT-5を見た。

すると、II号戦車の車長も村江に気付いて振り返ると、フランクな動作で投げ敬礼をした。

村江も弱弱しく苦笑しながら、敬礼を返す。

互いに死闘を繰り広げた者同士の、敬意と感銘の籠もった敬礼であつた。

続く

チャプター5 瀬戸際

さて、ベルデハ2は林を抜けて広場に出た。

この先は幅の広い川が流れており、兩岸は低めながらも切り立った崖となっており、その先を進む事は出来ないが、その代わり吊り橋が掛かっていた。

吊り橋の幅はベルデハ2が進むには十分だが、IV号戦車が進むには狭かった。

エルのII号戦車とBT-5の2輜は、対岸で落ち合う予定だった。『レオパルトを見逃そうってのかい?』

「まずはフラッグ車の安全確保が第一よ。それにIII突じゃ追いつけないでしょ?どのみち」

バスクの反論に、エルはそう諭した。

2、3秒の間を置いて、バスクの渋々といった口調が返事する。

『…分かったよ。でもそつちと距離があるけど?』

「ええ。だから別のポイントで合流するわ。あなたはそこに向かって。私達がベルデハ2を拾うから」

『OK。でも見張りにII号を1台つけるからね』

素っ気なく通信が切れる音に苦笑するエルだったが、直後に先頭を走るガリシアの緊迫した声でその苦笑が消える。

続けてその報告内容に顔が青ざめた。

『エル隊長!ルノーUEが吊り橋のワイヤーを切断しています!』

「切れ切れ!全部切っちゃえ!」

「片側だけで良いんじゃない?」

「それもそうですね!」

尾鷲の忠告に従い、萩原は8mm機関銃の弾丸を手前のワイヤー、即ち左側のワイヤーに向かってばら撒いて行った。

既に左側が2本、右側が1本切断されており、吊り橋は少しずつバランスを崩し始めている。

ルノーUE・タンケット仕様は、機関銃が主武装なのであらゆる戦

車を撃破するには完全に力不足だが、こういった役回りならお任せあれだ。

地図でベルデハ2の予測針路がこの吊り橋と予測した大地から指示を受けた萩原と尾鷲は、一足先にこの吊り橋に到着すると、機関銃で吊り橋のワイヤー切断作業に取り掛かり、ベルデハ2の退路を断とうとしていたのである。

そして大地の予測通り、ベルデハ2はここに現れたが、問題はまだ作業が終わっていない事である。

なるほど吊り橋はこれでも不安定になっているだろうが、ベルデハ2を支えるだけの力はまだ残されているかもしれない。

確実に退路を断つ為、萩原は一心不乱に機銃を撃ち続けた。

が、不意に銃撃が止まった。

「まずい、弾が切れた！補充しないと！」

「ベルデハ2は目の前よ」

弾帯を手に給弾を始めた萩原を横目に、尾鷲は目を細めながらベルデハ2を見やった。

ベルデハ2は尚も向かって来る。

吊り橋を強行突破するつもりだろう。

「衝突に気を付けて」

そう言うと、尾鷲はルノーを動かした。

「エル隊長！吊り橋が！」

『まだ行けるから！突っ込んで来て！』

「ええ、それマジですか!？」

『見て、ルノーは射撃を止めた。弾切れで補充中よ！今の内だわ!』

「うう…もう、こうなったら…!」

アルタは恐怖で目が潤みながらも、操縦手に「行くわよ！」

「まじっすか!？」

操縦手も啞然としながら、アルタの指示に従い速度を上げた。「う

おお、こうなったら道連れじゃーい！」

「もう少しでルノーを撃てるから、早く！」

確かに、対岸ではエルのⅡ号戦車とBT-5がこちらに急いで駆け付けてきている。

射程に入ればこちらの援護射撃に入るだろう。

だがまずはともかくにも、吊り橋を渡る事だ。

後ろでは、どうやらソフィアのⅣ号戦車がハリーホプキンスとこちらから引き離す事に成功したようで姿がまだ見えないが、時間の問題だろう。

そう、どのみち先を急がねばならないのだ。

と、その時。

「…え？」

アルタはルノーの行動に目を見張った。

ルノーがこちらに正面衝突コースで突っ込んで来たのである。

「ひええええええー！」

と、萩原の悲鳴が上がるが、尾鷲はお構いなくベルデハ2に向かってルノーを突っ込ませた。

ベルデハ2の主砲がこちらを狙うが、相手も慌てたらしく、発射された弾丸はルノーの右側に着弾した。

「尾鷲さん!?!」

衝突直前、萩原が尾鷲を見たが、尾鷲は全神経を自分の両手両足、そして正面のベルデハ2に集中していた。

「せいー！」

気合の一声と共に、尾鷲はベルデハ2を180度反転させ、バックでベルデハ2の正面に衝突した。

車内が急激な衝撃に襲われ、それに備えて体を固くしていた尾鷲と萩原だったが、やはりその衝撃の強さに悲鳴を上げた。

萩原に至っては危うく舌を噛みかけた程である。

「ぐう…！」

衝撃の強さに一瞬意識が朦朧としかける萩原だったが、すぐに尾鷲の事が気になって無理矢理意識を現実に戻す。

その時、萩原は同時に重心が前のめりになっている事に気づき、続

いて車体が前のめりに傾いている事に気付いた。

ルノーはベルデハ2に尻を持ち上げられる形で前傾姿勢になりながらズルズルと押されていたのだ。

傾きは更に角度を増していき、しまいには逆立ちになりそうだった。

「わわーやばいですよー！」

ルノーとの衝突直前、操縦手は無意識で急ブレーキをかけていたのだが間に合わず、ルノーの尻に衝突してそのまま押し上げていた。

しかしもう一度加速しようにも、ルノーにブロックされて思うように進めない。

ふと振り向くと、林の中から死神のハリーホプキンスが姿を現した。

アルタは息を呑むと、

「全速後退ー！」

ベルデハ2は一度停止するとバックしてルノーを引きはがしてから、その横を通り抜けようとする。

その間も背後からハリーホプキンスが迫り来る。

アルタの全身を冷や汗がドツと噴き出し、恐怖で心臓が高鳴った。するとルノーがベルデハ2を追い越し、今度は車体の左側をぶつける形でベルデハ2の前に割り込んだ。

またもブロックされたベルデハ2は減速を余儀なくされる。

そこへハリーホプキンスが更に迫り、2ポンド砲をこちらに向けて来た。

漸くソフィアのIV号戦車が林を抜けて来たが、ハリーホプキンスはいつでも射撃が出来る状態である。

アルタは主砲の45mm砲をハリーホプキンスに指向するよう命じた。

「急いでーアルタ達が危ない！」

エルのII号戦車とBT-5は漸く吊り橋の前に辿り着いた。

『ベルデハ2に当たりそうで撃てません!』

ガリシアの言う通り、ルノーやハリーホプキンスを撃とうにもベルデハ2が射線に被る。

ハリーホプキンスも対岸のエル達に気付いてベルデハ2と射線を被るように立ち回っていた。

「もう1度バック!」

ベルデハ2はまた後退してルノーから離れた。

吊り橋が近くて遠い。

ハリーホプキンスとの距離は、もう100m以内と至近距離だ。

相手は確実に仕留めに来ている。

と、ハリーホプキンスが発砲し、弾丸はベルデハ2の側面を掠めて行った。

「は、早く吊り橋を渡って!」

「分かっていますっつえ!」

喚くアルタに操縦手も喚き返す。

しかし前進するとルノーがまたも通せんぼしてきた。

「エル、行こう!」

トリスターナがエルを振り返った。

吊り橋はワイヤーが何本か切られて不安定だが、素早く渡れば問題無い筈だ。

エルは頷くと、

「ヴイリディアナ!頼んだわよ!」

「任せて!」

ヴイリディアナが操縦桿を動かしてII号戦車を吊り橋に向けると、慎重に車体を吊り橋に乗せ始めた。

「撃てえ!」

アルタの号令で45mm砲がハリーホプキンス目掛けて発射されたが、狙いを付けた瞬間に攻撃を見切ったらしく、ハリーホプキンス

は急カーブを切って回避した。
それからコースを再びベルデハ2に戻す。

II号戦車が車体の殆どを吊り橋に乗せた瞬間、負担に耐えかねたロープが音を立てて接続部から千切れ始め、II号戦車の足元も斜めに傾く。

「まずいー」

エルの命令を待つまでもなく、ヴィリディアナは急いでII号戦車を急速後退させた。

吊り橋の状態はさつきよりも悪くなった。

もうベルデハ2はこっちに渡ってこられない。

ハリーホプキンスの攻撃を危うく回避した直後にアルタは吊り橋の様子を見て取った。

「…林に戻るわよー」

しかし仕留め損ね、勢いで横を通過したハリーホプキンスが、すぐに反転して戻って来た。

45mm砲はまだハリーホプキンスを向いていない。

相手は落ち着いてこちらを狙えるわけだ。

「…嘘…」

アルタが目を見開いた瞬間、横から飛んできた砲弾がハリーホプキンスの横腹を直撃し、ハリーホプキンスはベルデハ2の眼前で停止して白旗を上げた。

砲弾が飛んできたのは吊り橋からではなく…

「ソフィア…」

IV号戦車が砲口から煙を上げて佇んでいた。

ソフィアは停止させると、ベルデハ2を助ける為に慎重に狙いすましていたのだ。

この状況では冷静な行動と言える。

『良かった…良かった…』

通信越しに、涙ぐむソフィアの声が耳に入って来た。

「え、まずくないですかこれ？」

「逃げ一択！」

尾鷲はベルデハ2のブロックを中止すると、林に向かって逃走を開始した。

IV号戦車とベルデハ2からの砲弾が追ってきたが、どちらも命中弾を得ず、ルノーは林の中へと身を隠した。

「ソフィア、よくやったわ！本当に助かったわ！」

『あ、有難うございます…！』

「ファインプレー、やるじゃない！」

「うんうん！ホント、プレッシャーも凄かっただろうに！」

エルに続けてトリストアーナとヴィリディアナもソフィアを労う。

『後でじっくり話を聞かせてほしいもんだねえ』

と、バスクの声があった。

『隊長、この後は？』

アルタの言葉に、エルは気を引き締め直した。

まだ試合は終わっていない。

敵は4輜に減ったが、こちらの攻撃を回避し、またさっきのようにチャンスには喰らいついて来る相手だ。

フラッグ車を倒すまで、油断は出来ないのだ。

「合流地点を言うわね」

『こちら大地、フラッグ車の撃破に失敗しました。私達はやられました。すみません！』

「ドンマイドンマイ。次の作戦考えっから」

『で、どうすんだよ？』

野島の声が尋ねる。

レオパルトはラムIIとSU-100と合流して吊り橋方面に移動中だった。

II号戦車が1輜、見張りについてきているが、攻撃はしてこないよ

うだ。

塚野はそのⅡ号戦車を一瞥すると、

「お萩にはベルつちの見張りをお願いすつから宜しくねえ」

『了解しました！』

と、萩原の声が返事する。

『敵は7輛、こちらは4輛。状況は良くないわ』

と、村江が現在の戦力を勘定した。『こちらから攻撃を仕掛けるのは…自殺行為よ』

「まあまあ。何とか勝つときたいから、前向きに行こ？」

『でも実際、どうするの？』

土橋が言った。

「ま、暫くベルつちの動向確認だねえ。村江参謀はどうすると思う？」

『私が青師団なら…まずは合流してベルデハ2の安全を確保する』

「そつからはどーすんの？」

『そうね。見張りにつけているⅡ号戦車からの報告を元に、攻撃作戦を展開する。何せ、向こうの方が数的有利だから、好きなように先手を打てるわ』

「ふうむ…」

『どうしたの？』

村江の問いに答える前に、塚野は数秒思索した。

「…あのさ、もしあたし達から先手を打つて言ったらどう思う？」

『…作戦は？』

続く

チャプター6 弾雨

アンダルシアから報告が入った時、エルは後ろ斜めから後を付けて来るルノーUEに双眼鏡を向けていた。

『エル隊長、フロンティアがこちらに向かうコースを取りました！』

エルは双眼鏡を下ろし、前方に首を回した。

頭の中で広げられた戦況図では、3輦のフロンティア学園戦車隊がこちらに向かつて森の中へと進んで行く様子が描き出されていた。

「了解。引き続き報告を宜しく！」

『はい隊長！』

ルノーの様子を目の端で監視しながら、エルは仲間達に指示を送る。

「みんな、迎え撃つわよ。これから森に入るわ」

『数的不利なのに無謀では？』

アルタの声にベルデハ2を振り向くと、開かれた砲塔ハッチからアルタが上半身を出してこちらを見ている。『もしそうなら、あとは…』
『いや、敵に何か策があるんだろうね』

と、バスクの声がアルタの意見を遮った。『あとは楽勝って言いたいんだろうけど、あいつらはそんな事を考えてないと思うね』

『でも副隊長。どうしてそう思われるのですか？』

これはソフィアだが、バスクは落ち着いて答える。

『レオパルトを仕留めようとしたとき。土壇場でやけくそになったり、すぐ諦めるような連中じゃないって確信したよ。向こうの車長は咄嗟にあたしの砲撃を避け、振り切った。あんな判断、ポツと出としては上出来過ぎるね』

『確かにあれは…私もまさかと思いました』

レオパルトの回避を間近で目撃したII号戦車のミランダが言った。

エルは仲間達の議論を暫し静聴していたが、やがて無線の送話ボタンを押し、

「みんな、よく分かったわね？フラッグ車を仕留めない限り、危険な相手だって。その上で、相手の挑戦を受けて立つわ」

青師団高校はフロンティア学園と正面から激突するコースで森に入って行った。

「…りよーかい。サンキュー」

萩原から青師団高校本隊の動きを知らされた塚野はそう答えて通信を切ると、後ろで監視しているⅡ号戦車を一度振り返った。

『会敵前に倒さない』

と、塚野の考えを村江が言った。『タイミングは？』

「大丈夫。任せて」

村江は頷き、

『いいわ』

直後にフロンティア学園も森の中に突入した。

それから少し時間が経過した。

エルは味方を横に散開させて森の中を進軍していたが、ベルデハ2だけは中央を進む三号突撃砲の後方に配置していた。

ルノーUEは尚もこちらに撃たれないよう用心しながら、樹木や草の間を見え隠れしてついて来ている。

両軍の様子は観客席の大型モニターで逐一表示されており、5分以内に会敵する筈だった。

その頃、アンダルシアはフロンティア学園戦車隊が見せた行動に頭を捻っていた。

「…どういうつもりなの？」

それまで3輜は横一列で走っていたのだが、中央のレオパルトを残して左にSU-100、右にラムⅡが展開して行ったのだ。

戸惑っている間にSU-100とラムⅡは姿をくらましてしまい、見えているのはレオパルトだけになった。

「エル隊長！」

『こちらエル。どうしたの？』

「敵が散開。今レオパルトを追っています」

『了解。こつちも備えるわ。気を付けて』

アンダルシアはハッチを開いて顔を出すと、こちらを無視して進み続けるレオパルトを見た。

フラッグ車であるレオパルト自身が餌となつてわざと孤立し、本隊を引き付けている間に残りの2輛がベルデハ2を狙うつもりだろうか？

「こちらも動向を把握されているから考えられる事ではある。

しかしどうも合点がいかない。

一体どうしてそう思うのだろうか？

敵が他の方法を思い図つていて、それが何かである事にまだ気付いていないからか？

そう考えの沼に耽つていたので、目の端で動く物体に気付くのにワントンポ遅れてしまった。

「…えい！」

ラムⅡだった。

前方で6ポンド砲の砲撃音が鳴り響き、エル達は緊張を強めた。

直後にアンダルシアの声が、

『エル隊長！やられました！』

アンダルシアからの被撃破報告に、チームがざわつく。

『え、どうしたの!?!』

『どういう事!?!』

『みんな静かに!』

エルが一同を制すると、改めてアンダルシアに問いかける。「何があつたの?」

『ラムⅡにやられました!警戒はしていたのですが、不意に…すみません!』

「気にしないで。交信終わり」

エルは喉の奥で唸った。「…なるほど。Ⅱ号を排除する為の作戦だったのね…」

会敵直前だと言うのに、これで敵の位置は分からずじまいとなつた。

逆に敵は青師団高校チームの位置を一方的に掴んでおり、好きなタイミングで、好きなポジションから攻撃出来るようになった。

エルは左右の味方を見回した。

「減速…どこから来てもおかしくないわ！警戒を厳にして！」

警戒レベルの引き上げを命じてから再び振り返ったが、ルノーUEの姿が見当たらなかった。

だが、どこかでこちらを見ている筈だ。

「ナイスー村江参謀！」

『まあ、上々ね』

村江が肩をすくめながら言った。

「でもまんまと引つ掛かるなんてねー」

と、鹿屋が言った。

塚野は敢えて三手に分かれるという一見意味不明な行動を取ったが、それはII号戦車を撃破する為の策略だった。

II号戦車には自分達を追跡させながら知らんぷりを装っていたが、ラムIIが横から襲い掛かり、見事に排除した。

相手の反応が遅れたのは、こちらの作戦を訝しんで困惑していたせいで注意力が散漫になっていたからだろう。

「ツツチー、そーいや本日2輦目？」

『ああ、そう言えば…そうだね…』

土橋は実感が無いのか、声がぼんやりしていた。

「ここまで8輦中2輦を倒しているが、どちらも土橋の手柄である。」

「ノイジーは今どこ？」

『そっちに向かっているとこだぜ』

「りよ。じゃまた」

『…どつちにしても賭けになるわね』

村江の表情はまだ不安そうだが、一方で監視のII号戦車を排除したアドバンテージを生み出した塚野に敬意を抱いたようで、次の一手に期待を抱いているようだった。

何しろ作戦が、古参校相手に通じたのだから。

そう言えば先のイズベスチャ社との演習でも、塚野の考えた作戦を黒森峰が発展させる形で採用し、一定の損害を与えている。

「ま、イチかバチかってやつ?」

4対6。

うち1輦は豆戦車：打撃を与えられるのは実質3輦だ。

『もうすぐかしら』

「オハギ、そろそろ知らせてくれていいよお」

『了解しました!』

ルノーUEの銃撃音と、曳光弾が出鱈目にばら撒かれた。

アルタの動揺した声が反応する。

『機銃!?!』

瞬時にエルは次に何が起こるかを悟った。

「来るわ!敵は近い!」

「え、どこ?見えな...」

ペリスコープ越しに目を皿のようにして前方の様子を窺っていたヴィリディアナが言い終わらないうちに、何かエル車の左側を高速で通過していった。

進行方向には横一列隊形の中央を走るバスクのⅢ号突撃砲がいた。

「来たよ!」

バスクが砲撃しようとして、現れた敵車輛に一瞬戸惑った。

SU-100が現れたのまでは良かった。

バスクはこれを撃破しようとしたが、その後ろにレオパルトとラムⅡが続いており、3輦は一本棒となって、一点突破を図った突撃をしてきていたのである。

「う...くそ...!」

バスクは狙いをつける間もなく腰だめで発射したが、砲弾はレオパルトとラムⅡの間を通り抜けた。

3輦はⅢ号突撃砲の傍を掠め、後方のベルデハ2に向かってまっしぐらに走って行った。

散開していたエル達は対応に遅れ、3輦とベルデハ2との間に遮る

ものはない。

「嘘……！」

アルタは距離を詰めて来るSU―100を見て硬直した。

咄嗟の判断が下せず、ただ敵戦車がこちらに爪をかけようと襲い掛かって来る様子を見つめている事しかできなかつた。

と、間に何かが割って入り、ベルデハ2の操縦手は慌てて急ブレーキをかけながら車体の向きを変えた。

横滑りしたベルデハ2は、急に割り込んできた物体に横からぶつかって停止した。

恐らくそれにSU―100がぶつかつたのであろう、もう1度衝撃がベルデハ2を揺るがし、蓋が開き白旗が上がる特徴的な音が聞こえた。

しかしそれがベルデハ2のものではない事をアルタは直感で分かつた。

ハッチを開くと、割り込んできたのがソフィアのIV号戦車で、白旗を上げていたのがこの戦車だつた。

ソフィアが敵戦車隊の動きに反応し、ベルデハ2を守る為に身を挺してSU―100とベルデハ2の間に割って入つたのだ。

バスクがSU―100を発見して僅か1秒後に行動を起こし、ギリギリでベルデハ2の盾になる事に成功したが、その代償としてIV号が代わりに被弾し、撃破判定となつたのであつた。

一方SU―100は、IV号戦車を避け切れずに真正面から突っ込んでしまい、砲身をIV号のターレットリングに突き刺すように組み合う恰好となり、動けなくなつていた。

『ダメだ！仕留め損ねちまつた！』

野島の報告に悔しがっている暇は無かつた。

塚野達の後ろでは、バスクのIII号突撃砲が旋回を終えて今正に砲身をレオパルトに向けようとしていた。

「撤退……つた……い……！」

レオパルトとラムIIは急発進してその場を逃れた。

左右に逃げられてIII号突撃砲の射界の外に出ってしまったので、バス

クはIV号から離れようともなくSU—100を先に攻撃し、車体後部に徹甲弾を突き刺されたSU—100は敢え無く白旗を上げる。

『隊長！逃げない！』

「でもフラッグ車がすぐそこ…」

塚野は村江の警告を無視しようとしたが、III号突撃砲の動きはレオパルトを狙って今まで以上に機敏になっていた。

ベルデハ2を狙っている間にやられかねない。

「たばっち！離脱！」

「了解！」

田張は摺座するIV号戦車を盾にするようにしてその場からの離脱を図った。

既にベルデハ2は親元に駆け寄る子鹿のように、戻って来る青師団戦車隊に向かっていた。

「隊長、こっちよ！」

村江は手を振ってレオパルトを呼び寄せると、「先に行つて！」

と言ってレオパルトを先に行かせてから土橋に命じる。

「よし。目標、ベルデハ2」

「了解！」

予め打ち合わせしておいたのだろう、土橋は砲塔を動かして、あと数秒で味方と合流しようとするベルデハ2に砲身を向ける。

樹木が障害物になっているが、村江は事前にどこを狙うべきかを指示しており、土橋は指示通りにその方向に狙いを付けた。

「合図で射撃」

ラムIIの目論みに気付いた三号突撃砲が停車し、車体を回してこちらに狙いをつけようとするが、村江はその前にベルデハ2を仕留めるつもりでいた。

最初の突撃に失敗した以上、これが敵フラッグ車を討ち取る最後のチャンスだろう。

たとえこちらがやられても、被弾前の射撃であればその砲弾は有効だ。

ベルデハ2が隊長車のII号戦車と合流する直前、ラムIIの射線に

入った。

「撃て！」

飛び出した6ポンド砲弾は木々の間をすり抜けて行き、切っ先はベルデハ2の背中を捉えていたが、運悪くU次型に湾曲していた砲塔後部を滑って地面を抉るに留まった。

隊長車のⅡ号戦車が急いでベルデハ2を自分の後ろに匿い、これでもうベルデハ2を攻撃出来なくなった。

仕留め損ねたラムⅡをⅢ号突撃砲が仕留め、フロンティア学園チームの残りはレオパルトとルノーUEの2輜となった。

「え、マジ…?」

「残りは私達とルノーだけよ」

井上が塚野を振り返った。

口調こそ冷静だが、焦りを押し殺した、緊迫した表情だ。

「どうするのー?」

「隊長！」

鹿屋と田張も塚野に指示を仰いだ。

塚野は逡巡したが、すぐに決断した。

「ここで逃げたらもうマジであとがないから…」

三号突撃砲を先頭にこちらに向かって来る青師団高校チームを振り返る。「反転して、もう一度仕掛けるよお！」

井上が塚野の言葉に目を丸くした。

「本気で言ってるの!？」

「マジだから。たばっち、迂回しながらベルっちに突撃！オハギ、そっちは正面から行って！」

「了解隊長！」

『わ、分かりました！』

レオパルトは青師団チームに向き直ると、最後の突撃を敢行した。二手に分かれ、レオパルトは青師団チームを迂回するように、ルノーUEは真正面から突っ込んで行く。

履帯幅の広いレオパルトは、樹木の根が網の目のように張り巡らされ、突き出た岩の先端等でデコボコした足場の悪い森の地面をやすや

すと踏破していった。

一方のルノーUEはそんな悪路を右に左に傾き飛び跳ねながら敢然と青師団チームへと切り込んでいく。

「こんな状況でも向かって来るなんて…」

トリスターナが感嘆の声を上げた。

「言ったでしょ、油断ならない相手だって」

だが、敵を称賛するのは試合が終わってからだ…結果はどうあれ…負けるつもりもないが。

エルは改めて味方の配置を確認した。

自分の後ろにベルデハ2、正面に三号突撃砲、その左右にミランダのII号戦車とガリシアのBT-5。

戦況は5対2で、真つ向勝負を挑んでくるのはルノー…これはまあ、ベルデハ2に直接害をなすものではないとして、こちらから見て右側から迂回して接近してくるレオパルトが危険だ。

ベルデハ2に有効打を与えられるのは唯一これだけで、しかもフラッグ車だ。

これを撃破するという事は、同時に青師団の勝利も意味するが、それまでは全く気が抜けない。

IV号戦車を失ったのは痛い、おかげでベルデハ2は守られ、逆転敗北は免れた。

ソフィアから貰った命、無駄にはすまい。

「甘い…」

尾鷲は三号突撃砲のブロックを出し抜くと、BT-5の砲撃を掻い潜ってこれも出し抜いた。

ベルデハ2は迂回接近してくるレオパルトを特に警戒して、隊長車のII号戦車を間に置く形で走りながら、なるべくレオパルトから遠ざかろうとしていた。

後ろではIII号突撃砲とBT-5が互いに交差しながら反転し、横ではもう1輦のII号戦車が並走しながら20mm機関砲を撃って来る。

当たればまず白旗だが、足場の悪い森の中であればそうそう当たる

事はない。

と、このⅡ号戦車が幅寄せしてきた。

接近して残りの弾丸を叩き込むつもりらしい。

「そうはいかないわー!」

尾鷲は速度を少し緩めながらミランダのⅡ号戦車に向かって転回し、ニアミスする形でこのⅡ号戦車を出し抜いた。

「あのルノー、やるわね!」

ヴィリディアナが操縦手としての観点からそう言った。

「ヴィリディアナ! あれを突き飛ばせる!?!」

「やってみる!」

レオパルトの動向も気になるが、先にこいつを始末しなければならぬ。

エル達も見たが、このルノーはベルデハ2をブロックする事で危機に陥れた影の脅威だ。

豆戦車と侮って放置して、敗北の原因となつてからでは遅い。

だからこそここで倒さねばならない。

「バスクー! レオパルトを追い払って!」

『あいよ!』

バスクはミランダとガリシアに合図して、レオパルトのいる方角に弾幕を張った。

おかげでレオパルトは一端コースを膨らむ必要が生じ、一時的にベルデハ2との間に距離が開いた。

ルノーとの距離が更に縮まる。

こちらを間近にして一切に怯む気配はない。

「ヴィリディアナ!」

「よっしや!」

ヴィリディアナがⅡ号戦車を押し出すと、木の根を踏んで少しジャンプしてルノーUEの前に躍り出た。

一瞬、ヴィリディアナはルノーUEの操縦手と目が合ったような気がしたが、本当の所は分からなかった。

ただ、相手の思考が読めたのか、それとも長年の戦車道経験が培った直感だったのか、ルノーUEの回避行動を見切った上で、ルノーの側面にII号戦車を正面から思い切りぶつけて突き飛ばす事に成功した。

ルノーUEは地面の凹凸に引っかけられて跳ねながらバク転するようになり、最後は樹木に天板をぶつける形で止まり、エル車の一斉射でハチの巣にされて白旗を上げた。

「よし…あと一輛…！」

『エル！レオパルトがそっちに向かったぞ！』

肩越しに、レオパルトがルノーの仕返しとばかりにBT-5を跳ね飛ばしながらこちらに向かって来るのが見えた。

バスクのIII号突撃砲の砲弾は樹木に阻まれ、再装填の最中だった。

『こちらガリシア！撃破されました！』

レオパルトは履帯の幅の広さによる高い走破性を活かして、あつという間に距離を縮めて来る。

エル車とベルデハ2が同時に応射したが、傾斜した正面装甲に阻まれ、50mm砲がベルデハ2に向かって火を噴いた。

幸いこの砲弾はベルデハ2を外れ、レオパルトは一撃離脱の要領で一端エル達から離れる。

「アルタ！味方と合流するわよ！」

エルはベルデハ2を導いてバスク達の部隊との合流を試みる。

また50mm砲弾が頭上を掠め、エルは一瞬頭をすくめたが、20mm機関砲で撃ち返す。

しかしレオパルトは全く怯まずエル車とベルデハ2の間に割って入るように突入し、その為両車は引き？がされてしまった。

そのままレオパルトはベルデハ2を仕留めようと車体を擦り付ける。

レオパルトより軽量のベルデハ2は、何度か突き飛ばされそうになって必死に堪えるが、何かの弾みで引っ繰り返されかねない。

「まずい！やられちゃう！」

アルタの悲鳴が上がる。

「ミランダ！何やってる！弾幕張れ！」

バスクが激を飛ばしながらレオパルトに牽制弾を放ち、その横でミランダ車も1クリップを乱射してベルデハ2からレオパルトを引き剥がす。

「追いかけて！」

「分かっているわよ！」

焦るエルに、同じく焦るヴィリディアナも強く言い返す。

「アルター！こつちに合流出来る!?!」

『無理です！レオパルトがまるで大男ですよ！』

その時エルは、レオパルトとベルデハ2越しに、上に向かって傾斜している岩に目を留めた。

上の部分はスロープのように滑らかである。

「食らえ！」

ミランダはまたも20mm弾を1クリップ分撃ち尽くしたが、お返しに放たれた50mm弾を横腹にお見舞いされて停止し、白旗を上げた。

その様子を気にする間もなく、三号突撃砲が通過する。

「バレリア、もっと飛ばしな！」

「了解！」

バレリアは悪路に苦心しながら、それでもその中でコツを掴んで走破性を上げていた。

そのおかげで、ベルデハ2に追いつきかけていた。

ベルデハ2も、45mm砲を振りかざしてレオパルトに必死の抵抗を試みていた。

追突されそうになる度に、右に左に避けてやり過ぎす。

『アルター！そのまま真っ直ぐ！こつちに任せな！』

「バスクさん！」

アルタが横に目を転じると、追いついてきた三号突撃砲が見えた。ベルデハ2とレオパルトの間に割って入るように幅寄せが始まる。アルタは操縦手を励ます。

「もつと速く！ここを乗り切れれば勝てるわ！」

「やってやろうじゃないの！」

「行くよ！今！」

「はい！」

バレリアは巧みに三号突撃砲を操って横滑りさせながらレオパルトと対峙させるよう車体を回す。

土や岩石、木の葉等が強引に跳ね飛ばされる中、バレリアは見事に三号突撃砲をベルデハ2とレオパルトとの間に割って入らせ、砲身をレオパルトに向けた。

「来い！」

スコープにレオパルトを捉える。「終わりだよ……！」

勝負の一撃が放たれ、砲弾は確かにレオパルトに向かって飛んで行った。

が、命中直前にレオパルトは地面から突き出ていた岩に乗り上げて左側を持ち上げる形となり、その下を砲弾が潜り抜けて行った。

「嘘だろおい！」

バスクが唾然としつつ、カサンドラに装填を急がせる。

最後の一撃とばかり思っていたカサンドラも我に返って砲弾をラックから抜き取り、砲身に押し込もうとする。

と、目の前でレオパルトが急停止し、砲塔と砲身を動かした。

バスクがもう1発を放つ前に、ベルデハ2を仕留めるつもりらしい。

「急いで！」

もう一度バスクはカサンドラを急かしたが、まだ砲弾は半分までしか押し込まれていない。

レオパルトが射撃する前に間に合うか……！

そう思った直後、スコープ越しに頭上を影が差した気配がした。

「ん？」

バスクが首を傾げる間もなく、頭上から弾丸が降り注ぎ、弾雨は手前の地面からレオパルトに向かって移動した。

何発かがレオパルトの天板に直撃したところで弾雨は止み、レオパルトの背後に錐もみ回転を終えたエルのⅡ号戦車が地面に華麗に着地した。

「え、何？」

何が起こったか分からず、ペネロペが困惑しながらバスクと顔を見合わせた。

エルはこの直前に見つけた、上がスロープ状の岩を使ってⅡ号戦車を駆けのぼらせると、ヴィリディアナのテクニクで車体を錐もみさせながら横に向けた機関砲を全弾発射したのである。

錐もみ状態の中でちょうど機関砲が地面に向くタイミングで銃撃したのである。

数発の弾丸がレオパルトの天板に食い込み、特に車体後部のエンジンに刺さった2、3発が有効打となり、数年分にも匹敵する数秒間の緊張の沈黙の後、レオパルトから白旗が上がった。

「エル！」

「ヴィリディアナ、よくやったわ！」

「イヤッホー！」

エルとヴィリディアナが掌を叩きつけ合う後ろで、未だ顔面蒼白のトリスターナがその場にへたり込む。

「死ぬかと思ったく」

エルのアクロバティックな戦術に仲間達が啞然とする中、蝶野亜美の判定が会場に試合終了を告げた。

『フロンティア学園フラッグ車、走行不能！よって、青師団高校の勝利！』

〈第5話・終〉

第6話 小休止

チャプター1 次に向けて頑張ります！

「一同、礼！」

蝶野亜美の号令で青師団高校とフロンティア学園の両チームが頭を下げると、暗澹たる気持ちで渋い表情だった。もともと、ほぼ疲労に覆い隠されて分かりにくかったが…塚野にとって意外な事に観客席から盛大な拍手が送られた。

一瞬、国崎会長と目が合ったが、国崎は拍手しながら 野に小さく頷き返した。

尚も途方に暮れていると、

「おいどうした。何ボヤツとしてやがる」

野島に脇腹を肘で小突かれて我に返ると、エル隊長、ヴィリディアナ、トリスターナ、アルタ、ソフィア、そしてバスク副隊長が歩いて来るのに気が付いた。

一瞬リンチでもしに来たのかという場違いな考えが浮かんで塚野の心臓がドキリとしたが、エルは塚野の前で立ち止まると、親しみと敬意のこもった動作で右手を差し出した。

「塚野隊長、今日はありがとう」

「…え？」

「正直、ここまで息詰まる戦いが出来るとは思っていなかったわ。私達は正直、もう少しで負けるところだった」

「そ、そうなんです…か…？」

塚野は戸惑いつつエルと握手したが、エルの一歩後ろに立つ5人が一様に頷いた。

塚野にしてみれば、相手は勝者で、こちらは敗者だ。

敗者に何が残ると言うのか？

いやそれよりも、今までスポーツとかその類のものに慣れ親しんできていない塚野にとって、スポーツマンシップとはどういうものなのかよく理解していなかった。

「あの時の咄嗟の回避、ナイスだったよ」

バスクが言った。「あんた、ホントは経験者じゃないの？」

塚野は慌てて首を横に振った。

「あいや、ホントにトローシローですう…」

「ええ、信じられないですって！」

「そうですよ。エル隊長の言うように、危うく負けるかと思いましたよ！」

アルタとソファイアの言葉に、塚野は益々驚くばかりだ。

思い付きを作戰にして実行に移しましたが、実際の所は必死こいて戦っていたに過ぎず、称賛される事をしたという覚えは無かった。

あるいはそういう事は、他人が評価する事であって、自己評価するものではないと思うが、『トローシロー』たる塚野はどう判断したものか分からなかった。

しかしともあれ、相手はこちらを皮肉もお世辞もなしに評価してくれた。

「私達もいつの間にか戦いに夢中になっていたし…」

「けど空中のローリングはもう勘弁してほしいかな…」

「えー、私の運転スキル疑われちゃってる！」

「いやヴェリディアナ、そう言うつもりじゃなかったのよ！」

わざと狼狽える仕草をしたヴェリディアナに必死に弁明するトリスターナに苦笑しながら、エルはまた塚野と野島を交互に見た。

「あなた達、あの食らいつきを大事にしてね」

「食らいつき…」

エルは頷いた。

「ええ。チャンスあらばそれに食らいついて来る敢闘精神。戦車道には色々な戦い方があってと思うけど、ちよつとでも油断したら足元を掬われる猛獣型も悪くないと思うわ」

「猛獣型…」

「そう。これから色々学んでいくだろうし、それで変化もあると思うけど、あの戦い方、私は好きよ。そうね、真剣勝負を挑んでいる感じがするから、かしら」

「はあ…」

バスクが片眉を上げた。

「なんだか訳が分からないってツラしてるね。まあ、一日頭を冷やしなから考えてみたらいいさ。そうだ、試合は録画してあるんだろ？」

「あ、はい。してます」

「なら、見返してみるといいよ。多分、自分達でも結構ビビるだろうね、その分だと」

「わ、分かりました。見返してみます」

その後、再びエルが口を開いた。

「ところで、明日も試合？」

「はい。明日の午後から第二試合です」

「そう。まあこつちも明日試合だから…親睦会開けないのは残念ね」

「なに隊長。あとで何か送ればいいさ。生ハムにするかい？」

「後で考えればいいわよ、それは」

また苦笑しながらエルはそう言ってから振り返ると、「あ、お礼はいらないから大丈夫よ」

「エル隊長」

エルは背筋をすっと伸ばした塚野を不思議そうに見つめた。

「どうしたの？改まって」

「有難うございます。実を言うと私…第一試合を落としてガツカリしていました。勝って胸を張れる、負けたら無意味だって…さっきまでそんな事を考えていました。でも、エル隊長と皆さんのおかげで、今はもう大丈夫です。次の試合を頑張ります！エル隊長も、次の試合頑張ってください！応援しています！」

エルの笑顔に力が入った。

特に、次を見据えて睨が決したように見える。

「Gracias！そう言つて貰えると嬉しいわ！もう一度握手しましょう！」

今度は戸惑いではなく、力強い握手を塚野は交わした。

その様子を後ろから見ながら、村江と大地が互いに頷き合う。

「村江さん。負けはしましたが…」

「得られたものは多いよね」
互いの健闘を祈り、両チームは次の試合に向けて移動を開始した。

チャプター2 移動

「にしても1日で移動とか横暴だよな」

後ろへ過ぎ去る外の光景を車窓越しに眺めながら野島が言った。

ここは第二試合のステージに向かう列車の車内。

フロンティア学園チームの戦車は、客車より後方に連結されている台車に積載されている。

「本来は72時間以内に試合の開催地に寄港し、それから会場に登録を申請するんですけどっけ？」

萩原の問いに、村江が首肯した。

「ええ、その72時間以内に、戦車の整備や作戦を考えるのだけれど：今回は異例ね」

「政府は2年後のプロリーグ開催に備えた人材育成に躍起になっていて、それでこんな慌ただしいスケジュールの組み方になったのかと思われませう」

村江は口をへの字に曲げた。

「やれやれ。こつちとしては有難迷惑ね：皺寄せを食らうのは私達なのよ…」

「試合開始が午後からな分、少しはマシでしょうか？」

大地が言ったが、村江は首を横に振った。

「まあ、朝一からにしなかつたのはせめての配慮かもしれないけれど：それでもきついわ。整備の時間も取れるか心配だし：それにみんな、疲れているわ」

見回すと、メンバー達が座席を傾けたり窓際に寄りかかって静かな寝息を立てていた。

表情には疲労の色が見られる。

土橋に至っては、書きかけの漫画の上に突っ伏しており、恐らくそのページは白紙からのやり直しになるかもしれないなかつた。

開かれたラップトップコンピュータには、今日の試合の経験のメモが箇条書きにされており、それをベースに新たなエピソードが構築中の中のようなのである。

「初めての…公式の試合ですからね」

と、大地が付け加えた。「相当気合も入っていたかもしれません」

「おい、起きろ」

相対する席で頭をこっくりさせ始めた塚野の左足の脛を、野島が蹴って起こした。

「ああ、ちよつちい、眠くてねえ」

「もうちよい起きてろ」

「明日までにHP回復しとかなきゃ」

「寝たらまた蹴るぞ」

野島はそう脅しつつ、自分も大きく欠伸して目をこすった。「あ、やべ」

「ま、なんにしても次は勝ちたいねえ」

第二試合を落とせばフロンティア学園はグループ内の争いを脱落し、敗者復活戦に賭ける事となる。

その為、第二試合を落としたとしても来年の全国大会出場のラストチャンスは残るが、負け続きはチームの士気にかわり、たとえラストチャンスに挑んだとしても低い士気のままではチームパフォーマンスに影響が出る。

この予選リーグを突破しないと、塚野を待っている結末を知る野島や土橋は、複雑な面持ちで視線を交わした。

村江や大地、萩原も一瞬黙り込んでしまったが、再び口を開いたのは塚野だった。

「んで、次の相手は…ええと、バラトン工業高校だっけ？」

「ええ。前にも言っただけれど、侮れない相手よ」

「てことはさあ、猶更今のうちに寝とかなきゃねえ」

塚野は眠気で重い頭を、窓際に肘を突いた右手で支えていた。「ああでも、なんか不安になってきたし…」

「隊長」

「なあに？むらつち」

「今日の試合も、悪くなかったわ。寧ろこつちが勝っていてもおかしくは無かった。あとは粘り強さと、少しばかりの運だと思うから、明

日も同じ調子で、最後まで踏ん張っていけばいいわ」

「なーに、それえ？昔懐かしの根性論ってやつ？マジうけんだけどお」
軽く笑う塚野だったが、村江はクールに答える。

「いいえ、違うわ」

「じゃあ何さあ？」

塚野の頭が右手に沈み込んだように見えた。

そろそろ疲労が塚野を制圧しようとしているようだ。

そんな塚野にこんな話が頭に入るかは分からなかったが：

「確かに、根性ね。でもそれは、ここぞと言う時に使うものよ。根性論とか、精神論とかとは違うわ。ただ、戦車道は戦車がやるものじゃない、人間がやるものよ。その時のコンディションや気持ち、考えが影響するわ。だから隊長が頑張ればチームは頑張れるし、へばればチームもへばる。だから、ここぞと言う時に踏ん張れば、チームも踏ん張る。まあ、みんなのメンタルも大事だけれど…ちゃんと説明出来ていたかしら？」

塚野はまた欠伸したが、ちゃんと真剣に村江の話を聞いていたらしい。

「いんや。なんとなく分かったよん。あたしが弱気じゃ、そりやダメだねえ」

「とは言え、相手の事も知っておかないと意味は無いけれど…だから根性論や精神論とは違うって言ったのよ」

話にひと段落がつくと、大地が

「そう言えばバラトン工業の、ハンガリー戦車だけの編成計画の話は、結局どうなったんでしよう？」

「試合の録画をまだ見ていないわ」

村江は右手で疲れた目を揉んだ。「早く確認しないと」

そう言つて立ち上がろうとする村江を、大地が押し止めた。

「私が見てきます。村江さんは休んでいて下さい」

村江はおとなしく体を背もたれに深々と預けた。

目は既に開く事を拒絶しており、固く閉じられている。

「そう？じゃあ頼んだわ」

「はい」

「録画は私が持っています」

大地は立ち上がると、萩原と一緒に自分達がいる車両を出て行った。

程無くして村江の呼吸が規則正しくなると、それが塚野や野島にも伝染する。

「うちらも寝よつかあ。ふあくあ…」

「ほら、ブランケットだぜ」

「サンキューノイジー…」

塚野はブランケットを頭から被ると窓際に寄りかかった。

野島もブランケットを首元まで引き上げると、座席を倒して仮眠に入った。

その頃、別の列車に乗るバラトン工業高校チームでは。

「あーあ。負けちゃったね」

「しつかりしなさいタールツアイ。相手が…強すぎたわ」

軽い口調だが今日の試合の結果を嘆く2年生のタールツアイ隊長を、隣に座る3年生のマヨルが嗜めた。

バラトン工業高校戦車道チームのタンクジャケットは、第二次世界大戦時のハンガリー陸軍の制服をモデルにした、茶色を基調としたものだった。

「エクセルシオール的事、スパイしておけばよかったですわね。正直悔ってましたわ」

そう言ったのは向かいに座る副隊長のアンヌだ。

彼女の横に座るもう1人の副隊長のニコラもうんうんと頷くが、彼女も握り拳を膝の上に置きながら悔しそうに俯き、口元を歪めている。

「ちっ、あんなポツと出の、成金みてえなクソ校には負けたくなかったなあー！」

「ニコラ、暴言を交えないで」

「でもさ、マヨル先輩…」

「仮にも戦車道をやっている身として、言葉も謹んで」

「マヨル先輩の言う通りよ、ニコラ。冷静にならなきゃ」

タールツアイにも言われ、ニコラはむっつりと押し黙った。

そんなニコラを、アンヌが苦笑しながら宥める。

「相変わらずね、ニコラ。でも結果は引つ繰り返せないわ。次頑張ろ？」

それからタールツアイを見る。

「それで、隊長。明日の相手ですが…」

「フロンティア学園。結果は青師団の勝ちなんだって」

「まあ、当然の結果ですわね」

「いや、実は五分五分で、逆に青師団はギリギリまで追い詰められたわ」

アンヌが青師団高校の圧勝だと思っているのを察したマヨルが補足説明を行った。「多分、舐めて掛かると痛い目を見るわ」

「SU-100は確かに、危険ですわね」

「スペックの問題じゃないわ、アンヌ」

と、マヨルが言った。「そのような事を考えていたら、また振り返りに遭うわよ」

「でもここだって、今年の9月からスタートしたばかりのチームでは？」

「録画を見たら考えが変わるわよ」

「え、マヨル先輩、いつの間に…？」

「それで知ってたってわけっすか？」

マヨルはアンヌとニコラを交互に見た。

「ええ。あなた達はいっ見るつもりだったの？」

「向こうに着いてからですわ」

「それまでは、ここで眠つところかなって…」

「そう。まあ、隊長は私と一緒にもう見たけど」

アンヌとニコラはほぼ同時に目を丸くしたので、タールツアイは面白そうに笑い声をあげた。

「た、隊長…？」

「笑わんでくださいってえ」

「いや、なんか可愛かったもん」

「タールツアイは真顔に戻ると、「いや正直、2人とも録画は今から見
ておいた方がいいわよ。心構えは早いうちに限るからね」

「分かりました」

「了解っす」

「アンヌとニコラは素直に立ち上がると、録画映像の確認に向かっ
た。」

2人がこの車両から出て行くと、マヨルが

「タールツアイ。あの二人、大丈夫かしら？」

「副隊長に就任したばかりですからね。マヨル先輩のご指導のおかげ
で、色々助かっています」

「早く自立して欲しいわ。試合では機敏だけど、それ以外の事も、ね」

「はい、分かっております」

「どうしてマルギットを副隊長にしなかったの？」

「マヨルは斜め前方の座席で眠りこけているマルギットという隊員
を見やった。」

「マルギットはまだ1年生です。急に重荷を背負わせるのは酷だと判
断しました…急な人事だった事ですし…」

「そうね。あなたはよく頑張っているわ」

「有難うございます。でもマヨル先輩から隊長の座を受け継いでか
ら、まだまだです」

「私はこの高校ではもう『老いぼれ』よ、タールツアイ。次の世代に、
チームの未来を引き継がないといけない」

「いえ、まだまだ学ぶべき事は多いです、マヨル先輩」

マヨルは柔和に微笑んだ。

「そう言ってくれると嬉しいわ、タールツアイ。ただ、老婆心ながら、
あの子達がハンガリー戦車だけの編成を熱望したというのに、あれで
はちよっと心配だわ…って、そう急に成長出来るものでもないわよ
ね」

実は今年の途中までマヨルがバラトン工業高校戦車道チームの隊

長だったのだが、前々からチームメンバーの間で上がっていたハンガリー戦車のみでの編成の声がいよいよ大きくなった事で隊長の座を自ら退き、全幅の信頼を置いていた当時の副隊長：即ち現隊長のタルツアイを次期隊長に据えていたのである。

マヨルはドイツ戦車の全廃には内心反対だったが、自分の拘りがチームの士気を低める事を懸念した上で次世代にチームを託す潮時だと考えたのであった。

もつとも、マヨルは3年生で半年もすれば自然とハンガリー戦車オソリーの保有になる筈だったが、その流れを変えたのがこの予選リーグである。

タルツアイも戦力保有としてはマヨルと同じ意見だったが、マヨルよりは柔軟な思考だったのでハンガリー戦車のみ編成を受け入れる姿勢を取った。

「私がしっかりチームの手綱を握ります」

そう言うタルツアイの表情は、いつものフランクさとは違って引き締まっていた。

「頼もしいわ。とにかく、明日に備えましょう」

「Igen」

その時、列車がカーブに差し掛かって傾いた。

続く

チャプター3 不安

ここはフロンティア学園チームが詰める格納庫。

明日の試合開催地に隣接する戦車整備場兼宿舎に到着してすぐに、田張たち機械部5人組は戦車の整備に取り掛かっていた。

明日に間に合わせる為、夕食の時間を惜しんでの作業だったが、これには他のメンバーも作業の手伝いに加わっていた。

しかし作戦を検討する必要もあつたので、塚野、野島、村江、大地の4人は隣の部屋で作戦会議を開いていた。

「お腹空いた〜」

天井を仰ぎながら呆けたようにそう言う田張に、ラムⅡの下部で作業していた安藤が、フロントの縁を掴んで台車ごと自分自身を引張って顔を出した。

ガムを噛んでいるらしく、口をもぐもぐ動かしている。

「まあたですかチーフ。5分に1回それ言ってますぜ」

田張は尚も突つ立ったまま安藤を見下ろす。

「え〜。だってもうかれこれ1時間経ってるじゃん」

「ああそうですかい。ほらチーフ」

安藤はズボンのポケットから引き抜いた板ガムの束で田張の左手をペチペチとひっぱっていた。「これでも噛んで我慢して貰われないと。でないとチーフのハングリーコールがそのうち1分に1度になるでさあ」

「それじゃあ遠慮なく」

銀紙の包みを開いてミント味の緑色の板ガムを暫く噛んでいると、空腹感が紛れて来たのか田張の表情も落ち着く。

「・・・でも夕飯いつ来るのよ」

「さあ。朝食にはならんでしよう」

SU-100のエンジンを整備していた五十嵐が振り向いた。「もうすぐ食堂閉まるんじゃないですか?」

実は桑田がチームの為に腕によりをかけて夕食を準備すると言っており、それならば食堂を往復する時間を省けるだろうという事で、

調理部が夕食を運び込んで来るのを作業しながら待っていたのである。

「痺れ切らして食堂行っちゃいますか？」

膝を屈めて工具箱を漁っていた伊関が言うと、作業で筋肉が強張った体を伸ばし解していた桐山も同調して、

「いつその事、行っちゃいましょうよ」

「でもそういう時に限って入れ違いになるもんです」

隅に置いた椅子に座ってタンクジャケットを修繕をしていた大川が、針と糸を持つ両手を動かしながら待ったをかけた。

「まあ確かにねえ」

土橋は紙コップに水入りペットボトルを傾けていた。「散々ウジウジして、漸く決断したらタイミングが悪かったというのは稀によくあるわけで」

「その通りです！『稀によくある』とはどういう事かはさておいて……と、なぜか勢いを得た様子の大川がタンクジャケットを前に突き出して言った。「辛い時は1分1秒が遅く過ぎ去るものです。でも今は耐える時。安藤さんの仰る通り、朝食までお預け、という事態にはまづならないでしょう」

「どうして分かるわけ？」

井上が腕組みをしながら訝し気な表情になると、

「桑田さんは調理部員ですから。気が付いたら朝日が昇っていたなんて事態になれば調理部の名に傷が付きまます。プライドにかけて……すると噂をすれば影が差すと言うのか、格納庫の入り口のドアが開き、

「その通り！大川の言う通りだあ！朝までチームを飢えて苦しめるなんて恐ろしくて想像もしたかねえ！」

どうやら会話が耳に入っていたらしい桑田の威勢の良いセリフと共に、国崎、佐伯、桑田、小戸が銀色の鍋を載せたワゴンを押して格納庫の中に入って来た。

蓋の間から食欲を刺激する香りが漂い、田張達は鼻をクンクン動かしながらワゴンの周りに自然と集まって来た。

「お、やったご飯だー！」

ラムⅡの車内から顔を出した鹿屋が歓声を上げて飛び降りたが、空腹と疲労で足元がふらついていたらしく、着地するなり横につんのめって倒れそうになったところを萩原と福地に支えられた。

「大丈夫ですか鹿屋さん？」

「広報は相当参っていたみたいね・・・」

「いやいやそれ程でもー」

呆れ顔の萩原と福地を後に、鹿屋はワゴンを取り巻くチームに加わり、後から萩原と福地も合流する。

「皆さんお疲れ様です！」

国崎が笑顔でチームを労うと、「今日はグヤーシユにテルテット・カーポスタ、キャセロールにチーズ類、パン、あとデザートにパラチンタとドボシュトルテがあります！明日の試合相手のバラトン工業高校から、食材を無償で譲って貰いました！調理部員が一から作ったんですよー！」

明日の対戦相手の厚意、そして調理部がこれらの豪華な料理を作って見せた事を知った一同が驚きの声を上げる。

「おいおい会長。そのセリフはあつしが・・・」

桑田が抗議しようとしたが、その肩に小戸の手が乗せられた。

「やめておくんだな桑田。会長に逆らうと痛い目を見るぞ？」

桑田はギョツとしながら小戸を振り返る。

「おいおい脅迫はやめてくれよ」

「脅迫じゃない。忠告だ」

「そりやどうも」

そんなやり取りをよそに、国崎は佐伯と共に食器をチームメンバーに渡し始めていた。

「では皆さん。好きなかだけよそって食べて下さい、でもあまりがつつくと胃がびっくりしますから、それには気を付けましょう」

桑田は抗議を諦めて、

「なあそれよりもよ小戸、一つ聞きてえんだが」

「なんだ？」

「どうしてまたあつしについてきたりしたんだ？バラトンとの交渉に」

夕食の準備を約束した桑田は、その当てとしていたバラトン工業高校に食材を分けて貰うよう交渉しに行ったのだが、これはバラトン工業高校が自前で野外料理する為の物資をたんまり持ち込んでいるという情報をアンツイオ高校の生徒から聞いたからだ。

「お前が勝手にバラトンの物資をくすねたり、うまく言いくるめて詐欺を働かないよう監視する為さ」

「そうかい」

「全く迷惑な話だ。人様の物資をおねだりしに行つたわけだからな」

「ああ。あつしも申し訳ないと思つていたからよ。ちやんとカネは払うつもりだったさ。ダメだと言われたらすぐ引き下がるつもりでいた。けど驚いた事に、彼女達は喜んでタダでくれたってわけさ。あれは拍子抜けしたね。そしてこれも意外な事に、お前が料理を手伝ってくれたり運んでくれたりした」

「チームの為に、一度に全部運びたかつただけだ」

「調理部員に任せればいいのかによ」

「お前の監視も兼ねていた」

「案外優しいな、あんた」

「ハ！買いかぶるな。保安部長としての仕事をしたまでだ」

その頃、いつの間にか騒ぎを聞きつけて隣の部屋から出て来た塚野達も食事に加わる。

「あ、塚野さん。今日は大変でしたね」

塚野は国崎からグヤーシユの入った深めのスープ皿とスプーンを受け取ると、自嘲気味に笑った。

「んまあ、勝ちたかつたですけどねえ」

「勝負は時の運と聞きます。まあ、部外者の私が偉そうですが・・・」

「会長は、参加しないんですか？」

すると国崎は少し言い淀んだ。

いつも穏やかだが回答に迷いの無い彼女にしては珍しい。

「参加してもいいのですが・・・ちよつとこここのところ、生徒会の仕事

が忙しいんです・・・生徒会長としての仕事が、です」
「はあ」

「そう説明するしかないのですよ」

と、国崎は肩をすくめた。

何か考え事というか、懸念材料があるのだろうか。

すると国崎は話題を変えて、

「そうだ。何か困っている事とかありませんか？」

「んー」

塚野はスプーンでグヤーシユをかき混ぜながら考える。

赤色が強めの濃いシチューの中に大粒の牛肉やジャガイモ、ニンジン、みじん切りの玉ねぎが具たくさんで食べ応えがありそうだ。

「やっぱ戦車道用の敷地が狭いですかねえ」

国崎も気持ちちは分かると言うように首肯しながらも、

「意見はごもつともですが、元々戦車道が無い学園艦だったんです。あれでも儲けものかと」

「そこをなんとか出来なですかねえ？」

国崎は苦笑した。

「私は生徒会長ですよ。独裁者じゃありません」

「横から失礼しますね〜？」

そう言つて会話に入つて来たのは福地だった。

手には自分で挟んだらしいテーリサラミとエメンタルチーズのサンドイッチが握られている。

「会長。確か新型学園艦に引越す計画があつたと聞いておりますが？」

「どこから聞いたのですか、それ」

「私は顔が広いです」

「まあいいですが・・・」

「新型学園艦って？」

国崎と福地が会話している間に牛肉とシチューを一口食べた塚野が尋ねる。

国崎が塚野にまた体を向けて、

「実は近日中に新型学園艦が完成予定なんです。もう我が校の学園艦は100年も運航しているボロ船。この際、そこに引越せないかと模索していたところですよ。しかも戦車道設置が前提とされているとか」

「え、隊長は知らなかったの?」

福地が困惑気味に塚野に聞いたが、

「いや、初めて聞いたし」

「実は新型学園艦を獲得する為の、戦車道のトライアル戦が企画されていたので、私もちょうどいいと思ったのですが・・・参加条件が学園艦を持たない戦車道設置校限定になっていたんです」

「ああ・・・そーゆー事っすかあ」

「そーゆー事っす。幾らボロ船だろうと、我が校は学園艦を持っています。なので対象から外れているわけです」

福地が皮肉気な笑みを浮かべる。

「学園艦の統合と廃艦を一拳に推し進めた副作用ってどこかしら?」

塚野が自信なさげに言った。

「参加の為に今の学園艦を捨てるわけにはいかないんですもんねえ・・・自分で言うのもなんですが、負けたら洒落にならないわけ」

「そんなのやってみなきゃ分からないじゃない」

と、福地が言ったが、

「いやあ、今の実力じゃちよっちい厳しいかなってえ」

無意識にグヤーシユをスプーンでかき混ぜながら、塚野は踵を返すと作戦会議に使っている部屋に戻って行った。

それを見た佐伯が後を追ひ、一度閉まったドアのノブを回して引き開けると、明日の試合会場が描かれた地図が広げられている机の上にグヤーシユ入りスプーン皿を置いて、心ここにあらずといった感じでスプーンに乗せたグヤーシユをゆっくり口に運んでいた。

「大丈夫?食欲ないみたいだけど」

塚野は佐伯には顔を向けず、地図をぼんやりと眺めながら「病気じゃないし」

「・・・明日の試合ね」

「負けたら敗者復活戦だけどさあ」

「連敗は良くないわね。あなたにとつては、特に」

後を引き取って佐伯は塚野の向かいに腰を落ち着けた。

「そこ、村江参謀の席」

「今はいないわ」

「で、何の用つすかあ?」

「隊長がそんな事じゃ、チームもダメになるわよ」

「分かってますつてえ」

「どうだか」

「まーたお説教?」

「出来れば往復ビンタしたいわね。でもそれじゃあ何も変わらないだろうし」

それから暫く沈黙が続き、塚野がスプーンでグヤーシユを掬う際にスープ皿に当たる音が室内に虚ろに響いた。

しかし塚野は無理矢理食事を腹に詰めている感じで、心から食事を楽しんでるわけではなさそうである。

今彼女の心を支配しているのは、明日の試合の不安、敗北への恐怖、そしてそれがもたらす、自身の退学のプレッシャー。

塚野が招いた危機だが、佐伯は放っておくわけにはいかなかった。

これが9月の時の自分だったら色々煽り立てていただろうが・・・
「怖い?」

佐伯の短い質問に、塚野が顔を上げた。

「どう思う?」

「そうだとでも無理ないわ」

「いつからそんなに優しくなったし?」

「違うわ。フロンティア学園の経歴に傷をつけたくないだけよ」

それは誤魔化しで、塚野にもそれは分かっているようだった。

「ふーん」

「不安なのは、あなただけじゃないわ」

「え?」

「バラトンチームの隊長も、同じよ。今のあなたと同じ目をしていた」
「あたしと?」

「そう」

佐伯は頷いた。「まさか同じく退学を賭けた戦いではないだろうか
ど、似たような心境を抱える理由があるのかもね」

「そっかあ」

集中力が切れ切れの塚野は上の空でそう応じたが、

「ねえ、お礼ついでに、その隊長と会って、話をしてみたら?」

と言う佐伯の提案に驚いてマジマジと相手を凝視した。

続く

チャプター4 意気投合

塚野が野島と一緒にバラトン工業高校戦車道チームの詰める格納庫に行くと、やはり相手チームも明日の試合に備えて、隊員総出で戦車の整備作業の真っ最中だった。

「あら、フロンティア学園の人？」

出迎えた隊員はマヨルと名乗り、3年生だった。

自軍の村江や大地、青師団高校のエル隊長もそうだったが、戦車道経験者はやはりその顔立ちや雰囲気を漂わせている。

「はい。食材の提供のお礼をしに来たんです」

「なるほど。私から隊長に伝えておきますよ」

「あ、実は・・・」

その先を言い淀んだ塚野に、マヨルはなんだろうと首を傾げた。

「ん、どうしました？」

「隊長に、会わせて貰えませんか？その・・・話もしてみたくて・・・」

「忙しいのは重々承知なんですが」

と、野島も一緒にお願いしてみると、意外にもマヨルは微笑みながら頷いた。

「なるほど、分かりました。ついて来て下さい」

マヨルの後について行くと、格納庫の隣に併設された一人用の三角テントに案内された。

ランタンの灯りで光るテントに、1人の座っているシルエットが浮かんでいる。

マヨルが入り口部分を捲り、

「隊長。お客さんです」

「お客さん？」

「フロンティア学園の隊長と副隊長です」

途端に噎せ返る音がそれに応じ、まだ咳き込みながらタールツアイ隊長がテントから顔を出した。

その手にはハンガリー系の高校には全く似つかわしくない、益子焼の湯呑みが握られており、テント内から漏れ出たランタンの灯りに照

らされている様子を見ると、どうも湯気の立つ緑茶に見えた。

「やあどうも」

と、タールツアイはにっこりと挨拶して、また咳き込んだ。

「いやあ、別に挨拶なんて良かったのに」

テントの外に急遽設けられた木製のテーブルを、キャンプ用に売られている折り畳み椅子で囲みながらタールツアイはそう言いながら2人にも飲み物を勧めた。

「こんなものしかありませんが、どうぞ」

マヨルが運んで来たのはトラウビソーダ入りのペットボトルだった。

説明だと、どうやらハンガリーやオーストリア、クロアチアで生産されるグレープ味の清涼飲料水のブランドらしい。

なかなか悪くない味で、タールツアイに促されると、コップに注がれた分を塚野はあつという間に飲み干してしまった。

多分、明日のプレッシャーでいつの間にか喉がカラカラだったのだろう。

「おい、もうちよつと遠慮しろよ」

野島はそう言ったが、すっかり給仕役になったマヨルが構わず

「おかわりを」

と言ってペットボトルを傾け、2杯目を注いだ。

「副隊長ですか？」

野島の質問に、マヨルは首を横に振った。

「私じゃありません。2人いますよ」

「後で紹介するよ」

と補足しながら、タールツアイは湯呑みの緑茶を豪快な動作で飲み干した……まるで酒飲みのように頭を後ろに倒しながら。

「うーん。今呼んで来るわ」

そうタールツアイに言うと、トラウビソーダのペットボトルを置き、「ご自由にどうぞ」と言って格納庫に歩き去って行った。

「んで、話をしたいって？」

急須から熱々の緑茶を湯呑みに注ぎ直しながらタールツアイが尋ねると、塚野はどう切り出したものかと未だ悩みながら、

「その・・・どんな人なのかなってえ」

タールツアイは急須を静かに置くと、塚野の顔を数秒間観察するように眺めた。

野島も目線で2人を交互に見て様子を窺う。

「なるほど。君も飯が喉を通らなかつたタチか」

見事に言い当てられたので、塚野はキョトンとしてしまった。

その様子が面白かつたのかタールツアイは笑い出し、熱々の湯呑みを持つ手に力が入って手を振り振り離れた。

「あっちうち」

「でも・・・どうして分かつたんで?」

「そりゃあこっちもそうだったから」

あっけらかんとした性格のタールツアイは塚野や野島にとっても親しみやすく、初対面なのに前に会った事があるかのような人物だった。

青師団高校のエル隊長も親しみやすい印象を受けたが、タールツアイはそれ以上だ。

「戦車道の経験者でも、そのような事があるという事ですか?」

野島の質問に、タールツアイは少し顔を斜め上に向けて考えた後、「どうかなあ。私だけかもしれないけどさ・・・んまあ、ちよつとした悩みがあるからかな?」

「悩み?」

食い付いた塚野に、タールツアイは片眉を上げて見せた。

「なあるほど。そっちにも大なり小なり悩みがありそうだね。んまあ、人間たるもの、悩みを抱える生き物だけど」

「まあ、そんなところですよ」

「うちはや」

と、タールツアイは自分の悩みを話し始めた。「つい最近人事が変わったのよねえ。さっきのマヨル先輩が隊長だったんだけど、それが私になったってわけ。事情は色々あるんだけど、ヘッドを一新した

チームを引つ張つてくのが、私の役目。しかもこの予選リーグで一定の成果を収める必要があるってわけ」

話しながらタールツアイは、塚野の共感する表情から似たような悩みを抱えていると察した。

一口緑茶を啜ると、

「塚野隊長も同じ悩み？」

「あ、あんた、エスパーか」

塚野が思い切つてジョークを口にする、と、タールツアイはまた豪快に笑つた。

「君、面白いね。是非とも交流したいなあ」

「おめえ、やんじゃねえか」

と、野島が手の甲で塚野の二の腕をトントン叩いた。

「ええと、そのお・・・」

「あ、ああ、話しにくい感じ？」

しかし塚野は、思い切つて話す事にした。

タールツアイからこれだけあけつひろげに接して貰つて、こちらは完全シークレットというわけにはいかない。

塚野は、自分が戦車道を立ち上げた経緯、そして予選リーグで負けられない理由を話した。

相手の顔色を窺いながら、慎重に話をしてみたが、意外にもタールツアイは表情一つ変えず、真剣な面持ちで塚野の身の上話に一言一句耳を傾けていた。

「ははーん。インパクトあるなあ」

そう感想を述べたタールツアイだったが、そこに嘲りや侮蔑の色は無く、塚野や野島にとつてこれは意外であった。

それと同時に、塚野はなぜか胸の中のつかえのようなものが霧のように消えていくのを感じた。

自軍のメンバーではなくて敵軍の隊長に話を聞いて貰つてそうなったというのもなんだか奇妙な話だったが・・・

タールツアイは不意に立ち上がると、

「夜食でもどう？小腹空いちやつた」

すると塚野も腹が鳴った。

「んじゃあ」

「オーケー。野島副隊長は？」

「あたしも」

野島も話に合わせて、タールツアイはまたテントの中に入って行き、次に出て来た時はほかほかの白米が盛られた茶碗が3つ載ったお盆を持っていた。

「話し相手が欲しくて、余分に作ってたんだよね」

苦笑しながらタールツアイは塚野と野島の前に白米入り茶碗を置くと、「お茶漬けだけいい？」

「いやいや、どうもですう！」

「無性に食べてえ」

ハンガリー料理の後には、こういうあつさりした和食は胃のウケが良いのかもしれない。緑茶が注がれると白い沢庵をおかずに、3人は一心不乱にお茶漬けを掻き込んだ。

緑茶で連結が切れた白米の粒と、ポリポリとした歯応えで味の濃い沢庵が実にマッチしており、あまりよく噛まずとも、すすいと喉を通って腹の中に流し込まれていく。

「にしてもさ、塚野さん」

タールツアイが肩書を外した事に塚野は気付き、注意を惹かれた。タールツアイは先を続ける。

「なんにしても、ここまでチームを引っ張って来たんだから、もつと自分を誇りに思ってもいいんじゃない？私は凄いなあ。どん底から這い上がって来たんだからさ」

「そ、そうかなあ」

「そうだとよ」

タールツアイは自分の右手を、塚野の右手の上に優しく置いた。「もう君は、立派な隊長だと思う。だから明日はお互いに頑張る？敵同士ではなく、友人同士として・・・それぞれ負けられないと思うけどね」

その時、マヨルがアンヌとニコラを伴って現れた。

タールツアイが、

「あれ、遅かったじゃん」

「ああ、見つけるのに時間が掛かってしまっただけ」

「ふーん。まあいいや」

それ以上の追求はせず、タールツアイはこの2人の副隊長を塚野と野島に紹介した。「こっちがアンヌで、そっちがニコラ。お嬢と毒舌でいいよ」

「た、隊長!?!」

「なんすかそれ!?!」

タールツアイの適当な紹介にアンヌとニコラが驚愕して抗議したが、本人はどこ吹く風である。

マヨルは苦笑していたものの、口出しはしなかった。

「ええと・・・アンヌさんとニコラさん。宜しくお願ひします」

さすがにタールツアイの勧めに乗るわけにはいかず、塚野と野島は丁寧に2人と挨拶を交わした。

ただ、お互いに明日の試合に備えてそれ以上だべっているわけにもいかず、自己紹介が済むとそれぞれがそれぞれの作戦会議に戻って行った。

しかしタールツアイと意気投合した事で、塚野は明日のプレッシャーが緩和されている事に気が付いた。

最も負ければ塚野にとって致命的だが、プレッシャーに怯むのではなく、頑張ろうと言う気持ちは今では優っていた。

〈第6話・終〉

第7話 フロンティア学園 V S バラトン工業高校 チャプター1 戦闘配置

そして迎えた翌日の午後。

フロンティア学園 V S バラトン工業高校の試合が幕を開けた。

両チームともこれ以上負けられない：敗者復活戦はあるが：ので、
隊員達の気合は嫌でも高まっていた。

因みに昨日の試合の疲労からはすっかり回復していたが、これは若
さの特権と言うべきか。

「あ、人増えてね？」

塚野が観客席の様子に気付いて言った。

確かにフロンティア学園の制服を着た人間は前よりも多く、恐らく
同学園艦の一般住人だろうか、大人達も少し増えているように見え
る。

「放送部のライブ中継が相当効果あったらしいです」

と、萩原が言った。「我々も派手に宣伝打っておきました」

「ああ、あの朝刊か・・・」

野島が呆れたように溜息を吐いた。

萩原の書いた学園新聞の朝刊分がチームにも送られてきたので、朝
食ついでにそれを読むと塚野隊長の事をえらく褒めそやしていたの
である。

「嘘は書いてませんって」

「でもよ、『全国大会優勝確定！』は幾らなんでも言い過ぎだろうがよ」

「まあまあノイジー」

「あ？」

塚野は野島に観客席をもう一度見るよう手ぶりで示した。

「注目が集まんのはいいい事じゃん？」

「人目が嫌いなんだよ」

「あーそれで帰宅部だったんだあ」

「うるせえな」

「隊長！そろそろ・・・」

大地が塚野を呼び、間もなく両チームが対面した。

「両校、礼！」

この試合の審判長を担当する女性の号令で頭を下げ合うと、塚野がタールツアイに手を挙げながら軽い口調で、

「よろっす！」

タールツアイもノリが良く、同じ仕草で返すと

「昨日の友は今日の敵。なんてね、冗談冗談」

塚野は苦笑しながらタールツアイと分けられるとチームメイトを追って持ち場に戻った。

「ほお？すっかり仲良くなっちゃったな」

SU—100に向かう前に野島が言った。

「なんつーか、肩が軽い感じかなあ」

「ぜってえ油断すんじゃないぞ」

「もー、分かっているってえノイジー」

「ふん」

どうだかと言う風に肩をすくめると、野島は慣れた動きでSU—100をよじ登る。

塚野も座乗のレオパルト軽戦車の車内に収まると、井上がヘッドフォンに右手を当てながら振り返り、

「隊長、村江さんからです」

「繋いでえ」

「了解」

村江の要件は塚野も分かっていた。

なので村江が、

『隊長』

と言った時には塚野はすかさず言葉を挟んで、

「あー。引き留めても無駄だかんね？」

昨夜の作戦会議では相当揉めたが、塚野に方針を替える気持ちは無かった。

今回の試合会場は東欧某国の都市を再現したテーマパークで、長崎

県佐世保市にあるハウステンボスと似ているが、規模はこちらの方が大きい。

このテーマパークは南北に最大幅300m程の広さを持つ大河が走っており、この大河を挟むように両チームが配置されていたが、くじ引きでフロンティア学園は城塞がある側に当たり、バラトン工業高校は街並みが広がる側に配置となった。

塚野は自軍が城塞に籠って戦うと同時に、大河の向こう側にフラッグ車を渡らせて敵をこちらまで誘き出す作戦を考えていた。

勿論護衛はつけるが、その役割を塚野座乗のレオパルトが担当する事になったのだ。

これに村江のラムⅡ巡航戦車が遊撃で援護し、残りの車輛が城塞に籠って待ち構えると言うわけである。

もつとも相手にもあつきりこちらの意図は透け透けだろうが、その前にフラッグ車を仕留めようと乗って来るだろうと塚野は予測していた。

ただ昨夜の作戦会議で塚野の方針を聞いた村江や大地は、隊長車が直接敵地に出張る事に反対の立場を取ったが、塚野も考えを変えるつもりは無く、議論は平行線を辿った。

野島も2人に賛同したが、

「フラッグ車を餌にすんのに高みの見物なんてできないっしょ」

塚野は3人にそう言って隊長として強権を発動し、議論を無理やり終了させたのである。

野島や大地は不満そうだったが、村江が他の打ち合わせ内容に話題を変えた事でこの議論はそれつきりとなった。

というわけで、塚野は村江が改めて自分に作戦方針の転換を要請しに無線を繋いで来たのかと思っただけだ。

『・・・いえ、隊長。ただ、念の為確認したかっただけよ。私も出来るだけカバーするけれど、くれぐれも気を付けて頂戴』

塚野は唾を飲み込み、真剣な面持ちで頷きながら返答する。

さつき野島からも油断すると言われたばかりだ。

その矢先にあつきりやられたら目も当てられない。

何せ言い出しっぺは自分なのだ。

「・・・勿論、分かってるから」

「OK。それならいいわ」

村江との交信を終えてから、塚野は田張、鹿屋、井上の3人がこちらを見ている事に初めて気付いた。

塚野は3人の顔を順々に見ていきながら、

「たばっち、操縦は任せんね」

「万事オーケーですよ」

「かのやん、撃つて撃つて撃ちまくっちゃまって」

「わーい！弾切れにするよー！」

「まあほどほどによる。井上さんは・・・」

すると井上は心外そうに塚野を睨んだ。

戦車道用敷地を提供してくれた女性の孫という事でつい遠慮してしまっただが、それが気に入らなかつたらしい。

「何よ。普通に綽名付けちゃっても別にいいんだけど」

「んじゃあ、イノシシは？」

「はあ・・・」

「あー、じゃあ」

「いいわそれで」

「え？」

「いのつちも面白くないし、それならイノシシでいいわ。他にいい名前思いついたら教えて」

「んじゃあ・・・イノシシは、味方との連絡を密に」

「了解」

その時、誰かがレオパルトをよじ登る音が反響し、上からノックされた。

ハッチを開いてみると、桑田だった。

「何？」

「差し入れだよ隊長。受け取ってくれると嬉しいね」

桑田はサランラップで包んだ例のお手製焼きそばパンを差し出した。「腹が減っては戦が出来ぬ」って諺もある・・・だろ？確か」

「みんなにも配ってんの？」

「そりやそうよ！一人1個ずつ。ついでに水をサーブスしとくぜ」

確かに桑田の傍らには500mの水入り1ペットボトルが人数分置かれている。

焼きそばパンを受け取ろうとすると、桑田が手を差し出してきた。

「え？」

「1個500円なんで2000円」

「は、金取んの？」

「今無いならツケでどうです？」

「じゃあいらねえ」

塚野がハッチを閉じようとする、桑田が慌ててその手を抑えて

「ああ！分かった、分かったから！今回は特別にタダにしときますぜ。でも学園艦じゃ、是非ご贖儀に」

「ああ、はいはい」

適当に領きながら塚野は桑田の差し入れを受け取ると、仲間達に配った。

桑田が全車に差し入れを配り終えた直後、試合開始の合図がアナウンスされた。

続く

チャプター2 陽動

「陽動隊が運河を越えました」

城塞に籠るハリーホプキンスから、フラッグ車のルノーUEと護衛のレオパルトとラムIIが橋を越える様子を双眼鏡で追いながら大地が無線で野島に報告する。

が、返事が無いので大地はもう一度呼び掛けた。

「・・・副隊長？」

「まったく、気が気じゃねえなおい」

「ああ・・・」

大地は昨夜の作戦会議で半ばふてくされた野島を思い出して苦笑した。

どうあつても方針転換するつもりが無い隊長に、大地は塚野の隊長として成長の過程に立ち会っているのかと思うと戦車道経験者として気を引き締める思いであった。

実際、負けたとは言え歴戦チームの1つである青師団高校相手にあそこまでやれた事は大地も予想外だったが、それもまた急速な成長を予感させるものと大地は考えている。

「副隊長。こうなったら信じましょう」

「ぼやく野島を大地がそう窘めると、

「でもよ。負けちまったらいよいよ崖っぷちなんだぞ、あいつは。幾らなんでも無謀じゃねえか？」

大地もその事はよく分かっている。

黒森峰女学園とタッグを組んでイズベスチャ社のアグレッサーチームと練習試合をする直前に、塚野が仲間達に告白した裏事情には驚かされたが、だからと言って大地の塚野に対する印象や考えは決して変わっていない。

「知っています。でもそう簡単にはやられない筈ですよ」

「だどいいけどな・・・」

野島は溜息を吐いたが、それ以上なにも言わなかった。

さてこちらは市街地を進軍するレオパルト。

ハッチの縁に腕を乗せた塚野は、辺りに油断なく目を配っている。いつどこから敵戦車と鉢合わせするか分からない。

下手するとフラッグ車を瞬殺されるといふ事態もあり得るのだ。

まるで本当にやられていないかどうかを念入りに確認するかのよう後ろを振り返ると、確かにルノーUEはしつかり後をついて来ている。

但しラムIIは遊撃に出ていて今ここにはいないが、何かあればすぐ急行する事になっていた。

塚野は咽喉マイクに触れた。

「塚野から村江参謀。状況は？」

『敵の気配は無いわ。何かあつたらすぐ知らせるわ』

「たのんます」

塚野はもう一度ルノーUEを肩越しに振り返った。

こまめにフラッグ車の安否を確認しないと安心できないようだ。

そんな必要は別に無いのだが、どうしようもない不安に襲われるのである。

機銃のみの豆戦車が狙われたら自衛する手段は無い。

だからこそ自分達が早々やられるわけにはいかないのだ。

『隊長、どうしました？』

機銃手の萩原が塚野の様子が気になったらしく、ドーム型ハッチを開いて呼び掛けて来た。

「ああ、いや。なんでもないよお。ハハ、ごめんね二度見も三度見もしちゃってさあ、なんかキモイよねえ」

『ああ・・・そんなつもりは・・・』

「分かってるってえ」

萩原に手を振ると、塚野はまた前方に注意を戻した。

『こちらマルギット。あと5分で北側の橋に達します』

タールツアイはフラッグ車のトゥラインIIIに乗っていた。

短砲身75mm砲が主砲だったトゥラインIIを改造キットで対戦

車戦闘向きの長砲身75mm砲に換装したものだが、第一試合は最終チエック中で間に合わず、この第二試合が初陣だ。

「敵は城塞に籠ってると思うから、十分に気を付けてね。あとSU-100にも要注意」

『Igen!』

「ニコラ、そっちは？」

『こっちもあと5分くらいで南側の橋に着きます』

「了解。そっちも気を付けてね」

『フラッグ車のハラワタはうちらで抉り出してやりますよ!』

「お、おう。えらい気合入ってるね」

バラトン工業高校チームの戦力は、上記のトゥラインIIIとトゥラインII、ズリーニイIIが1輛ずつと、マドセン20mm機関砲搭載の38MトルデイIIが2輛と42M51口径40mm戦車砲搭載の38MトルデイIIaが3輛という構成だ。

この内マルギットは20mm機関砲と40mm砲を1輛ずつ率い、ニコラが20mm機関砲を1輛と40mm砲を2輛率いて河の北側と南側の橋から城塞へのアプローチを試みていた。

そしてタールツアイ率いるトゥラインとズリーニイの主力部隊3輛が、中央から進軍して城塞との正面戦闘を引き受ける段取りとなっているが、最大の脅威として認識していたのはSU-100だった。射程距離と威力に関して言えば、バラトン工業高校のあらゆる戦車が太刀打ち出来ない。

もつとも、敵が籠城している事は単なるこちらの予想でしかないが、わざわざ有利な位置を捨てて河を渡って来るとも思えなかった。ただ、絶対では無いので、油断してはならない。

「さてと・・・どう出て来るのかなあ？あのギヤル隊長さんは」

タールツアイは左手に持っていたプラスチック製の袋から目刺を1本引き抜くと、ゆっくりじわじわとかじり始めた。

「そろそろ来るかも・・・」

塚野がそう呟いた直後、出し抜けにバラトン工業高校の主力部隊が

前方に姿を現した。

向こうもほぼ同時にこちらに気付き、走りながらトゥラインⅢとトゥラインⅡが砲塔を動かしてこちらに狙いを付けて来る。

「右折―」

塚野は素早く退路として目星を付けていた右折路へ先に入るようルノーUEに腕を振った。

ルノーUEが右折する間にレオパルトは急停止すると、50mm砲の仰角を少し上げて発砲する。

咄嗟撃ちにもかかわらず、弾丸はトゥラインⅡの砲塔側面を擦って行った。

『うわー当ててこられましたわー！』

アンヌの声を通信越しに聞きながら、タールツアイも応射を命じる。

「こつちも応戦！撃て―」

3輜が一斉に砲撃し、2発は大きく外れたが、1発はレオパルトの真下に着弾し、その衝撃が車体を震わせる。

「うわっ―」

突き上げるような衝撃に田張と井上が思わず声を上げる。

塚野も立ち直ると、

「ルノーに続けえ―」

命令に反応した田張が無意識に体を動かしてレオパルトを操作し、一瞬後退させてから右に転回させて右折路に飛び込んだ。

その直後にトゥラインⅢの高初速弾が背後を掠め飛び、建物の壁に直撃する。

神経を逆なでする空気の切り裂き音はいつ聞いても慣れない。

ルノーUEはレオパルトから10m程前方を走っていた。

それを確認してから体を捻って振り返ると、後を追ってトゥラインⅢが最初に現れた。

砲塔をこちらに向けている。

「ジグザグ運動―」

右に左にふらつきながら逃げるレオパルトのすぐ左を、トゥライン

Ⅲの砲弾が穴を穿つ。

幸い軽戦車ながら幅広で大柄なレオパルトの車体はルノーと敵戦車隊の間を遮っているが、ここでやられたらルノーが孤立してしまう。

「また右折！」

塚野の指示でルノーはその先の交差点で右折し、レオパルトも後に続くが、敵戦車隊こちらも見失うまいと追いつがって来る。

その間に砲塔を旋回させていた鹿屋が砲撃したが、トゥラーンⅡとズリーニイⅡの間を通り抜けて後ろの建物の窓に飛び込んだ。

「こちら塚野！敵戦車3輛と遭遇！トゥラーンが2輛とズリーニイが1輛！主力かも！」

『今向かってるから持ちこたえて！』

「やばい奴いつからなるはやで！」

すると村江は一瞬で車種を絞り込んだようだ。

「・・・トゥラーンとズリーニイ、どっち!？」

「トゥラーン！1輛が長いやつ付けてんの！」

再び敵戦車隊が発砲し、レオパルトの周りに着弾して破片を撒き散らす。

因みに村江がズリーニイにも言及したのは、トゥラーンⅢと同じ長砲身75mm戦車砲を搭載したズリーニイⅠが存在していたからだ。

『今どこ!？』

「南に逃走中！」

『了解！あとトルデイにも注意！ルノーならあれも天敵よ！』

「オツケー！気を付けっから！」

ルノーUEであれば、20mm機関砲でさえ危険な相手だ。

一瞬、フラッグ車はハリーホプキンスにすべきだったかと後悔が頭をよぎったが、すぐに塚野はその雑念を振り払い、村江のラムⅡと合流する事と、突発的な敵との遭遇にどうするか思考を巡らせた。

敵は包囲を狭めて来るだろう。

そして完全に囲まれる前に、隙間から離脱して運河の向こう側に逃走して敵を引き込まねばならない。

野島の心拍数が上がっていた。

「おい、大丈夫なんだろうな？」

『あーもうノイジー！ヘーキヘーキ！』

塚野の声は明るいが、敵戦車の発砲音と着弾音も一緒に聞こえてきており野島の冷や汗はひっきりなしに噴き出していた。

とは言え、今はただ無事にこちら側まで戻って来るのを待つだけである。

「ちっ、しくじったら承知しねえぞ」

そう言つて無線を切ると、城塞に籠るチームに指示する。「全車、攻撃用意。南側の橋だ」

続く

チャプター3 マルギツトの策略

『ニコラ！敵は南の橋に逃げるつもりよ！』

「了解！前後に挟み撃ちするわよ！」

ニコラ率いる3輦のトルデイ軽戦車は、タールツアイの本隊から逃げる敵チームの前方に通せんぼする作戦に出た。

狭い三車線道路の左右に林立する建物はどれも背は低めだが、直立した壁はまるで迷路の中にいるような錯覚と圧迫感を覚える上、慣れていないと似たような景色に惑わされてしまうだろう。

しかし、この模擬市街地はバラトン工業高校の一区画と似ており、バラトンの生徒達はいつもそこを歩き回るので方向感覚が自然と養われていた。

ニコラには、ここがハンガリーの首都であるブダペストの一風景のように映っていた・・・グールマップでしか見た事ないが。

「ええと、多分ここ・・・」

通信と地図を頼りに、ニコラは小隊を率いて南の橋に通ずる道の交差点の1つに出た。

ここを抜けてあと3つほど交差点を抜けると、川沿いの道に出て、そのまま南の橋に繋がっている筈だ。

そしてニコラの予想通り、右に左に波線を描くように砲弾を避けながら疾走してくるルノーUEとレオパルトをたった30m足らずの距離で出くわした。

ニコラ隊は横一列に並ぶ形で行く手に立ちはだかる。

「どんぴしゃあー！」

ニコラは手を打って歓声を上げると、「フラッグ車を狙え！」

一方の塚野も、不意の遭遇だったがすぐに怒鳴る。

「左折!!」

その声に反応して尾鷲がルノーを横滑りさせながらトルデイ隊のすぐ眼前を横切る形で交差点を左折させようとする。

トルデイ隊がルノー目掛けて一斉射撃したが、背が低く非常に小柄なルノーのスライディングを捉える事は出来ず、悪戯に道路を傷つけ

ただけに終わった。

20mm機関砲の車輛が最後までマガジンの弾丸を連射したが、ルノーはその弾幕をトンネルのように潜って交差点の左折に成功した。ニコラはほんの一瞬目を？いたが、

「くそつ、割り込め！」

と言って自車をルノーとレオパルトの間に割り込ませようとした。隊長車たるレオパルトの目の前で、守るべきフラッグ車を仕留めて泣きつ面を拝んでやるつもりだった。

が、塚野の

「させるかあー！」

という叫び声に呼応した田張がレオパルトを左折させる際に、その巨体の側面をニコラのトルデイに幅寄せして強か体当たりした。

「ぎゃー！」

勢いを外側に突き飛ばされたトルデイは、ガラスドアが連なる建物の入り口に突っ込み、ロビーの受付テーブルの手前でやっと止まった。

その後ろを仲間の車輛や本隊が次々通過していくのを振り返りながら、ニコラが悪態混じりに喚く。

「Basszus!!ふざけやがって！おい、早く出せつての！」

マイクのひずみ音のような耳障りな口調に、操縦手は呆れたように首を横に小さく振りながらトルデイを一端バックさせてから道路に脱出すると仲間の後を追って再発進させた。

「絶対フラッグの首は取ってやる！必ずよ！」

ニコラはまだ顔を赤くしていたが、彼女の痲癩を見透かしたかのようにタールツアイから通信が入った。

『ニコラ、もう怒ってないよね？』

一瞬でニコラの頭が冷えた。

「え・・・ええ、はい。全然怒ってません。頭に来ましたけど！」
『くれぐれも抜け駆けはやめてよ。いいね？』

凶星のニコラは一瞬返答に喉が詰まったが、

「あ、ああ、は、はい。了解」

『そこんとこ宜しく』

砲手が疑わし気に顔を向けて来たので、ニコラは作り笑いで手を振りながら、

「ああ、ちゃんと言うこと聞くって……何見てやがるの！」

「さっさと橋に向かうよお！」

塚野は敵戦車の方にねじっていた体を前方に戻した。「そこ右折！」

それに従って先を走るルノーが交差点を右折し、続いてレオパルトも車体を傾けながら急カーブを切る。

その後を40m砲のトルデイが続こうとしたが、左折方向から不意に現れたラムⅡが急停止して立ちほだかり、それを避けようとしたが間に合わずラムⅡに激突してしまった。

その後ろの仲間の車輛も斜めにスリップしながら建物のショーウィンドウに激突して停止し、トゥラーン隊やズリーニイⅡも追突を避けようと車体を斜めに向けて止まった。

「撃てー！」

発進前に村江の号令で、土橋が6ポンド砲をトゥラーンⅢに向かって発射した。

残念ながら敵フラッグ車を仕留める事は出来なかったが、砲弾は砲塔の左のシュルツェンを吹き飛ばした。

逃げて行くラムⅡにトゥラーンⅡが応射したが、建物の角に穴を穿っただけで命中しなかった。

タールツアイが感心したように右手を胸の前に振り下ろしながら指をパチンと鳴らす。

「くう、やるねえー！」

『早く追って差し上げないと！』

アンヌの言葉に、まだ前を塞いでいたトルデイがのろのろと体勢を立て直して再発進する。

このままでは橋に逃げ込まれてしまうが、なぜかタールツアイは落ち着いていた。

『隊長！お構いありませんの!?!』

「さあ、何とかなるんじゃないかな？」

マルギットが後続の20mm機関砲トルデイを振り返った。

「イロナ、私が囷になるわ」

イロナはマルギットの意図を心得ていた。

二人は戦車道履修以来ずっとタッグを組んできた仲間であり友人同士だ。

どちらも仲間の無線のやり取りをリアルタイムで聞いて情報を把握している。

『・・・どこでやる?』

「ついて来て」

『はい』

『ノイジー、状況は?』

「もう待ちくたびれてんだよこっちは」

SU-100が城塞から南の橋の対岸側に照準を合わせ、ハリーホプキンスとLVTは橋のこちら側で配置についている。

あとは囷部隊が逃げ込んで来るのを待っただけだ。

自分達は、その後を追いかけて来るバロンチームに砲弾の雨を降らせてやれば良い。

LVTの砲塔の上では、福地がカメラを構えてシャッターチャンス瞬間を待ち詫びていた。

「ふふ、良い画が撮れるといいな」

砲塔操作と装填を押し付けられたのは、前部席にいた西中だ。

「手伝って下さいよデスク」

「ちよつと待って、今いいところだから!」

残す交差点があと1つという時だった。

そこに、いきなり40mm砲のトルデイが右から現れ、横腹を晒した状態で停車するとそのまま居座り、砲塔がゆつくりとこちらに回転

し始めた。

「……突破一択！」

敵が攻撃準備を終える前に、塚野は相手を突き飛ばしてでも最後の交差点を強行突破するつもりでいた。

その目論見通り、このトルデイが砲塔を向け切る前にルノーはトルデイの後部と建物の隙間を通り抜けようとした。

しかしその直前、このトルデイはバックしてルノーを自身と建物の間に挟み込み、それによってルノーは動けなくなってしまった。

慣性の力が建物の方に向いていた事もトルデイに味方したようだ。

ただ、塚野はレオパルトの巨体と質量を持ってトルデイを突き飛ばそうと考えていた。

「蹴飛ばせ！」

そう言った直後、最初のトルデイが来たのと同じ道から20mm機関砲のトルデイが現れ、押さえつけられたままもがいているルノーの真後ろで停止した。

今度は砲塔が初めからルノーの方に向いている。

つまり、この2輦はそのつもりでここに罠を張っていたのだ。

40mm砲のトルデイが囿で、20mm機関砲のトルデイがルノーを仕留める役を受け持っていたようである。

レオパルトとルノーを捕らえたトルデイ隊との間は、僅か15m足らずだったが、この僅か1秒間の出来事が塚野にはまるでスローモーションのように映った。

「え……！」

塚野は鹿屋に射撃命令を出そうと口を動かそうとしたが、敵のトリッキーな戦術に頭の理解がすぐに追いつかず、すぐに口を動かす事が出来なかった。

この時、もし後ろのラムIIが、少し車体を横にスライドさせてレオパルトを射線からずらして発砲していなければ、20mm機関砲のトルデイがルノーに全弾を叩き込んで決着を付けていた事であろう。

ラムIIが発射したのは榴弾だった。

土橋が決死の思いで撃った6ポンドの榴弾は、トルデイとルノーの

間に楔を打ち込むように着弾して炸裂し、榴弾特有の爆風は40mm砲のトルデイとルノーを引き離し、その衝撃に20mm機関砲のトルデイの砲手が気を取られて発砲を中断させる事に成功したのである。

爆風はルノーを空中に持ち上げて縦に一回転させてから路上に着地させた。

「ぐわっ！」

萩原が頭を装甲ドームにぶつけて視界に星を飛び散らせる中、同じように装甲ドームに頭をぶつけて舌を噛みそうになりながらも尾鷲は本能でルノーを走らせ続けたが、その無意識下の体の動きが事態をややこしくしてしまった。

いよいよ橋に入ろうとした瞬間、20mm機関砲の斉射がルノーを掠め、尾鷲は思わず車体を右に切ってしまったのである。

あつと思つた時には既に遅く、ルノーは橋から遠ざかってしまつており、その後ろでは橋の手前でレオパルトが停止してルノーを追いかけようと車体を旋回させ、その左右をあの2輦のトルデイが走り抜けて追跡してきた。

「イロナ！ ナイス！」

『うまくいってよかったー！』

イロナの誘導射撃はダメ元だったが功を奏し、ルノーの川向こうへの逃走阻止に成功したのである。

2輦の間にレオパルトの50mm砲弾が着弾すると、マルギットがイロナの後ろについて盾となりながら後ろに向けた40mm砲で応戦する。

ルノーが相手なら、イロナ車でも十分だ。

対岸からはSU-100やハリーホプキンス、LVTの砲弾が降り注いでくるが、高速で走る小柄な車体に命中する心配は無かった。

「アンヌ！ 橋を封鎖しちゃお！」

『承知ですー！』

トゥラインIIIとトゥラインIIが南の橋の前に陣取ると、その後ろをズリーニイIIが通過した。

その音を聞きながら、橋を渡ろうと動き出したハリーホプキンスとLVTを牽制射撃で押し戻す。

本来はここでバラトンチームを足止めする筈が、逆にフロンティア学園が足止めされる恰好となっていた。

SU-100の砲弾がトゥラーンⅢの近くに命中すると、タールツアイは

「発煙弾装填ー！」

と命じ、それから砲身を城塞に向けさせると、SU-100目掛けて撃ち込ませた。

発煙弾はSU-100のすぐ近くの円柱型の構造物に当たったが、たちまち白煙がもうもうと広がってSU-100から視界を奪い取ってしまった。

「ダメですー！撃てませんー！」

桐山が野島に振り向くと、首を横に振った。

野島は歯噛みして舌打ちするが、次の指示を出す。

「ちっ。移動すんぞー！」

「了解できあー！」

安藤はSU-100を数メートルバックさせてから、車体を90度右に捻って発進させた。

『へー。いい記事になりそう♪』

福地の呑気な声が、オープンにしたままの通信を通して野島を苛立たせたが、

『なにのんびりしてるんですかデスクー！』

と言う井坂の抗議が野島の気持ちを代弁したのであった。

続く

チャプター4 攻防

「しめたーこのままフラッグを孤立させちまえ！」

ニコラが勢いづいて叫んだ。

トルデイ隊が左右に道を開けて、追跡部隊の中で最も火力の高いズリーニイⅡを先行させる。

早速ズリーニイⅡはルノーを狙い、ジグザグ運動するレオパルトとラムⅡが作る一瞬の隙間を狙って発砲したが、弾丸はレオパルトの横に着弾して外れた。

「うくん。ゾフィア、やっぱり1輦ずつ潰していかない？」

「ですよー」

マヨルの提案に、砲手のゾフィアは頭を掻き掻き頷いた。

こちらは全戦力、対してフロンティア学園は3輦。

残りの3輦は河の向こうにいるが、タールツアイとアンヌが救援に駆け付ける為の最寄りの橋を封鎖しているので、すぐには援軍に來られまい。

それは水陸両用のLVTとて同じだ。

水上航行は陸上で走るよりも速度は鈍る・・・川の流れを遡るとなれば猶更だ。

今のところルノーUEと自分達を隔てているのは、レオパルトとラムⅡだけである。

これとて侮れないが、敵が分断されている今が絶好のチャンスに違いは無い。

今度はズリーニイⅡとトルデイが一斉射撃したが、また打撃は得られなかった。

「このままじゃジリ貧ね・・・」

村江はキューポラの覗視孔越しに追跡部隊や橋の様子を観察していたが、通信ボタンを押すと、

「隊長、橋のフラッグ車を始末しに行くわ」

一瞬の沈黙の後、塚野の声が応答する。

『オツケー！頼んだよお！』

ラムⅡが離脱すると、ルノーと追跡部隊との間を隔てるのはレオパルトのみになるが、レオパルトは高い車高と小型の砲塔の故に後方への射撃は苦手だ。

どちらが先にフラッグ車を撃破するか・・・こちらが先にやられてしまわないか？

その不安が塚野の頭をよぎったが、なんとかこの状況を打開しなければならぬのも確かだ。

「了解。中村、市街地に入って」

「分かりました！」

ニコラ達の眼前で、ラムⅡは単独で道を右へ折れて市街地の中へ消えて行った。

「あ、ラムⅡが！」

ラムⅡの右折地点を通り過ぎる時に市街地に顔を向けたが、既にラムⅡの姿は無かった。

「早いですね・・・」

マルギットが驚愕と感服の入り混じった口調で言った直後、

『マルギット、こっちもちよつと寄り道するわ』

「先輩？」

『ラムⅡを始末してくるから、そっちは引き続きフラッグ車の撃破を頼むわね』

「・・・分かりました！」

『でもトルディだけでやれるのかな？』

ニコラが不安を口にしたが、

『副隊長、案があります』

マルギットの真剣な口調で、ニコラもこれ以上四の五の言う事は控えた。

「じゃ、指揮は宜しく」

『頑張りますー！』

いきなり現場指揮を命じられたマルギットだったが、常にそう言う事態を想定した訓練を積んで来たので落ち着いていた。

タールツアイはその場の作戦を思いついた隊員に、学年や年齢に係なく指揮を執らせる方針を取っていたが、これは提案者が最も作戦内容を周知しているという考えに基づく。

大洗女子学園戦車道チームの作戦方針にも似ているが偶然である。マヨルの応答が無いと思ったその時、初めてズリーニイⅡがいつの間にも隊列からいなくなっている事に気付いた。

少し後退した直後、トゥラインⅢの高初速弾が手前に穴を穿った。

こちらも100mm砲を撃ち返すが外した。

『副隊長、もう少し頑張って』

村江の通信が入った時、野島は橋向こうのトゥライン隊と川沿いを走る味方を交互に見ていた。

「けどよ、ズリーニイⅡがいなくなってるぜ」

『了解。気を付けるわ』

「で、あとどんくらい?」

『5分以内と思う』

『了解。一応、こっちはハリーホプキンスを救援に向かわせたぜ』

『とにかく持ちこたえて』

「で、作戦は?」

『機関砲にルノーを追わせます!こっちは敵フラッグ車を孤立させるんです!』

マルギットの提案は、ニコラにも妥当に映った。

20mm機関砲仕様のトルデイ軽戦車は、戦車道では非力な部類だが、豆戦車で紙装甲のルノーUEにとってはこれさえも脅威だ。

「イロナ、市街地から迂回してルノーに追いつける?」

『いけます!でもレオパルトは何とかして下さい!』

「任せて!」

マルギット車が速度を上げて先行し、その後ろにニコラ車ともう1輜の40mm砲トルデイが続く。

20mm機関砲トルデイのコンビの方は、イロナが相方の車長に手

を振って合図して市街地へ入って行った。

「くっそ、迂回する気じゃん」

塚野も相手の意図を察した。

しかし同時に、40mm砲トルデイ隊3輜が増速してこちらに近付いて来る。

こちらを邪魔する気なのは明らかだった。

塚野はキューポラ越しに40mm砲トルデイ隊を監視しながら、

「たばっち、準備は？」

「へへ、いつでもどうぞー」

田張はまるで悪戯っ子が浮かべるような笑みを浮かべていた。

「こっちもいいよー」

と、鹿屋が言った。

井上はと言うと、口を引き結んで両手を天井や横の壁に手を突っ張っている。

「目回らないといいんだけど・・・」

塚野は頷くと、

「やっちまえー！」

田張が両腕を動かすと、レオパルトが滑りながら左向きに回転し、砲口が一瞬だけ真後ろの敵集団に向けた。

その瞬間、

「うおー！」

と叫びながら鹿屋が50mm砲を発砲した。

本当は威嚇と牽制のつもりだったが、弾丸は偶然にも40mm砲トルデイに直撃し、有効打となった。

『は？！嘘でしょ？！』

やられた40mm砲トルデイの車長の悲痛な叫び越えがマルギツトやニコラの耳に響く。

こちらが優位だと思っていたのに、これ以上もたもたしていられない。

と言うより、早くしないと次の橋に到達して対岸に渡られてしまうし、敵もきつとそちらに1輜ぐらい救援に差し向けている筈だ。

ニコラは齒噛みしながら、再び前進に戻ったレオパルトに向き直った。

「マルギット！」

『行きます！』

既にマルギット車は行動に移っていた。

これにニコラ車も追従し、レオパルトの左右を挟むようにして接近しながら砲身をレオパルトに向ける。

「たばっちー！左右から来るよお！」

「了解！」

田張はどちらも追い抜かせないように、先に近付いてきたマルギット車の針路を塞ぐ形で幅寄せした。

その隙にとばかり増速したニコラ車には、わざと横に並ばせてからすぐに左に舵を切って体当たりをかまして針路を逸らし、またマルギット車の妨害に戻る。

針路を逸らされたニコラ車は、川に転落しないようにブレーキをかけざるを得なかった。

滑りながら車体後部が川沿いの向こうに飛び出したが、なんとかこらえる。

マルギット車がレオパルトに40mm砲を発射したが、角度が合わず弾かれてしまった。

ラムIIは遂にトゥライン部隊の背後を捉えた。

こちらに気付いているのか気付いていないのか、砲塔をこちらに回そうとする気配は無かった。

念の為、素早く周囲を確認したが、まだズリーニイIIの姿は見えない。

「目標、トゥラインIII！」

敵フラッグ車への攻撃指令に、逸る気持ちを抑えて土橋が砲塔を旋回させる。

だが、どんなに自制しても急激に噴出したアドレナリンに両腕は震え、指先が感覚を失いそうになり、自然と心臓の回転数が上がる。

「おい、早く撃つちまえよ！」

桑田がじれったそうにそう急かすが、土橋は無視して全ての集中力を総動員し、慎重に狙いを付ける。

「ロックオンターゲット！」

と、ラムⅡの後ろにズリーニイⅡが現れ、あつという間に砲身をこちらに向けて来た。

村江はそれに気付いたが、

「撃てー！」

ラムⅡの動きをじつと監視していたタールツアイは、こちらがロックオンされた事を自身の蓄積してきた経験と勘で察すると、

「バックー！」

ラムⅡが発砲する0.1秒前に、トゥラーンⅢはバックして手前の建物の後ろに身を隠した。

その為、6ポンド砲弾はトゥラーンⅢの車体上面を掠めて外れた。

「車体を斜めにー！」

中村がラムⅡを時計の長針と短針が4時55分を指すように車体を斜めにするのと、

ズリーニイⅡから放たれた対戦車榴弾が車体左側面の後部に当たって力を受け流され、その先の建物に命中した。

村江はもう一度橋の方を見た。

トゥラーンⅢはもう身を晒さないだろう。

しかも連中は、橋に発煙弾を撃ち込んだらしく、白煙が橋を覆い始めていた。

そして再びズリーニイⅡに顔を向けると、

「目標変更ー！」

ラムⅡは右に信地回転してズリーニイⅡと相対したが、意図せずして3年生同士の対決となった。

ゾエがもう一度対戦車榴弾を装填する。

「装填完了ー！」

「隊長、ラムⅡは任せて」

『任された！』

向かい合った時間はほんの2、3秒だったが、その緊張感は、両者にはまるで1時間にも感じられた。

「突撃ー！」

「Meggyー！」

ほぼ同時に命令が下され、ラムⅡとズリーニⅡは発進した。

「ちよーまずいじゃんこれー！」

レオパルトとルノーとの間は、ニコラとマルギットの陽動攻撃で明らかに開きつつあった。

40mm砲トルディ隊は、レオパルトを追い越せず打撃も与えられていなかったが、役割は果たしていた。

すぐには分からないよう速度をぼちぼち下げてレオパルトの速度を落とさせ、それに気付いて速度を上げようとするところらはそれ以上に加勢して追い抜かそうとする。

40mm砲をルノーに向けた方が早いような気もしたが、レオパルトに妨害されながら狙うよりは20mm機関砲隊がレオパルトとルノーの間に割って入って一気に畳みかける方がより確実だ。

とは言え、マルギット車とニコラ車は機会があれば40mm砲をルノーに向けて放っていた。

そして案の定、レオパルトの妨害を気にしながらだと当たる筈もなく外していた。

その頃、イロナ隊はレオパルトを追い越しており、市街地の中だったが建物と建物との間に一瞬だけルノーを発見していた。

「目標、11時方向・・・アグネス、行くわよ！」

『アイアイサーー！』

アグネス車を引き連れて、イロナは遂に攻撃に移った。

先手必勝とラムⅡが先に発砲したが、ズリーニⅡはひよいと横跳びするように身をかわす。

両者の距離があつという間に縮まる。

桑田が6ポンド徹甲弾を押し込んだ。

「次で決めるわ！」

「勿論！」

土橋はズリーニイⅡと交差する瞬間を狙っていた。

しかしここでズリーニイⅡが急停止すると、前進と同じぐらいの速度でバツクを始めた。

「くそー！」

土橋は再び砲塔と砲身を動かし、後退するズリーニイⅡを狙った。それを見ていたマヨルはすぐさま

「前進！」

ズリーニイⅡがバツクを止めて前進に移ったのを見て、土橋は焦った。

「嘘!?!」

「落ち着いて狙って！」

村江の鋭い声が土橋の自制心を何とか引き戻したが、相手に翻弄されているような気持ちは完全に拭えなかった。

一方、ズリーニイⅡの砲手のゾフィアも焦れていた。

「早く撃たせて下さい！」

「合図を待って・・・後退！」

操縦手は腕が引き裂かれそうな感覚を覚えながらマヨルの指示に従う。

またしてもラムⅡが遠ざかった。

「停止！」

とうとう村江もたまりかねてそう命令した。

ズリーニイⅡの前後運動は、さすがの冷静沈着な村江もイライラしたようだ。

「タイミングは任せるわ！」

「はいー！」

土橋はズリーニイⅡが一瞬停止する瞬間を狙う事にした。

砲塔と砲身をゆっくりと動かしてズリーニイⅡに追従させる。

「煙幕展開！」

ズリーニイⅡの発煙弾発射機が垂直に打ち上げられ、あっという間にすっぽりと覆い隠してしまった。

「ぬっ!？」

「気を付けて。出て来た瞬間を見逃さないで！」

「小癩な真似ばっかしゃがるなあ全く・・・」

桑田が呆れたように呟いた。

土橋は息を整えてその瞬間を待った。

後ろでは尚も橋で撃ち合いが続く音が、車内のエンジン音に混じって聞こえてくる。

数秒経過した。

煙幕が薄れ始めたが、まだズリーニイⅡは現れない。

「・・・ひよっとして、回り込んで来る系？」

土橋が不安を口にし、村江も迷いを覚えて一瞬顎を引いて考え込んだ。

が、それを待っていたかのように、急に煙幕の向こうに現れた黒い影が大きくなり、ズリーニイⅡが猛スピードで飛び出してきた。

迷いを見せた村江達は完全に虚を突かれた形となり、対処に遅れた。

息を呑む間にズリーニイⅡは一気に距離を縮め、正面衝突する直前に渾身の一撃を放ったのである。

105mm対戦車榴弾をまともに正面に浴びた衝撃を受けてびつくりしたように仰け反るラムⅡに、ブレーキをかけたが止まり切れずに突っ込んできたズリーニイⅡが正面衝突した。

黒煙が晴れると、ラムⅡから白旗が上がっていた。

レオパルトとルノーの間にイロナ隊が横滑りに飛び出してきた。

「くそっ、気を付けて！」

塚野が警告すると、萩原が歯を食い縛りながら相手の動きを監視する。

尾鷲も背後を時々振り返りながら萩原の合図がいつ来ても応じら

れるように鼓膜を研ぎ澄ました。

「撃ちまくれ！」

イロナが手を振ると、マドセン20mm機関砲が連射を開始した。

続く